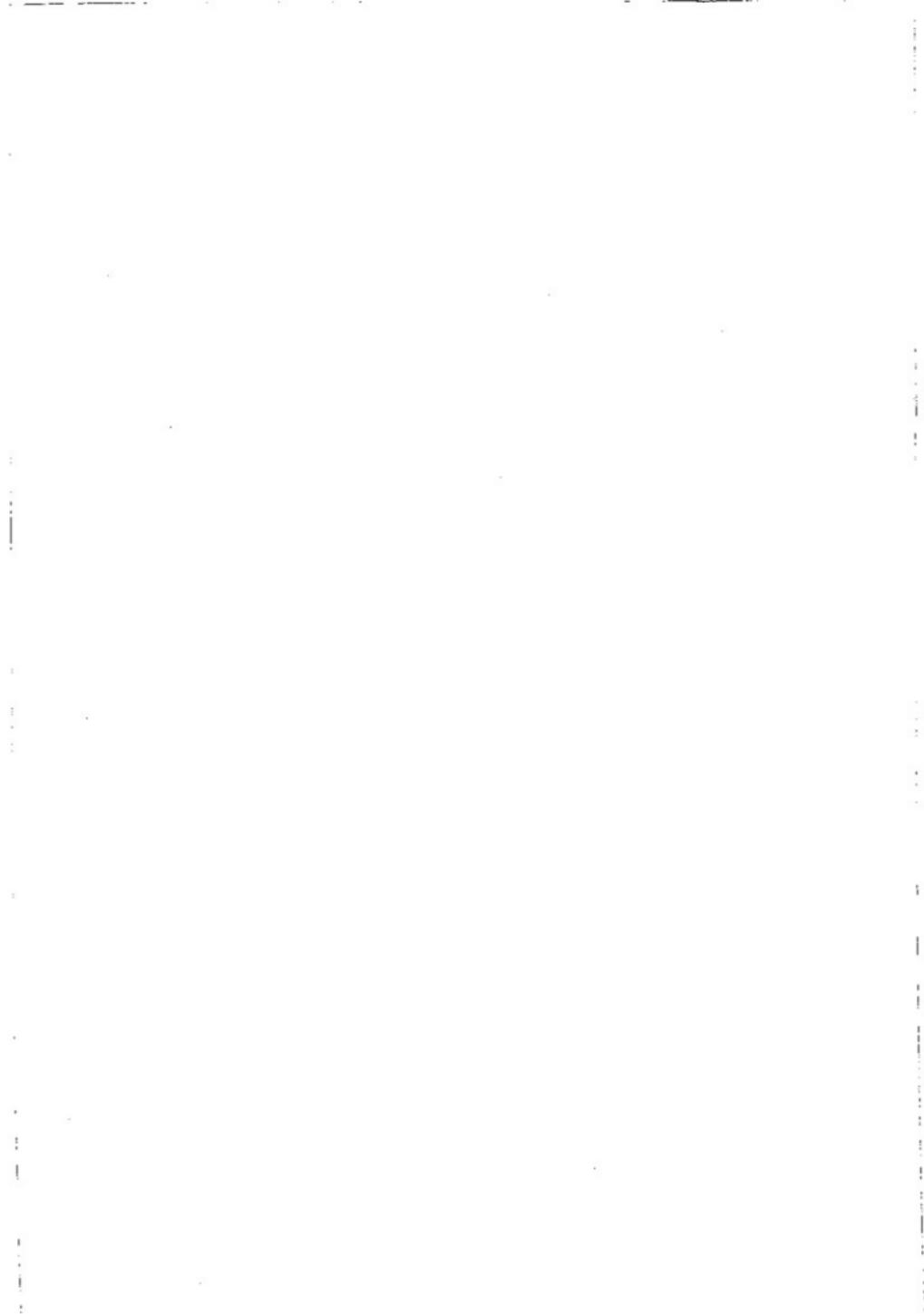


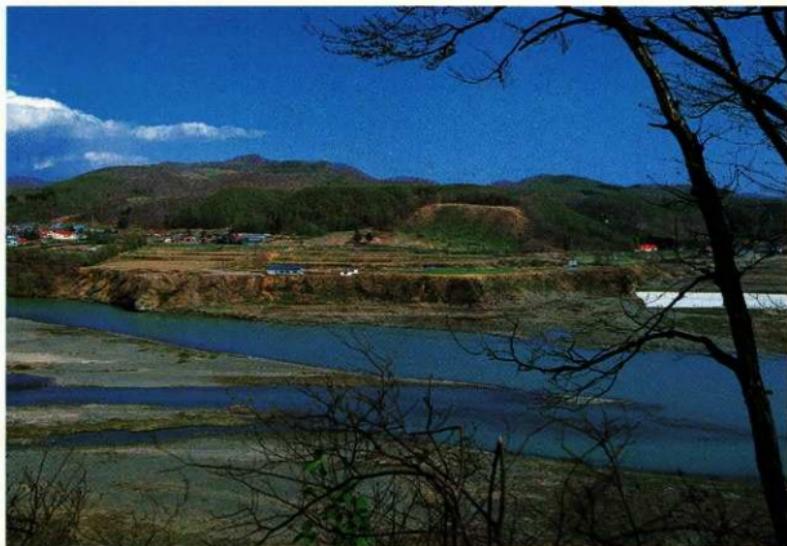
ユオイチャシ跡
ポロモイチャシ跡
二風谷遺跡

—沙流川総合開発事業（二風谷ダム建設用地内）
埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭和58・59・60年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター





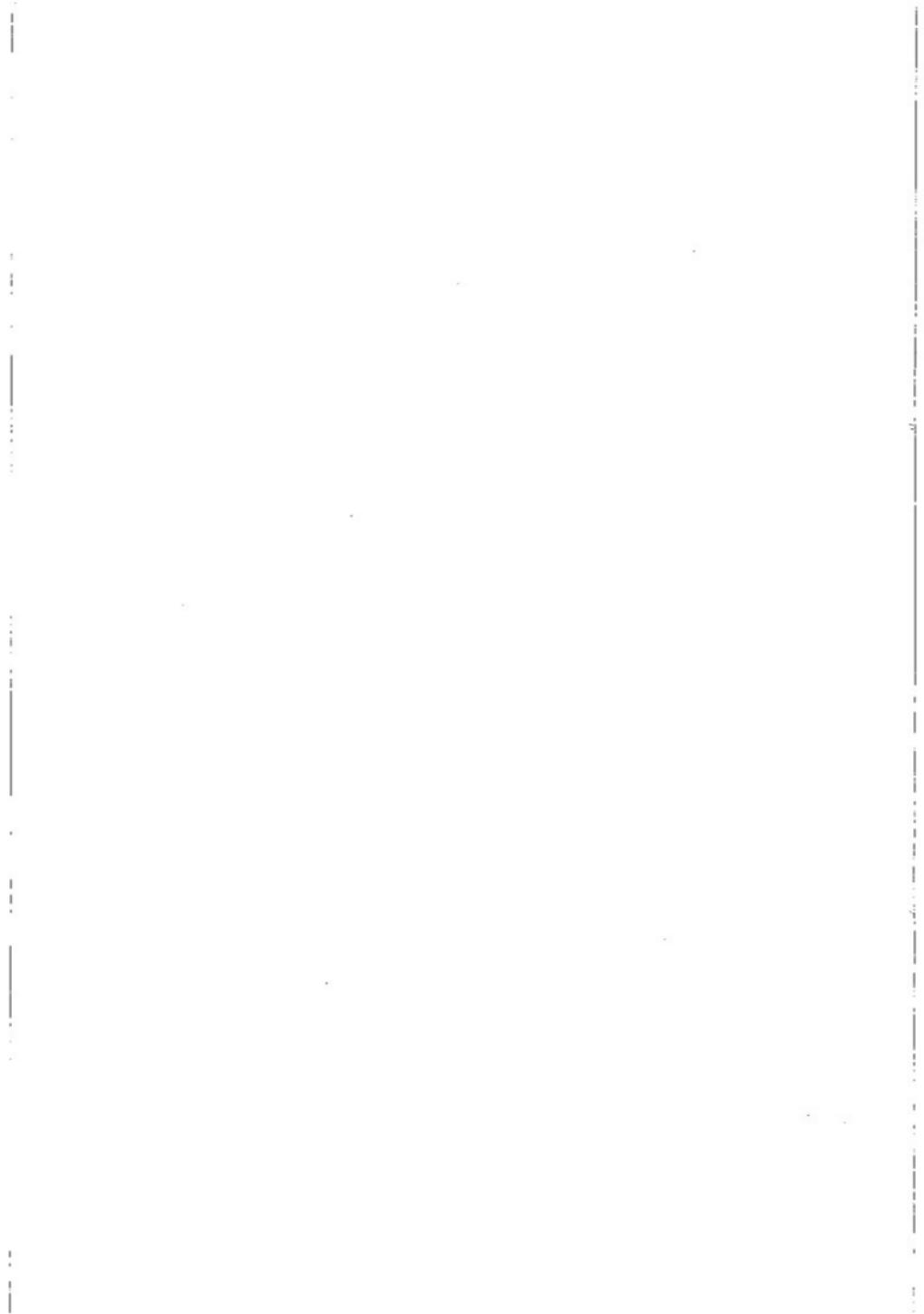
沙流川対岸から望む遺跡全景

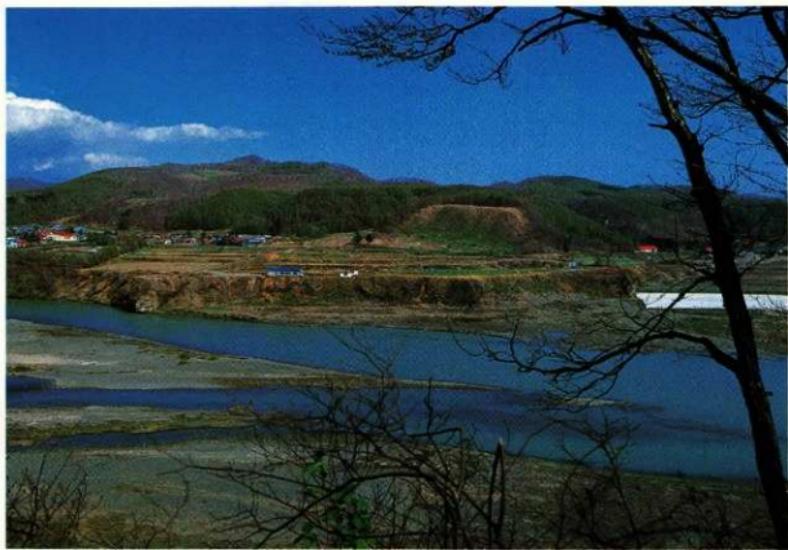


ボロモイチャシ跡出土絵唐津大皿



二風谷遺跡 1号墓漆器出土状況





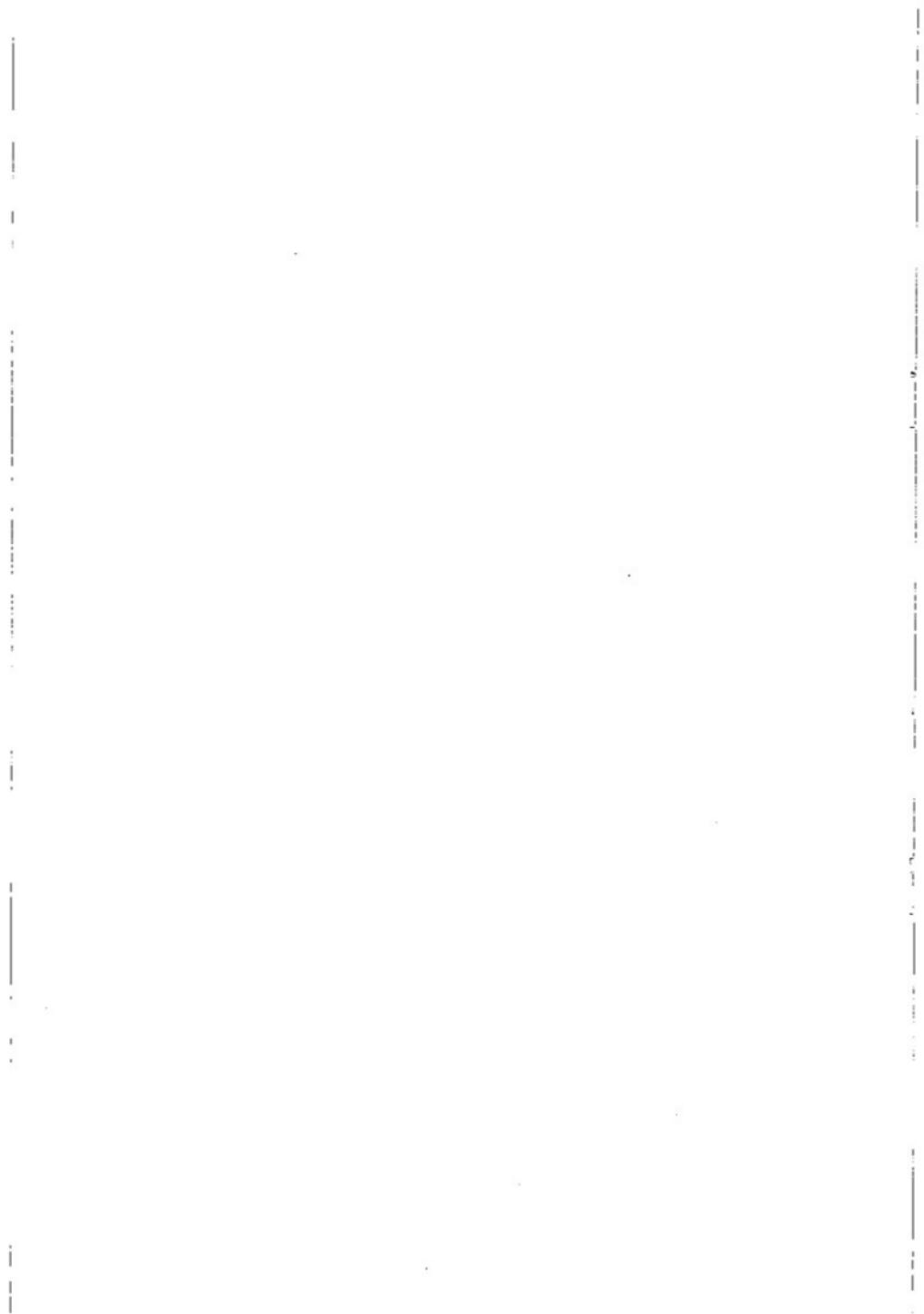
沙流川対岸から望む遺跡全景



ボロモイチャシ跡出土絵唐津大皿



二風谷遺跡 1号墓漆器出土状況



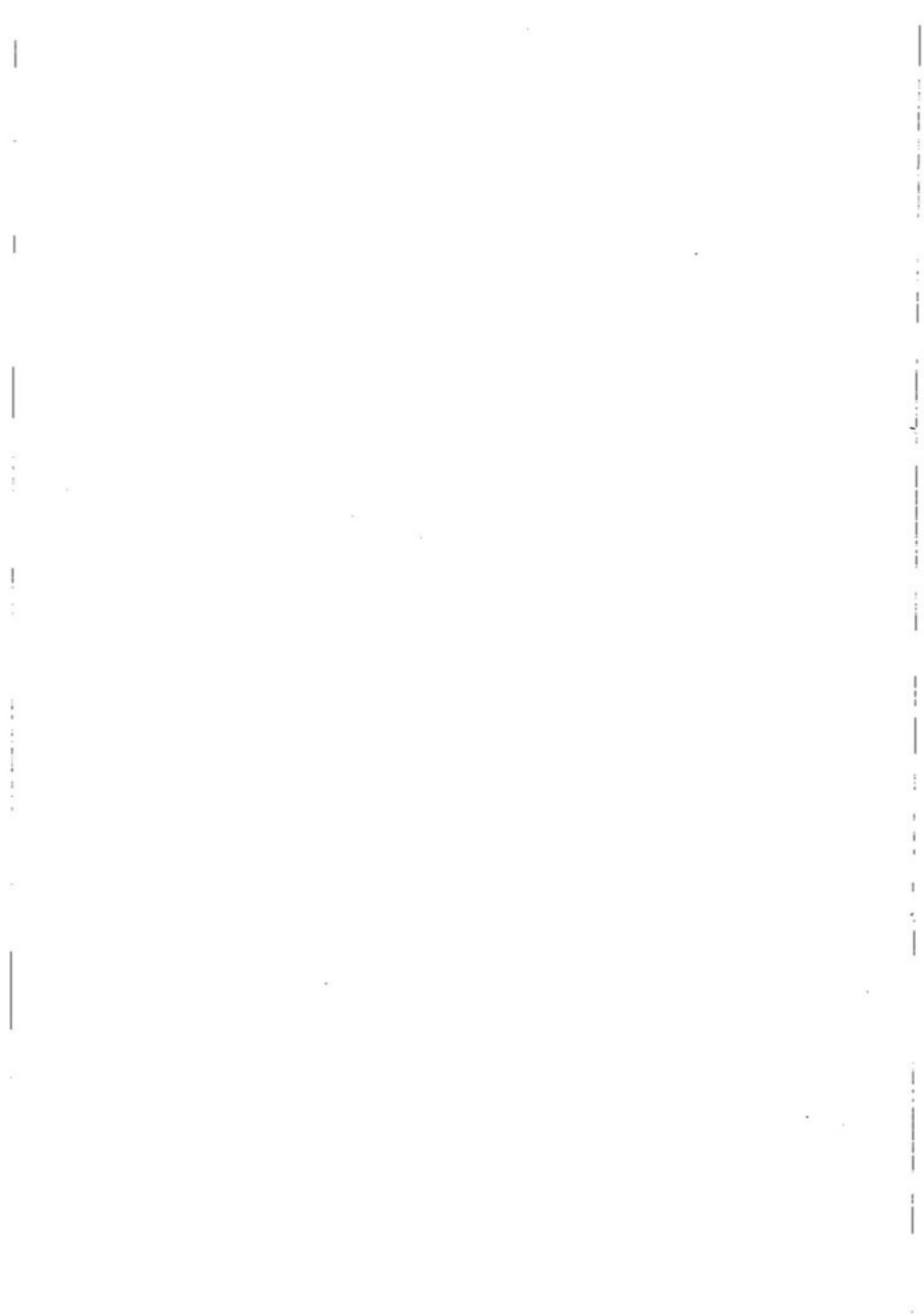
平取町

ユオイチャシ跡
ポロモイチャシ跡
二風谷遺跡

—沙流川総合開発事業（二風谷ダム建設用地内）
埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭和58・59・60年度

(財) 北海道埋蔵文化財センター



例　　言

- 1 本報告書は、^{さく}^{さく}沙流川総合開発事業、^{ふく}^{ふく}二風谷ダム建設用地内における埋蔵文化財の発掘調査に関するものである。
- 2 発掘調査は、^{ふく}^{ふく}北海道埋蔵文化財センターが、昭和58年度から60年度まで、3ヵ年に亘って実施した。各年度別の対象地区、面積、期間、調査体制は、以下のとおりである。

〔昭和58年度〕		財 北海道埋蔵文化財センター	
ユオイチャシ跡 (K-02-65)	理事長	中村 龍一	
1,986 m ²	専務理事	山本 慎一	
昭和58年9月1日～59年3月24日	常務理事（調査員）	藤本 英夫	
	業務部長	横田 直哉	
	調査部長（発掘担当者）	竹田 輝雄	
	調査員	河野 本道	
	同	吉田 玄一	
	同	長谷川 徹	
〔昭和59年度〕			
ボロモイチャシ跡 (K-02-64) (二風谷遺跡の一部を含む)	理事長	中村 龍一	
3,100 m ²	専務理事	山本 慎一	
昭和59年7月2日～60年3月26日	常務理事	藤本 英夫	
	業務部長	横田 直哉	
	調査部長	竹田 輝雄	
	調査第三班班長	種市 幸生	
	文化財保護主事（発掘担当者）	高橋 和樹	
	同	佐川 俊一	
	同	三浦 正人	
	嘱託	寺崎 康史	
〔昭和60年度〕			
二風谷遺跡 (K-02-82) (ユオイチャシ跡の一部を含む)	理事長	植村 敏	
9,000 m ²	専務理事	山本 慎一	
昭和60年5月7日～61年3月26日	常務理事	藤本 英夫	
	業務部長	間宮 道男	
	調査部長	中村 福彦	
	調査第二班班長	種市 幸生	
	文化財保護主事（発掘担当者）	高橋 和樹	
	同	三浦 正人	
	同	田中 哲郎	
	嘱託	寺崎 康史	
北海道教育委員会社会教育部文化課 文化財保護主事			青柳 文吉
(昭和60年8月5日～8月31日)			

- 3 報告書の作成は、各調査員が項目別に分担し、それぞれ文末に文責を明示した。
- 4 地形、地質については、調査第四班花岡正光が担当した。石質鑑定については、北海道開拓記念館赤松守雄氏の指導を得た。
- 5 写真図版の作成は、三浦正人が担当した。
- 6 地形測量図、遺構実測図等の報告書用素図は、昭和58年度は長谷川徹が、それ以降は三国谷雅子が作成し、トレースは三国谷雅子が担当した。
- 7 土器の実測、トレースは、主に中村清美が、石器、金属器、骨角器等の実測、トレースについては、主に木下昭仁、宮田明枝が担当した。
- 8 動物遺存体の同定および骨角器の材質鑑定は、早稲田大学金子浩昌先生に依頼し、一覧表の作成や結果のとりまとめについて、御指導いただいた。
- 9 植物遺体については、北海道開拓記念館矢野牧夫氏に炭化種子の同定と執筆を、山田悟郎氏には、種子の写真撮影などをお願いした。また、建物跡の構造材や櫛列跡出土の木片の樹種鑑定と執筆は、三野紀雄氏に依頼した。
- 10 人骨の取り上げは、札幌医科大学百々幸雄、大島直行の両先生にお願いした。
- 11 陶磁器については、佐賀県立九州陶磁文化館大橋康二氏に鑑定していただいた。
- 12 金属器、漆器等の保存処理、分析については、東京国立文化財研究所江本義理、鍬口清治、中里寿克、石川陸郎、青木繁夫の各氏の指導を得た。
- 金属器の保存処理は、三浦正人が担当し、鷺塚一子、鷺見桂子がこれを補助した。
- 13 御協力いただいた上記の方々のほか、発掘調査や報告書の作成に際して、下記の機関、諸氏より指導、助言をいただいた。深く感謝申し上げます。(順不同、敬称略)

佐賀県立九州陶磁文化館 東京国立文化財研究所 奈良国立文化財研究所
平取町教育委員会 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 北海道教育庁社会教育部文化課
北海道大学文学部附属北方文化研究施設 北海道開拓記念館 余市町立水産博物館
石川直章 (故)石附喜三男 伊藤裕満 乾 芳宏 今津節生 畑本 孝 岩本克昌
上野秀一 氏江敏文 宇田川洋 内山真澄 梅津 譲 上屋真一 大井晴男
太田善繁 大谷敏三 大塚邦義 大場靖友 岡田宏明 貝沢 薫 貝沢 正
貝沢輝一 貝沢与一 加藤邦雄 萱野 茂 川上浩一 川上勇二 川奈野惣七
菊地俊彦 北沢 実 北橋保男 工藤雅樹 久保 泰 小井川和夫 五沢 雄
越田賢一郎 小谷凱宣 後藤秀彦 小林和彦 小林達雄 小林幸雄 古原敏弘
齊藤邦典 齊藤 優 桜井清彦 佐々木達夫 佐藤一夫 佐藤訓敏 澤 四郎
沢口 清 篠原芳彦 島田健一 島田無譽 田崎博之 高橋正勝 館野 孝
田部 淳 谷岡康孝 田村すず子 田村俊之 田村リラコ 辻 秀子 土屋周三
角田文衛 出利菱浩司 戸田紀夫 土橋英二 豊原照司 中館吉達 中野益男
西 幸隆 西本豊弘 西谷 正 野村 崇 羽賀憲二 蓬池悦子 林 謙作
平川善祥 平村勝二 広井雄一 福田友之 藤村久和 干場隆利 本堂寿一
前田 潮 松崎水穂 松下正司 松田 駿 宮夫靖夫 茂木雅博 八木謙吉
山田一孝 矢吹俊男 山浦 清 横山英介 吉崎昌一 米田秀喜 領毛芳博

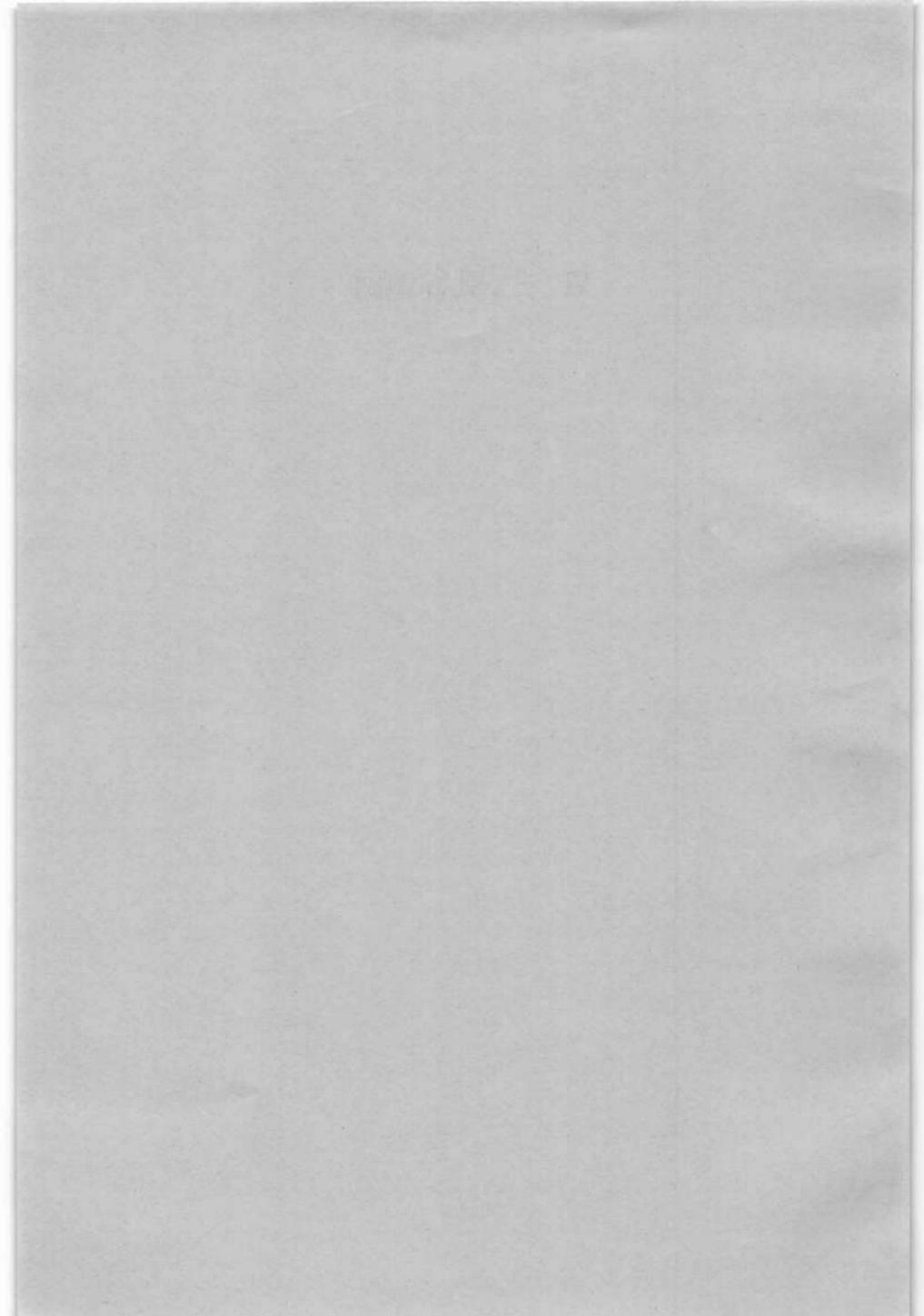
14 石質名については、次の略号を使用した。

Aga. (Agate) メノウ、Aga-Sh. (Agate Shale) メノウ質頁岩、
And. (Andesite) 安山岩、Che. (Chert) 硅岩、Con. (Conglomerate) 碎岩、
Gne. (Gneiss) 片麻岩、Gr-Mud. (Green Mudstone) 緑色泥岩、
Gr-Sa. (Green Sandstone) 緑色砂岩、Mud. (Mudstone) 泥岩、
Obs. (Obsidian) 黒曜石、Sa. (Sandstone) 砂岩、Ser. (Serpentinite) 姪紋岩、
Sh. (Shale) 頁岩

目 次

例言	
I 発掘調査に至る経緯	5
II 遺跡の位置と環境	5
1 遺跡の位置と概略	5
2 遺跡周辺の地形と火山灰	11
III 調査の方法	14
1 発掘調査の方法と層序	14
2 金属製品の保存処理について	20
写真図版	23
IV ユオイチャシ跡	29
1 概要	29
2 簪	29
3 棚列跡	32
4 遺物	47
写真図版	51
V ポロモイチャシ跡	61
1 概要	61
2 簪	61
3 A郭	62
4 B郭	80
写真図版	87
VI 二風谷遺跡	99
1 概要	99
2 III層の遺構と遺物	101
3 IV層の遺構と遺物	173
写真図版	215
VII まとめ	271
1 概括	271
2 ユオイチャシ跡	275
3 ポロモイチャシ跡	276
4 建物跡について	277
5 近世アイヌ墓について	280
6 陶器と漆碗について	284
7 金属製品について	285
8 ガラス玉について	294
9 鍾石について	296
10 回転式鉗頭について	298
付篇	301
引用参考文献	305

VI 二風谷遺跡



VI 二風谷遺跡

1 概 要

二風谷遺跡の位置する段丘は、II章でも述べたごとく、沙流川左岸の、二風谷の集落をのせる第II段丘である。遺跡の調査区域は、この段丘がユオイ沢によって開拓され、沙流川に沿った狭長な台地として区画された部分にある。この狭長な台地の、付け根（沙流川上流側）にボロモイチャシが存在し、台地の先端（沙流川下流側）には、ユオイチャシがある。昭和60年度の文化課によるB調査で、ユオイ沢対岸や付け根部分より上流側にも、遺跡の広がりがあることが確認されている。

昭和58年度のユオイチャシの調査や、59年度のボロモイチャシ及び周辺の調査では、遺構・遺物を、層位にかかわらず、とりあえず、年度ごとに整理した。60年度は、前述の狭長台地部分の調査が終結する年度であり、二風谷遺跡の大部分の調査がこの年度の行なわれるため、チャシ跡とそれに伴う遺構・遺物を二風谷遺跡の遺構・遺物を、58・59年度分を含めて、調査・整理した。すなわち、Ta-b 火山灰層直下の黒色土層（III層）の遺構・遺物では、チャシ跡部分で、チャシの時期と考えられる遺構・遺物（建物・柵列・金属製品・陶磁器・漆器・ガラス玉・錘石等）は原則としてチャシのものとして扱い、擦文土器は二風谷遺跡のものとして扱った。もちろんチャシ部分以外はすべて二風谷遺跡扱いとした。また、IV層以下の遺構・遺物は、チャシ部分も含めた台地全体を、二風谷遺跡と考えた。以下の報告は、この遺構・遺物の扱いの原則にのっとっている。

二風谷遺跡において、最も古い時代のものは、縄文時代早期の土器とそれに伴う石器である。ついで、前期、中期、後期、晚期とすべての時期の擦文土器と、それに伴う石器が出土している。統縄文時代の土器も確認しており、これらはIV層から出土している。遺構は、縄文時代中期の土壙1基・後期の住居跡2基・時期不明土壙4基・焼土75基を確認した。

III層ではまず、擦文土器とそれに伴うと思われる若干の鉄器があるが、明確な擦文期の遺構は確認していない（焼土は確定しにくい）。中～近世の遺構は、Ta-b 火山灰の降下（1667年）を下限として、道跡やシカの送り場跡、竪穴状建物跡2軒、打込み柱の建物跡11軒、柱穴列や炭化物列、焼土71基（擦文期のものも含まれる）、集石1基の他、周溝をもつ墓壙を2基確認した。この建物跡や焼土・墓は、この地を中心活躍した、近世アイヌのものと思われる。遺物は、墓の副葬品や、遺構に伴う遺物として、金属製品・漆器・骨角器・動物遺存体等があり、遺構以外からも多数の金属製品や、漆器・錘石・ガラス玉・動物遺存体等が出土している。焼土からは、サンブルをとり築作業を行った結果、多量の魚骨・獸骨を検出した。また、黒色土は、遺構の有無を問わず、10カ所ほどを1×1mでサンプリングし、フローテーションを行った。その結果、幾種かの植物遺体を検出した。動物遺存体は、各項で表・文で触れ、植物遺体については、矢野牧夫氏の報文を付篇に掲載した。

III層、特に中近世の遺構・遺物では、集落をなすと思われる建物跡や、近世アイヌ墓、多種多様の金属製品・骨角器・漆器がこの遺跡を代表するものである。当遺跡は、ユオイ・ボロモイの両チャシとは有機的な関係をもつ。その意においてチャシとその周辺を同時に調査し得たことは、大きな成果である。チャシと二風谷遺跡の遺構・遺物をどのように編年し、歴史を復元構築して、東北アジアの中近世史の中に位置付けるかは、報告の重大な課題であった。今回は、ほんのさわりだけの報告となつたが、それだけ多くの問題を含んでいるということであり、今後も検討を続けなければならない。

IV層の遺物も、縄文時代の全期を網羅するという、重要かつ貴重な資料であることは、一点の疑いもない。これらについても、今後の検討が必要不可欠である。

（三浦 正人）

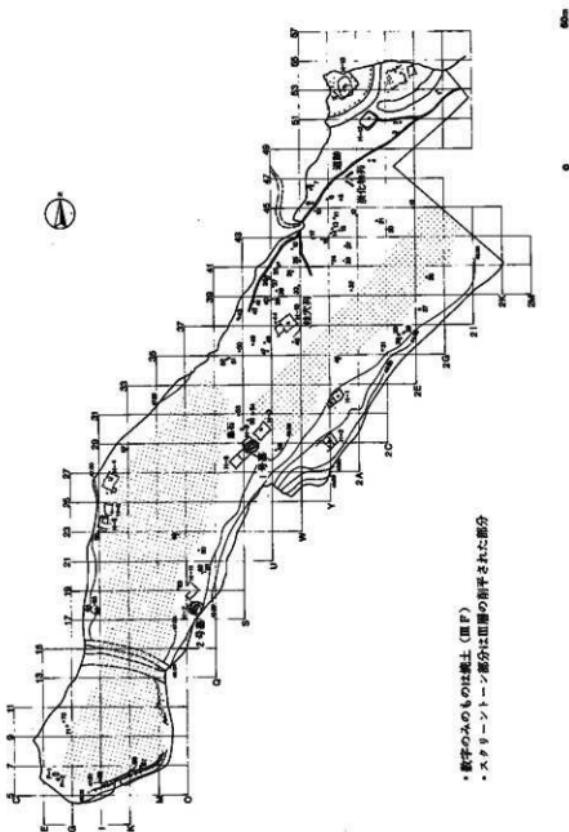


図42 III層造構位置図

2 III層の遺構と遺物

(1) 道跡 (図42・43、図版29)

調査区の北端2 G-52 区から、ボロモイチャシ跡の外を通り、段丘の西縁沿いに北東から南西へと100 m以上続く、道の痕跡が発見された。S-38 区に至って、造田のため破壊され、追跡できないが、恐らくは、ユオイチャシ跡へと、さらにのびていたに違いない。道跡は、第II層 Ta-b 火山灰を除去した時点で、第III層真黒色土の上面に、薄く白色の火山灰が残留することによって確認された。道幅は25~30 cm程度、踏み分けられて僅かに窪んだその深さは、せいぜいが3 cmどまりである。道には、堅穴(III H-12)の覆土上に達するもの、W-43 区から分れて南東へ向かうもの、その手前で崖を下つて川へ向かうものなど、幾つかの分岐がみられる。川原へ降りる坂道は、火山灰の降灰後も、全く同じルートで現在まで利用されており、その重要性が理解される。八重九郎氏は、ルコッru-kot(道の跡)がうねうね続くのが、本当のチャシであると言明しているといふ(萩中1980)。(高橋 和樹)

(2) 送り場跡 (図44、表8、図版50)

W-39・40、X-40 区から、シカの遺骸がまとまって発見された。大半は、W ~ X-40 区の北半分、約3×2 mの範囲に集中して残されており、さらに南西へ3 m程離れた地点にも、少量ながら骨や歯の点在が認められた。それらは、第II層 Ta-b 火山灰を剥いた時点で一部が確認できたが、多くは、第III層黒色土の上部にやや潜り込んだ状態で遺存していた。

遺骸は、角や歯など、頭蓋を構成する部位が主体で、やや離れて検出された大腿骨の破片(No.19)のみが、頭蓋に関係しない骨の唯一の出土例であった。保存

状態は全般に不良で、腐朽し、劣化の進んだ例が多い。平面図にも幾筋かの溝を示したが、一帯には、サブソイラーによる心土破碎が加えられており、農耕に伴う擾乱が、直接、間接に及んでいた。

さて、1、4、8とそれぞれ番号を付した、左右が揃った角は、北西~南東方向に並んでいる。さらに、3とした、右側のみの角坐部は、ちょうど心土耕に伴う溝が走る位置に検出されており、物理的な破壊を受け、左側部分が欠失した可能性が強い。当初は、左右が揃っていたのではないか。このように想定すると、1、3、4、8と連続する、直線的な配列が強く意識されてくる。また、16、17など部分的な角坐部や、11、14などの鹿角片は、西側の一角にまとめられているようにも見受けられる。いずれにせよ、これらの分布状態は、単なる偶然の結果とは考え難く、意図的な配置が認められるように思われた。

角坐など頭頂近くの骨以外では、歯の検出例が多かった。とりわけ上顎歯は多く、左側の第3後臼歯(M³)でみた最小個体数は6で、角坐部から推定される個体数にはほぼ一致する。下顎歯は、M₃でみると最小個体数が3で、ちょうど半分である。角を有する、雄ジカの頭蓋であれば、下顎骨が欠落する場合でも“送り”の対象にされた、ということであろうか。

年齢的には、特に老成した、大きな個体がみられるわけではない。1では、角坐部の後方に冠状縫合

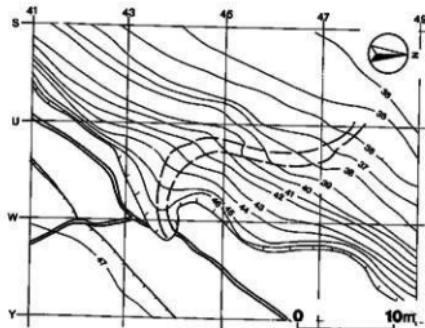


図43 道 跡

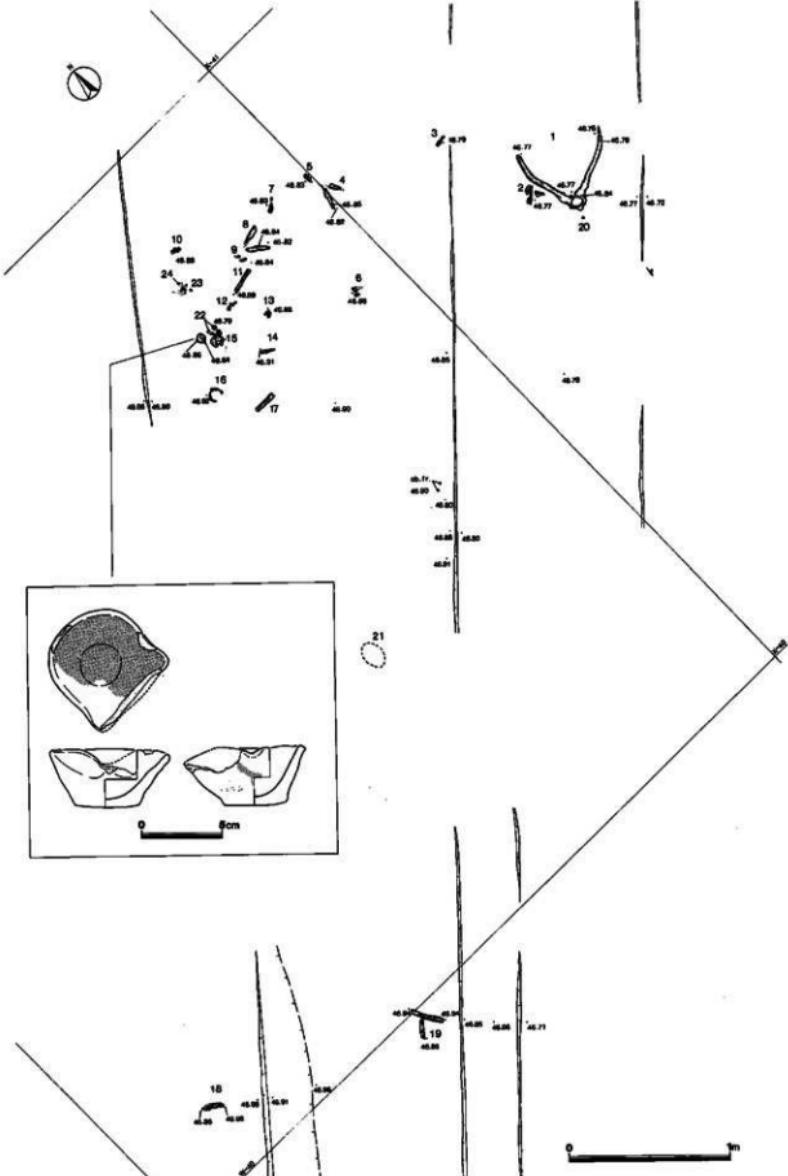
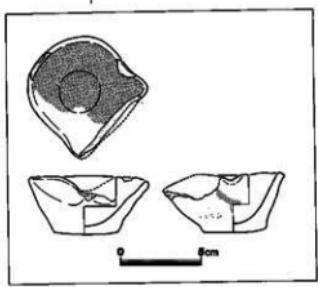


図44 送り場跡・出土土器

が明瞭に認められ、1、3、4、8いずれの場合も、損耗のため正確な計測はできないが、角の径は2.5 cm程度で、特別視する太さではない。2、6、10など、磨滅の程度を判定できた下顎歯は、いずれも M₂ の磨滅指数が3の段階におさまるもので、その年齢は、4~8歳の範囲にあると思われる。

このシカの送り場からは、口辺の一部を欠くが、ほぼ完形の小型の土器が検出されている。農耕による擾乱が及んだ地区であり、送り場に伴ったものとは即断できないが、同一時期の可能性が強いと思われる。

(高橋 和樹)

出土土器は、やや張り出した双角状の2つの口をもつ、小型の双口土器である。口径6.3 cmで、口部を含めた最大幅は7.4 cm。底部は橢円形を呈し、長径4.2 cm、短径3.5 cm。底部中央はふくらみ、やや安定性に欠けている。器高は3.6 cmで、双口部の直下では、器壁に屈曲が認められる。外面は、光沢をもつて丁寧に磨かれている。また、内外にススの付着がみられ、実測図には、スクリーントーンでその範囲を示した。このような小型の双口土器の類例は、岩手県二戸市畠野遺跡1号住居址に見出されており(草間 1965)、これは、栗田式に相当するものとされている(高橋信雄 1982)。

(田中 哲郎)

表8 送り場跡シカ遺存体一覧

遺物番号	測定部位・角	上 頭 下 頭												四脚骨など	種片	目 番					
		上 頭			下 頭			尾													
		L	R		L	R		P1	P2	P3	M1	M2	M3	M1-M3	P1	P2	P3	M1	M2	M3	M1-M3
No.1①	R 前頭～後頭骨・内																				
②	L 前頭～後頭骨・内																				
2								(P1+M1+2)	2	3-5				(M2+3)	2	3					
3	R 向左側か																				
4	$\frac{1}{2}$ 角形																				
5		M ¹	M ²																		
6		M ¹	M ²																		
7								M ₂	2	3-5											
8	$\frac{1}{2}$ 角形																				
9		M ¹	M ²																		
10															P1	M ₂					
11	L 角(分岐部)																				
12	R 誕生部							M ¹			M ₂										
13	側頭部か																				
14	内R.							M ²													
15	後頭部・後頭骨底部																				
16	R 角生部(基部)	P ¹	M ²					M ¹													
17	内生部か																				
18		M ²						M ²													
19																					
20		M ¹																			
21																					
22		M ¹	M ²																		
23															M ₂						
24																					

(3) 近世墓

概要

本遺跡では、2基の近世墓が確認された。2基は、ともにユオイ・ボロモイ両チャシ跡間の河岸段丘上に存在し、1号墓がそのほぼ中央に、2号墓がユオイチャシ跡に近いユオイ沢に面する段丘縁辺部にそれぞれ位置する。両者の間には、58 m ほどの距離がある。これらは、外観上、周溝と盛土をもつ同形態のものであり、規模も長軸 4.3 m 前後でさほど大きな違いはない。ただし、立地の面で、2号墓が堅穴（III H-7）のくぼみを利用していることが、注目される。長軸方向は両者とも、沙流川の上流方向つまり北東方向を示している。墓壇形態は両者ともに長台形を呈するが、2号墓には、意識された副葬空間が頭側にあり、副葬品がそこに集中している。これに対し、1号墓では、副葬品を特定の空間に固めて置くということはない。副葬品の内容は、両者とも太刀・山刀・刀子・中柄・漆器と、基本的に組合せは同じである。両者の年代は、本遺跡自体が Ta-b 火山灰で被覆されており、下限を Ta-b 火山灰の降灰年代 1667 年とすることができます。しかし、上限については、それを決定できる要素はない。ただ、墓標穴の覆土が、1号墓で Ta-b 火山灰、2号墓で火山灰を含まない茶褐色土となっていることから、1号墓は 1667 年をさほど超ないとみられ、2号墓がそれに先行する可能性が考えられる。

今回発見された周溝と盛土をもつ形態の墓は、千歳市ウサクマイ遺跡 B 地点・千歳市末広遺跡で、数例調査されている。これらは、Ta-a 火山灰に被覆されるものであるが、その内容・検討結果からみて、本遺跡例もこれらと同様のものと考えられる。したがって、2つの墓の被葬者は、副葬品からみれば、両者とも男性とみられる。墓壇については、発泡ウレタンで型取りを行った。

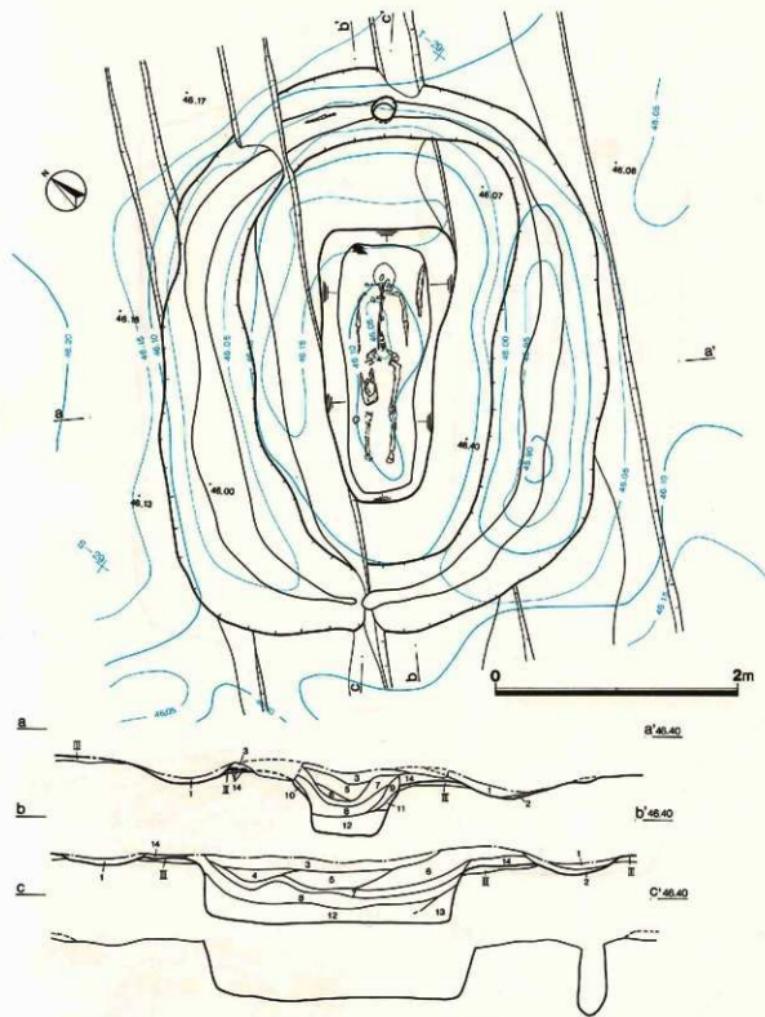
1号墓（図 45~49、表 9、図版 30~35・41）

この墓は、河岸段丘のほぼ中央部、S-28・29 区に位置する。標高は、46.05 m から 46.15 m である。Ta-b 火山灰除去後、数条のサブソライラーによる溝があるものの、周溝で区画された茶褐色土の揚げ土の高まりによって確認された。盛土中央部は、遺体の腐食などのため陥没し、また周溝東南部には、Ta-b 火山灰が丸く輪郭をみせる墓標穴が認められた。

周溝を含めた墓全体の規模は、長軸 4.56 m・短軸 3.63 m をはかる。周溝は梢円形にめぐらし墓域を設定している。周溝の最大幅は、西側部分で 1 m をはかり、深さは 24 cm ほどであるが、南西部分で 10 cm と浅くなっている。墓壇の規模は、壙口部で長軸 2.22 m・短軸 0.57~1.08 m、壙底部で長軸 1.99 m・短軸 0.45~0.69 m をはかり、深さは III 層上面より 0.5 m である。その形態は、北東側すなわち頭側が幅広の長台形を呈し、足端部がせまくなっている。遺体の大きさにはば見合った墓壇の大きさである。長軸方向は、沙流川の上流方向を向く N-56°-E である。

埋葬形態は仰臥伸展葬で、顔面を左側に向いている。頭位方向は、長軸方向と同一である。人骨の遺存状況は、かなり良好である。肋骨・手骨・足骨は腐食が著しく、その痕跡をつかめなかつたが、頭骨から脊椎・寛骨・大腿骨・脛骨・腓骨とはば原形のまま検出された。頭骨は土圧のため右側頭部が扁平となり、いびつに変化していた。大腿骨は、42 cm ほどで、膝蓋骨も残存していた。この人骨の取り上げについては、札幌医科大学助教授百々幸雄先生にお願いした。その際、熟年から壮年の男性であろうというコメントを頂いた。

長軸・短軸の埋土堆積状況をみると、墓壇を掘り上げた土を周間に盛り上げ、遺体安置後の埋め戻し時には、その揚げ土を意識的に残しながら、最後に周溝を掘るという、基本埋葬手順が考えられる。埋土の内容は、暗黄褐色土から茶褐色土が主体をなし、墓壇内の土は、しまりのないかなり柔らかいものである。その中でも 7 層の黒褐色土が目立ち、長軸断面図をみると埋土を上下に分けているよう



1号墓覆土

- | | |
|-------------------|----------------|
| 1 黒褐色土（ロームが若干混じる） | 8 暗黄褐色土 |
| 2 助茶褐色土 | 9 茶褐色土（しまりが悪い） |
| 3 茶褐色土（しまりが良い） | 10 黒色土 |
| 4 暗茶褐色土 | 11 黄褐色ローム質土 |
| 5 茶褐色土（しまりが悪い） | 12 明茶褐色土 |
| 6 暗黃褐色土 | 13 黄褐色土 |
| 7 黑褐色土 | 14 黄褐色ローム |

図45 1号墓全体図

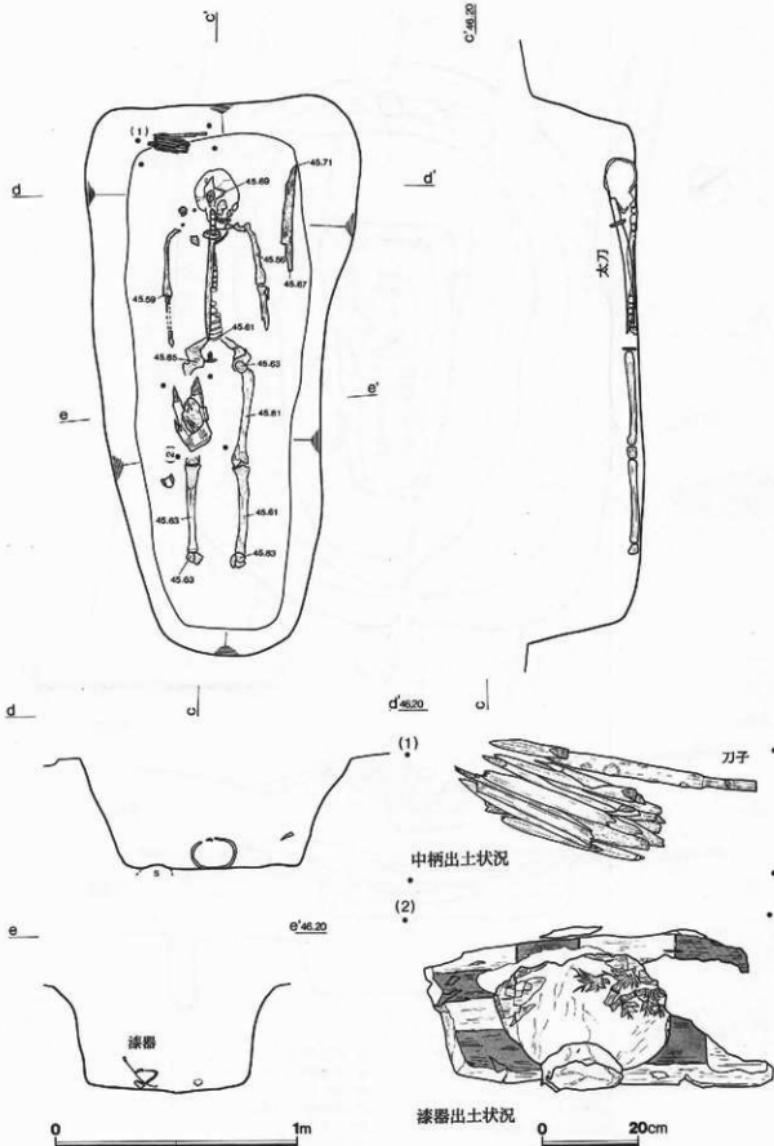


图46 1号墓墓壁实测图·遗物出土状况图

にみられる。この7層より上位の土が、マウンドを形成していたものとすれば、かなり高いマウンドが想定される。また、埋め戻しは、埋土上部ではまず頭側から、そのあと左右から行われた状況がわかる。マウンドの厚さは、周溝の深さと同様で足側の部分が薄く、他の部分にくらべ平坦に見える。この状況は、地形図からも読みとられ、長軸の足側部分が開口しているように見える。また埋土中に多くは、多くの焼骨片がみられた。

墓標穴は、深さ 58 cm・口径 19 cm である。断面形状は中程より脹らみ、丸い底へと続くものである。この中太りする形状からみて、掘り込まれたものとみられ、最大径は 24 cm をはかる。この墓における墓標穴の位置は、北東側の周溝中央部である。これは、ほぼ長軸（頭位方向）線上にあり、軸線から左右にずれることはない。覆土は、Ta-b 火山灰が底まで充填しており、Ta-b 火山灰降灰後に、墓標が抜かれた可能性が高い。のことから、墓の構築時期は、Ta-b 降下年代（1667 年）よりさほど遡らないと考えられる。

以下、遺物の出土状況について述べる。Ta-b 火山灰除去後、墓標穴西横の周溝内に、先を北西に向けて槍先（14）が出土している。上面で出土したものはこの槍先のみで、他はすべて覆土中および塙底からの出土である。塙内の副葬品では、銀覆輪の鐸をもつ太刀（1）が、下頸骨から脊椎に沿ってのり、切先を足側に向けて出土した。埋葬時に身体の上に置かれたものが、遺体腐食後落ち込んだものとみられ、頭骨の一部を陥没させている。この太刀の鞘尻と考えられる鹿角製品（11）が、太刀の延長線上の寛骨の間より出土している。また、柄頭とみられる刀装具（10）が頭蓋骨にのって出土し、これも太刀の延長線上にある。刀装具とみられる金属製品（6～8）は、頭骨右横の塙底部より出土しており、7 と同じものが 10 の柄頭にも 1 個ついている。また、6 と同じ製品（5）が人骨取り上げ後のクリーニング中に、下頸骨と頸椎との間より発見されており、その中央の孔には、2 つの小孔をもち、その一方に植物質のひもをつけた板状のもの（3）が入っていた。頭骨の左横には、山刀（2）が頭位方向に平行して置かれ、切先を北東に向けていた。塙底より 10 cm ほど浮いた状態での出土である。塙底北側の壁の立ち上がり部分には、刀子（13）とともに、シカ、タジラの骨を素材とした中柄（15～37）が 24 本まとめて出土している。刀子の切先は北西方向を向いており、中柄の先端部の向く方向は、すべて刀子と同じで逆転するものはない。中柄 24 本のうち 1 本だけに、鉄織が装着されていた（15）。中柄取り上げ時には、その外側をめぐるように植物質の薄い膜状のものがみられたが、取り上げることはできなかった。中柄は、この植物質のもので、束ねられて副葬されたものとみられる。植物質の痕跡は、中柄実測図中に、スクリーントーンで示した。また、北側に片寄る出土位置からみて、中柄には矢柄が装着されていたものと思われる。これまでが寛骨より上の上半部からの出土品であり、個体数が多い。これに対し下肢側には、右大腿骨上に、漆器の折敷と椀が出土している。朱と黒の市松模様をもつ折敷の中央に、椀（38）が伏せられて置かれ、折敷ともども大腿骨間に傾いていた。この出土状況は、民俗例にみられる通りであり、ヒモで縛られていたものと考えられる。ただし、箸はみられなかった。また、取り上げ後のクリーニング中に、折敷と椀との間より、黒地に朱漆で描いた二ツ巴文をもつ漆膜片（39）が検出された。これの器形については、全く不明である。ただし、漆碗内には土が充満しており、その口縁部付近に平面的にあったもので、椀とは考えられない。漆器の斜め横、右脛骨の右側で、銅製品（9）が出土している。南川 2 遺跡の 9 号墓出土の太刀の柄の装飾具として使用されているものと同様のものであり、刀装具とみられる。塙底部より 12 cm ほど浮いた状態で出土している。また、埋土のフライによる歯骨片選別作業中、14 の針状の鉄製品が検出されている。出土位置は不明である。

（田中 哲郎）

遺物(図47~49、表9、図版33~35)

太刀：1は、全長56.5cmの小太刀である。刃長45.3cm、元幅3.4cm、刃反り1.8cm、全反り2.5cmをはかる。刃部は鞘木質、茎は柄木質と、全体が木質におおわれている。柄には、黒漆・織維や、鹿角などの刀装の一部も残存している。太刀自体は平棟平造りで、鐔にかくれて見えないが、浅い両区をもつものと思われる。茎には、目釘孔がある。刀装具は、付属している鐔や切羽の他、3~11の製品がある。鐔は、銅製のやや方形化した円形鐔で、地は平肉、打ち返し耳をもつ。この耳に、四分一(銅75%・銀25%の合金)と思われる銀色の覆輪が、下方合わせでかぶせてある。茎櫛孔のみで小柄櫛孔・笄櫛孔はない。刃側の地は、切羽台の部分を残し、外縁から1.5cmほどの範囲で布目状に加工されている。ここに、耳に沿って8個の据文象嵌がなされている。笄用の抉りをもった銅の切羽が一枚ついている。茎側は、外縁から少し内に12個の据文象嵌がなされている(2個欠落)。さらに、この鐔と対をなす、同じつくりの大切羽がつく。形状も鐔の小型化したもので、四分一の覆輪(上合せ)とそれに沿う10個の据文象嵌が特徴的である。この外にもう一枚銅の切羽が装着されている。象嵌されている据文は、四分一製と思われ、鐔のものは20弁、大切羽のものは13弁の花卉型である。鐔は本来とは表裏が逆に装着されているようである。切羽台や据文の位置からみて、逆面の方が、大切羽の落ち付きが良いように見える。鐔の形態は室町時代のものである。3~4は銅の小板片の両端に小孔を穿ったもの。4には木質が残る。3は5とセットであることから、3~4は5~6の装飾を柄に固定する役目をもっていると考えられる。5~6は銀製と思われる薄板の、平面瓜形をした打出物である。文様は御珠の巣様で、中央に、3~4の金具の入る小孔がある。7も銀か四分一製と思われる小円盤で、木質に象嵌されていたものであろう。9は、柄に巻きつけるように装着した装飾で、両側辺に小孔が各2孔穿たれている。これも四分一製と思われる。10は木質の柄頭で、中央に小孔があり、これに小さな板がかぶせられている。その両側には拳形の金具がつけられている。8はその片方の頭部と思われる。金具はいずれも、銀か四分一製であろう。11は、鞘尻である。下の板は鹿角製で、平面構造形の襷開きする薄い板から内面だけに縁を削り出し、3孔を穿つ。そのうち中央の円孔を残し、脇の2孔に鉄製の釦を打ち鞘本体と接合する形式である。これら寄せ集めの刀装具とその装着方法から考えると、この太刀は、蝦夷太刀(エムシ)と呼ばれるものであろう。

山刀：2は山刀(タシロ)であろう。鞘・柄の木質が全体に残っている。全長42.9cm、全反り1.0cmで、わずかに外反する。平棟平造りで、両区があり、茎には目釘孔が2孔ある。

槍：12は、墓標穴窟から出土した槍である。稚先の断面から、平三角造りの槍といえる。柄への移行部は両側刃が面取りされ断面五角形となる。そこに舟形の口金がつく。柄断面は長四角形で、端部には抉りがある。

刀子：13は、平棟平造り、両区の刀子。鞘・柄の木質が一部残存。刃に使い減りがみられる。

鎌：15は、クジラの骨製の中柄を装着したままの鐵鎌。中央部で、はさみ込んだ中柄を目釘で止めている。先端を欠くが、無茎の腹抉五角形式の鎌である。

金属器では他に、覆土から出土した、針(14)がある。被葬者を男性と考えているこの墓には、不釣合な遺物で、1号墓占地前にあったIIIH-9の遺物と考えた方がよさそうである。(三浦正人)

中柄(15~37)：1号墓から合計24本出土している。図示できたものは23本で、残り1本については破損が著しく図示できなかった。寸法は、破損品が多く本来の長さをつかむことはできないが、12~14cmの間に入るものが多いと推定される。最大幅は、1cm内外である。これらの素材は、クジラの骨とシカの中足骨に分けられる。前者が15~25で、後者が26~37である。中柄先端部の形状をみると、断面形が扁平なもの[A]と三角形を呈するもの[B]に分けられる。Aは、図示した下方に平坦面

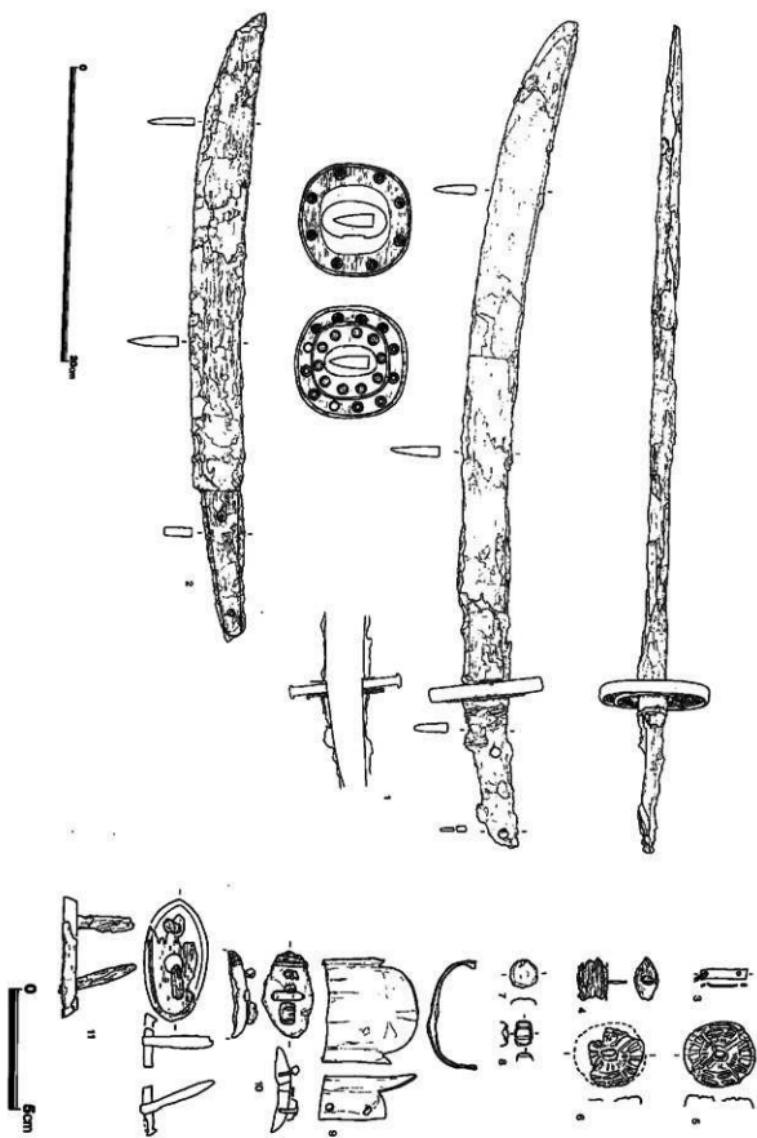


図47 1号墓出土遺物(1)

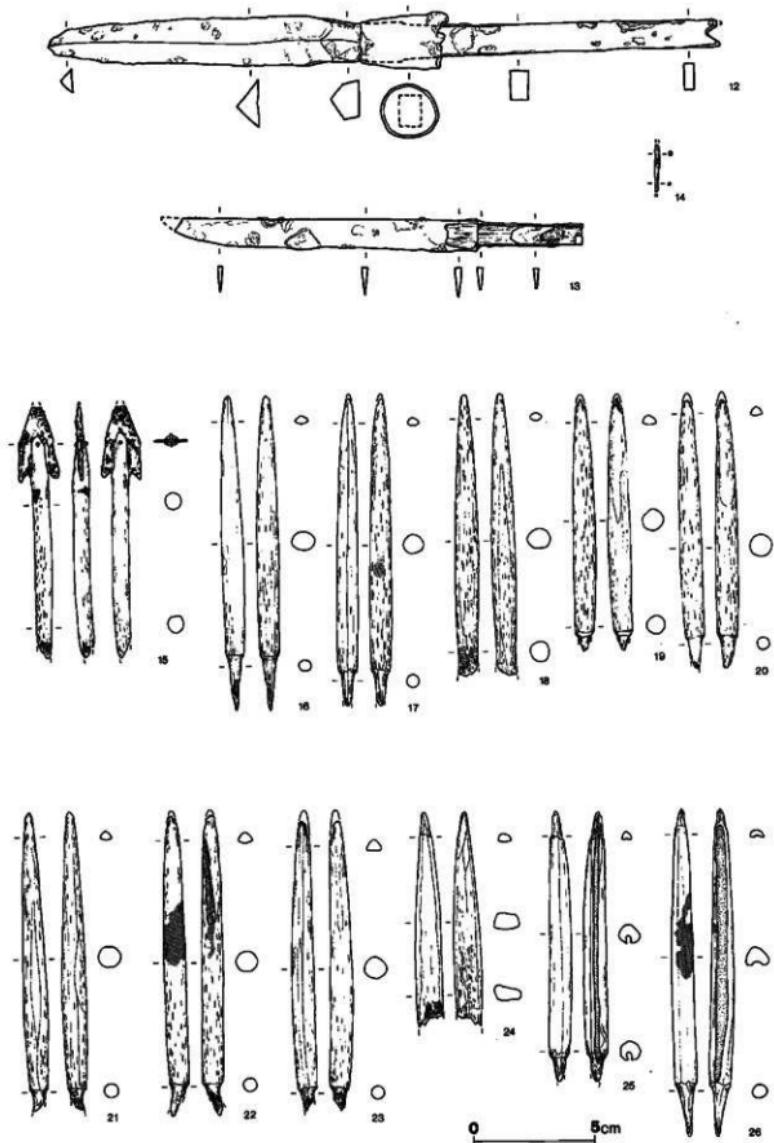


图48 1号墓出土遗物(2)

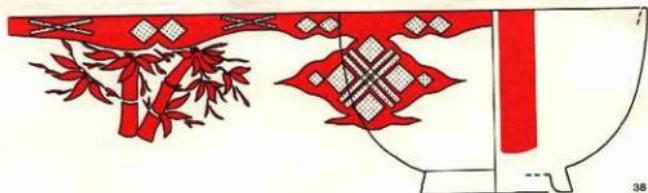
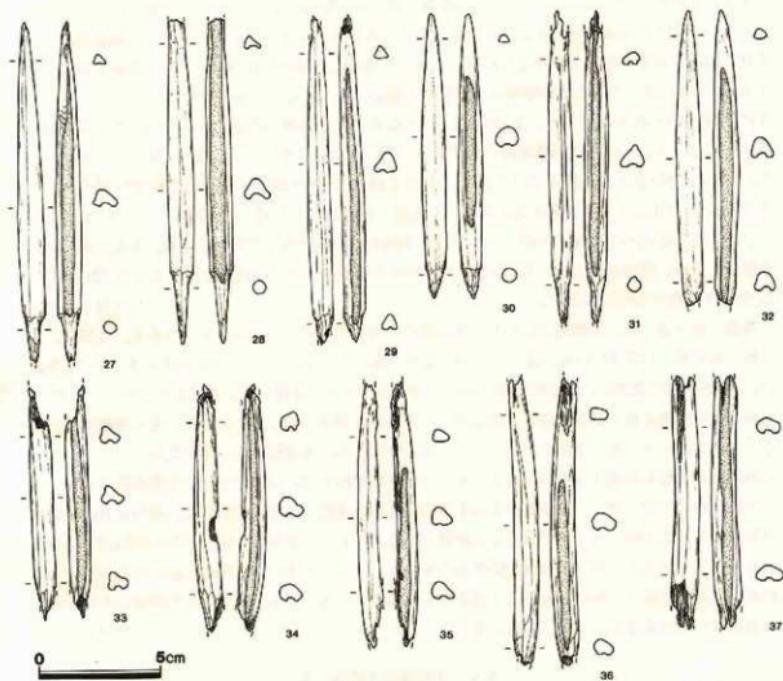


図49 1号墓出土遺物(3)

を削り出し、その逆側にも削りをかなりいたるもので、16~19・26がこれにあたる。Bは、Aと同様に下方に平坦面を削り出しているものの、逆側にはさほど極端な削りを入れていないもので、20~25・27・29~32がこれにあたる。クジラの骨製のものにAに該当するものが多いが、この両者の違いは、素材に起因するものか、とも考えられる。また、先端部に、鐵の装着のためと考えられる明瞭な段差をもつものを〔a〕とし、鐵の緊縛による装着の痕跡とみられるへこみを有するものを〔b〕とする。aには24・25・26があげられ、bには22・27・32がある。茎部の形状については、削り痕を明瞭に残すもの〔I〕と、わずかに痕跡程度に残すもの〔II〕、きれいに磨いているもの〔III〕の三者にわかれ。Iには、29・30・34・36があげられる。IIには16・17・26・27が、IIIには19~23・25・28・31があげられる。IIIにクジラ骨製のものが多い。鐵錐を装着している15は、刃溝(スリット)をもつもので、その外側はかなり扁平に磨かれている。中柄中央の横断面は円形を呈する。また、同じクジラ骨製であるが、裏面に溝をもつもの(25)や、中位の横断面がほぼ四角形を呈するもの(24)があり、24本のうち特異な形態を示す。

漆器：椀(38)は、秀衡庵といわれ、桃山時代の時期のものといわれるものである。寸法は、すべて復元推定値で口径12.5cm、高さ7.5cm、高台の高さ1.0cmである。内朱外黒の椀である。外面には、2個所朱漆で雲形(中央雲形)が描かれ、口縁部分でそれが連続する。垂れ下がる中央雲形の中に、方形に近い金箔4枚で繁菱を作り、繁菱内に×を二重に押捺している。これに、左右1枚ずつ、繁菱をつくるものより一通り小型の角がついている。口縁をめぐる雲形にも、中央雲形の上の左右にそれぞれ菱形角2枚が連続するものがある。ふたつの中央雲形の間には、朱で竹の文様が配されている。この竹文様の上方、抉りの入る雲形文にも菱形角2枚が連続し、その左右には、縦つぶれの×が押捺されている。この椀とセットで出土した折敷がある。これは四限を切り落とした形の限切盆である。これも推定値であるが、短辺19cm、長辺25cmほどである。黒地に朱を市松に配したものである。その他、前述した通り、黒地に朱のニツバ文をもつ漆器片(39)が出土しているが詳細は不明である。これらはいずれも漆膜のみで、木地は残っていない。

(田中 哲郎)

(田中 哲郎)

表9 1号墓出土遺物一覧

図 No.	名 称	材 質	寸 法cm()	内施用部	備 考	図 No.	名 称	材 質	寸 法cm()	内施用部	備 考
47	1 太 刀	鉄・骨等	55.5	刀身36.4	鉄切刃・骨・木質・漆塗仕	47	9 刀 鋸 具	鉄	3.7	幅4.4	鉄口?
2	山 刀	鉄	42.9	刀身30.0	鉄・木質抜抜	10 刀 鋸 具	鉄?				鉄頭? 木質底
3	刀 鋸 具	鉄	1.9	鋸 0.35	5枚組合せ	11 刀 鋸 具	鉄・木質	底30.0	刀身33.3	3~11 1の刀鋸具	
4	刀 鋸 具	鉄?	1.9	鋸 0.35	木質付-3と同形-5と組合せ?	12 刀 鋸 具	鉄	27.5	鋸歯2.0		
5	刀 鋸 具	鉄?	1.9	鋸 0.35	2.7	5枚組合せ	13 刀 子	鉄	36.6	幅1.3	先光火・鉄本質實存
6	刀 鋸 具	鉄?	1.9	鋸 0.35	5枚組合せ?	14 鋸	鉄	長(1.9)			基壇附近出土
7	刀 鋸 具	鉄?	1.1		門形	15 鋸 漆	漆	長(3.1)	幅1.7	小柄付	
8	刀 鋸 具	鉄?	1.0		漆と用形						
中柄											
図 No.											
計 面 備 理長 最大幅cm 底さ(g)											
45	クジラ	9.2	0.7	(5.7)	—	—	29 シカ 中 足	骨	13.4	0.95	5.5
15	*	12.6	0.95	4.9	A	I	30	*	13.4	1.0	5.6
16	*	12.1	0.95	4.9	A	II	31	*	12.7	1.0	3.8
17	*	11.5	1.0	4.1	A	—	32	*	12.0	1.0	5.1
18	*	10.3	0.93	3.0	A	III	33	*	9.5	0.9	2.3
19	*	10.9	0.9	4.8	B	III	34	*	10.0	1.0	3.1
20	*	12.3	1.0	5.9	B	III	35	*	10.8	0.9	2.9
21	*	12.3	0.9	5.4	B	III	36	*	11.7	1.0	4.5
22	*	11.9	0.9	4.6	B	III	37	*	10.3	1.1	3.4
23	*	8.8	1.1	2.4	B	—	—	*	—	—	—
24	*	11.8	0.9	4.5	B	—	—	—	—	—	根脚不規
25	*	12.3	0.9	4.8	A	II	38	漆	内朱外黒	底12.5~7.5~高12cm	骨・骨の文様(2列)金箔附
26	シカ 中 足	12.3	0.9	4.8	A	II	—	骨	骨	骨	骨の底張、漆塗漆
27	*	12.9	1.05	4.5	B	II (1)	39	漆 直方	朱・漆塗漆	底地朱の二ツ巴文	
28	*	13.3	1.0	4.5	—	III					

2号墓（図50～53、表10、図版36～41）

この墓は、O-17・18区に所在し、ユオイ沢に面する河岸段丘上縁辺部に位置する。標高は、46.15mから46.50mである。この墓の南西方向には19mほどの距離をおいてユオイチャシ跡がある。墓の形態は、1号墓と同様であるが、墓標穴が周溝内側の盛土部分にかかる点など違いがみられる。さらに、1号墓との著しい相違点は、この2号墓が堅穴（IIIH-7）の窪みを利用して立地していることである。また周溝内および墓の周辺には、シカの下顎骨などの歯骨片が点々と散布している状況がみられた。1号墓にくらべ腐植土の発達が見られた。

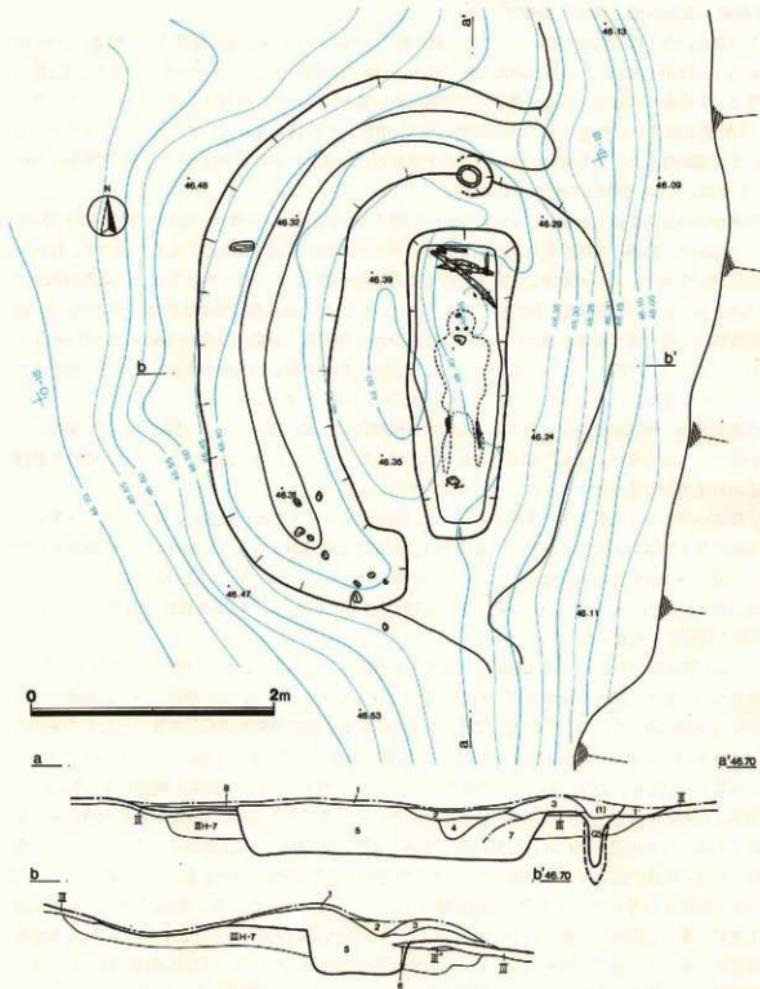
周溝を含めた墓全体の規模は、長軸4.20m・短軸3.40mである。周溝は、幅1mほど、深さ22cmほどをはかり、墓壇の西側を弧状に囲んでいる。ユオイ沢側の斜面部分は掘り込んでおらず、自然地形を利用してマウンド部を強調している。この墓の構築手順は、1号墓と同じであり、周溝が最後に掘り込まれている。足端部側の周溝および盛土についても、1号墓同様他の部分に比べ平坦である。墓壇の規模は、壙口部で長軸2.50m・短軸0.54～0.9m、壙底部で長軸2.24m・短軸0.31～0.64mをはかり、深さは1号墓より浅く0.37mである。形態は、頭側が幅広の長台形を呈している。長軸方向は、沙流川の上流方向を向くN-24°Eで、頭位方向も同一である。

埋葬形態は、仰臥伸展葬とみられる。人骨は、後頭部の一部、歯のエナメル質部分、両大腿骨の一部が検出されたのみで、かなり腐食が著しく、糊状を呈していた。他の部分については、骨粉の範囲などから遺体層の範囲を大まかにとらえたのみである。

墓壇内の埋土は、茶褐色土で充填されている。断面図でみると、頭の位置に、盛り上げたと考えられる黄褐色土の落ち込みがみられる。墓標穴は、長軸線上の周溝とマウンド部のちょうど境界部に位置し、深さ69cm・最大径19cmをはかる。その形状は、尖底でまっすぐに立ちあがることから、打ち込みによるものとみられる。その覆土は、ほぼ茶褐色土でうまい、Ta-b火山灰は含まれていない。1号墓とは際立った違いをみせる。

遺物は、壙口部の埋土から、4の銅製の刀装具が1点出土した以外は、すべて壙底からの出土である。壙底部では、頭部上方に50cmほどの空間を設けて、太刀・山刀・中柄など漆器以外の副葬品のすべてをこの空間に置いている。その東北隅に、切先を南むけ頭位方向に平行して置かれた刀子(9)が山刀(2)より4cmほど浮いて出土した以外は、すべて重なり合って出土している。太刀(1)は、それらの一番上に置かれ、切先を北西に向け斜めに置かれている。出土時には、3の刀装具も装着していた。また、鞘金具とみられる5が、太刀の鐔の西側に出土している。太刀の下には、山刀(2)が切先を西に向け置かれている。この山刀の下には、北側に刀子(8)が、南側に刀子(9)が、切先方向を山刀と同じくして置かれている。太刀の切先下の北西隅には、シカの骨を素材とする中柄が19本まとめて出土している。その出土位置から考えて、1号墓と同様矢柄がついていたものと思われる。また、9の刀子下にも中柄1本が、著しく腐食して出土している。これは、小動物による移動だらうか。中柄の下には、木柄部に銀象嵌を施した刀子(7)が出土している。これも切先を西に向いている。これら副葬品取り上げ後の壙底精査中、刀装具とみられる円形の銅製品(6)が出土している。2号墓の太刀・刀子類の出土状況をみると、9の刀子を除き、すべて切先を北西から西に向かって、かつ刃を遺体と逆の方向に向けている。これは、1号墓の山刀や刀子が刃側を遺体に向いているのと好対照をなしている。足端部側からは、碗とみられる漆器1点が出土している。1号墓にみられるような折敷はなく、碗のみの副葬である。

（田中 哲郎）



2号墓覆土

- | | |
|-------------------------|----------------------------------|
| 1 黒褐色土（黒色土と茶褐色土が粒状に混じる） | 7 暗黃褐色土（5よりもロームの入りが多い） |
| 2 茶褐色土 | 8 黄褐色土（ロームまじりの土、掘り下げる土の残り？） |
| 3 細黄褐色土 | 墓標穴 覆土 |
| 4 黄褐色土 | (1) 結茶褐色土（粒状をなす、Ⅲ層に近いがローム粒を若干含む） |
| 5 茶褐色土 | (2) 茶褐色土（しまりが全くない） |
| 6 黒色土 | |

図50 2号墓全体図

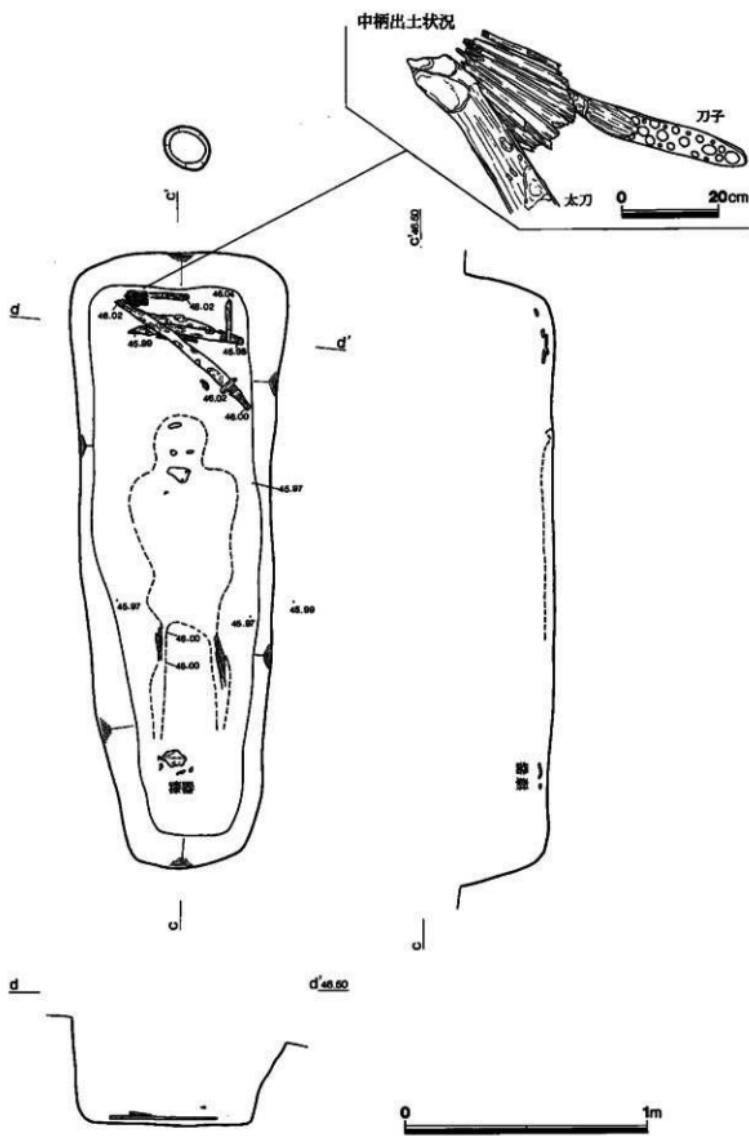


图51 2号墓墓室平面图·遗物出土状况图

遺物（図 52・53、表 10、図版 38~40）

太刀：全長 71.8 cm 刃部長 57.9 cm、元幅 3.3 cm、全反り 3.2 cm、刃反り 2.1 cm をはかる。鞘・柄の木質が一部残存する。特に刃付近は木質の残存状態がよく、上塗した黒漆や繊維痕跡も一部良好に残っている。太刀本体は、平棟平造りで、鍔や木質にかくれて観察しにくいが、浅い両区と思われる。切先は、かます切先で、先幅は 2.6 cm である。茎は厚みがあり、目釘孔が 1 孔ある。鍔は、銅製で、木瓜形、四方に猪の目透しをもち、平肉で、耳は鋸歯状耳である。茎窪穴のみで、小柄根穴や斧柄穴ではなく、覆輪等の装飾も一切ない。刃部側の耳の上辺に、2 カ所つぶれがみられる。刀への装着時につけたものであろうか。刃・柄側両方ともに 2 枚の切羽が装着されている。刃部側のものは、薄い銅製で、耳高より低く鍔内におさまっている。茎側のものは、2 枚とも銅製で、やや厚みがあり、縁部が小刻みに加工されている。その切羽の後に銀金物が、棟側合せで装着されている。銅製金鍍金で、唐草文の透し彫り（美濃彫り？）が施され、合わせ部両端に固定のための小孔をもつ。この他刀装具は、3~6 があり、3 は銀金物の後ろにはめ込まれていたもの、4 は刀からはずれて出土している。ともに筒金といえるもので、銅製の薄板に魚々子が施されている。3 には鍍金あり。側面で合わせるために両端に小孔がある。3 には留めるための繊維が残存している。5 は、鉄製で鍔のような形をしているが、元幅と合わないことから、鞘か、他の刀の装具と思われる。6 は中央に小孔のある銅製の円盤。太刀飾りではなく、他の刀のものであろう。鍔や透し彫りの銀金物は南北朝ごろのもので、刀装具や刀自体からみて、蝦夷太刀（エムシ）と呼べるものではなく、日本刀本来の姿をもっていたものであろう。

山刀：2 は、山刀（タショロ）と呼ばれるもので、鞘・柄の木質が全体に残存している。全長 48.4 cm、元幅 3.7 cm、全反り 0.9 cm をはかる平棟平造の刀である。木質でわからなかったが、X 線撮影で、浅い棟区のあることがわかった。茎は短く、目釘孔が 2 孔あるが、そのうち 1 孔は、穿ち直したものだろう。折れた太刀の再利用かもしれない。

刀子：4 本副葬されている。いずれも鞘や柄に木質や樹皮等の有機質が残っている。7 は、長目の柄木に銀か四分一（蛍光 X 線分析では銀と銅が強いスペクトルを示した）製の小板を象嵌したもので大小 29 カ所のほとんどに、それが残っている。X 線撮影で観察するとあらかじめ木に丸形をつけておき、

第 10 2 号墓出土遺物一覧

図 No.	名 称	材 質	寸法 cm () 内容容積	備 考
S2 1	太 刀 鞘・柄等	長 71.8 宽大径 3.5	鞘: 切羽・骨合付・本質・漆残存 柄: 鋼	
2	山 刀 鞘	長 48.4 宽 3.7	鞘: 鋼本質残存	
3	銀 金 鞘	長 1.2 幅 1.1	1 の刀装具・腰袋骨・魚々子	
4	銀 金 鞘	長 1.1 幅 1.3	1 の刀装具・腰袋骨・魚々子	
5	銅 金 具	長 3.0 幅 3.6	1 の刀装具	
図 No.	名 称	材 質	寸法 cm () 内容容積	備 考
S2 6	刀 装 具	鋼	径 2.1	円形
S3 7	刀 子 鞘	銅・銀等	全長 34.7 本体長 15.7	銀金装木附付
8	刀 子 鞘	全長 39.6 本体長 18.6	銅・銀木質復存	
9	刀 子 鞘	全長 37.4 本体長 18.5	銅・銀木質復存	
10	刀 子 鞘	長 15.9 刃闊幅 1.3	銅・銀木質復存	
図 No.	名 称	材 質	計 面 積 mm ² 最大径 cm 重さ(g)	外端部 基部部 の形状 の形状
S3 11	シカ中手前脚骨	9.5 1.6 2.4	—	動物遺物？
12	*	9.5 0.9 2.6	—	
13	*	4.5 1.1 0.8	—	
14	シカ中手骨	9.1 0.9 3.5	—	
15	シカ中足骨	7.6 0.8 1.3	—	
16	*	9.1 1.0 3.0	—	
17	*	8.4 0.5 3.5	—	
18	*	9.1 0.8 2.0	—	
19	*	10.0 1.1 2.6	—	
20	*	9.2 0.9 2.6	—	
21	*	6.05 0.8 2.6	—	
図 No.	名 称	材 質	寸 法	備 考
—	鹿 角	角・骨質	鹿地に角の痕跡？	

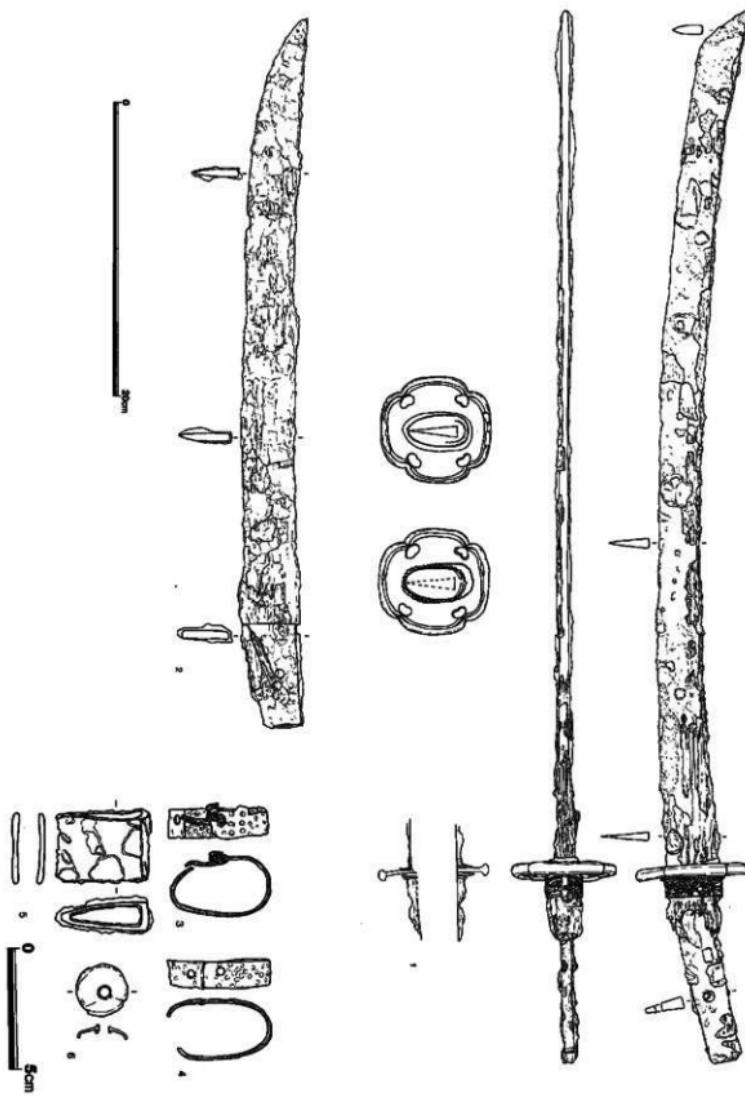


图52 2号墓出土造物(1)

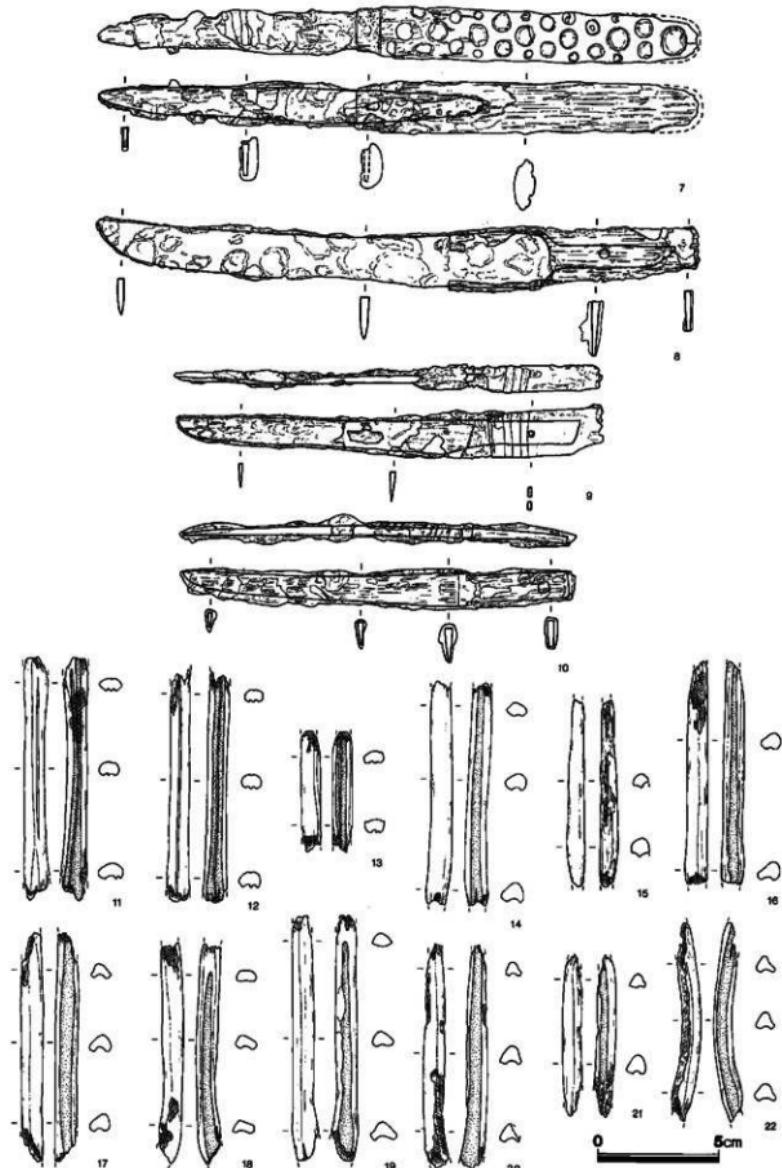


图53 2号墓出土遗物(2)

そこにこの板をたたき込んだもののようにある。残存状態からみて、片面にしかこの装飾は施されていないのであろう。刀身は刃もするどくなく、茎も短かい。おそらく柄の装飾がメインであり、非实用的なものなのであろう。このような象嵌を施されたものは伝世品の蝦夷太刀や矢筒等にみられ、千歳市末広遺跡のI P-45・82・114墓壙の刀子、音別町ノトロ岬遺跡A-1号墓の太刀にも確認できる。8は平棟平造りで、両区の刀子。外反りをもち、茎は刀身のわりに小振りで、目釘孔が1孔ある。マキリと考えられる。9・10はX線撮影で、その形状を観察した。特に9は柄に樹皮や織縫巻きがよく残り、そのため逆に刀子本体の形状がつかみにくかった。両者とも平棟平造りで、9はゆるい両区、10は浅い両区、ともに1孔の目釘孔を有する。8~9は刃に使い減りがみられ実用品であることがわかる。1、2号墓の金属製品についてはVII章の当該項でも、若干触れる。

(三浦 正人)

中柄(11~22)：この墓では20本の中柄が出土しているが、腐食が1号墓のものに比べ激しく、図示できたものは半数であり、しかも先端部の形状および茎部の形状を知り得るものはない。寸法も、全長を推定できるものではないが、最大幅が0.9cm内外を示すことから、1号墓出土のものと同様か或いは多少短くなるかとも思われる。材質は、シカの中足骨が過半数を占めるが、6点がシカの中手骨(うち4点が前面部使用)であり、1号墓ではみられないものである。また、1号墓でみられたクジラの骨はみられない。残り2点は、材質不明である。シカの中手骨前面部を素材とするものに、11~13がある。13は小破片でわからないが、11・12は、両端が幅広になる形状が認められる。シカ中足骨を素材とする19についても下端が幅広になる傾向がみられ、1号墓のクジラ骨製の中柄にみられる中太りのきれいな流線形と対照的である。

(田中 哲郎)

漆器：出土した漆器は、脛骨付近と思われる部位から出土したもの1点である。黒地に鮮やかな朱で、全体が細く先の尖る葉のような文様が描かれている。出土した面の逆側にも、同じような朱描きの文様がみられた。木地の残存はなく、漆の膜片のみである。膜片の広がり等から考えて、小さな器物、碗と考えられる。

(田中 哲郎)

(4) 建物跡

概要

59年度のボロモイチャン跡調査で、建物跡を確認したことが契機となり、二風谷遺跡の60年度調査では、炉・炭化材・金属製品・鍾石等を目安にして、建物跡の柱穴確認につとめた。その結果、11軒の打ち込み柱建物跡を検出した。これによって、59年度確認していた數ヶ所の炭化物列等も、建物跡である可能性が生じてきた。これとは別に2軒の堅穴状の建物跡も検出した。そのうちIIIH-12は擦文期よりも新しいもので、平地の打ち込み柱建物に、移行する過程のものとも考えられる。打ち込み柱、堅穴状の両建物跡とも、入口構造のわかるものがあり、建物の中央に炉をもつものが多い。柱穴は、深いもので60cmほどあるが、掘り方のみられるものはない。長軸方向も、3通りほどにグルーピングできる。IIIH-7と2号墓、IIIH-3・8・9と1号墓、IIIH-12とA墓、IIIH-13とA郭建物という、重なり合った部分の前後関係もとらえられ、大枠では時期的な把握も可能である。ほぼ全軒から、金属製品が出土しており、鍾石も3軒の建物跡から確認した。炉には魚・獸骨の焼骨片がみられる。これら建物跡は、チセとの類似点・相違点の両者をもち合わせているが、IIIH-10は特に類似性が強いように思われる。以下各建物跡ごとに、概略を述べるが、詳細は、VII章の建物跡や遺物の節に記述する。チャシ・墓等との関係も各項で折りに触れてある。

(三浦 正人)

III H-1 (図 54・55、表 11・25、図版 42・43)

遺跡の位置する段丘の南東向き緩斜面、言い換えると、ユオイ沢向きのX・Y-28~32 区では、2軒の、打ち込み柱建物跡が確認された。北側をIII H-1、南側をIII H-2と名づけた。III H-1は、15本の柱穴で構成され、長軸を南西→北東に向いている。規模は、長軸の最長が柱穴 9-14 で 6.7 m、短軸の最長が柱穴 3-10 で 3.1 m。南西側と北西側の2つのスペースがあり、合計面積は約 14.8 m² である。柱穴間の距離は、0.8 m 前後のもの (a) と 1.3 m 前後のもの (b) に分類され、a+b という間隔も存在する。長軸側では b と a+b、短軸側では b が主体の間隔となる。打ち込み柱の深さは、40 cm 前後に集中し、径 10~12 cm のものがほとんどである。入口は、柱穴 13・14・15 で構成されるものと思われるが、あるいは、南西側スペース全体が、入口としての役割も担っていたかもしれない。炉は、2カ所存在する。北東側にメインの炉である F 1、南西側に F 2 がある。F 1 は、上部に灰層をもった厚い焼土で、灰層・焼土層からは、サケ等の魚骨椎体やシカと思われる焼骨が、検出されている。F 1~F 2 間に、炭化物の残存する面が広がっている。ただこれが建材の一部であるか、床面構造の一部であるのかは、断定できない。

遺物は、鉄器 3 点・古銭 1 点、ゴザ等を編む時に用いる錘石が 1 群出土している。1 は、両区の刀子で、刃部幅からみて、マキリと呼べるものであろう。柱穴 10-11 の列の外から出土している。2 は刃部の長さ 11.5 cm の直刃の鎌である。刃部先端を欠いているが、折れた部分が丁寧に処理されており、欠損後も引き続き使用していたことがうかがえる。刃部棟側でも 2 mm とうすく、柄部でも 3~4 mm しかない。柄部端も折れているようで、そこに目釘孔が 1 孔。半欠状態でみられる。口金(タマクラ)となる、長径 3 cm の精円環が付属している。南西側スペースの錘石群中より出土した。同形態のものは、ボロモイチャシ A 郷から 2 点、2 E-5 区から 1 点出土している。使用法については不明であるが、この時期のものが、直刃であることは、千歳市末広遺跡の例をみてもわかる。3 は、柱穴 15 の脇から出土した小札片である。孔は 2 列で、現存で 6 個確認できる。4 は、F 1 脇より出土した銅鏡で、文字は行書體で「元豊通宝」と読める。元豊通宝は北宋神宗の 1078 年初鋳で、渡来鏡中でも数の多いものの一つである。錘石は、本来、南西側にあったものが斜面下に落下し広がったものであろう。総数は 89 個で石質は砂岩・片麻岩・泥岩が主である。長さ・幅・厚さの平均が各々 5.6 cm・2.7 cm・1.6 cm の、細長い小穂で、平均重は 40.3 g である。

III H-1・2 は同時存在したものと思われ、両者の関係や、他の建物・墓・チャシとのかかわりが重要である。これについては、改めて VII 章で触れる。

(三浦 正人)

表 11 III H-1 柱穴・出土遺物一覧

No.	深さ cm	No.	深さ cm	柱穴 No.-No.	距離 m	分類	柱穴 No.-No.	距離 m	分類	柱穴 No.-No.	距離 m	分類
1	47	9	35	2-3	1.45	b	9-10	1.80	c	13-14	1.15	b
2	43	10	39	3-4	2.10	c	10-11	1.90	c	8-14	1.35	b
3	25	11	38	2-5	1.25	b	6-7	0.85	a	13-15	1.30	b
4	45	12	37	5-9	1.25	b	7-8	2.25	c			
5	52	13	56	4-6	1.20	b	11-12	0.75	a			
6	38	14	42	6-11	1.80	c	12-13	1.25	b			
7	48	15	39									
8	60											

a : 0.8m 前後
b : 1.3m 前後
c : a + b

図番	名 称	材 質	寸法 cm () 内径存測	備 考	図番	名 称	材 質	寸法 cm () 内径存測	備 考
1	刀 子	鉄	長 20.3・刃部幅 2.2		4	古 銭	銅	径 2.4	元豊通宝
2	鎌	鉄	刃長 11.5・高 (9.5)	直刃・タマクラ付	錘 石 (89個)	Sa. Gne. Mud.	平均高 5.6・平均幅 2.7・平均厚 1.6・平均重 40.3 g		
3	小 札	鉄	長 (2.6)・幅 2.2	孔 2 列	魚骨片・歌音片	サケ等・シカ?			F-1 焼土灰中

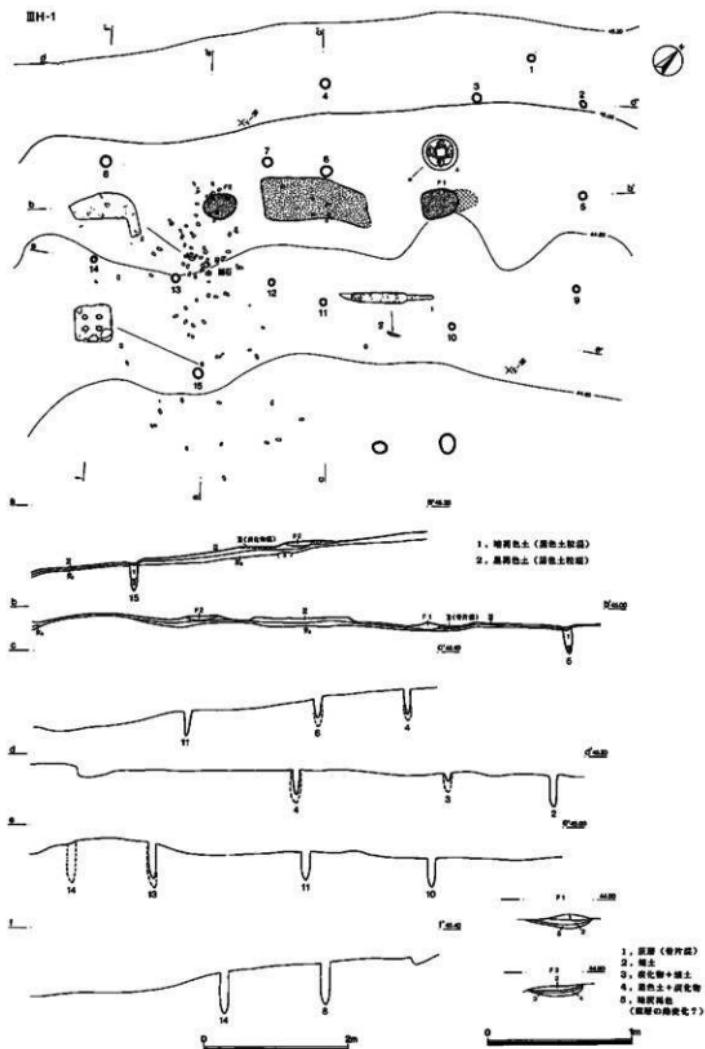


図54 IIIH-1

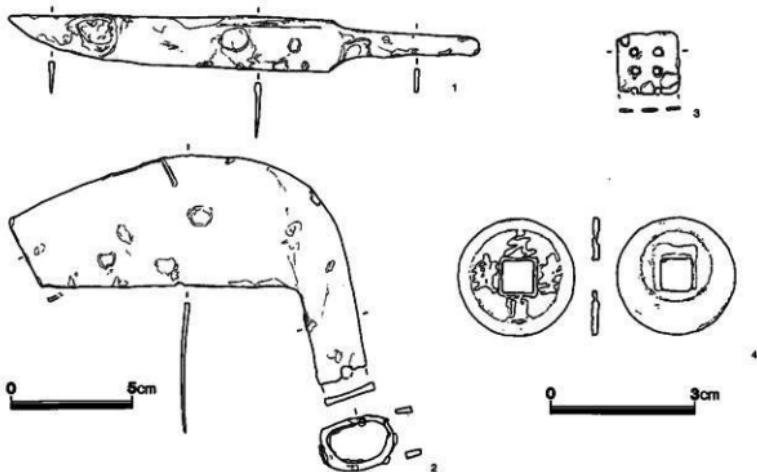


図55 III H-1・出土遺物

III H-2 (図 56、表 12・25、図版 42・43)

III H-1 の南側、斜面の下端近くで、ユオイ沢に最も近い位置に III H-2 がある。風倒木痕等により、緩斜面がより平坦化しているスペースがあり、ここを利用し構築したものと思われる。III H-1 同様、長軸を南西—北東にとった建物であるが、南西側の柱穴が、明確でなく、完全な列としては、どちらでない。発見柱穴の数は、12 本である。確認された柱穴で構成される規模は、長軸方向で柱穴 1-4 が 6.3 m、短軸方向は柱穴 2-9 で 4.0 m である。柱穴 8-12 を長軸の主要部分として、その面積は約 17.6 m² である。打ち込み柱の深さは、30 cm 内外で、その径は 10 cm 前後である。柱穴の間隔は、0.8 m 前後のもの (a) と 1.3 m 前後の (b) に分類でき、b を主として構築されている。入口構造は不明。おそらく、確認できていない南西側にあるものと考えている。炉は 2 カ所ある。北東側にある F 1 がメインで、灰層を上部にもつ厚い焼土である。焼土中からは、サケ椎体等の魚骨や、シカ骨と思われる焼骨が検出されている。

遺物は、柱穴 6-9 に開まれた方形部分の中央から、鉄器が 2 点出土した。1 は、断面方形で、胴体に通った、曲りのある棒状鉄器片。2 は径 2.7 cm、内径 1.9 cm の円形の環状鉄器、鎌等の口金 (タマカラ) と思われる。III H-1 との間に、Y-30 区で刀子が 2 本みられる。

表12 III H-2 柱穴・出土遺物一覧

No.	深さ cm	No.	深さ cm	柱穴 No.-No.	距離 m	分類	柱穴 No.-No.	距離 m	分類	柱穴 No.-No.	距離 m	分類
1	30	7	(25)	1-2	1.50	b	8-9	1.50	b	2-7	2.10	2a
2	26	8	40	2-3	2.20	2a	9-10	1.60	b	6-7	1.55	b
3	(24)	9	43	3-4	2.65	c	10-12	1.40	b	7-9	2.00	2a
4	-	10	37	1-5	0.95	a						
5	-	11	16	5-6	1.50	b						
6	21	12	24	6-8	1.55	b						

() 内推定

図番	名 称	材質・種	寸法(cm)	内記符	備 考
1	棒 状 鎌 器	鉄	高5.9		断面角・曲り有
2	環 状 鎌 器	鉄	外径2.7 幅0.35		タマカラ
	魚骨片・歯骨片	サケ等・シカ?			F-1 灰土中

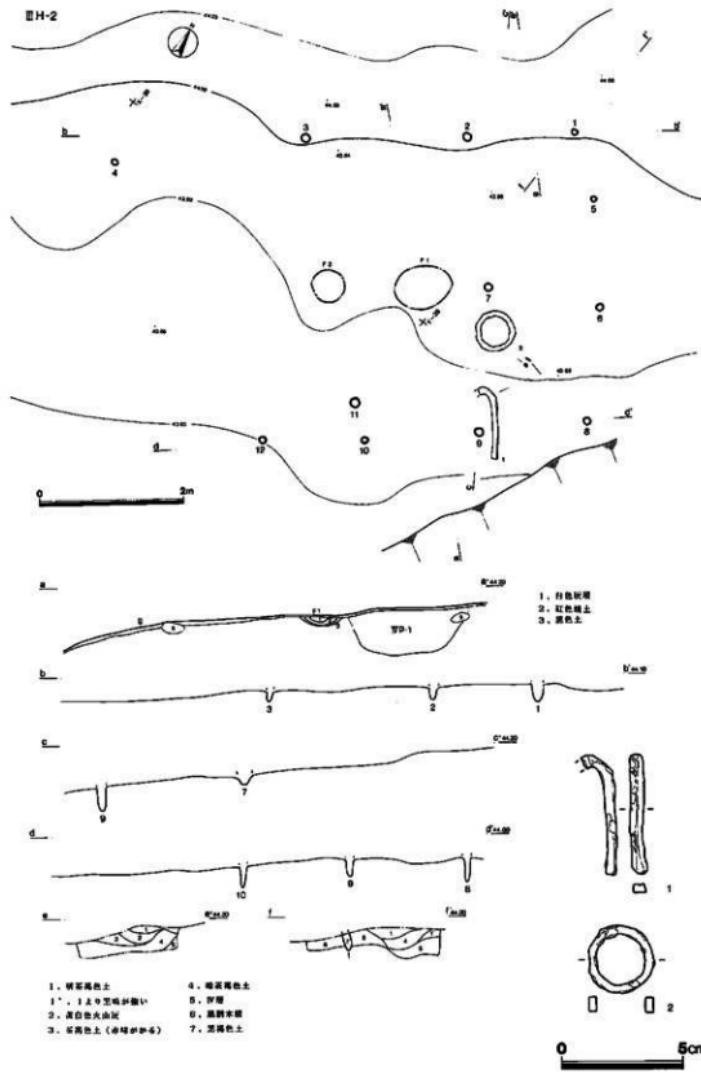


图56 III H-2 · 出土遗物

IIIH-1・2の2軒とその周辺の、ユオイ沢向き緩斜面が、当時、ユオイ沢との関係ということにおいて、特に重要な地点であったことは想像できる。耕作で削平されてしまった、IIIH-1の上方の一面にも、建物があったと考えれば、狭い範囲の一単位の集落としてとらえることができよう。

(三浦 正人)

IIIH-3 (図57、表13・25、図版44)

段丘中央部の平坦面(ややユオイ沢寄り)、標高46.20mあたりに位置する。調査区はS・T-29・30区である。南西に接するように1号墓があるが、墓が周溝をもっていることや、墓標穴と柱穴の埋土の比較(火山灰量の多少)等からみて、IIIH-3が先行するものと考える。さらに1号墓南西には、IIIH-8があるが、これとは同時に存在したものと考えてよいだろう。柱穴は16本確認したが、16は無関係か、外部施設のものかもしれない。他の15本は、東コーナーを除き、ほぼ長方形に配置されている。その長軸は南西-北東方向で、規模は、長軸柱穴1-4で5.1m、短軸柱穴1-11で3.5mである。面積は、約17.6m²である。柱穴間隔は、0.9m前後の(a)を基本とし、2a・3aと、倍数を使用しているようである。柱穴は深いもので80cmあるが多くは50cm前後で、断面はきれいな、打ち込み柱の形状を示している。入口構造は不明だが、柱穴10が関係するかもしれない。東コーナーの変則的な柱穴のあり方も、入口とは思えない。柱穴2や4脇の柱穴列線上にある浅いくぼみも、建物構造と何らかの関係をもつものであろう。中央から北西寄りに、長径1.3mの広い範囲で、灰層の広がる、厚い焼土がみられる。これがIIIH-3の炉で、灰層中から鉄器2点の他、全層にわたってサケ・マス・イトウ・キュウリ・シシャモ等の魚骨や、シカ焼骨等が検出された。内容物からみて、かなり長期にわたって使用していたものと思われる。

遺物は炉からの鉄器2点を含めて、計3点が出土している。1は、炉から出土した小札片で、孔は2列、両端を欠いているが、計6孔が認められる。2は、断面U字形気味の薄い鉄片である。ボロモイチャシA郭建物の炉からも同形の遺物が出土している。3は、炉から出土した、断面円形の環状鉄器の破片である。3点とも用途が判然としないが、当該期の炉から出土する鉄器については、意識的なものか、混入したものか、今後検討する必要があろう。

(三浦 正人)

表13 IIIH-3 柱穴・出土遺物一覧

No.	深さ cm	No.	深さ cm	柱穴No.-No.	距離 m	分類	柱穴No.-No.	距離 m	分類	柱穴No.-No.	距離 m	分類
1	(62)	9	(45)	1-2	0.85	a	4-7	2.55	3a	7-9	0.80	a
2	52	10	65	2-3	2.05	2a	11-12	1.45	2a	7-15	1.60	2a
3	39	11	(47)	3-4	2.25	3a	12-13	1.50	2a	9-14	1.55	2a
4	60	12	(42)	1-5	0.85	a	13-14	1.00	a	9-15	1.20	
5	67	13	42	5-6	0.95	a	1-16	1.75	2a	14-15	0.80	a
6	70	14	42	6-8	0.85	a						
7	(30)	15	(39)	8-11	0.95	a						
8	80	16	58									

() 内推定
a : 0.9m前後

通番	名 称	材 質	寸法 cm() 内測定値	備 考	通番	名 称	種	部 位	備 考
1	小 札 片	鐵	長(1.5)・幅2.1	孔2列・炉出土		魚骨片	サケ		上頸・椎体 F-1 中
2	不 明	鐵	長(1.8)	断面薄		々 イトウ・キュウリ・シシャモ	椎体	F-1 中	
3	環 状 鉄 器	鐵	長(3.0)	断面円形・炉出土		骨骨片	シカ		F-1 中

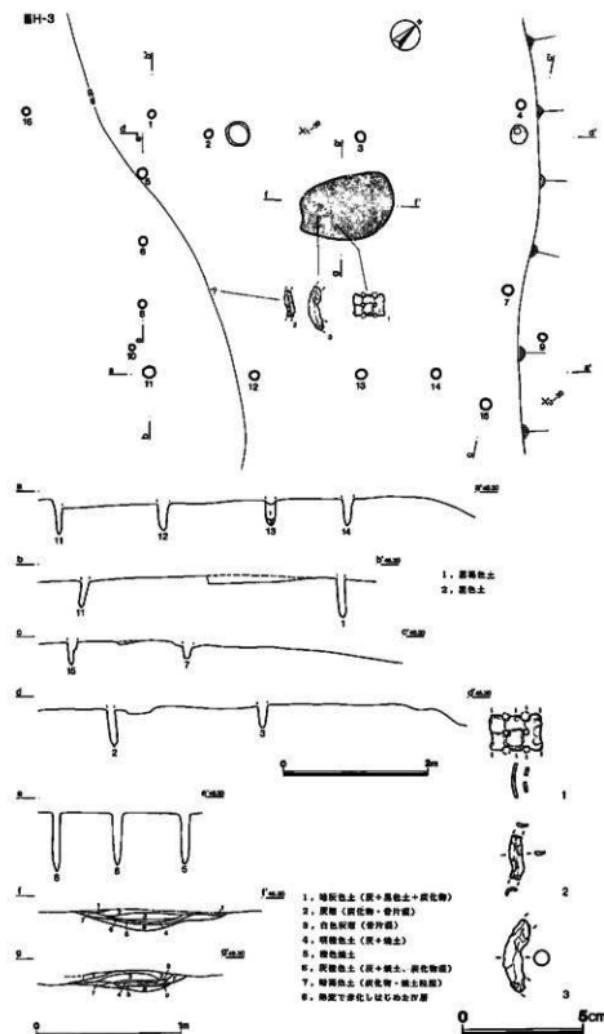


図57 III H-3・出土遺物

III H-4 (図 58、表 14、図版 44・45)

段丘の沙流川に面す縁部のうち、I-26 区周辺の、やや突出した平坦面に存在する。南には、III H-5・6 が確認されている。黒色土面で観察した段階では、コンターラインにも一部表われているようにこの突出部をかこむように、ゆるい盛り上がりがあり、ボロモイチャシ A 郡の建物のあり方を連想させた。調査の結果、人為的な盛り土は確認できなかったが、建物があった部分を取り囲むように、盛り上がりがあったことは、確かである。柱穴は 15 本検出でき、これが南コーナーに張り出し部のある、長方形に並ぶことを確認した。長軸方向は南西—北東である。規模は、張り出し部を除くと、長辺が柱穴 8-12 で 5.4 m、短辺が柱穴 1-8 で 3.6 m をはかる。この主要部面積は、約 19.4 m² である。柱穴間の距離は、1.0 m 前後 (a) と 1.5 m 前後 (b) という単位に分類でき、実際は a・2a・3a という a の倍数と、b が、長短両方向に使用されている。柱穴の深さはほとんどが 50~60 cm で、柱は垂直に打ち込まれている。入口は、柱穴 8・9・13~15 で構成される、前に南側張り出し部と考えている。周辺のレベルの高低からみて柱穴 8-14 間に開口部があったのであろう。焼土は、屋内外に 9 カ所確認されているが、炉となるものは、屋内中央やや北東寄りの、F 3 と思われる。前述の III H-1~3 の炉と比較すると、灰層がみられず、骨片等も検出されなかったが、位置的にみて、妥当なところであろう。他の屋内外焼土がもつ意味は、建物外北西にある、炭化物層ともども不明な点が多いが、いずれも III H-4 に伴うものと想定している。建物範囲の黒色土フローテーションでイネ科植物 (アワ?) が検出されている。これについては、付篇の矢野氏報文を参照されたい。

遺物は、鉄器が 6 点と、入口付近にみられた鍛石群がある。1 は、小型の鋸の先端部片である。幅 1.4 cm ほどの、現代でいう金切鋸のような形状である。歯部には小さいながらもアサリがあり、1 単位ごとに内向きの刃が付けられている。この時期の鋸の出土例は、同型のものでは、今のところ小樽市桃内貝塚発見のものしかない。極めて貴重な資料といえる。2 は、2 枚の小札で、一端が斜辺となる狭長な形状を呈する。孔は 2 列で計 13 孔ある。当遺跡では、これと同型の小札が W-43 区から 1 点、ボロモイチャシ A 郡建物跡の炉から 1 点、出土している。3 は、棒状鉄器の破片である。断面は角形で、両端とも、カーブする部分で破損している。1~3 の 4 点は、入口の北東側屋外から出土している。4 は、先端の尖った、断面円形の棒状鉄器片である。5 は、径 5 mm の小環が連なった鎖片で、2 連+11 環が残存している。鍛籠手の小札をつなぐものであろうか。鍛石群は、計 37 個が入口付近の隙間に張り分けられたような状態で出土した。石質は砂岩・片麻岩・泥岩で、長・幅・厚さの平均が各々、7.1 cm・3.7 cm・2.5 cm、平均重は 92.5 g と、やや重めである。

炉のあり方を除けば、突出部に立地することや、入口構造、遺物のあり方等で、特にボロモイチャシとの関係が注意されなければならない建物であろう。

(三浦 正人)

表 14 III H-4 柱穴・出土遺物一覧

No.	深さ cm	No.	深さ cm	柱穴 No.-No.	距離 m	分類	柱穴 No.-No.	距離 m	分類	柱穴 No.-No.	距離 m	分類
1	(55)	9	(55)	1-2	0.85	a	4-6	1.50	b	11-12	1.05	a
2	(50)	10	(45)	2-3	1.60	b	6-12	1.35	b	8-14	1.40	b
3	(65)	11	(70)	3-4	3.00	ba or 2b	8-9	1.10	a	9-13	0.80	a
4	(60)	12	(55)	1-5	2.200	2a	9-10	1.50	b	13-15	0.50	½a
5	(65)	13	(55)	5-8	1.55	b	10-11	1.80	b	14-15	0.90	a
6	(45)	14	(55)									
7	(60)	15	(40)									
8	(55)											

() 内推定
a : 1 m 前後
b : 1.5 m 前後

番号	名 称	材 質	寸法(cm)	() 内現存測	備 考	四番	名 称	材 質	寸法(cm)	() 内現存測	備 考
1	鋸	鉄	長(3.7)・幅1.4		アサリ有り	4	棒 状 鉄 器	鉄	長(2.5)		断面円形
2	小 札	鉄	長 5.6・幅1.1	2枚・孔2列・13孔		5	鎖	鉄	小環径0.5		11環
3	棒 状 鉄 器	鉄	長(3.3)・幅0.5	断面角・曲り有り		鍛 石 (37個)	Sa. Gne. Mod.	平均高7.1・平均幅3.7・平均厚2.5・平均重92.5 g			

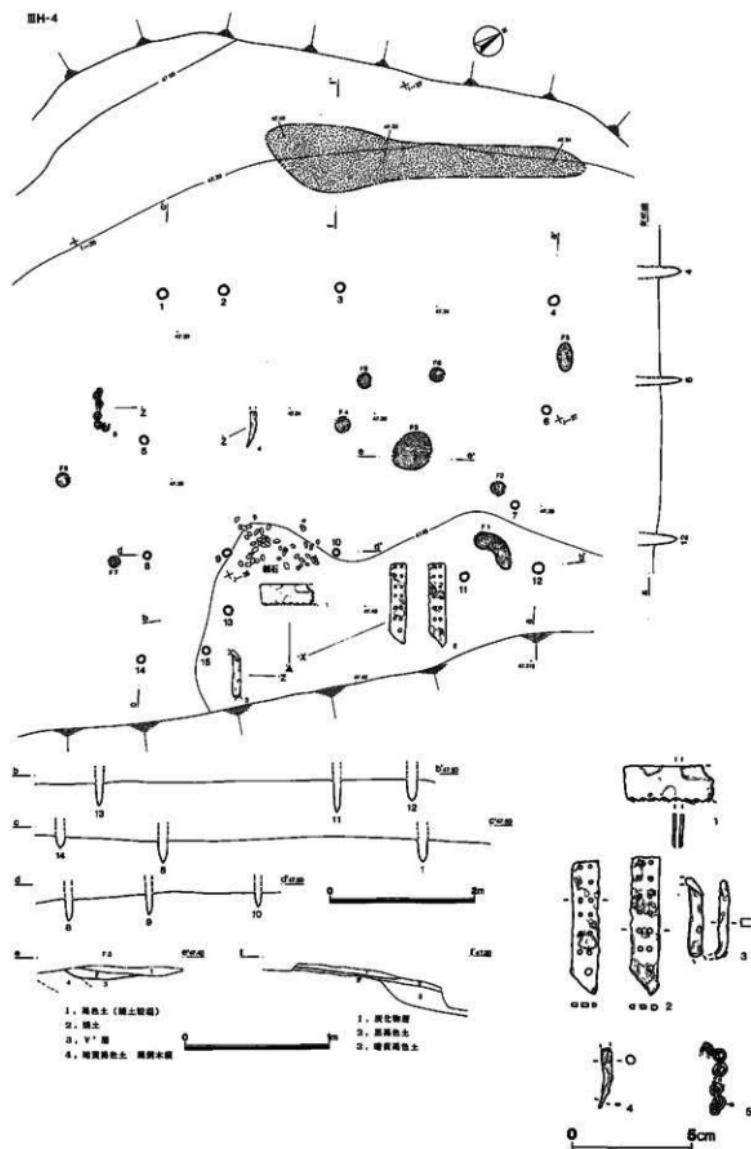


图58 III H-4·出土遗物

III H-5・6 (図 59、表 15・16、図版 45)

III H-4 の南側に、III H-5・6 とした柱穴列が存在する。沙流川に面する段丘縁辺ではあるが、III H-4 が立地するような突出部ではない。ともに炉は検出できず、特に III H-5 は住居としての建物である可能性はうすい。III H-5 とした柱穴は 14 本あるが、太く浅く先端が平坦なもの(掘立柱?)と、深さ 50 cm 前後の打ち込み柱が混在する。全体の構成は方形にとらえられるが、数列の重なり合った柵列状のものと解することもできる。建物として把えると、長軸は南北に求められ、長辺柱穴 1-3 で 3.0 m、短辺柱穴 1-10 で 2.5 m の規模、面積は 7.5 m² である。建物であれば、倉庫 (III H-4 か 6 に付随する) のような建造物、柵列とすれば、物干場・幣場のような施設が考えられる。遺物は断面円形で、曲がりをもつ鉄器 (金具片?) が 1 点出土している。

III H-6 は、50~60 cm 程度の深さをもつ打ち込み柱が、21 本検出されており、一応方形に配置されている。柱穴 18-19 や 20-21 は屋外のものと考えられ、16-17 は 6-11 と入口を構成するものも思われる。この入口や、12-13、14-15 の近接する柱穴が窓構造を示すものとすれば、住居としての建物という構造物ととらえられる。無番の、6 脇や 11 脇の浅いくぼみも、構造に関係するものであろう。長軸方向は南北を示す。規模は、長辺柱穴 15-11 で 4.1 m、短辺柱穴 1-11 で 3.2 m をかかる。主要部面積は、約 12.2 m² である。基本柱穴間隔は、0.45 m 前後 (a) を単位とし、2a・4a が主として使用されている。遺物は、屋外の段丘縁辺から、鍛金をほどこしたと思われる、銅製の刀装具(鍛金)の破片が出土している。

III H-5・6 は、位置的にみて、III H-4 と同時に存在したものと考えてよいだろう。耕作で削平された、中央部にも、これらと同時期の建物があったと思われる。

(三浦 正人)

表 15 III H-5 柱穴・出土遺物一覧

No	深さ cm	No	深さ cm	柱穴 No-Na	距離 m	分類	柱穴 No-Na	距離 m	分類	柱穴 No-Na	距離 m	分類
1	(47)	8	(55)	1-2	1.10	2a	7-8	1.15	2a	9-10	0.55	a
2	(54)	9	(42)	2-3	1.85	b	12-14	1.70	b	10-11	0.50	a
3	(51)	10	(44)	3-14	2.10	4a	13-14	2.10	4a	11-12	0.50	a
4	(53)	11	(45)	1-10	2.50	5a						
5	(44)	12	(65)	2-12	2.30	c						
6	(50)	13	(42)	a : 0.5m 前後 c : a + b			b : 1.8m 前後					
7	(44)	14	(65)									

() 内推定

表 16 III H-6 柱穴・出土遺物一覧

No	深さ cm	No	深さ cm	柱穴 No-Na	距離 m	分類	柱穴 No-Na	距離 m	分類	柱穴 No-Na	距離 m	分類
1	(50)	12	(61)	1-2	1.25	3a	11-12	1.75	4a	6-16	0.75	2a
2	(46)	13	(64)	2-3	0.90	2a	12-13	0.30	a	16-17	1.65	4a
3	(60)	14	(50)	3-4	0.80	2a	13-14	1.65	4a	11-17	1.05	2a
4	(61)	15	(50)	4-5	0.85	2a	14-15	0.45	a	12-13-18	1.00	2a
5	(70)	16	(50)	1-6	1.40	3a	6-7	1.65	4a	18-19	1.25	3a
6	(65)	17	(40)	6-11	1.80	4a	7-12	1.85	4a	20-21	1.65	4a
7	(67)	18	(50)	5-9	0.95	2a	7-8	1.65	4a			
8	(50)	19	(38)	9-15	1.95	4a						
9	(44)	20	(52)									
10	(54)	21	(44)	a : 0.45m 前後 2a 基本								
11	(64)											

() 内推定

III H-7 (図 60、図版 46)

この住居跡は堅穴住居跡である。ニオイチャシ跡の外縁から 10 m 距離をおいた、ニオイの沢に面する河岸段丘上の縁辺部に位置する。標高は 46.25 m から 46.70 m である。この住居跡のくぼみを利用

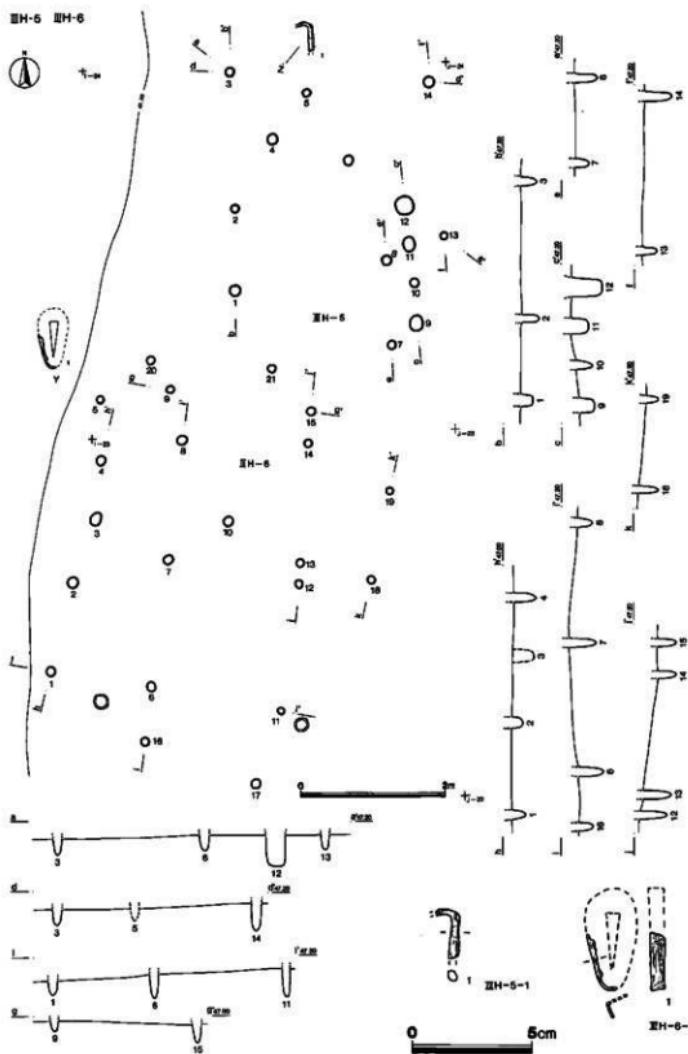


図59 IIIH-5・IIIH-6・出土遺物

して2号墓がつくられており、床面の一部をこわされている。

規模は北壁長3.35m、南壁長3.60m、東壁長3.20m、西壁長2.60m、深さはIII層下面より18~23cmを測る。平面形は、基本的には北壁・東壁がやや幅広のいびつな方形を呈し、北壁側・東壁側・西壁側にそれぞれ張り出し部をもつ。西壁側の張り出し部は橢円形を呈し、床面より7cmほど一段高くなっている。この張り出し部は2号墓調査前からくぼみとして確認されたもので、当初かまどではないかと予想されたが、覆土中に少量の焼土が粒状にみられるもののかまどとは断定できない。東壁側は浅い皿状にくぼむ張り出しである。北壁側の張り出し部には、53cm×42cmの焼土がある。焼土は最も厚い部分でも3cmほどと薄い。

柱穴は、計6本が確認された。住居跡中央にある柱穴4が深さ17cmと一番深く、他の柱穴の深さは10cm内外である。柱穴の配置は、南壁際に3個(1・3・6)が並び、これに対応するかたちで北壁際に2個(2・5)がある。ただし、柱穴6に対応するものが北東隅には検出されなかつた。

この住居跡からまったく遺物が伴出しておらず、その時期を確定することは困難であるが、2号墓東側の覆土上部(III層下位)に苔小牧火山灰とみられる白色火山灰が薄く堆積していることから、10世紀以前のものとみられる。ただし、この住居跡の使用期間を考える時、焼土の状況や床面南西部に地山(V層)の礫が多く露出していることからすると、長期の使用は考えられない。(田中 哲郎)

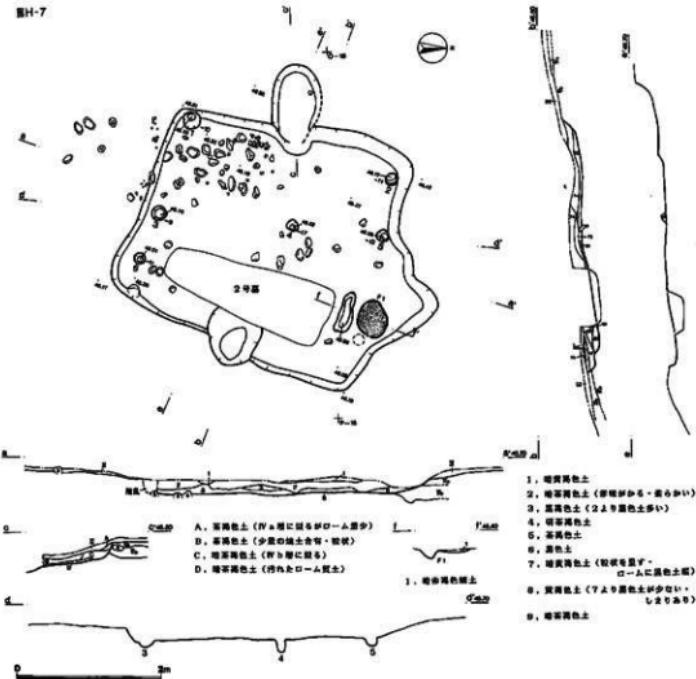


図60 III H-7

III H-8 (図61、表17、図版46)

段丘中央平坦部のユオイ沢寄りに、1号墓をはさんでIII H-3の南側に位置する。調査区ではR・S-27・28である。後述するごとく、1号墓はIII H-9の跡を占地しているが、III H-8も、北東側で、III H-9の柱穴と重複している。1号墓の状況や、III H-3・8・9の柱穴埋土の状況から、新旧関係は、III H-9→III H-3・8→1号墓となる。

表17 III H-8 柱穴・出土遺物一覧

No	深さ cm	No	深さ cm	柱穴No-Na	距離 m	分類	柱穴No-Na	距離 m	分類	柱穴No-Na	距離 m	分類
1	38	6	(57)	1-2	1.90	2a	6-10	2.10	2a	3-5	1.35	
2	26	7	27	2-3	1.75	2a	7-8	2.75	3a	5-9	1.70	2a
3	42	8	25	3-4	3.15	3a	8-9	0.90	a	1-7	3.25	3a
4	(65)	9	73	4-6	1.00	a	9-10	3.10	3a			
5	40	10	(53)									a : 1 m前後

() 内推定

図番	名 称	材 質	寸法 cm	備 考
1	マ レ ブ	鉄	幅4.7	断面円形・アツ?
	鰐石(35個)	Sa. Gne. Mud.	平均長7.1・平均幅3.1・平均厚2.1・平均重73.0 g	

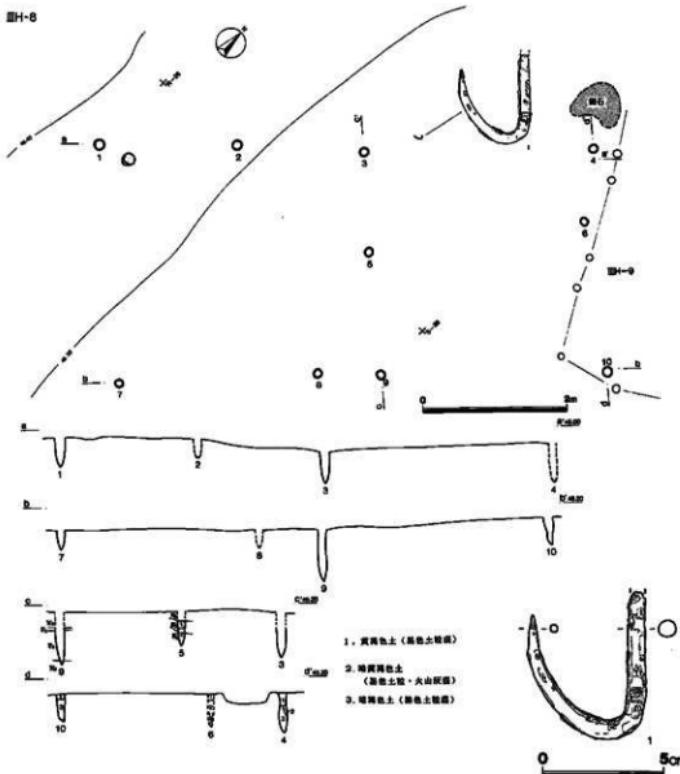


図61 III H-8・出土遺物

IIIH-8 の柱穴は、10 本を確認した。柱穴 4・6・10 の列では、IIIH-9 の柱穴列が交差するように検出されたが、埋土の状況や配列状態から判断した。短辺柱穴 1-7 間では、柱穴の検出ができなかつた。長軸方向は南西-北東を示す。規模は、長辺柱穴 7-10 で 6.7 m、短辺柱穴 4-10 で 3.1 m である。面積は、約 20.5 m² と推定される。柱穴の配置からみて、南東側と北西側の 2 軒の建物としての可能性も考慮しなければならない。1 軒であれば、この柱穴配置は、IIIH-2 に類似している。柱穴間隔は、1.0 m 前後 (a) が基本単位で、a・2a・3a と倍数にして設計されているようである。すべて打ち込み柱で、深さは 25~73 cm、口径 8~15 cm である。柱穴 4-9 のような中ぶくれのものや、10 のように形状不整のものも、柱が打ち込まれた時かその後の変化によるものと思われる。入口構造は不明、炉も検出されなかつた。

遺物は、マレブ 1 点、錘石 1 群が屋外北側で発見されている。マレブ先端部の鉄器は、断面円形で、受け部分の浅い釣針型のもので、逆刺はついていない。最大幅 4.7 cm という大きさからして、マス漁用のものであろう。錘石は 35 個がひとかたまりで、北コーナー外にあった。石質は、砂岩・片麻岩・泥岩で、平均の長さ・幅・厚さは各々、7.1 cm・3.1 cm・2.1 cm、平均重 73.0 g の中間的なものである。

(三浦 正人)

IIIH-9 (図 62、表 18、図版 46)

前項で簡単に触れた如く、IIIH-9 は、1 号墓が占地する以前、さらに IIIH-3・8 の建造前に、存在した建物である。1 号墓調査後の、下層面の調査中に、柱穴が検出されたことにより、発見されたもので、柱穴 13-14 間は、1 号墓壙底に 18 という柱穴痕跡と思われるものを、見い出したのみである。西コーナー部分にあった風倒木痕も、この建物の発見を運らせた。南側の IIIH-8 との重複部分において、柱穴をどちらの建物跡のものか判断する基準は、柱穴の埋土状況と、配列からの考慮である。

立地は、段丘平坦面中央でも、ややユオイ沢寄りの一段低くなる面に、建造域を設定している。IIIH-9 が、他の建物跡と決定的に違うことは、長軸方向が、南東-北西であることである。他と約 90 度の角度の振れがある。この長軸方向をもつ当遺跡での建物跡は、ボロモイチャシ A 郡建物跡に重複して発見された IIIH-13 (チャシ建物より古い) しかない。数々の制約の中で、柱穴は 18 本を確認した。すべて打ち込み柱であり、深さは、30 cm 強のものが中心である。規模は、長辺柱穴 1-6 で 4.8 m、短辺柱穴 6-14 で 2.9 m をはかる。主要部面積は約 14.6 m² である。柱穴の基本間隔は、0.45 m 前後の (a) と 0.7 m 前後の (b) で、2a が主となる。a・2a は、長辺両辺に使用されているが、b は短辺にのみ使用されていることが発見される。柱穴 2-3 や 4-5 が、窓構造で、a という間隔をもつことは、IIIH-6 にも見られたことである。入口構造は、柱穴 8-9 と 15-17 の部分と考えられる。炉は確認できなかつたが、1 号墓の墓壙およびその周囲にあった可能性がある。墓壙周辺や覆土中に、多くの焼骨片がみられたことが、その可能性を示唆している。

遺物は発見できなかつたが、焼骨片と同じく、1 号墓壙覆土から出土した針様の鉄製品(図 48-14)が、IIIH-9 のものであるかもしれない。

IIIH-9 が、当遺跡およびボロモイチャシの建物跡の中でも古く位置付けられることは、間違いない。しかし、1 号墓とどのくらいの時間差を有しているのかは、IIIH-3・8 を中にはさむこと以外、資料を得られなかつた。

(三浦 正人)

表18 III H-9 柱穴一覧

No	深さ cm	No	深さ cm	柱穴No-Na	距離 m	分類	柱穴No-Na	距離 m	分類	柱穴No-Na	距離 m	分類
1	(36)	10	(43)	1- 2	0.90	2a	1- 8	1.20	2b	9-17	0.85	2a
2	(48)	11	(42)	2- 3	0.45	a	8- 9	0.30	a	16-17	0.30	a
3	(45)	12	(34)	3- 4	1.10	2a	9-13	1.55	2b	15-16	0.90	2a
4	(36)	13	(58)	4- 5	0.35	a	13-(18)	2.25				
5	(45)	14	(37)	5- 6	1.90	4a	14-(18)	3.15				
6	(43)	15	(48)	6-10+11	1.45	2b						
7	(51)	16	(28)	10-11-12	0.85	2a						
8	(60)	17	(44)	12-14	0.60	b						
9	(48)	18	(52)									

() 内推定

a : 0.45前後

b : 0.7m前後

2aが基本

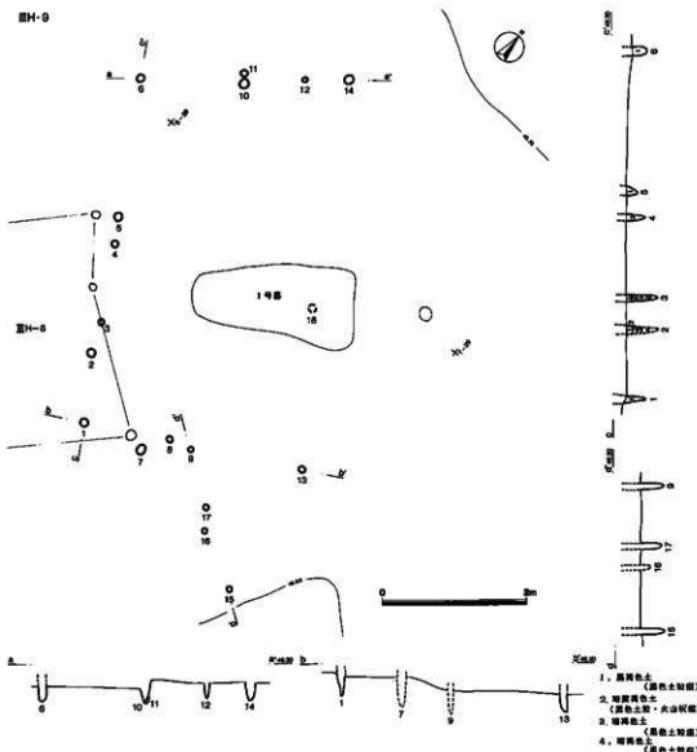


図62 III H-9

III H-10 (図 63、表 19・35、図版 47)

段丘平坦面の中央部、調査区でいうと、U・V-36・37 区に位置する。発見の契機は、灰層のある厚い焼土 (F 1・2) である。この周辺を詳細に観察したところ、黒色土面の小さくへこむ部分が何ヵ所か見受けられた。これが打ち込みの柱穴であった。柱穴の探査は、黒色土面から、配置を考え行なったが、すべてを把えきれず、何本かは、断面観察の方法で検出した。このようにして、計 25 本の柱穴が凸形に配置されていることを確認した。長軸方向は南西—北東である。主要部は、長辺柱穴 1-5 で 4.4 m, 11-15 で 4.8 m, 短辺柱穴 1-11 で 4.1 m, 5-15 で 4.2 m と、ほぼ正方形を示す。また南西側に張り出す部分は柱穴 10-19 で 2.7 m, 16-19 で 2.4 m をはかる。主要部と、張り出し部の面積は、合計で約 25.7 m² である。形態は、アイヌの家屋であったチセに極めて近く、比較検討する必要がある (VII章参照)。柱穴間隔は、0.7 m 前後 (a) を基本とし、a・2a を使用している。チセの構築方法からいえば、2a を基本とし、中間柱を入れることで、a という間隔が存在することになるのかもしれない。柱穴は、深さ 30 cm 前後のものが多い。いずれも打ち込み柱であり、5・11・13・20 のような変形は、下層の礫によるものである。入口構造は、チセでは、南東張り出し部が、その役を担うが、III H-10 では、この張り出し部北コーナーに、さらに小柱穴 4 本 (22~25) が見られた。入口を構成する何らかの施設と思われる。図示していないが、この周辺 1.5 m 径の範囲に、径 5 cm 以下の浅い杭跡が、50 本ほどみられた。入口付近で、何を意味するものか、今後の検討課題である。炉は、F 1, F 2 と 2 カ所みられるが、いずれも、耕作による擾乱をうけており、本来の形状は示していない。F 2 は、F 1 から動いている可能性もある。炉周囲には、炭化物や焼骨片が広がる。炉自身は、厚い灰層をもった、使い込まれた焼土層で、全層と周囲から、サケ椎体等の魚骨片や、シカと思われる獸骨の焼骨片が、かなりの量検出されている。また建物範囲の黒色土フローテーションの結果、モロコシ類のえい果が検出されている。これについては付篇の矢野氏報文を参照されたい。

遺物は検出されていない。しかし周辺部から、鉄器・錠石や焼土・炭化物が数多く検出されており、59 年度段階では、確認できなかった建物跡も、相当数あると考えている。その一例は、後項で「炭化物列」として示してある。また東側に、建物のようには配置されない、数本の柱穴を検出したが、これは、III H-10 と関連するものと考えている。「柱穴列」として後項で述べる。

図 72 や 78 で示す通り、金属製品・漆器の分布は、このIII H-10 からラボロモイチャシ跡にかけて、集中する傾向がある。III H-10 と III H-1・2 の間で、黒色土が削平されているため、断定できないが、長期間にわたって、この周辺が、生活の中心的な場として存在したことは認められよう。

(三浦 正人)

表 19 III H-10 柱穴・出土遺物一覧

No.	深さ cm	No.	深さ cm	柱穴 No.-No.	距離 m	分類	柱穴 No.-No.	距離 m	分類	柱穴 No.-No.	距離 m	分類
1	(28)	14	37	1-2	1.30	2a	11-12	1.40	2a	19-25	0.15	1/2a
2	39	15	30	2-3	1.50	2a	12-13	1.50	2a	24-25	0.20	1/2a
3	(41)	16	(42)	3-4	0.80	a	13-14	1.45	2a	23-24	0.35	1/2a
4	(23)	17	(32)	4-5	0.80	a	14-15	0.50	a	22-23	0.30	1/2a
5	42	18	18	5-7	1.80	2a	16-17	1.45	2a			
6	32	19	15	7-9	0.70	a	16-18	1.50	2a			
7	29	20	35	9-15	1.70	2a	18-19	0.85	a			
8	(25)	21	34	1-8	2.70	4a	19-20	1.05	2a			
9	30	22	37	8-10	0.60	a	20-21	1.05	2a			
10	(28)	23	(39)	10-11	0.80	a						
11	30	24	(37)									
12	40	25	(28)									
13	36			() 内推定								

a : 0.7 m 前後

図番	名 称	種	部 位	備 考
	魚骨片	サケ	椎体	F-1 中
	獸骨片	シカ		F-1 中

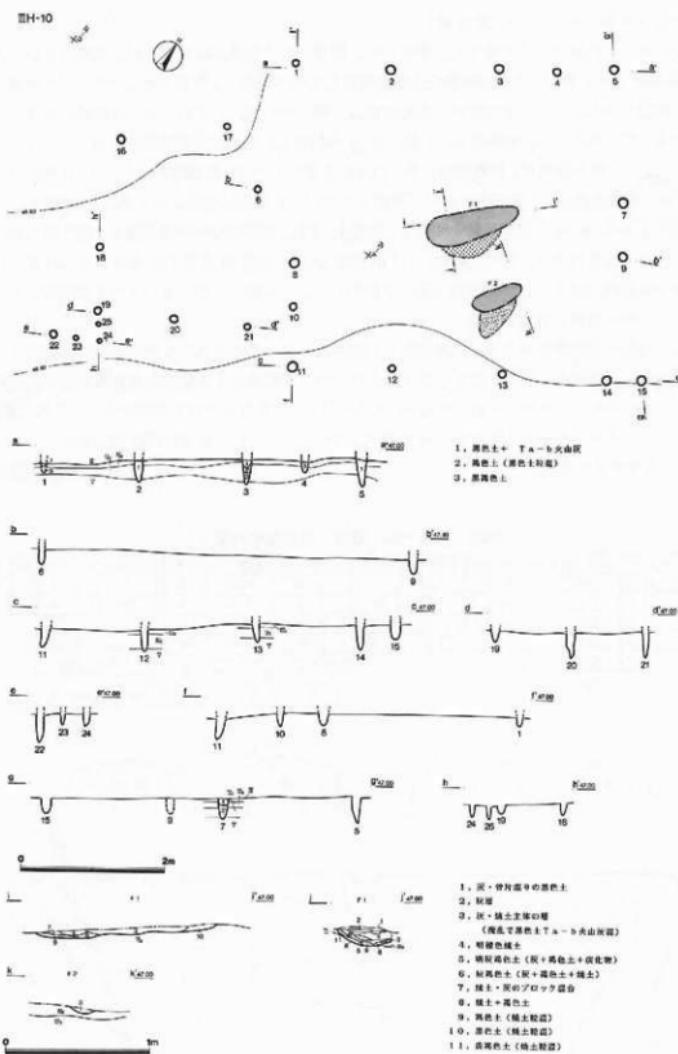


図63 III H-10

III H-11 (図64・65、表20、図版48)

段丘の、ニオイ沢側縁辺に立地する。南側には、III H-7・2号墓が存在するが、重複はない (III H-11が最も新しい)。III H-7周辺の黒色土面を調査している過程で、発見したものの、ごく一部の柱穴しか、確認できなかった。北側屋外にある鉄鍋は、早くから検出していたが、建物跡に伴うものとの認識はもっていなかった。最終的には、柱穴を11本検出し、それが方形に配列されることから、建物跡と認定した。吊耳鉄鍋は、屋外壁際にあったものと想定される。長軸方向は柱穴6-9列の方向と考え、南西-北東と把えた。短辺側で柱穴が明確でなく、3-9が連結するものであれば、長軸は90°かわる可能性もある。6-9方向を長軸とすると、柱穴1~3は、吊耳鍋の存在を考慮し、送りのための幣場という考えも必要だろう。柱穴間隔は、1.1m前後(a)と1.85m前後(b)とおさえられる。柱穴は推定40cm前後の深さで、すべて打ち込みと思われる。入口構造は柱穴6・10・11で形成されるものであろう。炉は検出されなかった。

遺物は、上記の吊耳鉄鍋がある。屋外壁際か、幣場をつくって送られたもののように、伏せられた状態で出土した。底部が、湯口・脚ごと見あたらないのは、耕作による擾乱と思われる。二つの対称位置にある吊耳をもつ。片耳は3孔であるが、もう一方は、3孔目を開ける痕跡をもった2孔である。口縁にバランスとりと思われる鉄片が、折り曲げてつけられている。復元口径は44.4cmで、計算上の容量は、5升焚きである。

(三浦 正人)

表20 III H-11 柱穴・出土遺物一覧

No.	深さ cm	No.	深さ cm	柱穴No.-No.	距離 m	分類	柱穴No.-No.	距離 m	分類	柱穴No.-No.	距離 m	分類
1 (49)		7 (36)		1-2-3	1.50		6-7	1.90	b	6-10	0.50	1/2a
2 (35)		8 (42)		4-5	2.30	2a	7-8	1.15	a	10-11	0.50	1/2a
3 (28)		9 (26)		4-6	1.70	b	8-9	1.30	a			
4 (31)		10 (45)		5-7	1.90	b	3-9	4.50	4a			
5 (35)		11 (54)										
6 (26)	() 内推定											

図番	名 称	材 質	寸法cm()内現存部	備 考
1	吊耳鉄鍋	鉄	口径44.4・高(16.0)	物通りされた6のか?

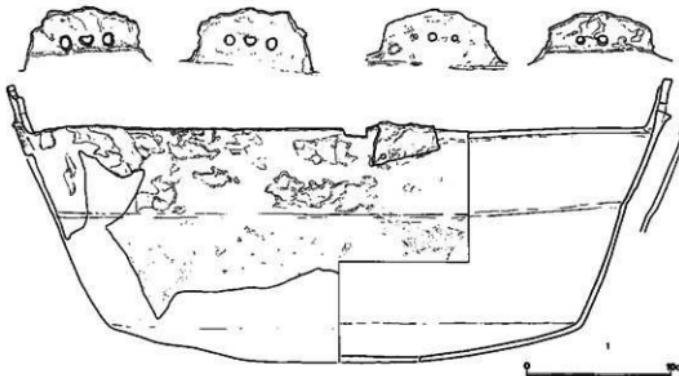


図64 III H-11・出土鉄鍋

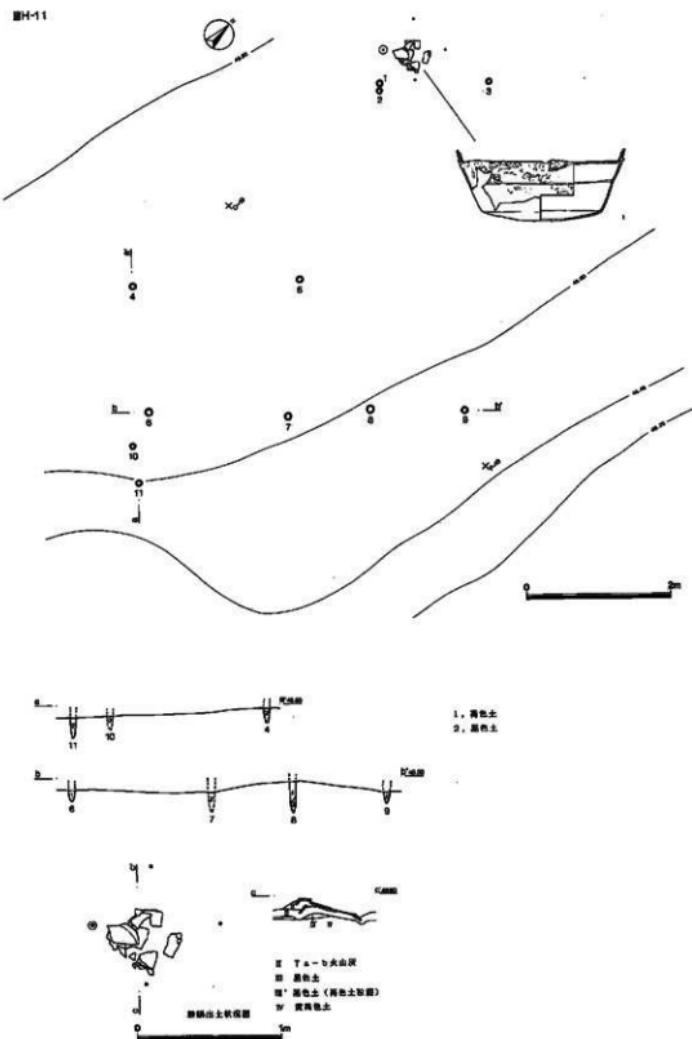


图65 III H-11·铁锅出土状况

III H-12 (図66・67、表21・25、図版49)

ボロモイチャシ跡A塗の外辺に、火山灰を除去した段階すでに、方形に浅く窪んだ部分が観察できた。これがIII H-12とした、竪穴状の建物跡である。A塗の揚げ土が、竪穴にたまつた黒色土(III層)にかぶっており、明らかに、A塗、ひいてはボロモイチャシに先行する建物跡である。床面は、礫の出ている、かたい面であるが、壁は、周囲の土と判別するのが、きわめて難しい状態であった。平面形は長方形を呈し、規模は、竪穴下端で、長辺5.2m、短辺4.3mである。竪穴面積は、約22.4m²である。長軸は、南西-北東方向である。柱穴は、打ち込み柱が11本、補助柱と思われる壁際の浅いくぼみが3カ所確認できた。打ち込み柱は、基本の8本が、竪穴長軸よりやや南北に軸を振った位置に検出された。補助柱3本は、東コーナー付近を除く、短辺側の壁際に、外傾して存在する。柱穴間隔は、1~1.5mほどである。打ち込み柱は、ほとんどが50cm以上の深さをもつ。入口は、東コーナーに、道跡と連結する部分があり、柱穴12が、これと関係してくるものと思われる。床面には焼土が4カ所検出されたが、炉といえるものは、長径1m弱の、F1である。このF1・F2や床面の数カ所から、シカ骨と思われる焼骨が検出されている。

遺物は、入口付近の東コーナー部分から、内耳鉄鍋の破片が出土している。口縁から胴部にかけての破片がほとんどで、全体の1/4程度の部分があり、底部(湯口部分)は見つかっていない。内耳部分は2片見つかっており、対称位置に耳がつく二耳の内耳鉄鍋と思われる。耳は、断面円形で、やや肩が張る形で、口唇下から、胴部移行点に縦に接続している。復元口径は、32.3cmで、計算上の容量は2升焚きである。全体の形状は、ボロモイチャシA郭先端から出土した、4升焚きの内耳鉄鍋と似た感じで、容量からみても、セットで、当地域にもたらされたものではないかと考えている。

この住居跡の覆土の上に、A塗の揚土があることから、両者の新旧関係は、明らかにIII H-12が古いことがわかる。出土した内耳鉄鍋の口縁部一片が、A塗揚土下から出土したこと、この事実を裏付けている。しかし、この住居跡が、他の平地建物に先行してあったものか、同時併存したものかを、明確にする資料

はない。同じ竪穴状の建物跡であるIII H-7との関係も不明である。

(三浦 正人)

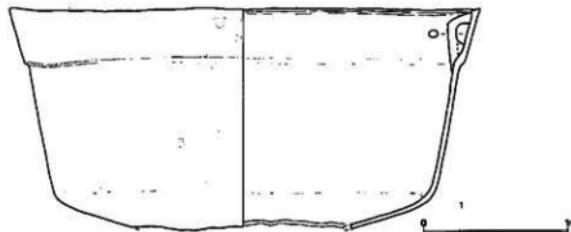


図66 III H-12・出土鉄鍋

第21表 III H-12柱穴・出土遺物一覧

No.	深さ cm	No.	深さ cm	図番	名 称	材 質	寸法 cm () 内現存測	備 考
1	15	8	55	1	内耳鉄鍋	鉄	口径32.3・高(15.2)	2升焚き・小片接合
2	61	9	60					
3	63	10	61					
4	59	11	12	F-1 中	シカ?	fr.	0.4	焼土中
5	17	12	37	F-2 中	"	"	0.5	"
6	21	13	52	B-1	"	"	0.6	床面
7	50	14	29	B-2	"	"	+	"
				B-3・5	"	"	2.1	" P-7 鍋
				B-4	"	"	0.4	" P-8 鍋

III H-12

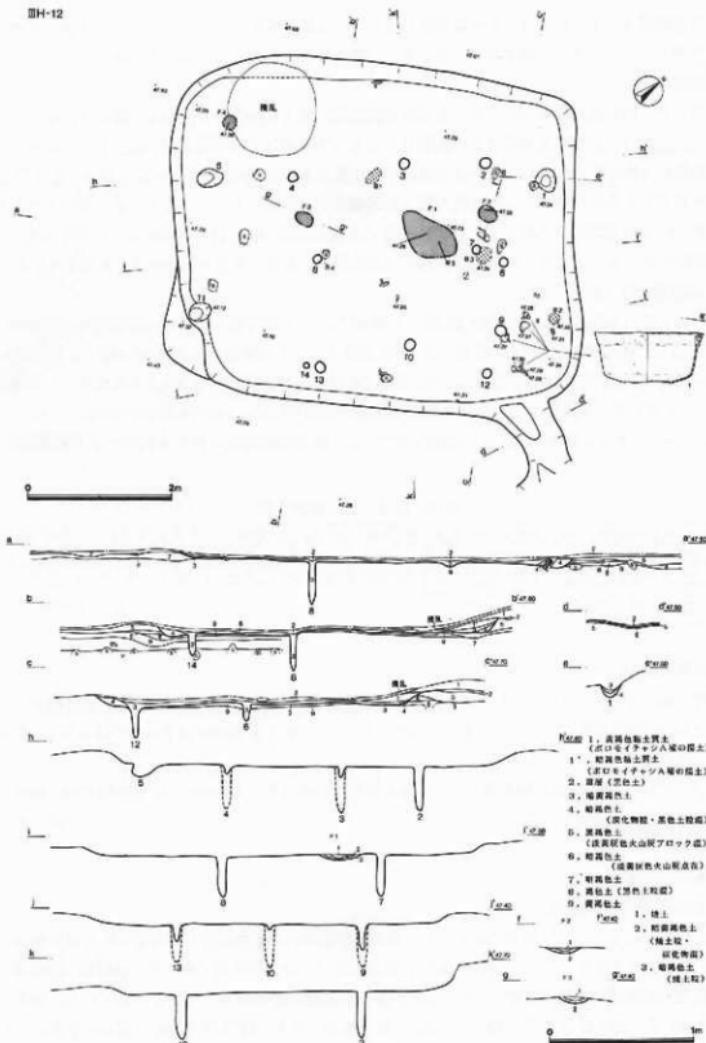


図67 III H-12

III H-13 (図68、表22、図版49)

この建物跡は、Y-52・53、Z-52・53にまたがって位置する。ボロモイチャシ跡A郭の建物跡に伴うであろう柱穴以外で、確実にボロモイチャシ跡より古いと認められる柱穴を中心にして、把えたものである。

柱穴のP-38・42・45については、A郭建物跡壁際の焼土を除去した後および盛土下にあったものである。P-44は、壁炭化材取り上げ後発見したので詳細は不明であるが、盛土上からはその存在が認められなかった。P-34は、P-5に対応する位置にあるが、近接するP-35の覆土に若干Ta-b火山灰が含まれるのに対し、この柱穴の覆土が黒褐色を主体にしまっていることから古いものと考えた。P-16には直刃の鎌がのっており、P-29はA郭建物跡の張り出し部の中央に位置するなど、A郭建物跡に伴うものとは考えにくい。これらは共に覆土の上部に黒色土がやや厚く堆積していた。P-15も同様な覆土状況であった。

P-44・29間が5.65m、P-29・16間が5.15mではほぼ方形を呈し、その主要部分の面積は約24.9m²である。柱穴間隔はP-44・42間の1.40mが最小で、その倍数の2.80内外が多い。長軸方向は南東-北西で、A郭建物跡から北にふれる。炉については、位置関係からF-2とも考えられるが、F-3からも獸骨片が検出されており、A郭建物跡との関係からF-3の方が可能性が高いと思われる。また、ボロモイチャシ跡A郭内出土の遺物の中で、この建物跡に確実に伴うと判断できるものはない。

(田中 哲郎)

表22 III H-13 柱穴一覧

No	深さ cm	No	深さ cm	柱穴No-Na	距離 m	分類	柱穴No-Na	距離 m	分類	柱穴No-Na	距離 m	分類
44	(39)	34	31	44-15	2.90	2a	34-16	2.75	2a	38-8	1.90	
15	22	38	30	15-29	2.75	2a	44-42	1.40	a	8-16	3.00	2a
29	32	8	-	29-34	2.40							
42	25	16	36									

a : 1.4m前後

柱穴列 (図68)

III H-10の東側に、P-1・2とP-4・5・6の2グループの柱穴列がある。当初、建物跡を想定していたが、配列や本数で、そとは考えられなくなった。6本とも40cm以下の打ち込み柱で、幣場か物干し用の杭列とすべきであろう。

周辺に鉄器や、焼土・炭化物もあり、それらとの関係を考えねばならないが、基本的には、III H-10の付属の施設ととらえている。

(三浦 正人)

(5) その他の遺構

炭化物列 (図69、表23)

前述してきたように、59年度の調査では、柱穴の配置された建物跡を、とらえることはできなかつた。しかし、ボロモイチャシ跡からIII H-10周辺にかけては、炭化物・焼土や、金属器・漆器等の分布(図72-78参照)が濃い地域で、明らかに何らかの遺構の存在することを、示している。炭化物列でいえば、Z-46・47区、Z-42区、2A・2B-44区、2F-51区等を中心に広がりがある。代表例として、Z-46・47区の炭化物列と焼土・遺物を取り上げておく。

この炭化物は、点状に広がる部分と、列をなす部分がある。後者は約4mものが2本、ほぼ直角をなして西側コーナーを形成するように位置する。炭化物が、建材の一部かどうかは不明であるが、木材の炭化のように観察できる。この2本を壁の位置と考えると、中央となる部分に、周囲に、シカと

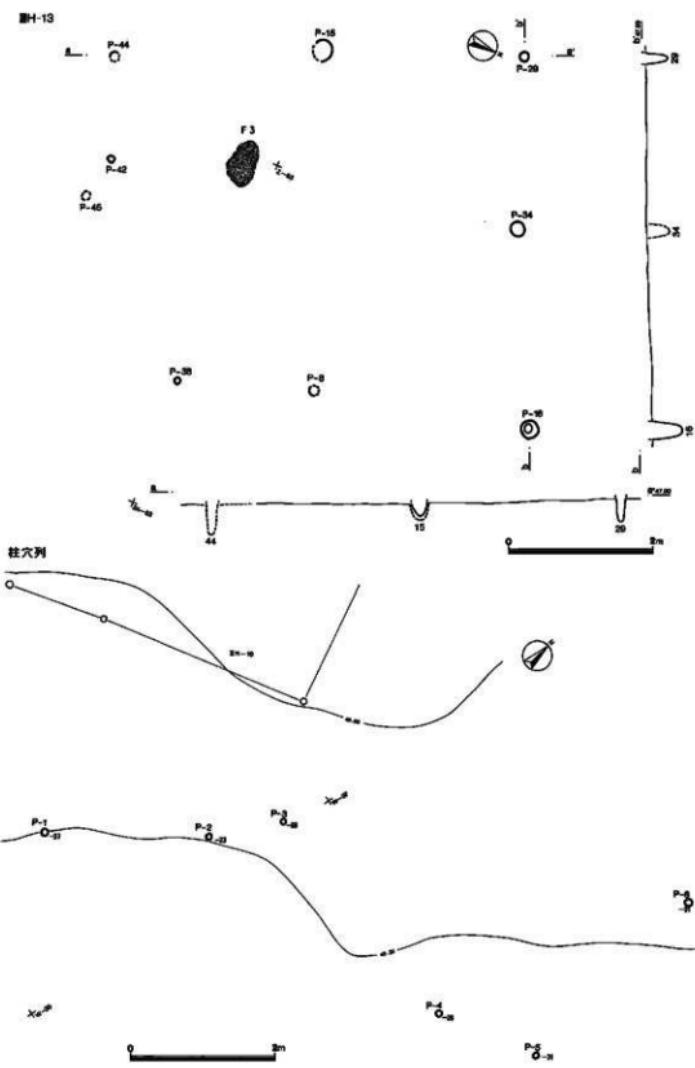


图68 III H-13·柱穴列

思われる焼骨片が広がる焼土がある。これを炉と考えたい。

遺物は、炉周辺に棒状鉄器片(3)と古銭(1)・漆器片があり、列外に刃部の変形した刀子(2)がある。1の古銭は、火をうけたためか、劣化が激しく、文字も読みとりにくいが「元祐通宝」と思われる。元祐通宝は、ボロモイチャシA郭建物跡からも出土している。

(三浦 正人)

漆器片は、炭化した木地の痕跡が一部に残存するもので、碗と思われる。黒漆を器全体に塗った後、内面に朱漆を塗ったものとみられ、口唇部に、黒漆部分を残している。蓋りは丁寧で、他のものに比べ、破片も大きく厚肉のあるものである。

(田中 哲郎)

集 石(図 69、図版 51)

R-29区のIII層中に、扁平礫が7個、集中して置かれて発見された。礫の下には炭化物を混じえた土が存在する。礫の重さは、0.69~3.42 kgである。狭長なもの1個・卵形のもの2個で他の4個は、ほぼ円形である。すべて片面か、両面に熱をうけており、変色している。剥離するように割れているものがあるが、熱によるものと、打ち欠いたものの両者があるように見受けられる。そのうち1個は、石錘にあるような打ち欠きを有している(重さ2.04 kg)。7個が同時にあつかわれていたことが、出土状況から、想像できる。熱をうけたのが使用前か後かは、一概に言えないが、石錘か、何かに熱を与えるためのものと考えてよいであろう。

(三浦 正人)

焼 土(図 70、表 24・25、図版 51)

III層で確認した焼土は、他遺構の炉を除いて、71カ所ある。ただ調査年度や、III層残存状況の関係から、ボロモイチャシ跡にあった焼土は、炉も含めて、チャシの遺構としてあつかい、ニオイチャシ跡にあった焼土は、二風谷遺跡の焼土としてあつかった。図70に示した平面・断面図は、代表的なもの(焼土層の厚いのや骨片等の検出されているもの)である。III層の遺構ということで、Ta-b 火山灰直下の黒色土(III層)上面からのものと、黒色土中にあるものを、同時に取り扱ったが、本来的には、前者は近世のもの、後者は擦文期のものと考えられる。完全に両者に分けきれないため、明示していないが、8割方が近世のものであること、特に道跡周辺に多いことを記しておく。検出した焼骨片は表25に示してある。III F-6からは図示したように、鹿角製の開窓式鍋先が1点、灰層中より出土している。焼骨片の出土するものや、灰層をもつ厚いものは、建物跡炉との比較や、炭化物列の項目で述べたような理由から、建物跡の炉であった可能性が高い。III F-6はその好例である。

(三浦 正人)

表23 炭化物列出土遺物一覧

No.	名 称	材 質	寸法 cm()	内面存留	備 考
1	古 銭	銅	Φ2.5		「元祐通宝」?
2	刀 子	鉄	長(6.5)・幅(0.9)		刃部
3	漆 漆器	漆	長(3.4)		断面円形
	漆骨片	内生骨片			炭化木地が明顯に残る。

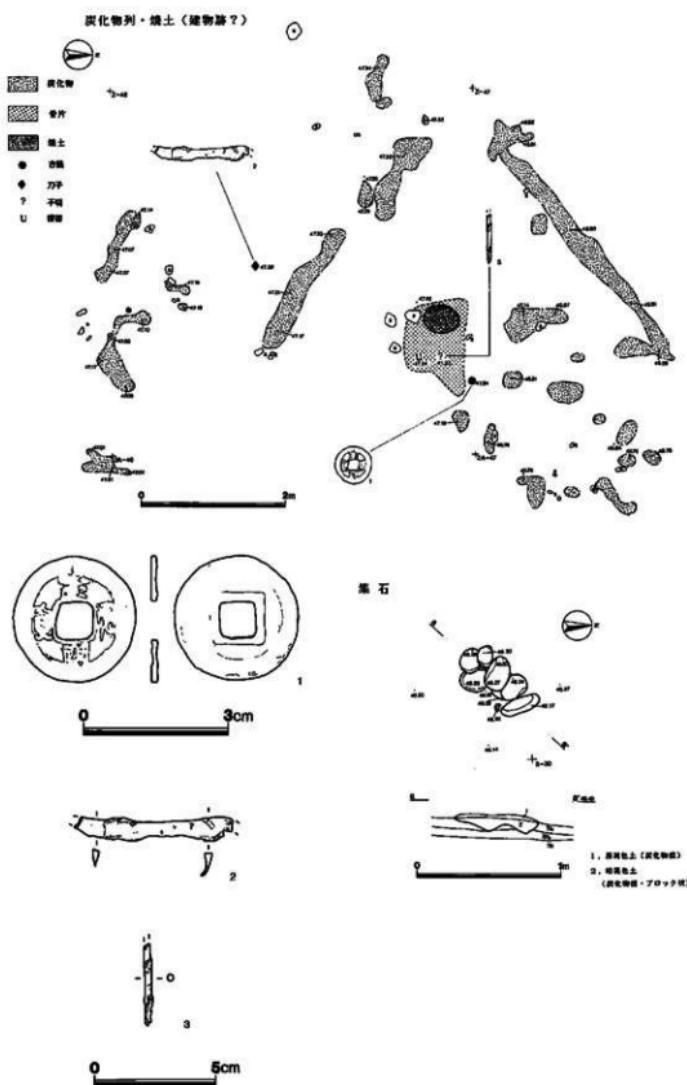


図69 炭化物列出と出土遺物・集石

表24 III層焼土一覧
III層焼土 (III F-) ①

No	グリッド	中央レベル m	長径・短径・厚 cm	備 考
1	2F-52	47.13	85・37・4	
2	2C-50 2D-50	46.90	-・-・6	
3	2C-50 2D-50	47.04	70・34・8	図掲載
4	2A-48	47.02	69・45・6	
5	Y-45	47.22	85・66・14	図掲載
6	X-Y-45	47.33	106・86・12	骨頭部・三角形軸先・ 海豚骨片・シカ骨片
7	W-46	47.25	155・107・24	
8	W-46	47.49	89・54・19	図掲載・骨片
9	W-45	47.32	75・48・24	図掲載
10	X-44	47.34	42・40・5	
11	Y-44	47.06	44・40・5	
12	Z-2A-44	46.80	60・44・5	
13	Y-43	46.88	92・63・17	図掲載
14	Y-43	46.84	70・50・10	図掲載
15	Y-43	46.88	35・28・5	
16	X-42	46.94	28・24・3	
17	W-X-42	47.08	178・94・1	
18	V-42	47.40	44・40・4	
19	2D-45	46.38	20・18・6	
20	2C-43	46.46	26・12・4	シカ骨片
21	2B-44	46.63	131・38・5	
22	Z-42	46.74	30・24・-	炭化物がらみ
23	Z-41	46.38	61・39・-	
24	Y-41	46.59	44・21・-	
25	V-W-41	47.05	95・62・16	図掲載
26	2E-40	45.94	65・24・6	
27	2E-38	45.72	122・73・2	
28	2D-36	45.62	120・70・10	
29	2C-36 2D-36	45.68	60・16・8	
30	2C-36	45.59	136・60・4	
31	2B-35	45.38	53・33・19	
32	Z-39	46.36	36・33・8	
33	V-39	46.86	54・30・2	
34	V-40	47.18	90・84・20	
35	U-40 41	47.39	198・77・12	
36	T-40	47.44	380・96・16	

III層焼土 (III F-) ②

No	グリッド	中央レベル m	長径・短径・厚 cm	備 考
37	U-39	47.14	86・40・13	
38	U-39	47.11	78・52・15	図掲載
39	U-38	47.02	52・44・8	
40	T-38	47.15	47・39・4	
41	S-38	47.26	76・58・5	
42	S-38	47.28	62・42・3	
43	R-37	47.18	168・54・25	
44	U-37	46.84	51・49・7	
45	Y-35	45.89	58・48・3	
46	V-35	46.60	34・22・10	図掲載
47	T-35	46.78	54・44・8	周囲に金属器・鍾石
48	T-35	47.52	53・45・7	夷湯板・ナガ骨片 周囲に金属器・鍾石
49	S-35	46.96	28・24・10	図掲載
50	R-35	46.99	44・36・1	
51	R-34	-	109・52・-	
52	Q-34	-	42・38・-	
53	B-30 31	46.50	60・55・9	図掲載・シカ骨片
54	S-30 31	46.26	90・68・11	図掲載・シカ骨片 サケ・キュウリ骨片
55	S-30	46.25	69・45・4	図掲載・シカ骨片
56	U-28	46.08	-・-・4	シカ骨片
57	J-28	47.50	55・46・-	
58	H-23	-	72・48・-	
59	N-22	47.03	34・32・6	
60	O-21	45.59	22・20・4	
61	P-20	46.53	22・16・3	
62	P-20	46.29	36・30・9	
63	N-19	-	80・44・-	
64	H-17	47.24	50・44・9	
65	H-18	47.56	44・24・-	
66	H-17	47.36	16・16・-	
67	K-6 7	46.83	82・46・5	以下71までユオイ チャシ跡内
68	K-6	46.87	42・30・6	
69	H-6	46.98	44・15・5	
70	F-10	46.96	79・45・4	図掲載
71	F-9	46.97	77・42・9	図掲載・骨片

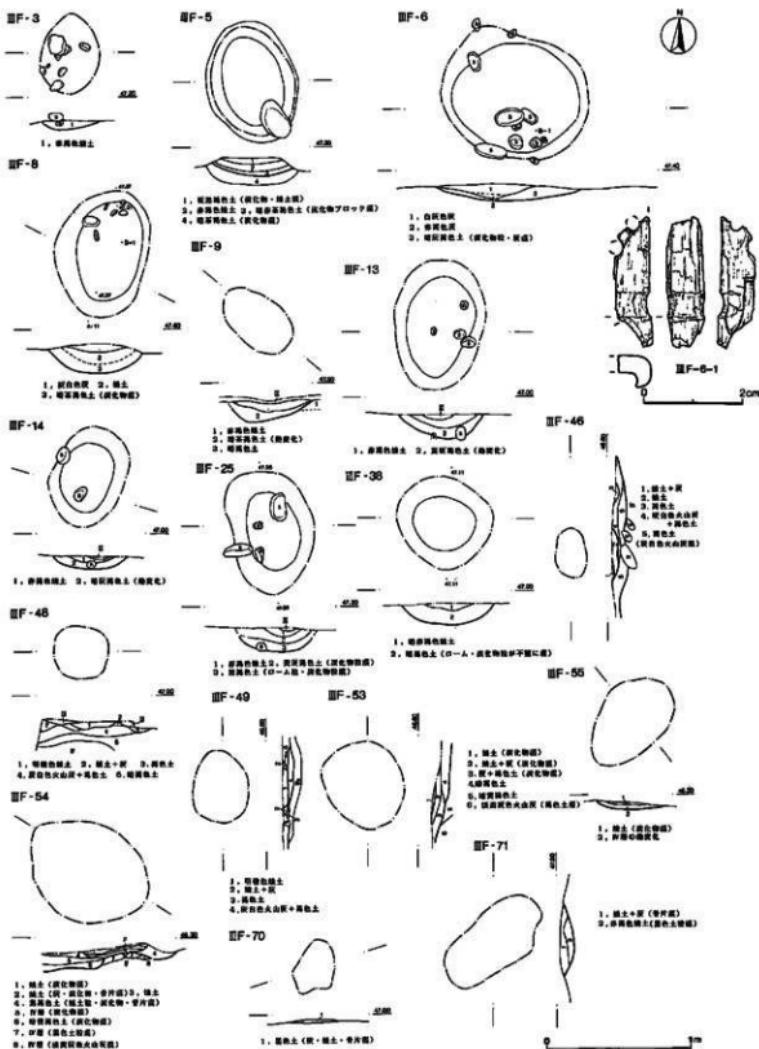


图70 III层烧土

表25 建物跡・焼土出土動物遺存体一覧

遺構名	層位	魚 鰐								哺乳類	
		サケ科		サケウツオ科				その他の 種、部位など		重さ	
		サケ・マス類	イトウ	キュウリ	シシャモ	部位など	重さ	部位など	重さ		
IIIH-1 炉	土 灰	サケ椎体	fr. 4	0.2g		g		g		g 不明	0.2 + 0.4g
IIIH-2 炉	土 灰	サケ椎体	fr. 2	+					fr.	+	シカ? fr. 19.5
IIIH-3 炉	1層	サケ上部 椎体	fr. 1	+	椎体	fr. 1	+	椎体	fr. 5	+	fr. 2.5 シカ? fr. 0.45
	2層	サケ上部 椎体	fr. 3	+				椎体	fr. 2	+	fr. 1.6 シカ? fr. 0.7
	3-4層	サケ上部 椎体	fr. 1	+				椎体	fr. 3	+	fr. 0.9 シカ? fr. 0.1 シカ? fr. 0.35
	5層							椎体	fr. 2	+	fr. 0.3
IIIH-10 炉	土	サケ椎体	fr. 3	0.1						fr.	1.0 シカ? fr. 6.5
IIIH-12	土 灰										シカ? fr. 0.9
IIIH-6	灰 屑										シカ? fr. 3.1
IIIH-20	土										シカ? fr. 0.5
IIIH-48	土	サケ椎体	fr. 1	+						fr.	0.05
IIIH-53	土										シカ? fr. +
IIIH-54	土	サケ椎体	fr. 3	+		椎体	2	+		シカ? fr. 1.2	
IIIH-55	土										シカ? fr. 1.7
IIIH-56	土										シカ? fr. 0.6

III P-1 (図 71、表 26、図版 51)

ニオイチャシ跡の範囲であるE-6区に存在する土壤。58年度の調査である。チャンの遺構とは考えにくいため、ここで扱った。段丘の沙流川に面した縁辺部にある。平面形は長円形で、長軸を西→東に向いている。規模は長径 1.5 m、短径 0.8 m である。壇壁はほとんど傾斜がなく、壇底部にいたる。その深さは、0.6 m ほどで、壇底部はほぼ平坦である。壇底から 10 cm くらい上層に、図示したように、黒色土の広がりがあり、鉄器 2 点が壇底にある。58年度の調査者も、埋土のうち、1-2 層は自然堆積だが、3-5 層を埋め戻した土と考え、墓壇の可能性を示唆していた。

遺物は、1 が刃部に使いべきのみられる刀子。両区で、茎には柄木質が残存している。2 は、一部に螺旋構造をもつ環状鉄器。この土壤が基であり

表26 III P-1 出土遺物一覧

回数	名 称	材 质	寸 法 cm	備 考
1	刀 子	鉄	長23.2 刃幅1.8	柄木質残存
2	環状鉄器	鉄	径3.6	コイル状

III P-2 (図 71、図版 51)

これも、ニオイチャシ跡内 (E・F-6 区) に存在する土壤で、58 年度に調査されたものである。長軸を東西→北東に向かって、平面椭円形の土壤で、長径 0.98 m・短径 0.59 m を有する。ほぼ垂直に掘り込まれており、深さ 0.3 m で、平坦な壇底にいたる。壇底から、中ほどまでに、15 cm 大の縁が入れられているが、それ以外に壇内からは何も検出されていない。壇口部出土の擦文土器は、口径 12.8 cm・高さ 13.5 cm・底径 5 cm の小型の甕である。口唇の断面形態は方形で凹線がある。文様は 3 本の沈線によって文様帶が区画され、2 本の沈線による二重の鋸歯状文がめぐらし、口唇下の一部に M 字形の沈線文がみられる。器面の調整は、文様帶部分が横ナデ、胴部は丁寧な縱方向のヘラ磨き、底部にはヘラケズリ痕がみられる。内面には横方向の刷毛目調整痕が残る。

(三浦 正人)

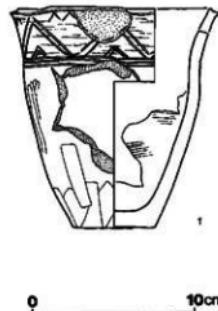
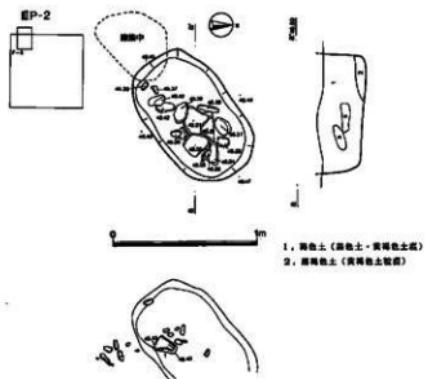
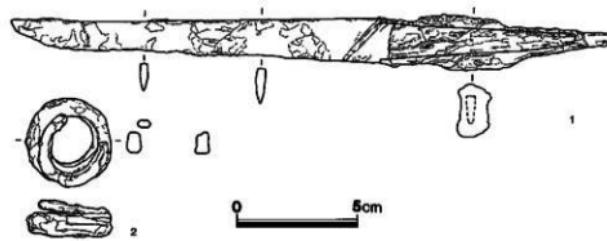
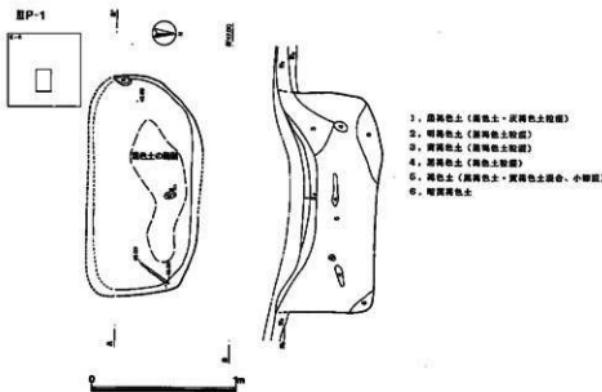


図71 III P-1・2と出土遺物

ii) III層包含層の遺物

(1) 金属製品（図72～77、表27・38～40、図版52～54・56～60）

金属製品は、ほとんどがIII層の上面(Ta-b火山灰直下)にあり、近世の遺物と思われるが、一部はIII層に少し入った状態のものもあり、これについては擦文期の金属製品の可能性が高い。ここではなるべく個々の物について説明し、類例や総合的なことはVII章で触ることにする。

鍋：1は、段丘下のニオイ沢縁の低地(V-24区付近)から出土した。内耳鉄鍋片である。口縁から底部まで的一片で、肩の張った耳が縦位置につく小型の鍋。2も内耳鍋の耳部分の破片。3は口縁部片で、同時に胴部片も数点出土している。4は小型の吊耳鍋片。耳には頂点突起と、段があり、大小の2孔が穿たれている。5はIII H-1・2のあるニオイ沢向きの緩斜面にあったもの。出土地点の上方は削平部分で、そこには、建物があったのだろう。口縁から胴部の1/4を欠く。小型の鍋で、計算上の容量は8合。残った口縁部分に不自然な個所があり、そこが吊耳だったと思われる。底は平らで、長六角形に近い丸形湯口と、三本の脚がついている。6は胴部片、7は胴から底部への移行部分であろう。8は口縁部の損傷部両端に、折り曲げた小札が付いている破片。

刀子：9～20は刃部幅が2cm以下のもの、21～28は2cm以上のもので、後者には大型のものが多い。刃部はすべて平様平造りで、区の観察できるもののうち、9～11・16・20～22・24は両区、12・13は刃区がある。9・10には明瞭な使い減りがみられる。9・10・21・22は長い茎をもつ。目釘孔が確認できるものは、25・26・28である。11・14には棟や刃につぶしがみられ、加工して刃の一部を使用していたものと考えられる。20は、折損部両端が処理されたようになめらかである。破片でも使用したのであろう。23・26～28は、刀の破片再利用と思われる。23の刀身には縫が通っており、折損部の付近を茎につくりかえて、マキリとしたものであろう。27は、木器の内側を削るためのレウケマキリにしたものであろうか。全体に刃物を大切に使用している、印象を得る。

ナタ：いわゆる「腰鉈」と呼ばれるもので、ボロモイチャシ跡から出土した2丁と同一の形態である。木材の切り出し、加工に使用されたものであろう。棟の一部には明瞭なつぶしがみられる。敲打による、切断・加工を行ったものだろう。茎には1本の目釘が残っている。

鎌：30は、ボロモイチャシ跡やIII H-1からも出土している形態の、直刃鎌である。地金・刃金の区別のない薄型で、柄は刃と約100°の角度をなす。柄には目釘が残っている。中世末～近世初の位置付けができる。31はこの鎌の口金(タマクラ)である。32は、片端が欠損し全体形状を把握できないが、直刃と曲刃が同居した鎌で、片端の肩部に折り返しがある。2 E-38区周辺の擦文土器出土状況等を考慮すると、擦文期の鎌とることができよう。

歛先：この遺跡における農耕を示唆する遺物である。付篇の矢野氏報文にもあるように、フローテーションでIII H-4でイネ科(アワ?)、III H-10でモロコシ類が検出されている。33は、角歛先の破片である。刃部がかなり使い込まれて短くなっている。ふところの深い風呂受けをもつ。頭部に重ねてたたかれた痕があり、つぶしがみられる。破損後、刃部を利用して木割り具やタガネのように利用したものであろう。34・35はU字形の歛先である。34は側部が短く、刃部幅も狭くなっている。折損したためであり、かなり使い込んだものであろう。36は、断面が、刃部のV字形に比較し、側部が極端なY字形を呈す。刃には片減りがみられる。風呂受けの中央の孔(破損)は、歛先と木芯を固定するためのものであろうか。この歛は、鍾石群と同時に出土したものである(図78)。これら歛先を使用した耕作地が、どこにあったのか興味深いことである。

斧：36は、近世～現代に通用の形態で、鍔の後方突出部のない形をしている。木割りの斧である。柄装着孔(櫛)は、やや下すぼまりの長方形である。斧頭が丸珠をもつが、側面觀は、長二等辺三角

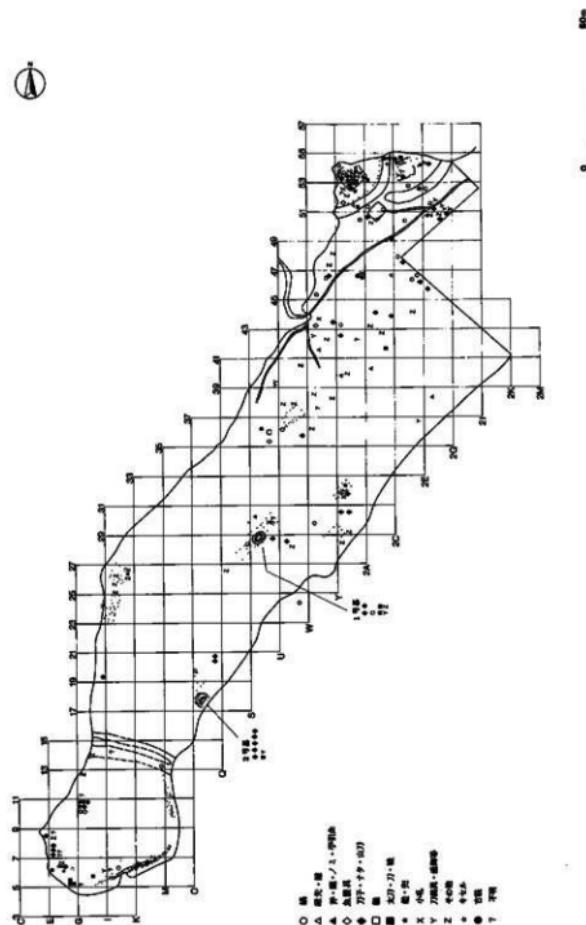


図72 金属製品分布図

形である。両面に三本の穂がみられる。37は、撫文期の袋状鉄斧である。袋部は三方囲みのヨ字状である。袋部と刃先部との区別が明確で、側面觀は長二等辺三角形を呈す。

刀：38は、この段丘では、チャシ以外で唯一の刀である。全長38.2cm、全反り0.7cmの小刀。平棟平造りで、浅い両区をもち、茎には2孔の目釘孔を有す。

鎌：39は先端を失するが、無茎の狭鋒腹抉長三角形式の鎌である。腹抉交点の上方に小孔を1つ有す。同形小型のものが、ボロモイチャシA郭建物跡から出土している。40は、先端を欠損しているが、断面長方形の笠被ぎと、円形の茎を有する。笠被ぎと茎の変換点は明確でない。笠被狭鋒平造腹抉三角式の鎌である。41は、笠被ぎと茎の分化が明瞭である。鋒部は斧先形をなす。笠被方頭細根斧箭式の鎌である。周囲に焼土や焼骨がみられた。

魚獲具：42は、マレブ（自在鉤鉈）である。大きさからみて、マス漁用と思われるが、IIIH-8のものとは、受けの深さが違う。43は、アブ（魚とり鉤）の破片であろう。断面は正方形である。46~49の棒状鉄器は、マレブ・アブのような、魚獲具の破片ではないだろうか。44は、かえりのついた、断面正方形のヤスで、単独使用かあるいは、三本ヤスの中心のものであろう。

その他の鉄器：45は2列13孔の狭長な小札で、折り曲げられている。IIIH-4や、ボロモイチャシA郭建物跡から同形のものがある。46~49前述。50~53は角釘であろう。51~52は揚子様の棒状鉄器。54は4片が一括のもの。1本には振りがみられる。長く接合するものとすれば火箸だろうか。55は針金か。56には先端に、平たくなる鉤手がついている。59は一角に丸穴のある。直角三角形の薄板である。60は、レバー状の鉄器で、形状は仕掛け弓の引き金（ヘチャウェニ）に酷似する。

垂飾：61~66のコイル状、67~69の渦巻巻頭、70~74と多数の小片の鎖、65~76の振棒、77の環、70に付着する帯状環の部品が、20cm四方の範囲に、黒色土にもぐった状態で一括出土した。コイル状鉄製品の類例は、常呂町ライトコロ川口遺跡12号堅穴内墓壙の副葬品にみられる。61~69は径2.5mm、70~76は3.5mmの針金を加工したものである。コイル状のものは、針金を中空の長球状に、右回り螺旋で巻き、61~63のように端に環をもうけ針金先を中空内に差し込んだもの。66のように振棒状にしたものもある。全体で腰帶様の装飾を構成するものと思われる。櫛太・沿海州・シベリア方面にその起源となるべき例を見出せそうである。VII章で若干触れる。

刀装具：すべて銅製品である。78~79は86~107のガラスビーズ玉と併出しており、80も近くにあった。78は縁と呼称するもので、天井部が破損し、孔の形がみられない。79は合わせが棟側で、棟部山形の鎌である。刀装具から他の装飾に転用されたものであろう。80は平円頭の傘紙で、先が二股に分かれている。81は小柄で、片面のみ小縁がつけられ、地板に魚々子状の文様（鮫皮の模倣？）がある。82~83は同時出土である。四弁花形で各端に2本の刻線が入る。裏には鉤がつく。飾金具だが、刀装具ではないかもしれない。

古錢：銅錢。熱をうけて劣化が著しい。ボロモイチャシA郭建物跡からも出土している元祐通宝（北宋哲宗1093年初錢）だが、これは文字が不鮮明であり、模铸錢（鑄錢）であろう。（三浦 正人）

(2) 土製品・石製品（図77、表27、図版60）

土製品：85は、径2.0cm、縁高の小型土製円盤。中央に小孔を有する。片面にこの小孔から放射状に刻線文があり、縁部と側面には刻文が施されている。装飾か、勅錦車の模倣品であろう。

石製品：環状の泥岩製品である。108はきれいなドーナツ形をしているが、厚みが不均一である。109にみられるように、两者とも自然の有孔石を加工し、装飾品にしたものであろう。（三浦 正人）

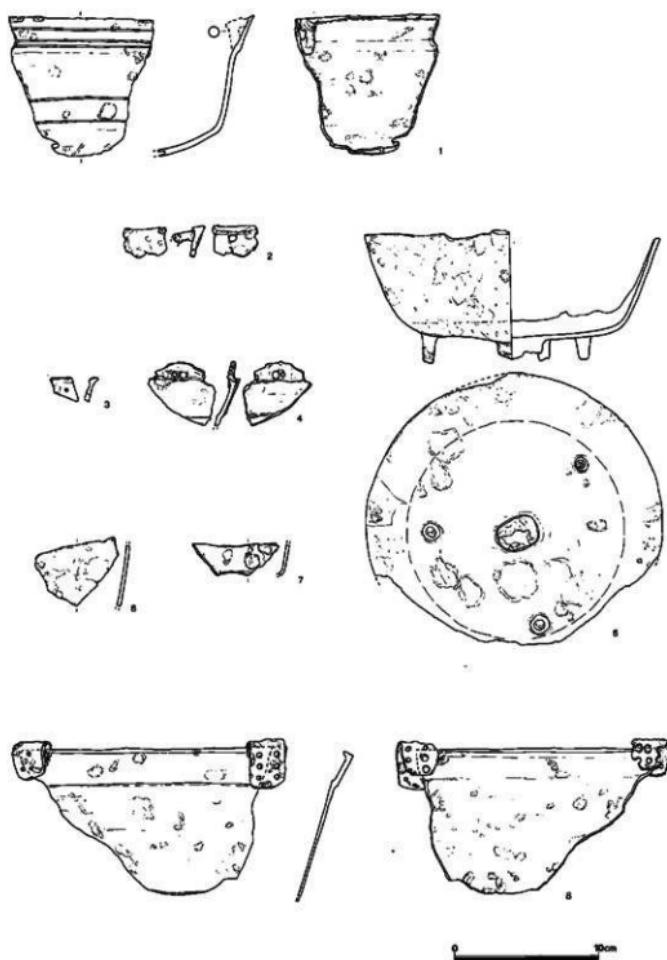


図73 金属製品(1)

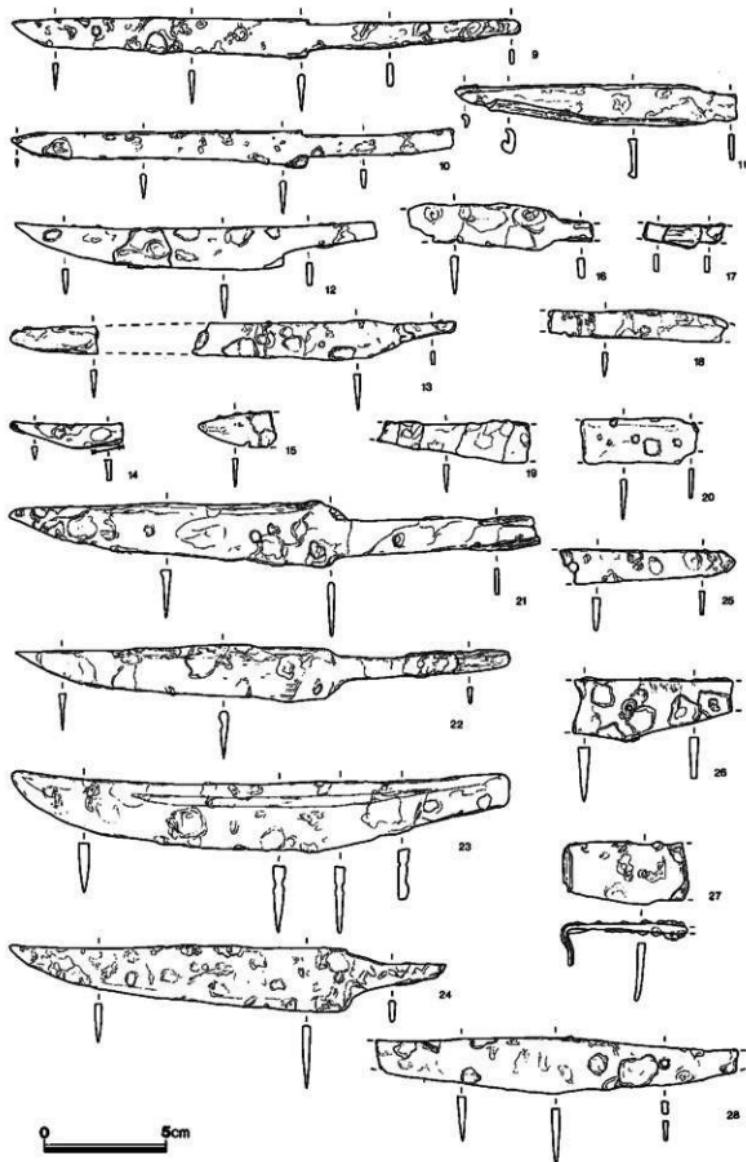


図74 金属製品(2)

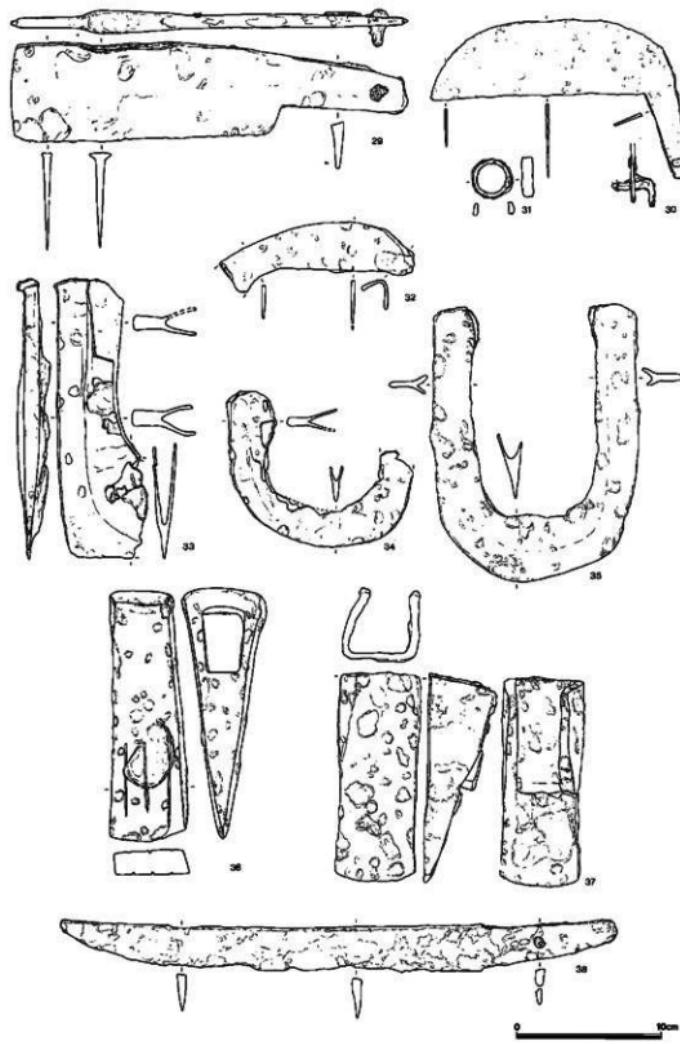


圖75 金屬製品(3)

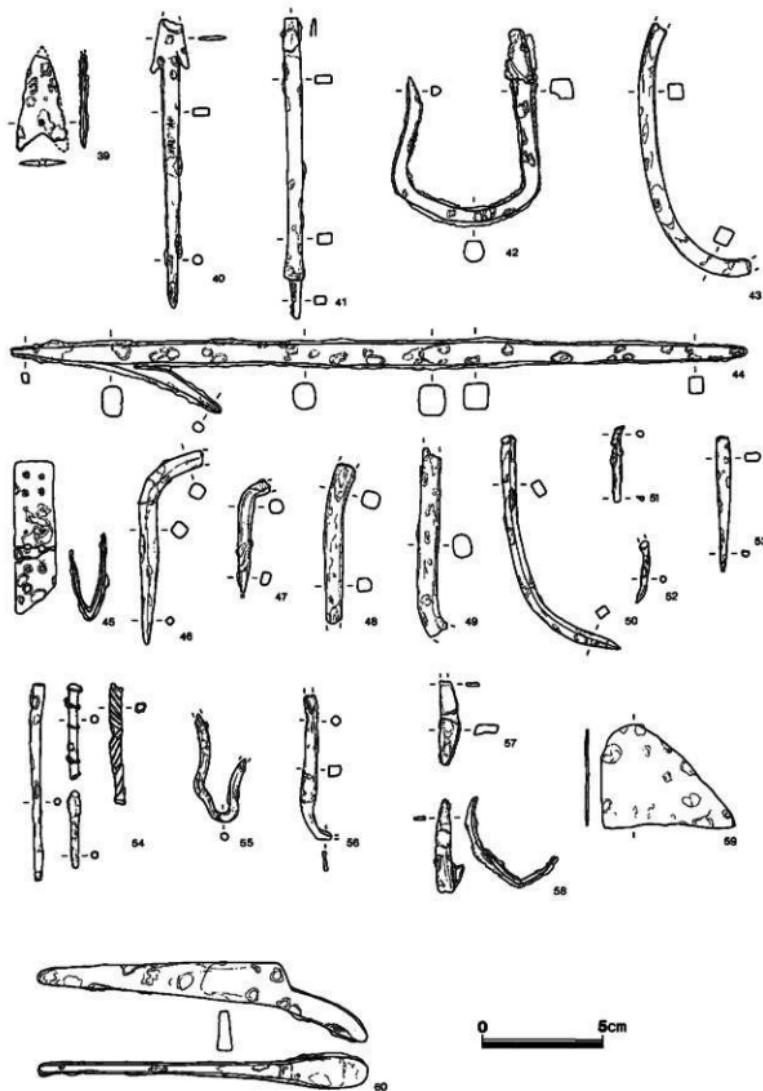
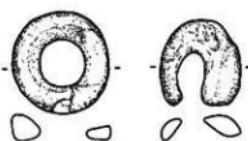
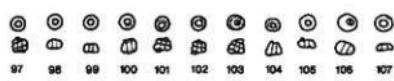
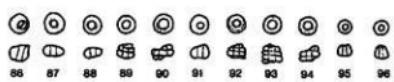
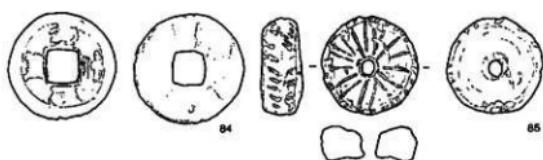


図76 金属製品(4)



0 5cm



0 5cm

0 5cm

図77 金属製品(5)・土製品・石製品・ガラス玉

(3) ガラス玉 (図 77、表 27・41、図版 61)

2F-51 区で、86~107 の 22 個のビーズ玉と、78・79 の刀装具が一括出土した。径 3~4.5 cm、厚 1.5~4 mm、重さ 0.02~0.09 g の小粒状であるのでビーズ玉とした。すべてを結いでも 6 cm に満たず、78・79 の刀装具を含めても、大がかりな装飾にはならない。88~94 は無色透明である。88・91 は普通の丸味のある玉だが、89・90・92~94 の 5 個は、極細のガラス棒を螺旋形に巻いた形をしている。製作方法のちがいであろう。86・87 は深紅透明、95・96・98・99 は青緑色透明、100~106 は水色で 102・105・106 に透明感がある。97 と 107 は風化して白っぽくなっているが、水色の玉であろう。このうち螺旋形状やその痕跡を残すものは、96~98・100~105・107 で、上記無色の 5 個を加えると、総数 22 個のうち 15 個がこの製法でつくられたものである。95・99 は巻かれた痕跡はあるが、螺旋にはなっていない。螺旋がそのまま残るものは切り放したのみで、痕跡が残るものは、表面を研磨処理したものだろう。螺旋状のものは軽めで、丸味をもつ玉の方が比較的重量がある。東京国立文化財研究所 江本義理氏による蛍光 X 線分析によると、深紅のものは鉛の強いスペクトルを示し、水色・緑青色のものも、鉛と亜鉛の弱いスペクトルを示すのに対し、無色のものは、鉛のスペクトルを示さない。無色のものは、アルカリ石灰ガラスと思われる。他の色つきの玉は鉛ガラスであることがわかる。螺旋形のものやその痕跡を残すものの出土例や、製作技法については、明らかでない。痕跡のみのものについては見逃されていることも考えられる。つぶさに資料をあたる必要がある。

(三浦 正人)

(4) 漆器 (図 78、表 27)

漆器片は、III層上面において 16 地点で出土している。いずれも漆膜の破片のみで、その原形を知り得るものは、少ない。ただし、漆膜の裏面に炭化した木地の痕跡を残すものが多い。の中でも T-27 区出土のものは、底部とみられる漆膜片もあることから椀と考えられる。これは、内朱外黒とみられる。また、Y-45 区(①)出土のものには黒地に 3 mm 幅の朱線 2 本が描かれ、2B-46 区のものには詳細は不明であるが、黒地に朱による文様が描かれている。他は、すべて朱漆であり、小破片のものが多い。2B-47 区・2C-47 区出土のものについては同一個体とみられ、個体数にすれば全体で 12 個ほどになる。漆器片の多くは、ボロモイチャシ側の道跡の南に集中しており、チャシとの関係において注目される。

(田中 哲郎)

(5) 錘石 (図 79・表 27・図版 54-1~3)

III層においては、長さ約 6~7 cm のサイズの揃った自然礫が集中する箇所を 11 か所検出している(以下集中箇所をブロックと呼称する)。このうち、5 ブロックの出土状況を図示した(図 79)。ブロック 4・7・9・10 は直径 50 cm の円内にまとまった状態で出土しており、ブロックの下に掘り込み、焼土等の遺構は認められない。自然礫の石質は、砂岩、泥岩、片麻岩が大半を占める。各ブロックを構成する礫は、長さ 6~7 cm、幅 3 cm 前後、厚さ 2 cm 前後、重量 30~70 g であり、同一の目的のために使用されたものであろう。また礫の表面は滑らかであり、川原から選択され、遺跡へ持ち込まれたものであろう。これらは、アイヌの民俗具例からゴザヤスダレを編む時の錘石(ピッ(Pit))として用いられたと考えられる。

同様の錘石は、ボロモイチャシ A 郭・B 郭、III H-1・4・8 においても検出されており、これらを含めて後述する(第Ⅷ章 9 節)。

(寺崎 康史)

Ⓐ

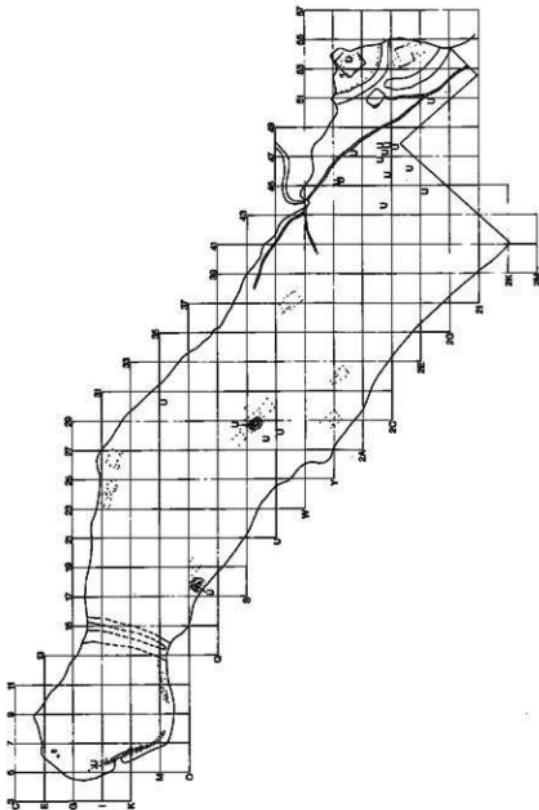


図78 漆器分布図



図79 ガラス玉・鍾石出土状況図

表27 包含層出土金属製品・土製品・石製品・ガラス玉・漆器・鏡石一覧

番	No.	名	材質	寸法cm() 内側存無	グリッド	番	No.	名	材質	寸法cm() 内側存無	グリッド
73	1	鏡	銅 内耳	V-24		76	41	鏡	銅	長12.2・方鏡脚附式	2C-50
2	鏡	銅 内耳		2 D-46		42	マレット	銅	高(3.1)・幅6.0	W-43	
3	鏡	銅 口唇		Y-43		43	アーヴィング	銅	長(12.4)	U-26	
4	鏡	銅 形耳		W-45		44	ヤース	銅	高(3.2)・かえりの長4.0	T-35	
5	鏡	銅 口唇2.0・高さ9.5・三脚・大型脚口		W-29		45	小札	銅	長6.2・幅1.6、13孔	W-43	
6	鏡	銅		2 D-46		46	脚状鏡脚	銅	高(3.5)・角型丸?	Y-39	
7	鏡	銅		2 C-48		47	脚状鏡脚	銅	長(4.8)・	2D-44	
8	鏡	銅 口唇・小2.1・吹付脚		X-46		48	脚状鏡脚	銅	長(3.5)・	S-28	
74	9	刀	子 銅	長20.5・刃部幅1.6	U-28	49	脚状鏡脚	銅	高(3.0)・	X-47	
10	刀	子 銅	長13.1・刃部幅1.4	Y-30	50	脚状鏡脚	銅	長(3.0)・約?	X-46		
11	刀	子 銅	長(11.5)・刃部幅1.6	Y-30	51	脚状鏡脚	銅	長(3.1)	2A-50		
12	刀	子 銅	長14.8・刃部幅1.7	H-19	52	脚状鏡脚	銅	長(3.2)	Q-26		
13	刀	子 銅	規定長13.2・刃部幅1.5	2 B-44	53	脚状鏡脚	銅	高(3.5)・約?	W-38		
14	刀	子 銅	長(4.6)・切先部分	V-35	54	脚状鏡脚	銅	脚脚長(4.9)・大器?	X-38		
15	刀	子 銅	長(3.2)・切先部分	2 B-51	55	針金状鏡脚	銅	脚(5.4)	X-42		
16	刀	子 銅	長(3.6)・刃部幅1.7	2 C-47	56	胸手付鏡脚	銅	長(3.3)	V-40		
17	刀	子 銅	長(3.4)	P-30	57	不規	銅	長(3.4)	Z-42		
18	刀	子 銅	長(3.4)	2 D-46	58	不規	銅	高(3.7)	2E-51		
19	刀	子 銅	長(3.3)・刃部幅1.7	P-30	59	不規	銅	長25.4・厚3.1・三脚底脚	U-38		
20	刀	子 銅	長(3.2)・刃部幅1.8	X-46	60	不規	銅	長12.5・ヘチマーク?	W-37		
21	刀	子 銅	長21.8・刃部幅2.6	T-28							
22	刀	子 銅	長20.9・刃部幅2.2	2 B-45							
23	刀	子 銅	長19.4・刃部幅2.8	Y-42							
24	刀	子 銅	長17.8・刃部幅2.6	2 B-48							
25	刀	子 銅	長(3.2)・茎部分	2 A-44							
26	刀	子 銅	長(5.5)・刃部幅2.5	X-43							
27	刀	子 銅	長(5.2)・刃部幅2.4・シケヤモキ?	2 F-50							
28	刀	子 銅	長(14.0)・刃部幅2.3	2 A-50							
25	29	ナメ	銅	長27.3・刃部幅3.8	2 F-50						
30	鑿	銅	万葉集1.7・高10.8	2 E-50							
31	チャタク	銅	圓3.5・深3.5・付属	2 E-50							
32	鑿	銅	長13.4・幅3.3	2 E-50							
33	鉤先	銅	高19.0・角鉤	2 B-45							
34	鉤先	銅	高19.6・半圓幅14.0、U字縫	Y-39							
35	鉤先	銅	高18.8・幅12.2、U字縫	2 A-40							
36	矛(頭)	銅	長17.1・刃部幅2.2	S-30							
37	矛	銅	長14.5・刃部幅2.5	W-41							
38	刀	銅	長30.2・刃部幅2.2	2 B-41							
76	39	鑿	規定長4.3・最大幅2.1、高茎	2 E-51							
40	鑿	銅	長(31.7)、布茎	T-35							

漆器

グリッド	特 徴	な ど	グリッド	特 徴	な ど	グリッド	特 徴	な ど
M-30	火薙	炭化木地の痕跡あり。	2B-43	火薙。	炭化木地の痕跡あり。	2C-47	火薙。(2B-47と同一個体?)	
T-27	内生外輪縫?	*	2B-45	火薙。		2D-46	火薙。	
U-28	火薙。	*	2B-46	周地朱縫(漆物文)。	炭化木地の痕跡あり。	2E-44	火薙。	
Y-45①	周地朱縫。幅3mmの朱縫2本。	*	2B-47①	火薙。	同一個体	2E-50	火薙。	炭化木地の痕跡あり。
* ②	火薙。	*	* ②③	火薙。	*	106	漆4.2×4.5・重24.4g	2F-38、Y-38

鏡石

鏡石番号	グリッド	測定	子 均 寸	均 寸	石 質	鏡石番号	グリッド	測定	子 均 寸	均 寸	石 質
ブローフ1	T-40	16	6.2	2.9	1.9	45	Sa. Mud. Gne				
2	V-48	47	6.3	3.5	2.3	72	*				
3	W-44	54	5.9	3.6	2.3	76	*				
4	X-43	28	7.0	3.3	2.0	79	*				
5	Y-45	44	6.4	2.9	1.7	92	*				
6	2A-45	70	6.2	2.9	1.9	99	*				

(6) 動物遺存体 (図 81、表 28)

ニオイチャシ跡場列付近や二風谷遺跡の送り場以外の地区からも、第III層真黒色土の上面を主体に、動物遺存体が検出されている。大部分はエゾシカの遺骸で、その他ウバガイなどの貝類が少量得られている。シカの遺骸は、大別して、焼けて白変した骨片と、それ以外の歯や骨など、部位の分かる破片がある。前者は、シカの四肢など管骨の破片が多く、指趾など末端部を除いては、部位の特定が可能なほど大きな破片はない。後者は、主にシカの歯や角から成り、四肢骨などが若干含まれる。焼骨片については、3段階に分けた地区別の出土量を図示し、焼骨以外の遺存体の分布状況については、全般的に遺存が認められた箇所における分布図を作成、代表として例示した。

結論的には、これらの遺存体は、1、2号墓や、墓と推定されたIII P-1、2そしてIII H-2、10、12といった建物跡の周辺など、遺構の領域に重なって検出された例が多かった。建物付近における食物残渣の発見、墓での供奉など、遺構との密接な関係を強調すべきかも知れない。
(高橋 和樹)

表28 包含層出土動物遺存体一覧 (1)

区名	重さ(g)			計
	焼骨	歯	その他	
E-6	55.8			55.8
F-6	24.9			24.9
G-5	1.6			1.6
G-12	1.0			1.0
H-6	4.6			4.6
I-21	0.1			0.1
I-25	0.8			0.8
J-7	33.4			33.4
K-28	0.3			0.3
L-17	0.3			0.3
M-16	6.0			6.0
M-18	3.6			3.6
N-19	11.3			11.3
N-20	4.0			4.0
N-21	12.1			12.1
O-16	4.2			4.2
O-21	0.8	5.4		6.2
O-26		員分 0.2	0.2	
P-19		4.6		4.6
P-20	1.2			1.2
P-22	0.1			0.1
P-23		0.8		0.8
Q-21	9.5			9.5
Q-22	0.6			0.6
Q-23	1.9			1.9
Q-27	3.5	5.4		8.9
Q-28	0.3			0.3
R-27	10.7	5.5		16.2
S-27	1.1	4.5		5.6
S-28	4.5	2.6		7.1
S-29	2.3			2.3
S-30	5.0			5.0
S-38	2.5			2.5
T-27		5.2		5.2
T-32	0.1	1.1		1.2
U-27		1.1		1.1
U-29				0.1
U-34				0.4
U-35				0.2
U-36				2.6
U-37				2.5
U-38				7.8
W-27				5.5
W-36				9.5
W-37				0.3
X-28				0.2
X-29				1.0
Y-31				員分 5.4
Y-38				3.4
Y-41				3.0
Z-38				2.4
Z-44				5.2
2A-40				9.9
2A-41				1.0
2A-42				2.1
2A-48				0.8
2B-41				1.3
2B-43				4.1
2C-44				1.4
2C-45				0.2
2C-49				0.1
2C-50				31.5
2D-36				8.0
2D-43				0.6
2D-44				1.1
2D-45				1.1
2D-51				1.3
2D-52				0.1
2E-45				41.9
2F-39				6.1
2F-40				0.2
2F-51				7.4

表25 包含出土地层等价量 (2)

区 号	层 号	上			中			下			上			中			
		L	M	R	L	M	R	L	M	R	L	M	R	L	M	R	
E-4	④Ez.	C1P1P2M1M2M3	C1P1P2M1M2M3	C1P1P2M1M2M3	M1	M2	M3	P1,M1,2,3									
E-5								M1	3								
E-6																	
E-7																	
E-8																	
E-9	⑤Ez.																
F-9								P1,M1,2									
F-10								(P1,M1,2)									
G-11																	
H-12																	
E-13								P1,M1,2									
E-14								P1,M1,2									
H-15								M1	1	4,5,6							
H-16								P1,M1,2									
H-17								M1	1	4,5,6							
H-18								P1,M1,2									
H-19								M1	1	4,5,6							
H-20								P1,M1,2									
H-21								M1	1	4,5,6							
H-22								P1,M1,2									
H-23								M1	1	4,5,6							
I-19								P1,M1,2									
I-20								M1	1	4,5,6							
I-21								P1,M1,2									
I-22								M1	1	4,5,6							
I-23								P1,M1,2									
I-24								M1	1	4,5,6							
I-25								P1,M1,2									
I-26								M1	1	4,5,6							
I-27								P1,M1,2									
I-28								M1	1	4,5,6							
I-29								P1,M1,2									
I-30								M1	1	4,5,6							
I-31								P1,M1,2									
I-32								M1	1	4,5,6							
I-33								P1,M1,2									
I-34								M1	1	4,5,6							
I-35								P1,M1,2									
I-36								M1	1	4,5,6							
I-37								P1,M1,2									
I-38								M1	1	4,5,6							
I-39								P1,M1,2									
I-40								M1	1	4,5,6							
I-41								P1,M1,2									
I-42								M1	1	4,5,6							
I-43								P1,M1,2									
I-44								M1	1	4,5,6							
I-45								P1,M1,2									
I-46								M1	1	4,5,6							
I-47								P1,M1,2									
I-48								M1	1	4,5,6							

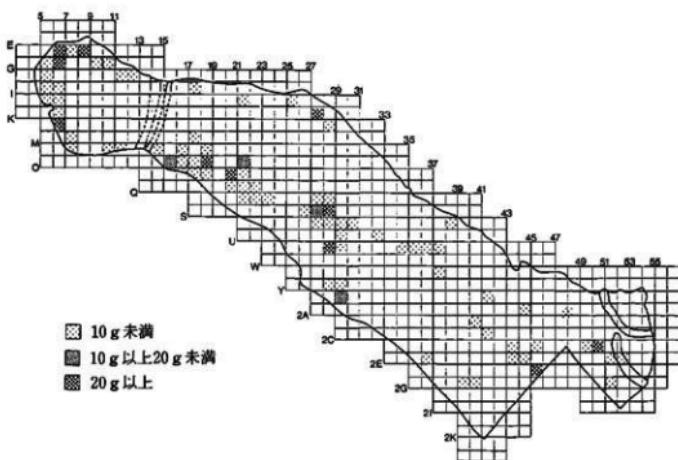


図80 燃骨分布図

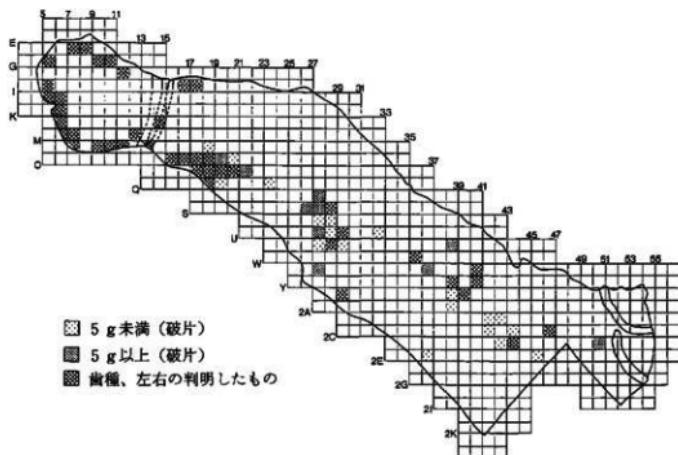


図81 シカ歯分布図

(7) 土器

III層出土の土器は、すべて擦文時代に属するものである。出土総点数は、6,034点である。この遺跡は、水田造成による削平部が多く、全体を把握することはできないが、ユオイチャシ跡の先端部や、P-20区近辺、ボロモイチャシ跡B線の外側に、多くの土器片が出土している(図82)。

器形には、壺・高壺・甕・鉢があり、この順に説明していきたい。

壺(1~5)：ロクロ未使用のもの(1・3・5)とロクロ使用のもの(2・4)がある。1は、平底で、口縁部がやや立上がる。内面は、みがかれている。口径16.7cm、底径6.3cm、高さ6.1cm。3は、推定復原したもので、内黒である。5は、口縁部に3本の沈線がめぐり、体部下部に刷毛目調整痕を残す。推定口径18.4cm、底径6.9cm。2は、ロクロ使用のものであるが、内外面とも丁寧にみがかれており、ロクロ成形痕を残していない。内黒である。口径15.5cm、底径5.3cm、高さ5.8cm。4は、回転糸切り痕が残るものである。底径5.4cm。

高壺(6~22・52~69)：高壺には、口縁部に沈線をもつもの(6・7・52・53)と、刻線文様をもつもの(9・10・55~69)、無文のもの(8・11)がある。

6・7は、口縁部に沈線をもつもので、前者は、沈線を入れたあと横方向のナデ調整が施され、後者は、横方向の箇ミガキが行われている。52は、体部に刷毛目調整痕を残している。53は口縁の外反するもの、54は沈線の他に刻み目の入るものである。

刻文をもつものは、器厚の厚手のものと、薄手のものがある。55~57は厚手のもので、細く浅い刻線で横位のハの字文様をもつものが多い。9は、体部が刷毛目調整されており、その調整具とみられるもので、口縁部に3段の斜位に押捺した文様がみられる。この調整具による文様は、10や67にもみられる。64~61は同一個体で、16の脚部をもつものである。

無文のものである5は、外反する口縁に段をもつもので、内外面とも箇ミガキが行われている。11は、甕の34と供伴して出土したもので、口径10.9cm・高さ8.7cmである。厚手のもので、口縁が外反している。体部の一部に箇ミガキ痕が残っている。

高壺の脚部が多く出土している。脚部の裏面に刺線を放射状に入れるもの(17)や、円形の刺突に入るものの(19)、9でみられた押捺文を施すもの(21)など、様々なものがある。

甕(23~46・70~88)：甕は、口縁から頸部にかけて沈線がめぐり、口唇形態が角型で凹線がみられるもの(I類)と、刻文をもつもの(II類)に大別される。

(1) I類(23~28、70) 23・24は、胴部の内外面に刷毛目調整痕を明瞭にもつものである。24には、複数の沈線を分割するように、一列の刻み目が横位に入る。前者は口径19.0cm、後者は27.8cmである。26は、24と同一個体とみられる底部である。25は、口唇に刻み目がめぐるもので、口径12.7cm・底径5.8cm・高さ12.0cmである。胴部外面は丁寧な箇ミガキが施されている。28は、頸部にのみ細い沈線がめぐるもので、内外面とも箇ミガキが施されている。

このI類は、ユオイチャシ跡の先端部で、そのほとんどが出土している。

(2) II類(29~46、71~88) II類はまた、刻文のみのもの(a種)と、貼付帯をもつもの(b種)に分けられる。

a種(29~37、71~84) 29は、口径12.2cm・底径5.9cm・高さ13.5cmである。胴部上半を文様帶としているが、文様構成に規則性はみられない。30は、2本の横位の沈線で胴部上半を文様帶としているが、文様を施さない部分をもつ。32・33は、器面全体にミガキを施しているものの、文様部には明瞭な刷毛目調整痕を残している。32は、口径16.7cm・底径7.2cm・高さ20.0cmであり、後者は底径8.0cmである。34・37は、口径が、それぞれ26.1cm、25.6cmをはかる大型の甕で、文様帶

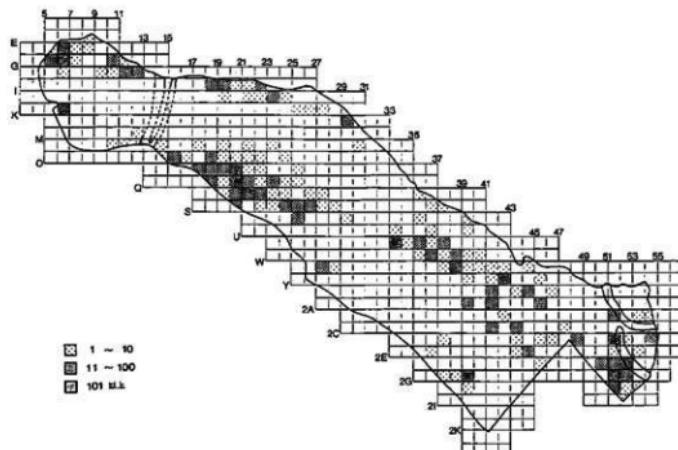


図82 III層出土土器分布図

は横にめぐる鋸歯文や斜線で構成されている。胴部には、箇ミガキ痕を残す。35も、同様の文様構成をもつが、口縁下に明瞭な縦位の刷毛目調整痕を残している。36は、高坏の9にみられた同様の調整具で、文様が施されており、胴部には、みがかれたあとに刷毛目を施している。79は横走沈線を地文とするもので、今回の調査での出土はこの1点のみである。

b種 (38~46・85~88) 38は、口径14.4cm・底径7.0cm・高さ15.0cmである。焼成が悪く、ゆがみが著しい。貼付帯と口縁部に沈線をもつものである。39は、口唇形態が角型のもので、貼付帯によって文様帯が区画されている。器外には刷毛目調整痕がほぼ全面に残っているが、貼付帯の部分は横ナデされている。口径29.8cm・高さ29.8cmである。40・41は、外反する口縁に、沈線と刻み目があげられ、貼付帯によって文様帯が区画されるものである。文様帯は、縦の沈線によって分割されている。特に、41は、斜位の十文字2つと縦の沈線と斜めの沈線が組合わされた文様を、1セットとして、全体で4セットがめぐっている。42は、口径13.2cm・底径5.8cm・高さ11.2cmの小型のものである。最大胴径部に貼付帯をもつもので、縦位の貼付帯もみられる。貼付帯の上下に斜格子文がみられる。丁寧なミガキが施されている。43は、文様帯の上下に貼付帯のあるものである。縦の沈線による文様帯の分割はないが、縦位と横位のハの字文が交互に繰り返えされている。口径21.2cm・底径6.9cm・高さ26.3cmである。44・45は、一旦外反した口縁が立ち上がるるもので、b種の中では少ない口縁形態をもつ。44は、縦の2本の沈線による文様帯の分割がみられるもので、43と同様、縦位、横位のハの字文が交互に繰り返えされている。口径は24.3cmである。45は、高坏9と同様の調整具による押捺文を口縁部に持っている。貼付帯上にそれをもつ46は、文様帯の中に2個の粘土の貼瘤がみられる。

これまで記述してきたII類には、a種とb種で、文様構成上の差異が認められる。a種は、37の腰が横位の2本の沈線によって文様帯を分割するように、1つの文様単位（右下がりの刻線・左下がりの刻線・鋸歯文など）を、横にめぐらした文様の帯を、上下に積み重ねていく文様構成のものが多い。これに対し、b種は、貼付帯によって区画された文様帯を、縦位の沈線によって分割し、その分割した空

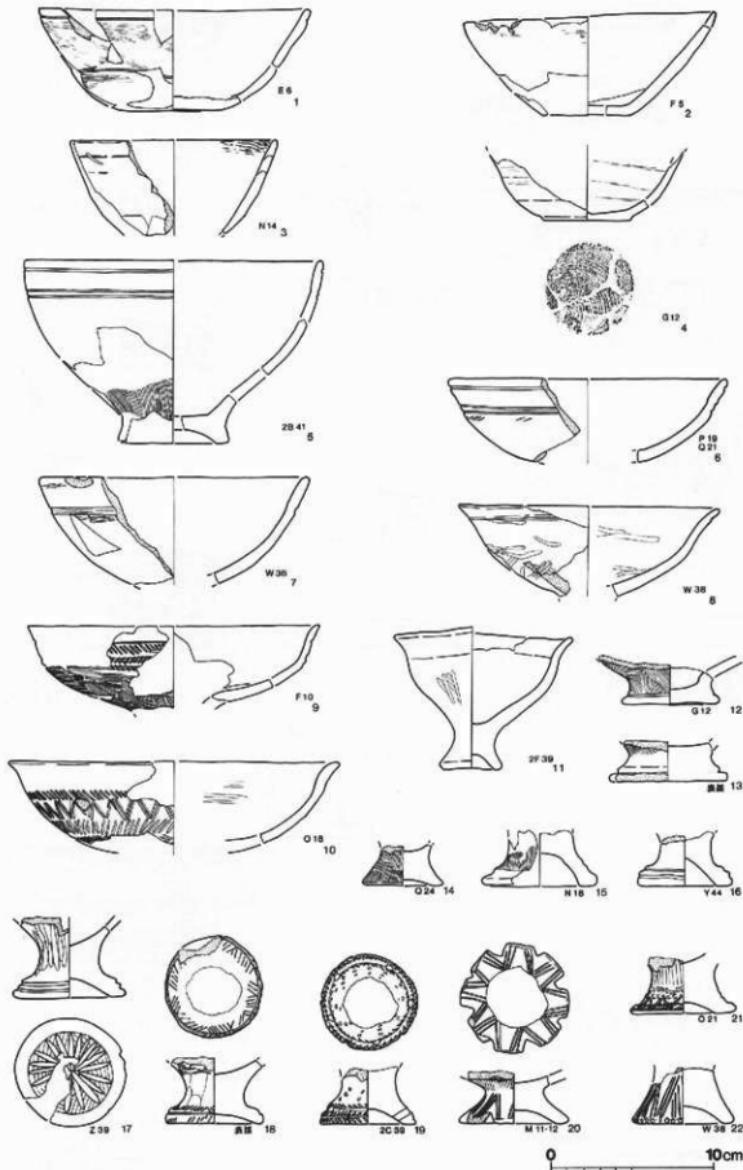


図83 III層出土土器(1)

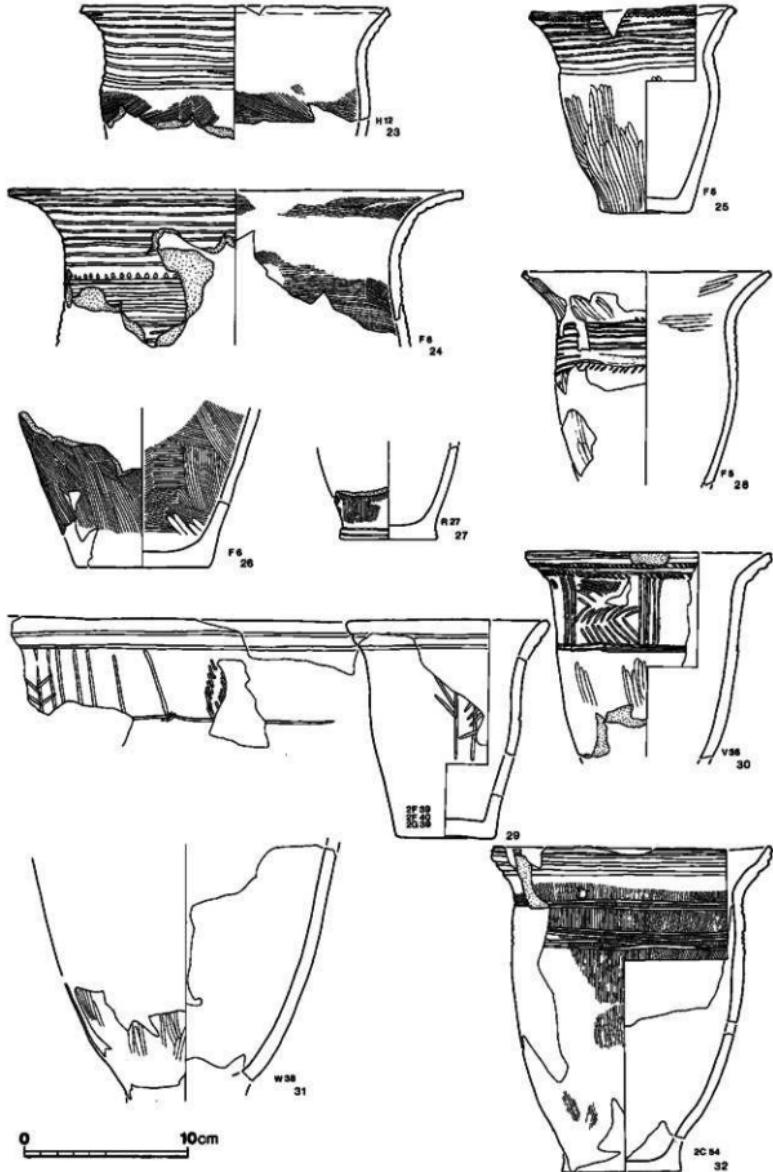


図84 III層出土土器(2)

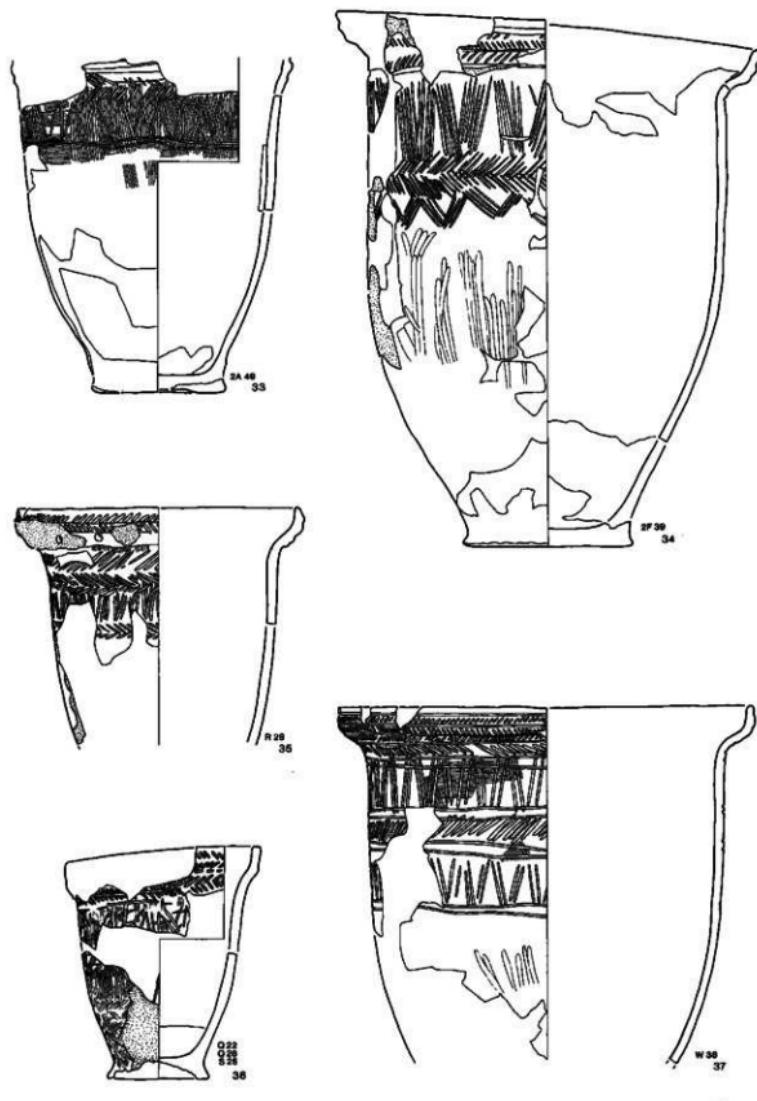


図85 Ⅲ層出土土器(3)

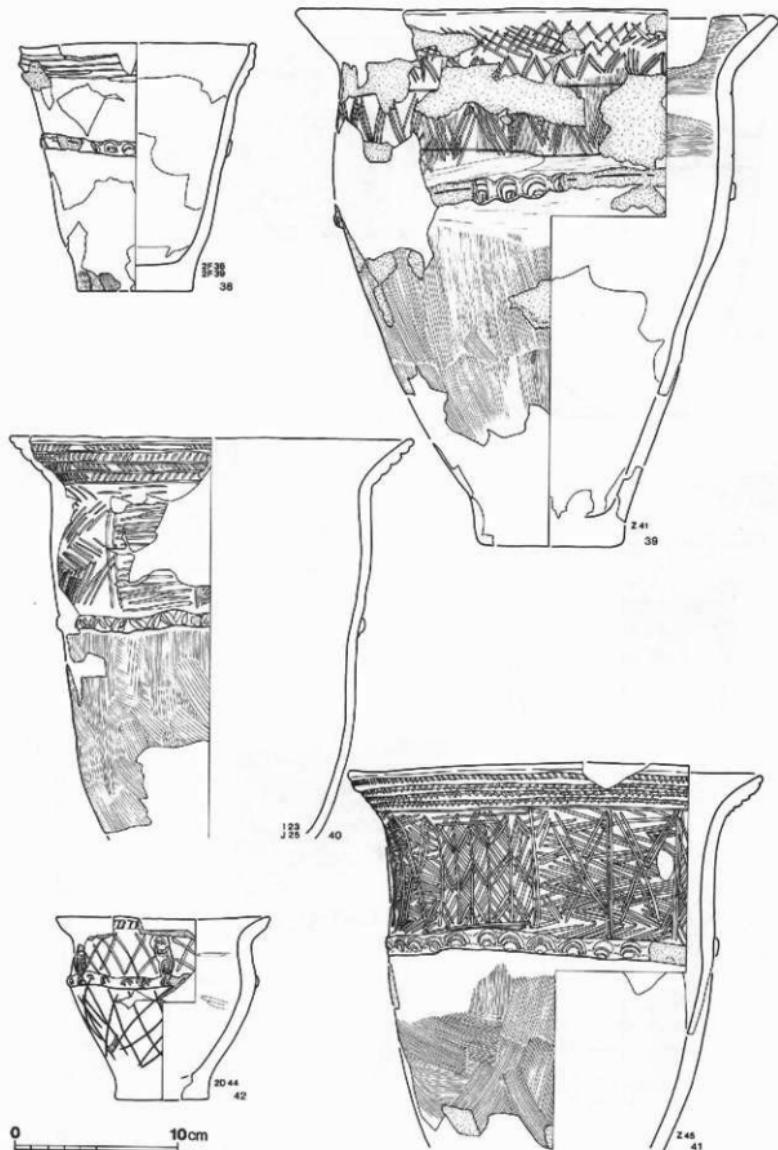


图86 III层出土土器(4)

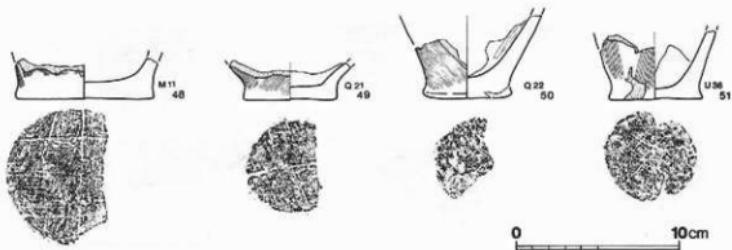
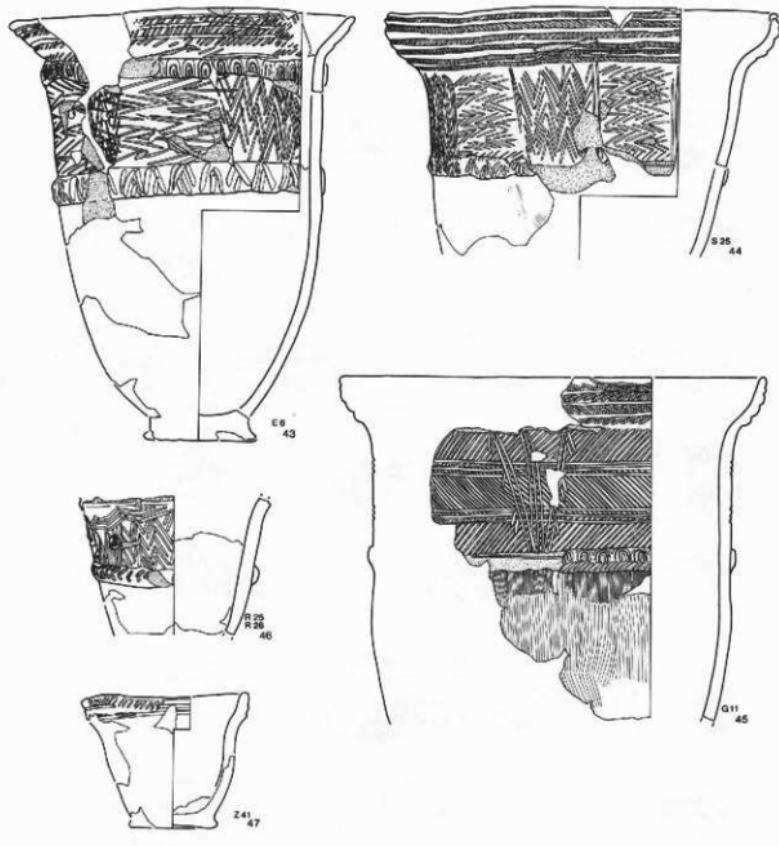


図87 III層出土土器(5)

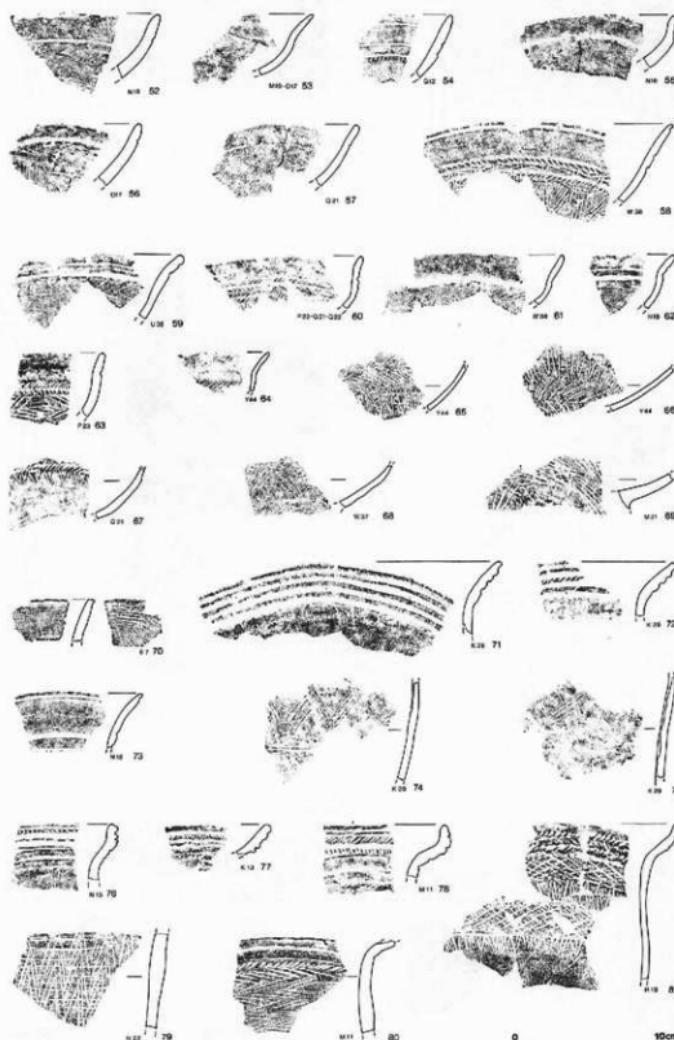


图88 III层出土土器(6)

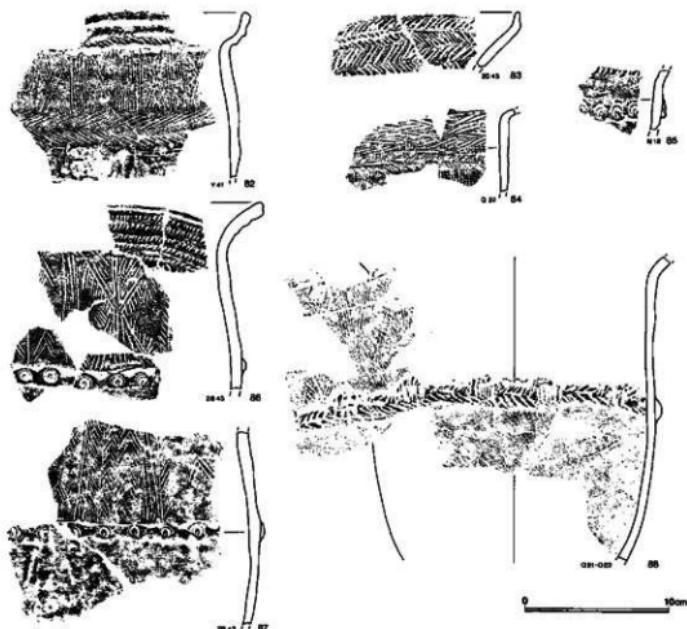


図89 III層出土土器(7)

間を、2種の構成の異った文様で交互に繰り返されるものが多いのである。口縁形態が、a種には、一旦外反した口縁が立ち上がるものが多く、b種には、直線的に外反するものが多いという点も指摘できる。

鉢(47)：この小型の鉢は、39の甕と併せて出土したものである。口縁には、2本の横位の沈線があり、また一部分を限って、左下がりの短刻線が入る。肩部は、縦方向にみがかれている。

この他、甕や壺の底面に、笹の葉の圧痕をもつもの(48・49)や、十字の沈線をもつもの(50)、何本もの沈線を交叉させているもの(51)があった。
(田中 哲郎)

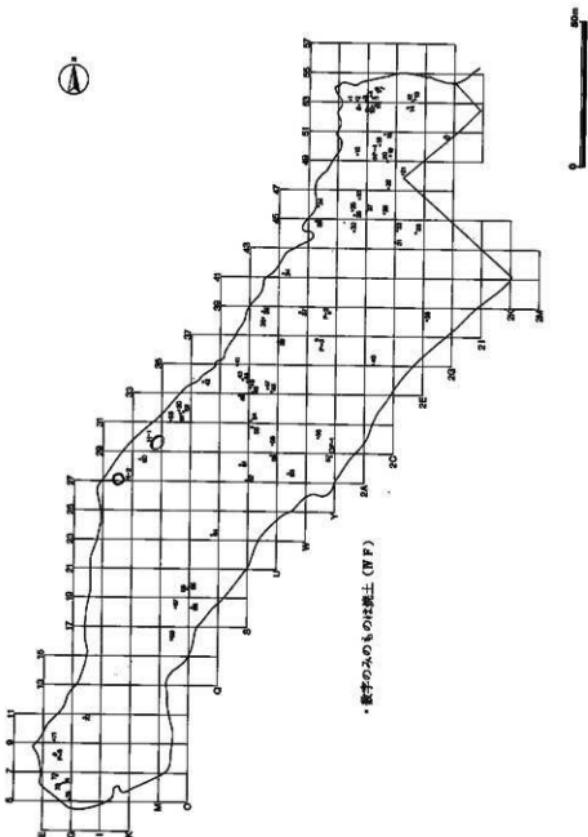


図90 IV層造構位置図

3 IV層の遺構と遺物

i) 遺構

(1) 土壙

IVP-1 (図92・図版71)

この土壙は、壙底からの底部欠損土器の出土、覆土の落ち込みからみて、墓と考えられる。

当遺構は、遺跡の主体を占める河岸段丘面からニオイ沢に傾斜する谷壁斜面中にあるわずかな平坦部に位置し、標高44mほどにある。X-29区に位置する。平面形は橢円形で、北西側の壙口部が幅広くなっている。壁は壙底部より緩やかに立ちあがる。長軸方向はN-58°-Wである。規模は、壙口部で長軸1.67m・短軸1.44m、壙底部で長軸1.08m・短軸0.77mをはかる。深さは54cmほどであり、VI層の砂利層を壙底としている。

覆土の状況は、土壙の窪みにたまたま腐植土の可能性が強い3層以上が自然堆積のもの、4層以下が土壙の埋土と考えられる。5+9層は掘りあげたVI層のものと考えられる小礫を多く含む黒色土で、後者が固くしまっている。その他の埋土は茶褐色を基調とする色調を呈するものである。窪みにたまる2層は、Ta-c火山灰とみられる淡黄灰色の火山灰である。この火山灰が土壙周辺の窪みに点々と堆積する状況からみて、火山灰堆積後ニオイ沢の氾濫などの要因によって削平された可能性がある。また、覆土中からは、土壙の北西側に9個の礫が流れ込むようなかたちで検出された。

東北側の壙底部から土器が1個出土している。口縁を壁に向けており、底部は欠損していた。この底部は、土壙の東側に4mほど離れた地点にやまとまって出土している。この土器は深鉢形土器で、円筒上層式にその系譜が求められる繩文中期後半のものと思われる。口径19.2cm、底径11.1cm、高さ22.0cmで、器厚0.7から0.9cmである。口縁形態は平縁で、断面が三角形に肥厚している。また、口縁には全局で推定4個の小突起が付加されている。全体の形態は、ゆるやかに外反する口縁部が、頸部でいったんすぼまり、ふたたび胴上部がふくらんでいる。最大胴径は15.5cmである。底部は平底で、外側にやや張り出している。器面には、結束第一種のある原体を利用した単節の斜行繩文が一面に施され、内面は滑らかに調整されている。色調はやや赤味を帯びた黄褐色を呈し、胎土には砂粒のはか鐵繊の混入も認められた。土器の他、石鐵の茎部、フレイクチップが数点、覆土中より出土しているが、本土壤に伴うとはみられない。

(田中 哲郎)

IVP-2 (図92、図版71)

X-38区において、III層調査を終えた時点で、IV層に黑色土の溜りがみられた。半載し観察したところ、周辺にある自然營力によるくぼみとは違い、人為的な土壙と見えられた。平面形は、径71×63cmの円形である。断面は、下ぶくれ気味で、壙底は丸味をもつ。覆土はすべて自然堆積と思われる。遺物はない。

(三浦 正人)

IVP-3 (図92、図版71)

W-36区でも、IVP-2と同様に、黑色土の溜りがみられた。これも半載観察によって、人為的土壙と見えられた。平面形は径80cmの真円形に近く、断面形も、壙口部の広がりを除けば、半円形を呈す。覆土は、自然堆積と思われる。遺物はないが、壙底部に焼土層の広がりがあり、これは意識的に入れられたものと考える。この焼土からは、骨片等は何も検出されていない。

IVP-2+3ともに覆土に入っている淡黄灰色の火山灰は、Ta-c火山灰と思われ、降下・流れ込みいずれにしても、土壙の時期決定の一応の目安となろう。

(三浦 正人)

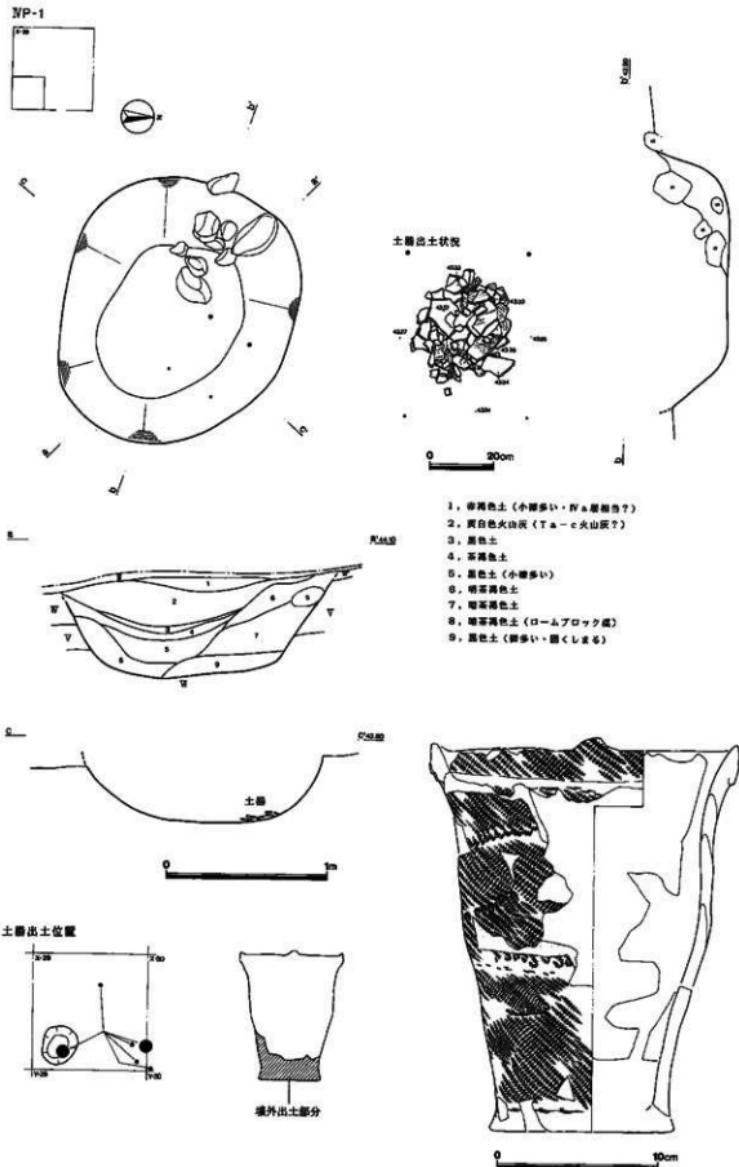


図91 IV P-1・出土遺物

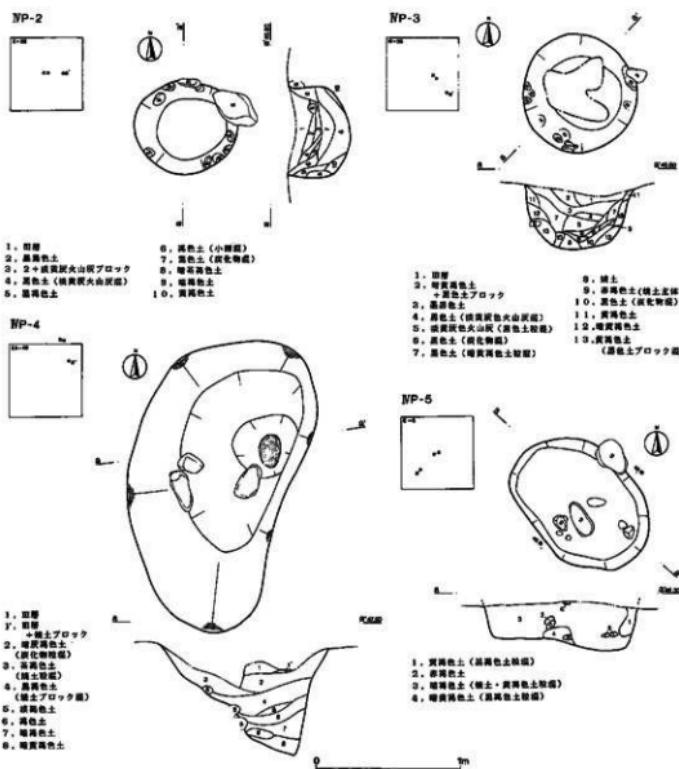


図92 NP-2~5

IVP-4 (図92)

Z-2 A-49区に存在する。周辺には、自然營力による、水抜け穴のような不整形のくぼみが、多くみられるが、この土壤は、その中にあって、覆堆積状況等から、人為的なものと考えられた。平面形は、一部くびれをもつ長円形で、長軸をほぼ南一北に向いている。長径2.03m 短径1.09mをはかる。壁面は、西側が緩やかなスロープ状を呈してそのまま壇底を形成し、東壁は急にせり上がる。壇口部に擦文土器片、壇口、壇央部に焼土混入土があるが、これらは、土壤が埋まる過程のもので、直接の関係はない。遺物は検出されていない。

(三浦 正人)

IVP-5 (図92、図版71)

58年度に調査されたもので、E-8区にある。平面形は橢円を呈し、長軸を北西一南東に向ける。長径1.05m、短径0.74mをはかる。切り立った壁と、南東部がやや低くなる平坦な底面からなる。覆土中から、最大で20cmの大の礫が数点あり、それに混じって、縄文時代前期の土器や黒曜石フレイクが検出されている。これらとこの土壤の関係は不明である。

(三浦 正人)

(2) 住居跡

IVH-1 (図 93・94、表 30、図版 72)

段丘の沙流川向き縁辺、L-29・30 区に存在する。南東側の半分以上を削取されているため、平面形は把握できないが、多角形の様相を呈する円形と、考えている。掘り込みは浅く、最も深い段丘縁辺部寄りでも、25 cm ほどの壁しかない。床面は南側にゆるいくぼみを持つが大体は平坦で固くしまり、17 層とした炭化物層が広がっていた。柱穴は、外周部で 2 本検出した。西側壁のやや乱れた部分は、入口かもしれない。焼土は 3 カ所確認しているが、いずれも壁際にあり炉とは考えにくい。

遺物は、土器は外周部出土 (1 は覆土)、石器は 10・12・14・15 が床面、他は外周部・覆土の出土である。土器は、第 IV 群、縄文時代後期初頭の余市式系のものである。1 にはやや太めの繩文が見られる。2 は口唇部片で、口唇はほぼ平坦につくられている。3・4 には横位の貼付帯があり、5~7 には羽状繩文が施されている。8~9 は、かえしの明瞭でない有茎石斧である。10・11 は左右非対称の石槍で、片側刃に明瞭なかえしを有す。11 のもう一方の側刃は緩やかに湾曲する。12 は横長剣片が素材で、背面左側刃上半部に調整を施し、腹面右側刃も加工している。13・14 は擦切手法を用いていない磨製石斧で、両者とも刃部を欠損している。15 は緑色の硬質砂岩製、16 は石斧としては珍しい礫岩製である。15 は、両面にすり面が認められる石皿、片面の中央部は、くぼんでいる。土器・石器とも分類は、包含層の項を参照されたい。

(三浦 正人)

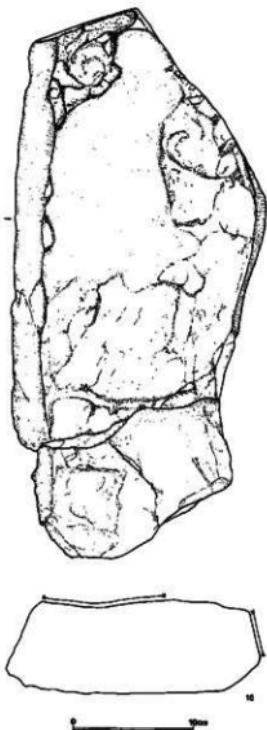


図93 IVH-1・出土遺物(1)

土器

表30 IVH-1 掘出遺物一覧

図番	部位名	出土位置	分類	特色等	図番	部位名	出土位置	分類	特色等
94-1	胴 部	覆 土	IV群	裏面剥離	94-5	土器胴 部	外 周	IV群	羽状繩文
2	口 縁 部	外 周	IV	裏面剥離・口唇平坦	6	胴 部	外 周	IV	羽状繩文
3	胴 部	外 周	IV	貼付帯が連結して重なる	7	胴 部	外 周	IV	羽状繩文
4	胴 部	外 周	IV	横位の貼付帯					

石器

図番	器種名	出土位置	分類	特 色 等	長 cm	幅 cm	厚 cm	重 g	石 質
94-8	石 斧	外 周	IV	有茎石斧・先端部欠損	(2.0)	1.1	0.3	0.6	Obs.
9	石 斧	外 周	IV	有茎石斧・先端部・中間部欠損	(1.5)	1.6	0.4	1.0	Obs.
10	石 槍	床 面	C	片側刃にかえしを有する。15 の石皿上にあり	4.4	1.9	0.6	3.8	Obs.
11	石 槍	覆 土	C	片側刃にだけかえしを有する。	4.5	2.4	0.6	6.7	Obs.
12	加工痕のある剣片	床 面	-	横長剣片を素材とする。	3.5	2.1	0.4	3.1	Obs.
13	石 斧	外 周	-	磨製石斧・刃部欠損	(11.5)	4.9	2.6	231	Gr-Sa.
14	石 斧	床 面	-	磨製石斧・胴部断面卵型・刃部欠損	(15.7)	5.3	3.5	491	Con.
93-15	石 皿	床 面	-	表面裏面にすり面あり。2 点に分割	44.8	20.9	8.0	9,500	Sa.

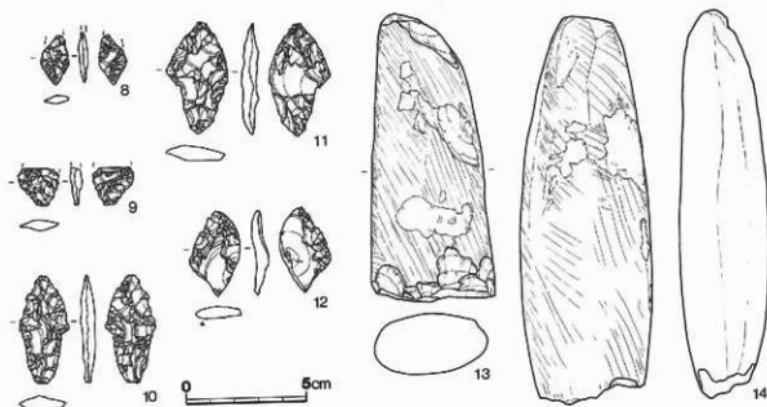
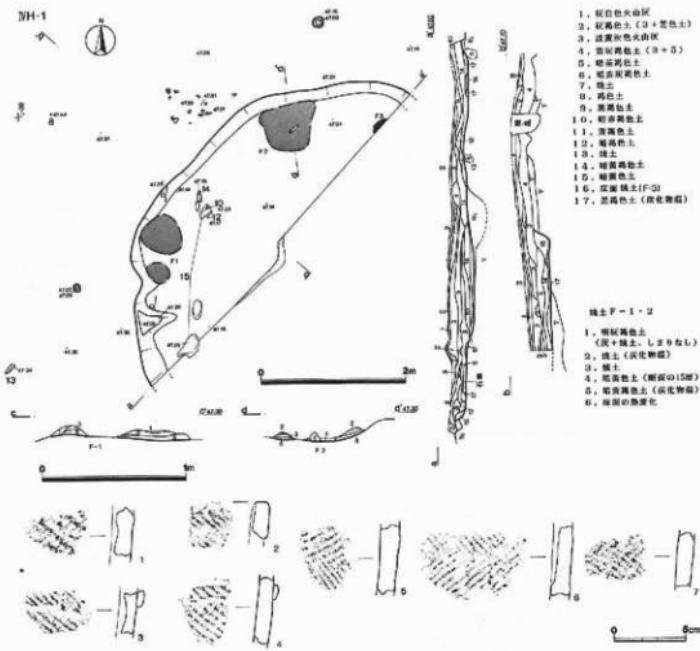


図94 IV H-1・出土遺物(2)

NH-2

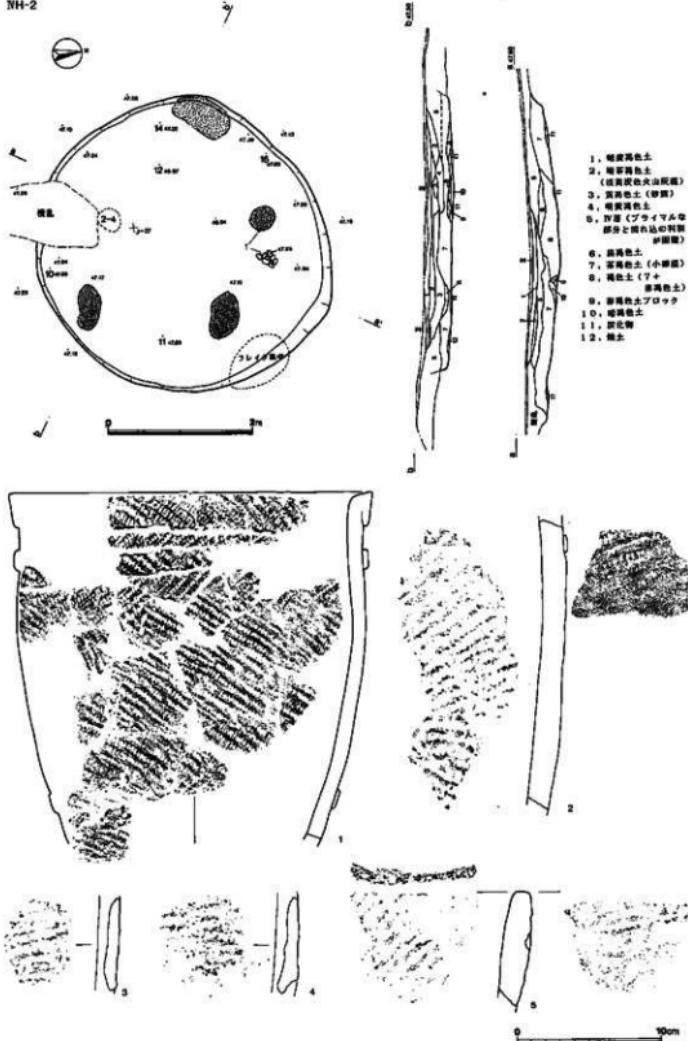


図95 NH-2・出土遺物(1)

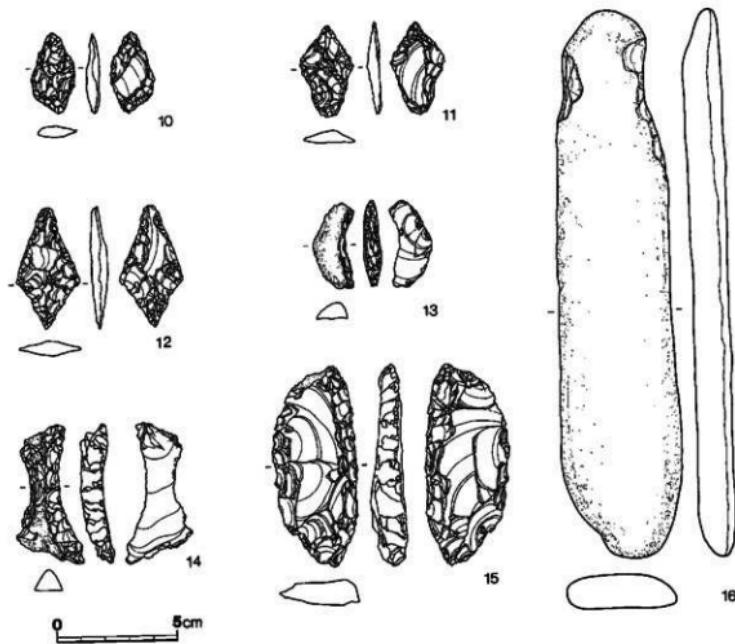


図96 IVH-2・出土遺物(2)

IVH-2 (図95・96、表31、図版72)

段丘の沙流川に面した縁辺、IVH-1から13mほど南西にIVH-2がある。調査区はI・J-26-27区である。平面形は、ほぼ円形で、北西・北東部にやや角張った部分がある。規模は、最大径4.2m、最小径3.8mをはかる。掘り込み面が判然とせず、壁の確認にも手こずったが、明瞭に把えた部分で、壁高20cm弱という浅い住居跡である。南西側の壁は一部、風倒木による擾乱をうけている。床面は、中央部ほど低くなる皿状を呈し、固くしまった部分も、あまりない。數カ所に炭化物の広がりがみられる。柱穴・入口については確認できなかった。焼土は、床面に3カ所あるが、壁寄りで、しかも薄く、炉とは考えられない。東壁の黒曜石フレイクの集中は、住居構築以前のもので、壁面にチップが多量に見られる。なお、覆土中にみられる淡黄灰色火山灰は、Ta-c火山灰と思われ、IVH-2は、これ以前の住居であるといえる。

遺物は、1~4 の土器と 10~12・14・15 の石器が床面、他は覆土の出土である。1 は、底部を欠失した深鉢形土器の破片で、全周約 1/2 程度が接合している。口縁部肥厚帯と、その直下および胴下半をめぐる貼付帯が特徴的である。円形刺突文はみられない。2~7 は、同一個体と思われる。2~4 は風倒木痕脇の床面から、5~7 は覆土から出土している。やや厚手で、口縁部には縄端による刺突が加えられ、口唇上や口縁内側、底面にも縄文が施されている。8~9 は、羽状縄文のある胴部片である。IVH-1 の土器と同様に、いずれも第 IV 群、縄文時代後期初頭の余市式系の土器である。

10 は左右非対称の有茎石鎧である。11 は最大幅（かえしの部分）が、中央部より上部にある石鎧。12 は、基部が三角形をなす、かえしのある石槍。13 は、内湾する刃部をもつ削器で、背面に原石面を有す。14 も背面に原石面を残しており、両側縁に内湾する刃部をもつ削器である。断面は三角形を呈す。15 も削器で、背面右側辺に急峻な加工を施し、スクレイバーエッジを作出している。腹面にも刃部に沿って調整が施されている。16 は、上端部両側辺に敲打による抉りをもつ。右側縁を刃部として使用した石器かもしれない。この部分は反対側より鋭い。

IVH-1~2 とも、出土する土器は余市式系で、石器をふくめて考えると両住居が営まれていたのは、縄文時代後期初頭とみることができよう。

(三浦 正人)

表31 IVH-2 掘遺物一覧

土器	図番	部位名	出土位置	分類	特色等	図番	部位名	出土位置	分類	特色等
95-1	口縁部	床 面	IV群	推定口徑 25.0cm		96-6	胴 部	覆 土	IV群	
2	胴 部	床 面	IV	やや厚手、刃厚 6~1.8cm		7	底 部	覆 土	IV	平底、底径は推定 11.5cm
3	胴 部	床 面	IV	裏面刻離		8	胴 部	覆 土	IV	羽状縄文・裏面刻離
4	胴 部	床 面	IV	裏面刻離		9	胴 部	覆 土	IV	羽状縄文・裏面刻離
5	口縁部	覆 土	IV	縄端による刺突文						

石器

石器	図番	器種名	出土位置	分類	特 色 等	長 cm	幅 cm	厚 cm	重 g	石質
96-10	石	鎧	床 面	IV	有茎石鎧	3.3	1.8	0.6	3.0	Obs.
11	石	鎧	床 面	VI		3.7	2.2	0.5	2.8	Obs.
12	石	槍	床 面	C	基部三角形・かえしあり	4.8	2.5	0.6	5.4	Obs.
13	削 器	器	覆 土	—	背面に原石面を残す。刃部内湾	3.5	1.7	0.7	3.6	Obs.
14	削 器	器	床 面	—	背面に原石面を残す。両側刃刃部内湾	5.6	2.7	0.8	9.4	Obs.
15	削 器	器	床 面	—		8.1	3.3	1.2	34.4	Obs.
16	敲 打 直 を も つ 縫	器	覆 土	—	上端部に敲打による抉りあり。	22.2	4.8	1.4	265	Sa.

(3) 焼土 (図 97、表 32)

IV 層の各層 (IVa~IVd 層) から、75 カ所の焼土を検出した。直に火が焚かれたものの他、くぼみに流れ込んだように観察できるものもあるが、極端に乱れのあるものや、自然層的なものを除いて、すべてを表に掲載した。図示したものはその代表である。59~62 は、IVd 層のもので、周辺の遺物出土状況から、縄文早期のものと考えられる。43~49 のある S-T-33 区周辺は、縄文中期の土器・石器が豊富で、この焼土も当該期のものといえよう。ただここでは、風倒木痕や、礫・水等による地面の乱れが多く、住居跡は確認できない。

(三浦 正人)

表32 IV層焼土一覧

IV層焼土 (IVF-) ①

No.	グリッド	中央レベル m	長径・短径・厚 cm	備 考
1	Y-53	-	55・45・-	
2	Z-53	46.74	12・・5	
3	Z-53	47.68	81・55・8	図掲載
4	2A-53	-	80・26・-	
5	2A-53	-	68・42・-	
6	2A-53	47.66	58・42・3	
7	2A-53	47.51	83・72・9	
8	Z-52	47.89	74・50・9	
9	Z-52 2A	47.63	40・32・-	
10	2A-52	-	45・42・-	
11	2A-52	47.46	52・48・-	
12	2D-53	47.22	28・17・5	
13	2D-53	47.16	60・55・10	図掲載
14	2C-52	-	62・42・-	
15	2B-50	-	60・20・-	
16	2A-50	-	65・40・	
17	2F-50	46.86	60・20・17	
18	Z-49	-	- - -	
19	2B-49	-	- - -	
20	2B-49	-	- - -	
21	2C-48	-	- - -	
22	2B-47	-	- - -	
23	Z-46	46.63	20・・・-	
24	W-45	47.21	40・40・12	
25	Z-45	46.86	40・20・9	
26	Z-45	46.73	30・25・6	
27	Z-45 2A	46.89	45・25・4	
28	2B-45	46.35	10・10・5	
29	W-44	47.34	35・25・15	
30	Z-44	46.71	65・35・20	
31	2C-43	-	- - -	
32	2C-44	-	35・37・-	
33	2D-44	-	110・70・-	
34	U-41	46.84	20・15・6	
35	S-38	47.00	25・20・4	
36	S-38	47.22	25・20・5	
37	V-38	46.64	70・60・5	
38	2E-38	45.78	61・25・6	図掲載

IV層焼土 (IVF-) ②

No.	グリッド	中央レベル m	長径・短径・厚 cm	備 考
39	T U-36	46.89	60・50・13	
40	2A-35	45.64	40・25・	
41	R-34	46.62	140・60・12	図掲載
42	O-33	47.14	90・40・10	
43	R-33	46.87	30・20・18	図掲載
44	R-33	46.67	65・50・18	図掲載
45	S-33	-	55・20・-	43~49周辺に1箇 文中期の土器多い、
46	S-33	-	75・35・-	
47	T-33	46.21	55・30・7	図掲載
48	T-33	46.08	80・70・15	図掲載
49	R-32	46.70	50・50・9	図掲載
50	N-31	47.17	40・35・5	
51	N-31	47.16	35・30・8	
52	N-31	47.13	40・30・7	
53	M-31	47.34	60・45・9	
54	S-31	46.20	90・60・10	図掲載
55	S-30	46.08	70・46・5	図掲載
56	S-30 30	44.33	30・25・2	
57	X-30	43.81	40・30・-	
58	T-29	46.04	- - - 14	
59	T-28	45.84	- - - 22	縄文早期
60	K-28	47.43	75・40・8	
61	R-28	45.48	70・60・8	
62	R-27	45.51	45・18・5	図掲載・縄文早期
63	U-27	46.64	20・20・-	
64	P-23	46.47	30・25・14	図掲載
65	N O-19	46.55	50・45・-	
66	N-19	46.64	40・40・12	
67	N-18	46.92	50・30・-	
68	O-18	46.40	60・45・-	
69	M-16	46.96	110・55・11	
70	G-10	46.74	47・25・14	図掲載
71	E-9	46.77	83・58・12	図掲載
72	E F-6	46.73	72・55・11	
73	F-6	46.54	78・60・12	
74	F-6	46.81	32・22・4	図掲載
75	G-5	46.52	180・85・26	

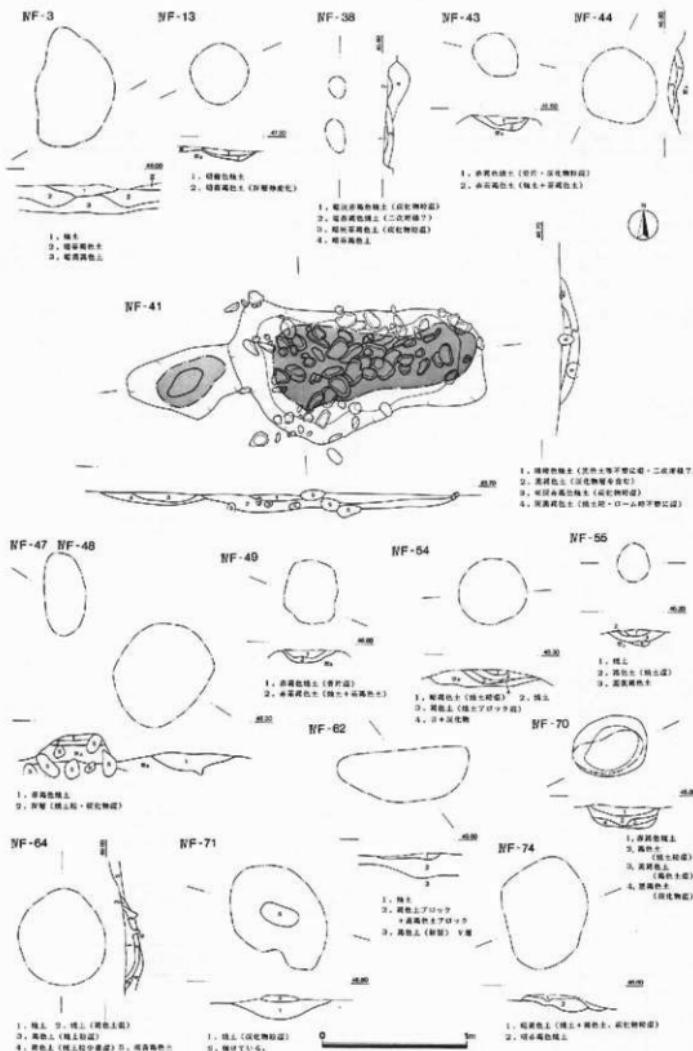


图97 IV 层 烧 土

ii) 包含層出土遺物

(1) 土器

IV層出土の土器は、縄文時代早期から統縄文時代まで、各時期のものがみられた。縄文早期の土器をI群とし、順に統縄文期のVI群までに分け、以下に説明する。

IV層出土の土器は、総点数約14,300点、内訳はI群が29.4%、II群1.8%、III群44.8%、IV群19.8%、V群3.6%、VI群0.6%で、縄文中期の土器が圧倒的に多く、次いで早期、後期の順であった。時期別の出土点数は各区毎に集計し、I~10、11~100、101以上の3段階に分けて、図98、99に示した。

I群土器（図98、100、104、105、図版74、77、78）

縄文早期の土器は、調査区のほぼ全域から見出されたが、第III章に触れたとおり、Q-W-24~32区にかけてやや厚く堆積したIVd層中に、特に多量に包含されていた。復元できたもの、口径、底径が推定できるほどに接合できたものの多くが、この地区から得られている。

I群土器は以下のように細分でき、一概にはいえないが、色調は赤褐色または黄白色のものが多く、全般に薄手で、堅敏に焼成されている。胎土には砂粒を含み、纖維の混入がみられる例もある。

a類（図104-1）表裏に条痕の横走があり、絡条体压痕文が器面や口唇部に施されている。条痕を有することから、やや古手の印象が強く、東鉄路III式のグループに比定できよう。

b類（図100-1・2、104-2~30） 繩文、半置半転による短縄文、絡条体压痕文、組紐压痕文など回転手法によらない文様が多用される一群。口唇部、胴部に貼付帯を有する例もある。

図104-2~10は、横位にめぐる水平、波状の縊文文と、短縄文または縄端部が繰り返し施されるものである。同様の文様構成は、組紐压痕文を有するものにもみられる（図100-1）。

11~20は、絡条体压痕文を有するものである。20のように縦位の短縄文が組み合わさり、14には裏面口唇部に短縄文がみられる。また、19には羽状の縄文が施されている。

21~30は組紐压痕文を横位あるいは斜位に施しており、縄端が押捺されている例が多い。

図100-2は、短縄文のみによって施され、V字状とU字状に貼付帯が張り巡らされている。

C類（図100-3、104-105-31~48） 縄文、羽状縄文が施文されるもの。貼付帯をもつものと、ないものとがある。図104-31~33は、貼付帯をもたず、口唇部はほぼ平坦で、口唇上に縄の押捺が施される例が多い。地文に、短縄文、縄端压痕などが加えられたりしている。貼付帯を有するものは、いずれも縄文の施文後に貼付帯が付加され、貼付帯上には短縄文、縄端の押捺がみられる。貼付帯の幅は3~15mmであり、最も多いのは図100-3を代表例とする5~8mm程のものである。

図105-49~54はb・c類の底部であり、「く」の字状に張り出す例が多い。最下部には指頭による押圧が加えられる例がある（51）。b・c類は、いわゆるコッタロ式に比定されよう。

d類（図105-55~61）幅2mm程の細い貼付帯をめぐらせたのち、短縄文の圧痕が器面に施されており、底部は張り出さない。いわゆる中茶路式のグループである。

e類（図105-62~66）撚糸文に特徴づけられる土器群で、丸底になる例が多い。62は、1段RとLの撚りの異なる撚糸を並列させた撚糸文で、口唇部を横環する貼付帯がみられる。これらは、東鉄路IV式のグループに含まれよう。

土製品（図105-67~73）67~71は、b・c類の土器片を利用して円盤状土製品。72、73は同一個体で、73は下端部に構造を有する。ミニチュア土器の底部付近の破片と思われる。（寺崎 康史）

II群土器（図98、106、図版74、78）

縄文尖底土器群に包括される、いわゆる静内中野式のグループである。地区的には、段丘の南端部、特にE~F~G~H~I区を中心とする、南西端に分布が偏在していた。色調は黄赤褐色もしくは黄褐色を

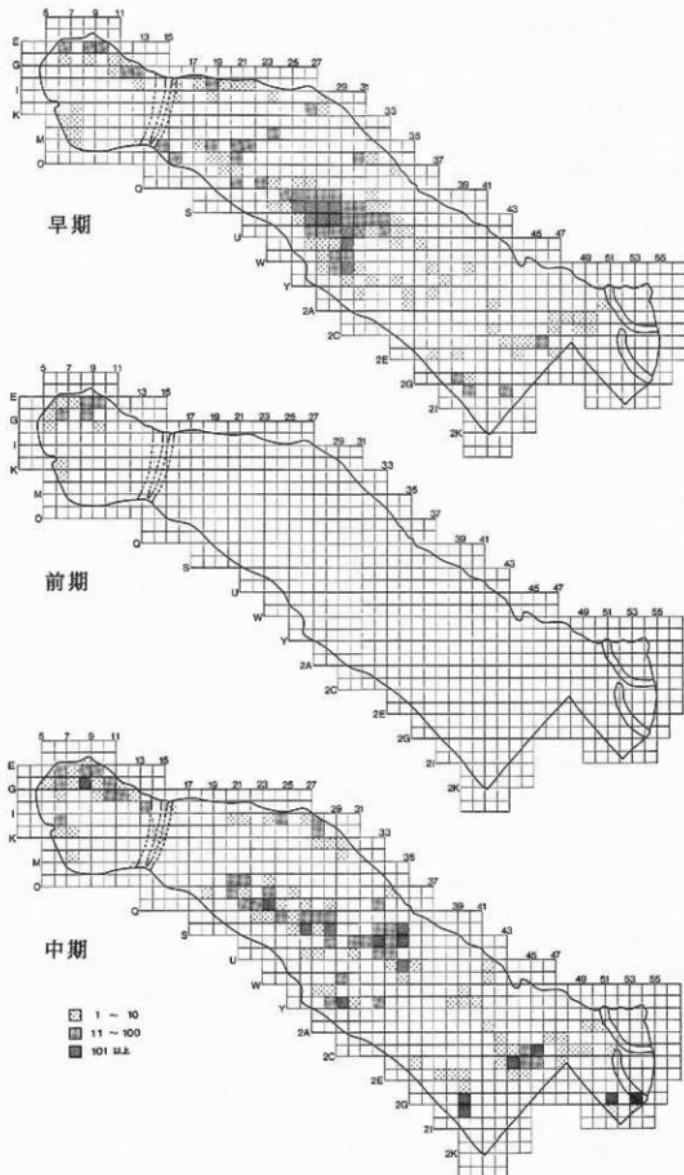


图98 IV层出土土器分布图（早・前・中期）

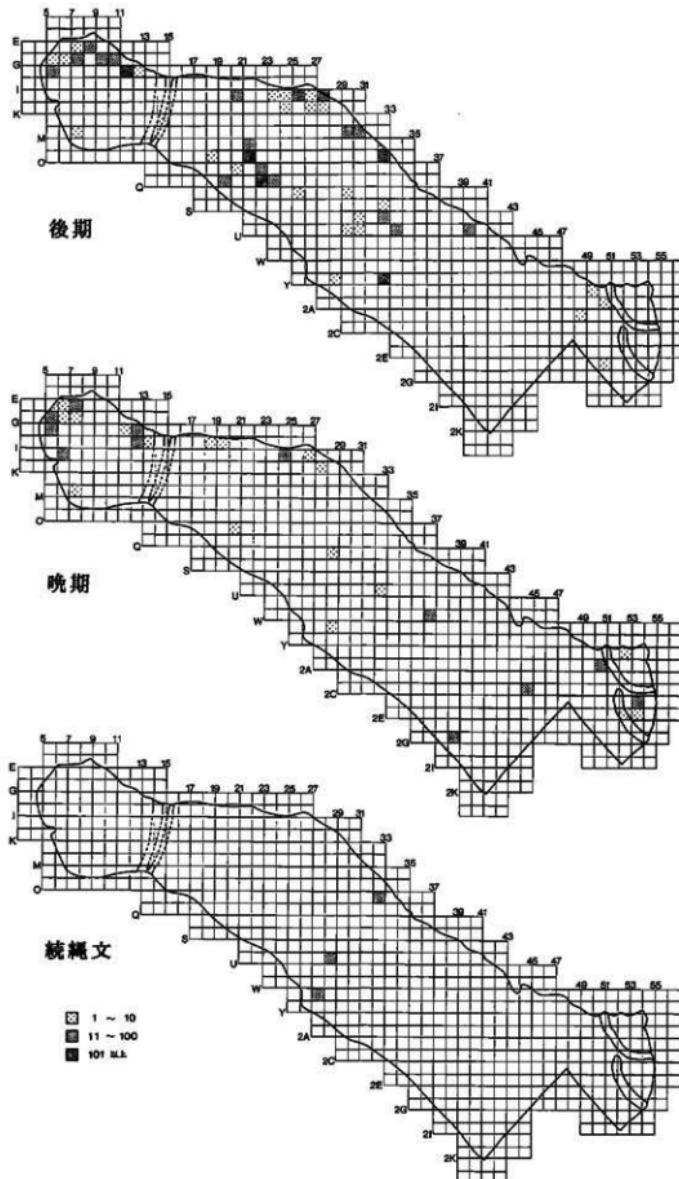


図99 IV層出土土器分布図（後・晩期・統繩文）

呈し、胎土に纖維を含むものが多い。図 106-79 などのように、特別に纖維の混入が多い場合を除けば、焼成は堅敏である。一般にやや厚手だが、74~76 にみられるように、口辺へ向うにつれて器厚がやや薄くなる傾向が強いようだ。口唇は、平らに調整された例が多く、底は、81~84 から窪われるよう、丸底となる。器面には、通常、太めの原体による、単節の斜行縄文が施されている。

III群土器 (図 98、100~102、106~108、図版74~76、79)

縄文中期後半の土器群で、a ~ e の 5 類に分けて説明するが、必ずしも明瞭に弁別できたわけではない。III群土器の分布は全域に及び、局所的に集中する箇所も少なからず認められた。

a 類 (図 100-4~6、106-85~88、107-89~94) おおまかにみて、円筒上層c 式もしくはその前後の土器群との類縁が指摘できるものを a 類とする。深鉢形で、口縁部には、断面三角状の肥厚帯がめぐり、4 個の小突起が付加されるのが一般的である。色調は、黄褐色から黄赤褐色で、堅敏に焼成され、裏面が滑沢に調整された例が多い。地文は、通例、結束第一種のある単節の羽状縄文で、口縁部文様帶には、地文が殆どみられない。a 類には、貼付文のあるものと、ないものがある。

図 100-4 には、口縁に並ぶ貼付文のほか、C 字状の絡条体圧痕文と撲糸文とが重ねられている。106-86、87 における刺突列は、平笠や半截竹管によるものである。貼付文には撲糸文が加えられている。

図 100-5 には貼付文ではなく、平笠による刺突文列と、束になって横走する細い沈線がみられる。106-85、88 には、C 字上の絡条体圧痕文と撲糸文がある。89~94 は同一個体で、C 字状の絡条体圧痕文と束状の横走沈線がみられ、地文の縄文が消えずに残されている。

b 類 (図 101-7~12、102-13、107-95~106、108-107) 円筒上層d 式もしくはその前後の土器群との類縁が窪われるもので、円筒上層式の系統をより濃く認められるものと、そうではないものとが混在している。器形は、a 類とはほぼ同様の深鉢形だが、口縁部の外反がやや弱く、直立ぎみとなる。口縁部肥厚帯も、断面がはっきり三角形を呈するものは少なくなり、肥厚帯のない例も稀ではない。色調、焼成、裏面調整などは、殆ど a 類と変わらない。地文は、やはり結束第一種のある単節の羽状縄文が多いが、施文がやや粗略となる傾向が見受けられる。斜行縄文が施された例も少なくない。

図 101-7~9 には、C 字状の絡条体圧痕文や、貼付文を刻む絡条体圧痕文があり、107-95~104 では、口唇や貼付文上に、絡条体や縄などによる刻みが加えられた例が多い。104 には平笠による刺突文列がみられ、108-107 の原体は撲糸が戻りぎみである。104-13 の口縁部肥厚帯には、縄文が施されている。

図 101-10~12 は、半截竹管による刺突文列が多用されたもので、10 には、小さな把手がみられる。

c 類 (図 102-14、15) いわゆる天神山式のグループに含めうると思われる土器で、沈線文がみられる。器形、色調、焼成、裏面調整などは b 類とはほぼ同様で、時間的にも、ごく近い関係にあると思われる。図 102-14 では、突起部やその直下、口縁部肥厚帯などに粘土紐を貼付し、そこに半截竹管による刺突を密に加えている。15 では、口辺や貼付文上に、絡条体圧痕文による刻みがみられる。

d 類 (図 102-16) いわゆる柏木川式のグループに比定できる土器である。図 102-16 は、やや太めの貼付文がみられ、文様帶の上下に、横位にめぐる、半截竹管による押し引き文が配されている。

e 類 (図 108~108) いわゆる北筒式のグループで、検出例は至って少ない。図 108-108 には、押し引き状の刺突文列と、円形刺突文とがめぐり、内面にも、原体を縱方向に回転させた縄文がみられる。

IV群土器 (図 99、102、103、108~110、図版76、79、80)

IV群は縄文後期の土器で、初頭に位置づけられる a 類と、末葉の段階の b 類とがある。量的には、大半が a 類によって占められている。分布は、かなり広範囲に及ぶが、北東部では稀薄であった。

a 類 (図 102-17、18、103-19、108-109~118、109-119~129) 余市式系に含まれるであろう土器群を a 類に一括する。これらは恐らく細分が可能で、単純に同一視すべきではないものが包括さ

れていようが、ここでは分類は試行せず、刺突文をもつもの、纏線文をもつもの、貼付帯をもつものの順に説明する。これは、全く記載の都合上の仕分けであり、型式的な差や、時間的な先後関係を勘案したものではない。a類の土器は、一般に、色調は灰褐色がちな黄褐色を呈し、胎土には砂礫が多く、焼成は堅く、重厚な感じのものが多い。器厚が1.5cmを超える厚手のものも多く、それらの破片では、表裏に剝離したものが少なくない。裏面は、滑沢というほどではない。

刺突文には、丸棒状工具によるものと、纏文によるものとがある。図108～109、110は前者で、器厚が他よりやや薄く、内面や口唇の一部にも纏文がみられる。纏端によって刺突文が加えられた土器は、検出例が多い。厚手で、口縁内側や口唇上にも纏文が施されるのが通例である。113～116などは、特に厚手な例である。108～118、109～119、120は同一個体で、器形が知られる好例で、118では、纏文を施した後、さらに粘土を輪積みしている。109～122では、纏文が斜位、横位、縱位と入れ乱れている。

図102～17は、縱位の纏線文と、丸棒状工具による2個単位の刺突文がみられる例である。109～124には、2本単位の横位の纏線文がある。125には纏線文はないが、124に近い精緻な感じの口縁片である。

貼付帯をもつものは、やや粗大な印象のものと、いわゆる小野観タイプのものがある。図102～18は前者で、器厚は2.5cmにも達し、幅広の無文のバンドを横環させている。103～19、109～126～128は、口縁部肥厚直下の無文部に円形刺突文がめぐるもので、19の器面には、複節の斜行纏文もみられる。

b類(図103～20、図110～130～139)後末葉の堂林式、御殿山式などに含まれる土器をb類にまとめる。口縁部が僅かに内彎し、口縁が小波状につくられた例が多い。底は少し揚底となる。灰色がちな黄褐色を呈し、薄手で、焼成は堅緻、裏面も丁寧に調整されている。内から外へ、突瘤文を加えたものが多く、図110～134では、口縁内側にも纏文が施されている。136、137にみられる沈線文や刺突文列は、編棒状の工具によるものらしい。139の底面には、纏文が施されている。

V群土器(図99、103、110、図版76、80)

纏文晩期の土器で、本遺跡では、末葉のタンネトウル式などに含まれるもののが主体である。色調は灰黄褐色、焼成良好で、裏面も丁寧に調整され、口縁部は内傾する平坦面をなすのが通例である。

図110～140、141では、やや太めの沈線文が、148では、やや細い沈線文がみられる。142では、少しへこんだ無文帶の上下に連続刺突文がめぐり、143には、竹管様工具による突引文が残されている。

図103～21、110～146、147は浅鉢で口唇に纏文や燃糸文があり、147の口辺には不整な押圧がある。

図103～22は、舟形に想定復元された、薄手、無文の土器で、軸先に片口状のつくり出しがある。前後に2個一対の小突起があり、突起下には貫通孔が配されている。図110～149～151は、同一の鉢形土器で、2個一対の貫通孔を結ぶ波状の沈線文などがみられ、口縁および、底部の一部には、赤色顔料が付着している。この鉢形土器と、前段の22とは、他よりやや新しく位置づけられるべきかも知れない。図110～152～154は、V群土器の底部で、底面中央がややふくらみ、纏文が施されている。

VI群土器(図99、103、110、図版76、80)

統纏文期の土器は、a～c類に分けられるが、それぞれ1個体ずつが得られているに過ぎない。

a類(図103～23)恵山式末期の土器で、胴上部に最大径がある。頸部をめぐる、刺突文列を挟む平行沈線文のはか、縱位の纏文原体の痕痕もあるが、意図的に配された文様か否かは不明である。

b類(図110～155、156)後北A式の範疇で捉えうる土器で、帯纏文が横走する胴上部には、爪形状の連続刺突文や2本単位の斜位の沈線文が配され、その下端は短刻線によって区画されている。帯纏文が縱走する胴下半には、縱位の短刻線が重ねられている。

c類(図110～157～160)後北C₂式に含まれるやや小型の鉢型土器である。平底で、口縁が小さく外反し、帯纏文、微隆起線文、列点文が、横位、縱位および弧状に展開されている。(高橋和樹)



圖100 IV層出土土器實測圖(1)

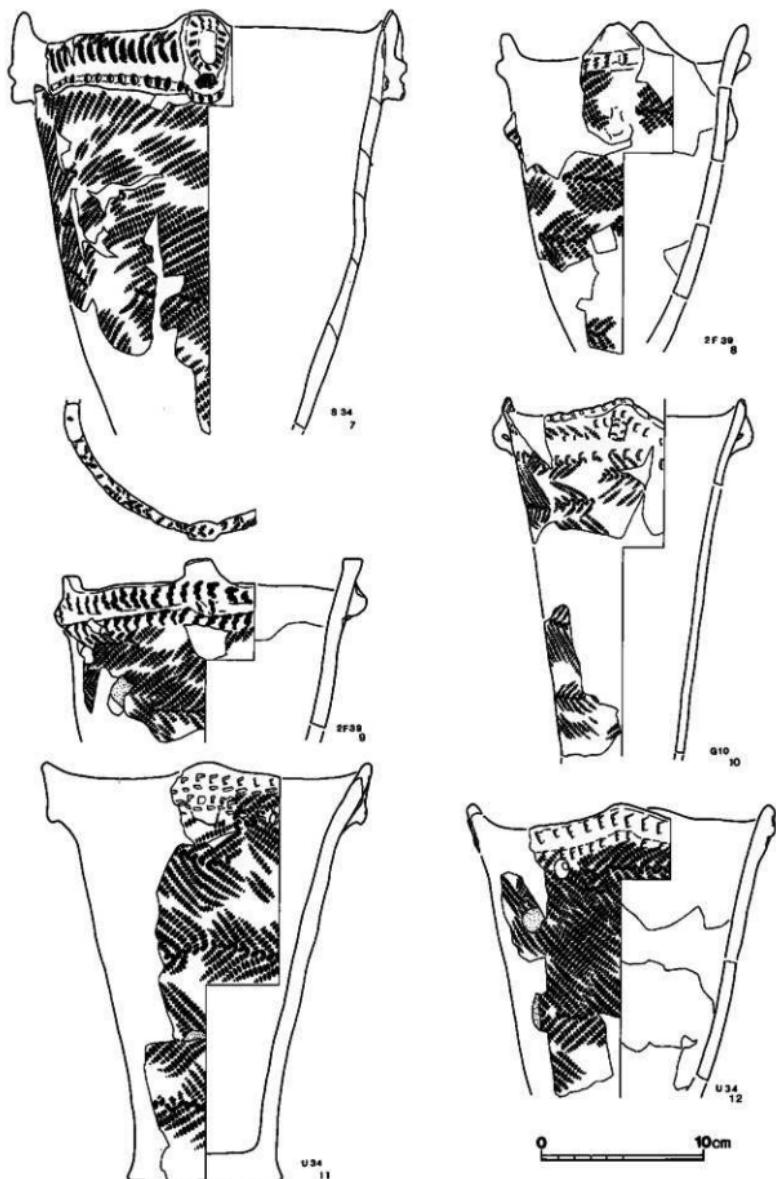


图101 IV 层出土土器实测图(2)

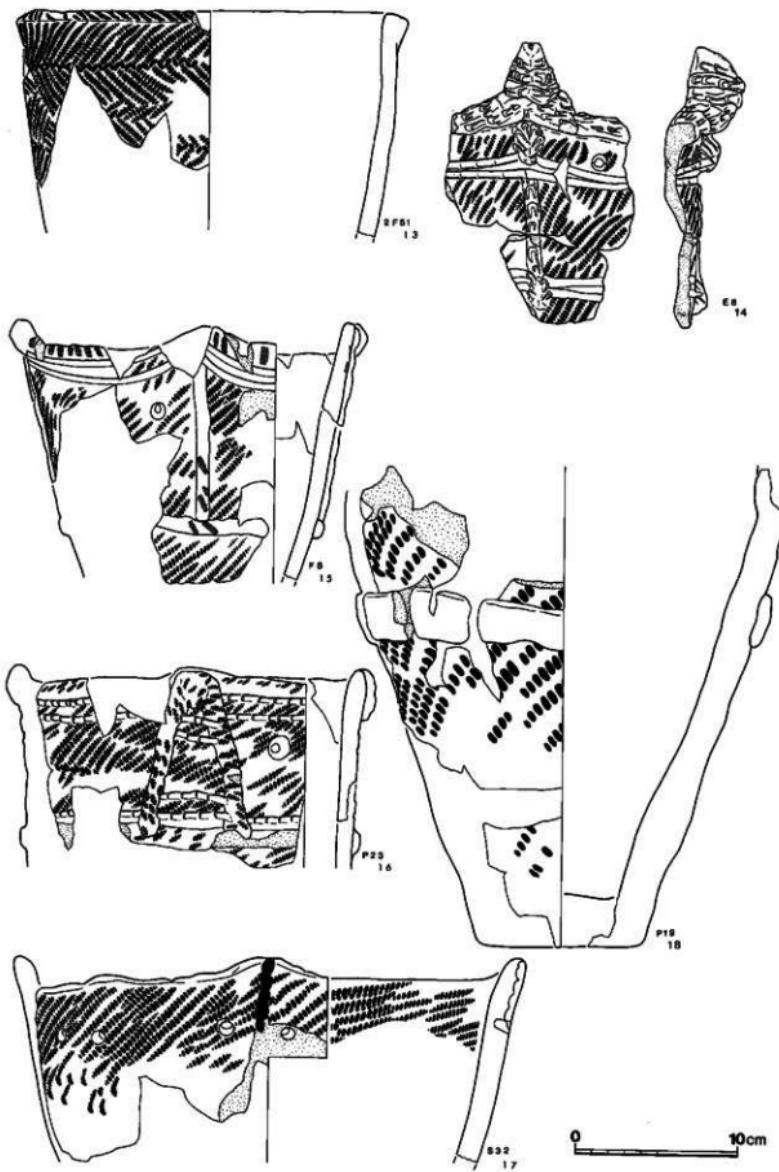


图102 IV层出土土器实测图(3)

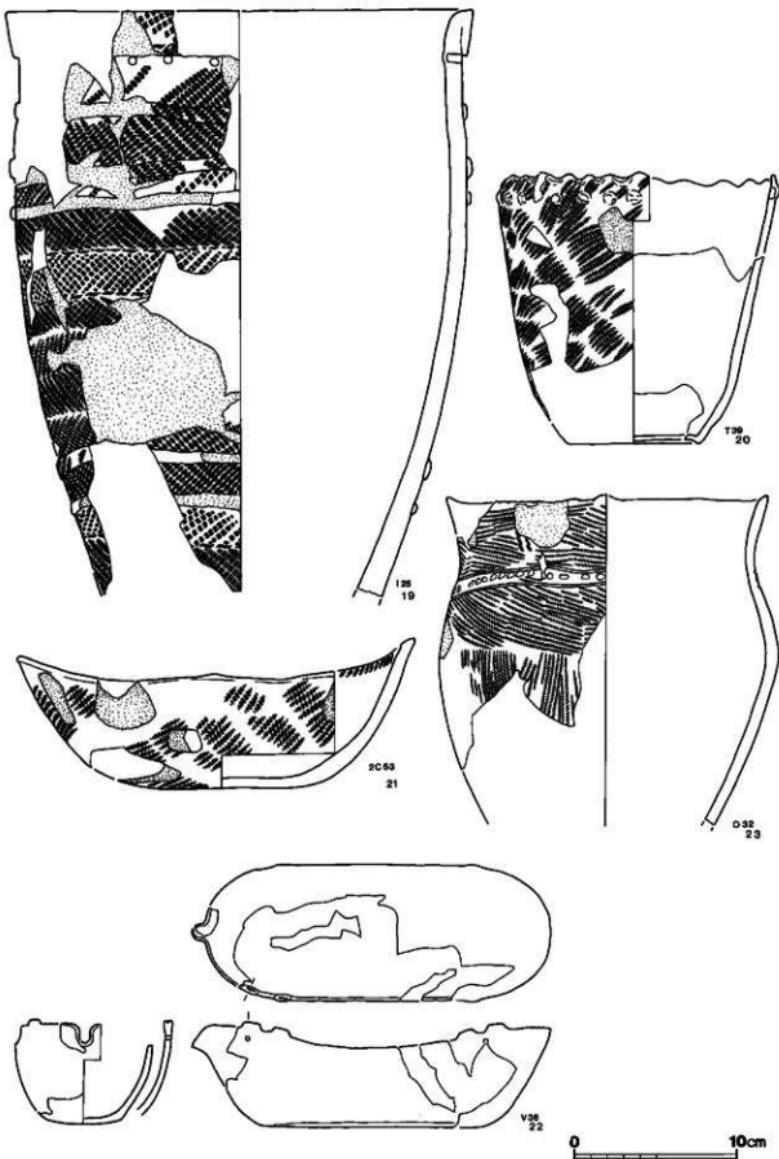


图103 IV层出土土器实测图(4)

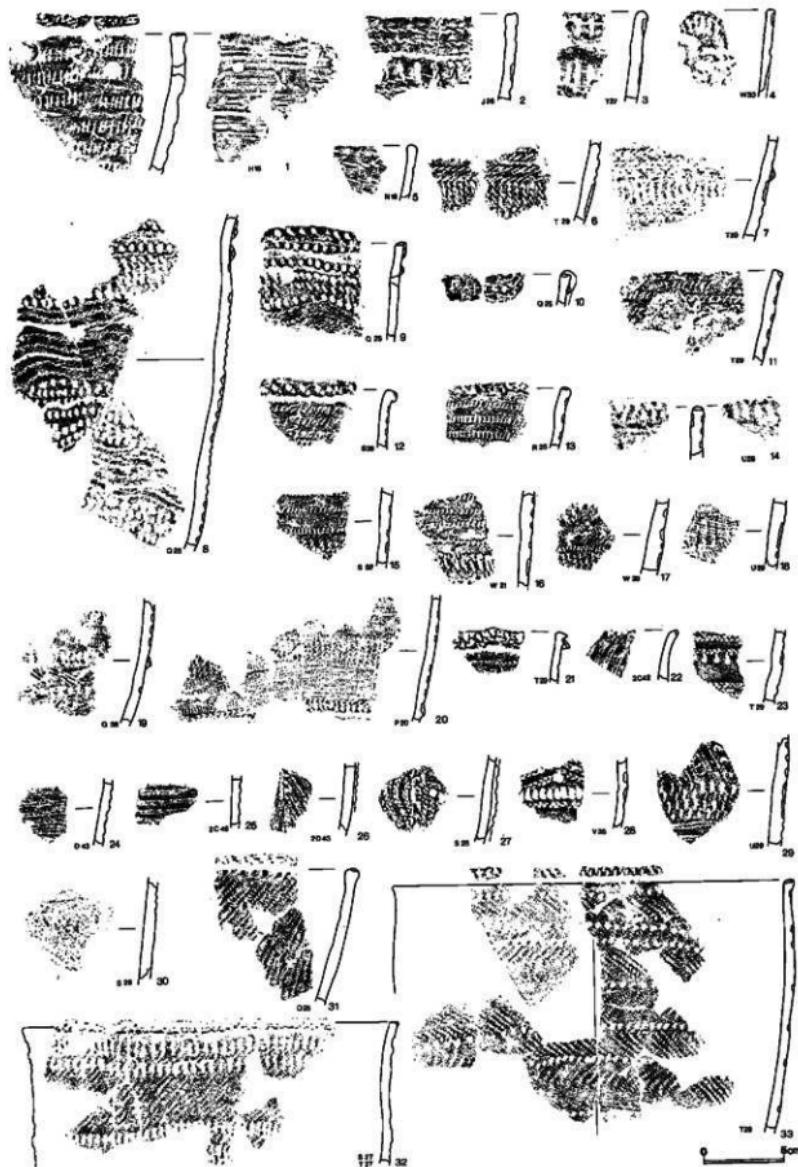


图104 IV层出土土器拓影图(1)



圖105 IV層出土土器拓影圖(2)

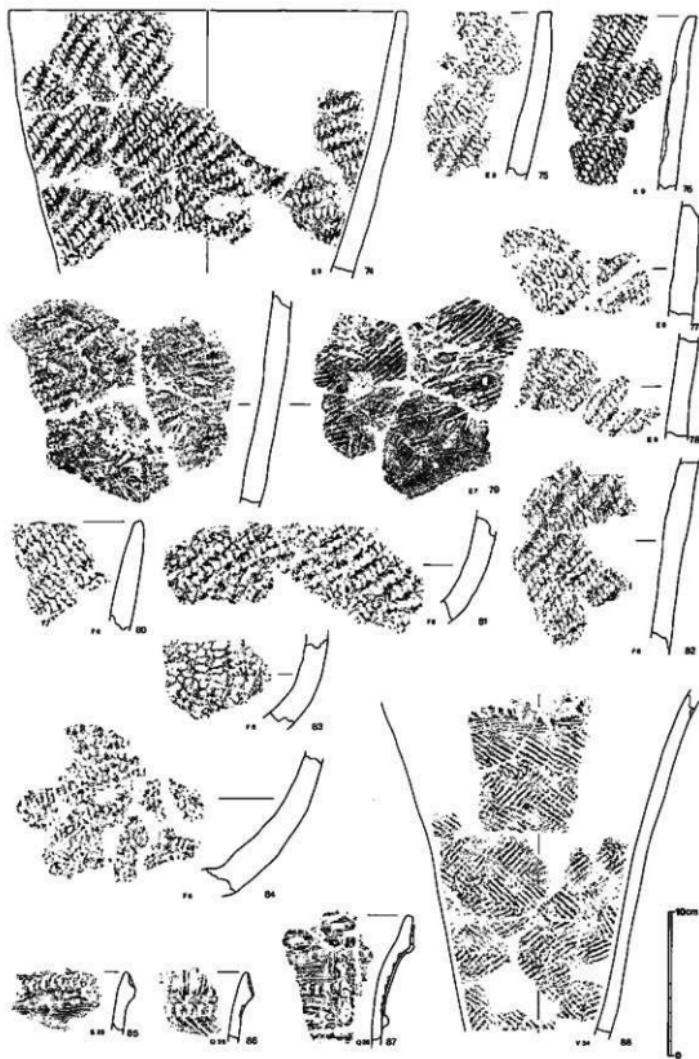


图106 IV层出土土器拓影图(3)

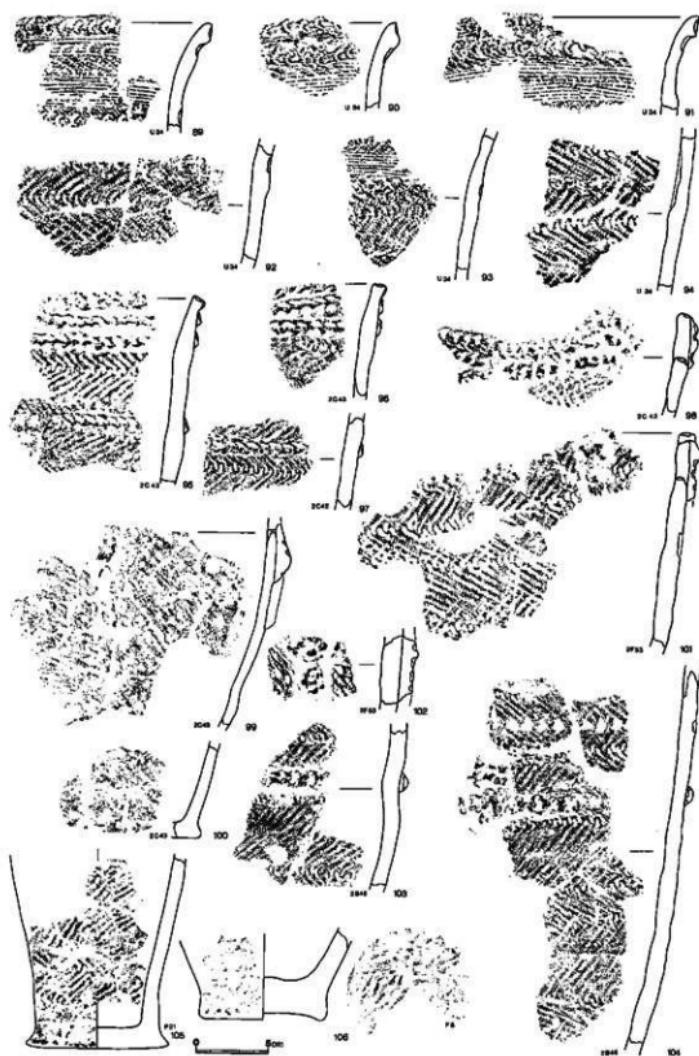


图107 IV层出土土器拓影图(4)

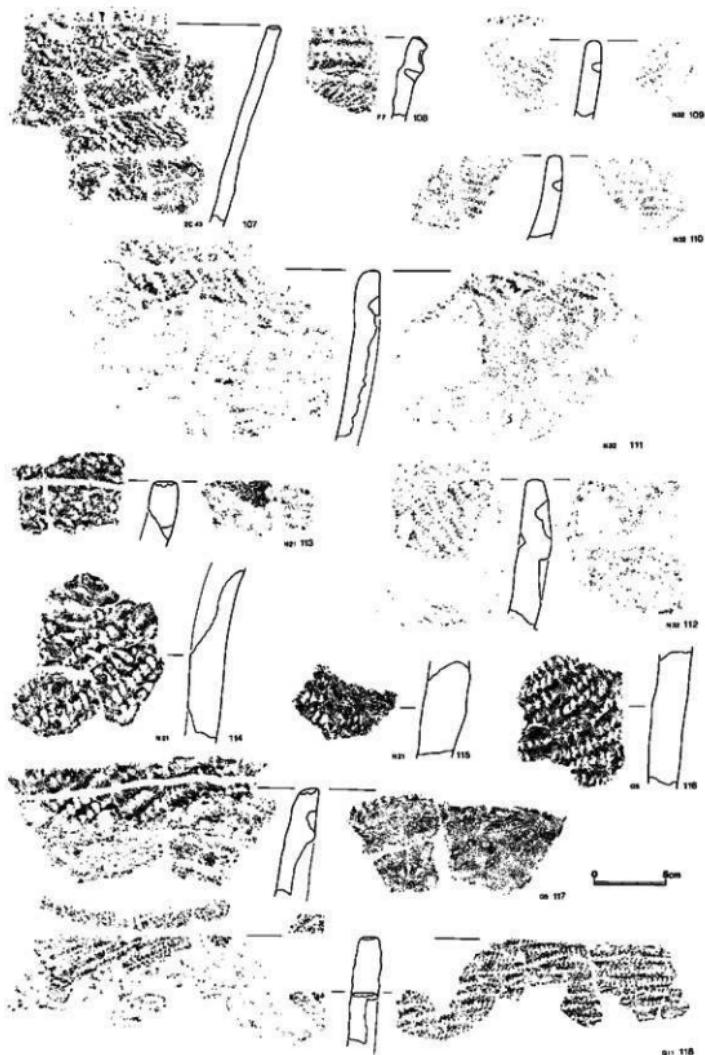


图108 IV层出土土器拓影图(5)



圖109 IV層出土土器拓影圖(6)

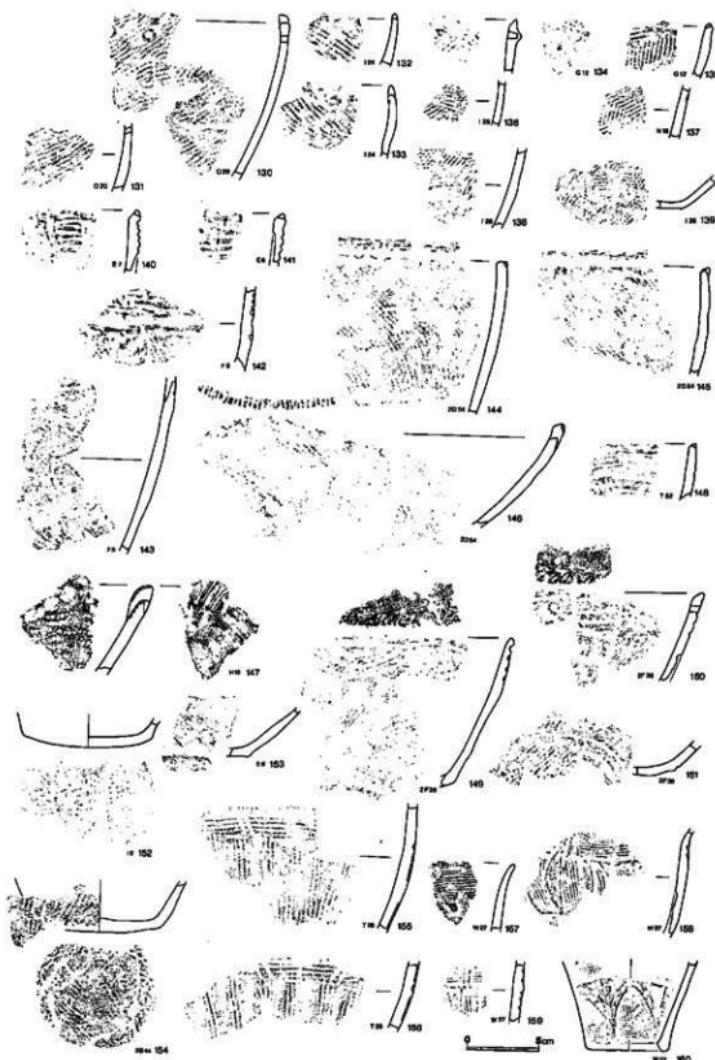


图110 IV层出土土器拓影图(7)

(2) 石器

二風谷遺跡IV層から出土した石器は総数約4万点（自然礫を除く）である。III層出土の石器でも、據文時代以前のものと思われるものは、これに含めた。以下、主な器種について説明する。

石鎌（図112・113、図版81-1・2）

破損品も含めて564点の出土である。形状の差異により、6類に大別する。

I類は柳葉形を呈するもの。側縁が平行し、幅1に対する長さ3~5の狭長なものをIa類とする（1~19）。74点がこれに含まれる。平基が多いが、抉りの入るものもある（12~13）。74点中完成品は11点であり、破損している例が多い。また、これらの中には折断面を打面とした、穂状剝離面を有するものがある（1~2・4~16）。Ib類は外湾する側縁部をもち、幅1に対する長さの比は2~3である（20~25）。腹面には、素材の主要剝離面を残す例が多い（20~23）。17点検出されている。Ic類は3例を数えるのみで、素材となる剝片の周辺に加工を施したものである（26）。

II類は基部に抉りを有するもの（27~38）。基部辺の長さと両側辺の長さがほぼ等しいもの（27~31）と、基部辺より両側辺が長いものとがある（32~38）。42点を検出した。

III類は平基の無茎石鎌（39~44）。二等辺三角形を呈するものが多い。19点の出土である。

IV類は明確なかえしを持たない有茎石鎌（45~65）。菱形を呈するもの、五角形を呈するもの、若干のかえしを有するものを含めている。76点を検出した。

V類は明瞭なかえしを有するもの（66~77）。両側辺が直線的なもの（66~69、71~73）、内湾するものとがある（74~77）。20点を数える。

VI類は最大幅が器体中央部より上部にあり、両側辺はゆるやかに外湾し、丸味を帯びた先端部を形成している（78~83）。17点の出土である。

石槍（図114、図版81-3）

器体長が5cm以上のものを石槍とした。形状により、4類に分類する。

A類は柳葉形を呈するもの（84~87）。9点の出土である。

B類は菱形を呈するもの（88~93・95）。20点がこれに含まれる。

C類はかえしを有し、有茎といえるもの（94~96~99）。16点がある。

D類は石鎌VI類の5cm以上のものであり、101がこれに該当する。類例は少なく5点を数えるのみである。その他石槍の破損品と思われるもの33点を検出した。

石錐（図115~102~107、図版82-1）

102は棒状のもので1例のみである。103~106は素材となる剝片の1か所を機能部として突出させ、剝片の周辺にも加工を施している。石錐は14点の出土である。

石匙（図115~108~122、図版82-1）

108~112は素材となる剝片の背面の一側縁或いは二側縁に加工を施し、腹面はつまみ部のみに調整が加えられている。113~115は先端が尖り、背面の全周に調整が施され、断面三角形をなす。115の腹面右下半部には背面からの調整がみられる。116~117は背面全面に面的な調整が加えられ、両側辺

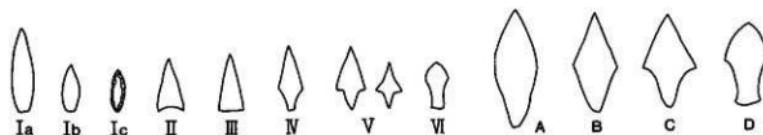


図111 石鎌・石槍の形状模式図

は平行する。118~121 は、腹面にも面的な調整が及び、半両面加工といえるものである。122 は両面加工の石匙である。石匙は破損品も含め 27 点を数える。

削器（図 116~123~135、図版 82~2）

削器としたものは 31 点を数える。123・124 は一側縁に刃部を有するもの、125・126・127 は二側縁に刃部を有するものである。128 は IVH-2 出土の削器（図 96~14）に類似し、中央部が括れ、断面 D 字形である。129 は湾曲した刃部を有し、8 cm 大の大形で薄い剝片を素材としている。130~135 は全周に調整加工を施した削器で、いずれも部厚い剝片を素材としている。134・135 は先端部が尖り、図 116 の 114 等の石匙に類する形態である。

円形搔器（図 116~136~142、図版 82~2）

16 点の出土である。全例、素材となる剝片の縁辺に弧状の刃部を有するものである。打面を残置し、それ以外の周辺部に調整加工を施しているものが 8 例あり、137~141 がこれに該当する。142 は片面加工といえるもので、石器末端部から右側縁中央部にかけて急峻な加工が施されている。

両面加工の石器（図 117~143~145、図版 82~3）

石槍のような明確な先端部をもたない両面加工の石器である。図示した 3 例は、いずれも部厚い剝片を素材としており、143 は背面右側縁から下部にかけて細かい調整により刃部を作出している。144 は背面左側縁が交互剝離により縁辺がジグザグをなすのに対し、右側縁は薄く、かつ直線的に調整されている。145 は図の下半部より厚く、断面は丸味を帯びる。これらの石器は側縁が薄く、直線的な部分を刃部として、ナイフのような機能を具備していたと思われる。

抉入搔器（図 117~146~148、図版 82~3）

5 点を検出している。いずれも剝片の縁辺に幅 5 mm~18 mm、深さ 5 mm 程の抉入部を設けている。

ピエス・エス・キュー（図 117~149~151、図版 82~3）

両極打法の結果による剝離面をもつ石器を 5 点検出している。149・151 は、上下両端からの剝離が中央部付近で対向し、縁辺には細かい剝離が連なり、両極打法により剝離が加えられたことが明らかである。150 も含めて、3 点とも側面部にはフルーティングがみられる。いずれも継断面は楔形を呈する。

加工痕を有する剝片（図 117~152~153、図版 82~3）

縦長剝片を素材とするものが多く、削器のような明確なスクレノバー・エッジをもたず、調整剝離も浅いものである。図示した例のように整った剝片を用いてはいないが、加工痕を有する剝片は 257 点程を検出している。

石核（図 117~157~160、図版 82~3）

157 は剝片を利用した石核で、剝片の側面を打面として横長の剝片を作出している。158・159 は背面に縦面をもつ亀甲形の残核である。ともに全周から剝片剝離が行なわれている。160 も背面に縦面をもつ石核であるが、打面を上下両端にもつ両設打面のものである。

石斧（図 118・119、図版 83）

擦切手法の痕跡を残す磨製石斧が 9 点ある（161~167）。162~166 は蛇紋岩製であり、薄く、鋭い刃部を有する。164 の表裏中央部には溝状の擦痕が横走している。装着の際の擦れであろうか。168 は両側面に敲打による調整痕がみられる。

162~172 は局部磨製石斧である。170~171 は片面に縦面を浅し、主要剝離面側には大きな剝離により整形を行なっている。170 は縦面側、171 は主要剝離面側とともに刃部のみに磨痕が観察されるものである。片面全体が縦面に覆われている石斧は、他に 2 例ある。169~172 は全長 20 cm 程で、他に

比し長大な石斧であり、ともに背面に礫面を残し、172は礫面を刃部としている。169は旗面の刃部のみを磨いている。172は両面の高い部分が磨かれている。169は2号墓の揚土からの出土、172はIV層最下部(IVd層)からの出土であり、縄文時代早期土器群との共伴が確認されている。

石斧は、44点を検出した。この他に両側縁を打ち欠きながらも、刃部を作り出していない石斧未成品が出土している。

石斧原材(図121-176・177・181、図版84-1)

緑色泥岩の石斧原材が3例ある。176・181は打製石斧の素材となるものと思われる。177は中央に1条の溝が彫られており、擦切磨製石斧の原材である。

敲石(図120-173・174、図版84-1)

棒状の礫の先端に剝離面、潰れ痕がみられる。2例を数える。

くぼみ石(図120-175、図版84-2)

表裏ともに、潰れによるくぼみがみられる。

擦石(図120-178~180、図版84-2)

180は、断面が隅丸三角形を呈し、その1つの稜を面取りしたものである。178・179はいわゆる「北海道式石冠」であり、表裏品も含めて3例がある。

砾石(図120-182・183、図版84-2)

182は板状の砂岩の一面に橢円形状に広がる磨耗がみられるもの。183は2面にわたって磨耗が観察される全長25cmを計る大型のものである。

以上、主な器種について概観した。石器の分布状況は石鏃・石槍のみに関して形態別に図示した(図111)。

石鏃Ia・b類はQ、R、S、Tラインの26~28区に集中している。これは縄文早期土器群が集中する地点と重なるものであり(図98)、縄文時代早期の所産と考えられる。石鏃II類は、発掘区に万遍なく分布している。基部に抉りが入る石鏃は縄文前期前半に特徴的な形態であるとされる(遠藤1982)が、縄文前期の土器は発掘区南端に分布し、石鏃II類の中でも、土器の分布と重なるものがある。石鏃IV類の分布は、縄文中期の土器の分布とほぼ一致するものである。石鏃Ic・III・V・VI類に関しては出土点数も少なく、分布も散漫であり、明らかなことは言えない。

石槍は概して、発掘区東側に偏って分布する傾向があるが、各形態の所属時期を明らかにすることはできなかった。

(寺崎 康史)

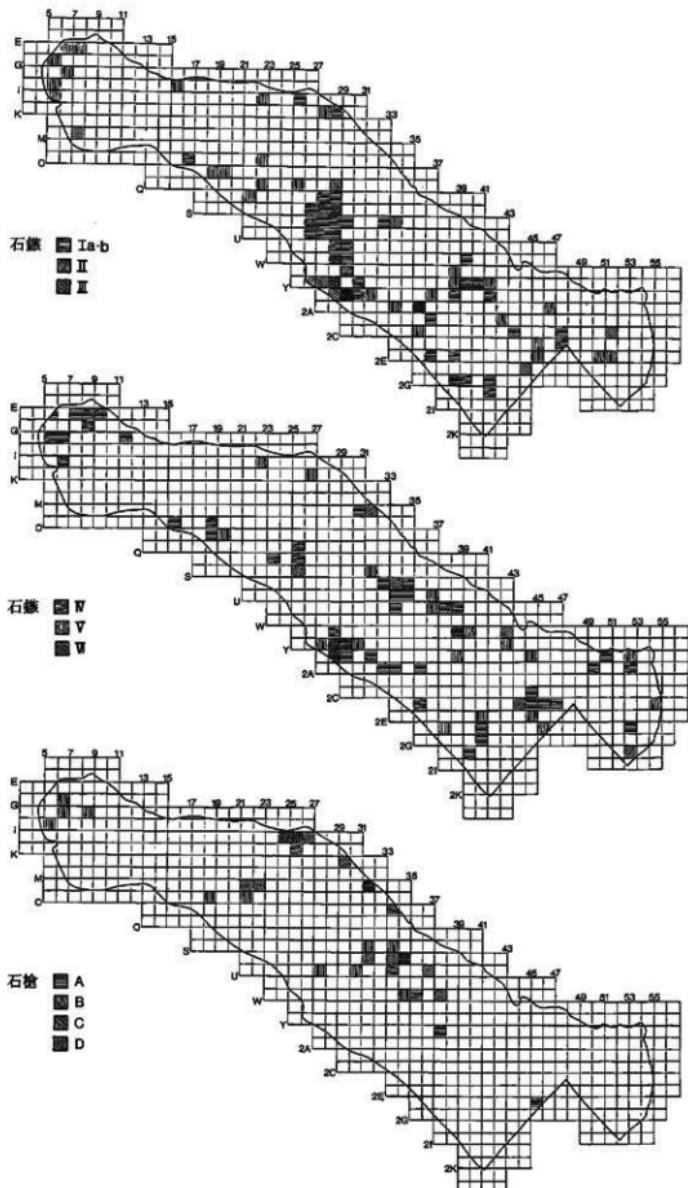


図112 IV層出土石錠・石箱出土分布図

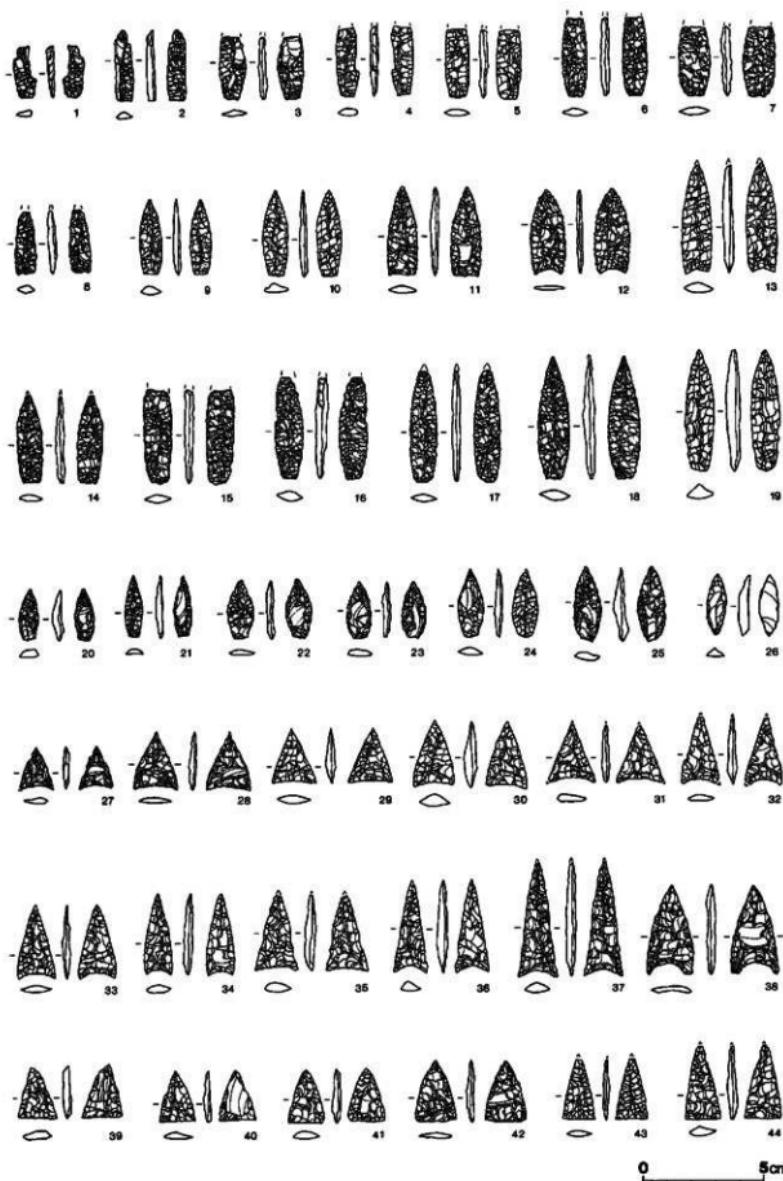


圖113 IV層出土石器(1)

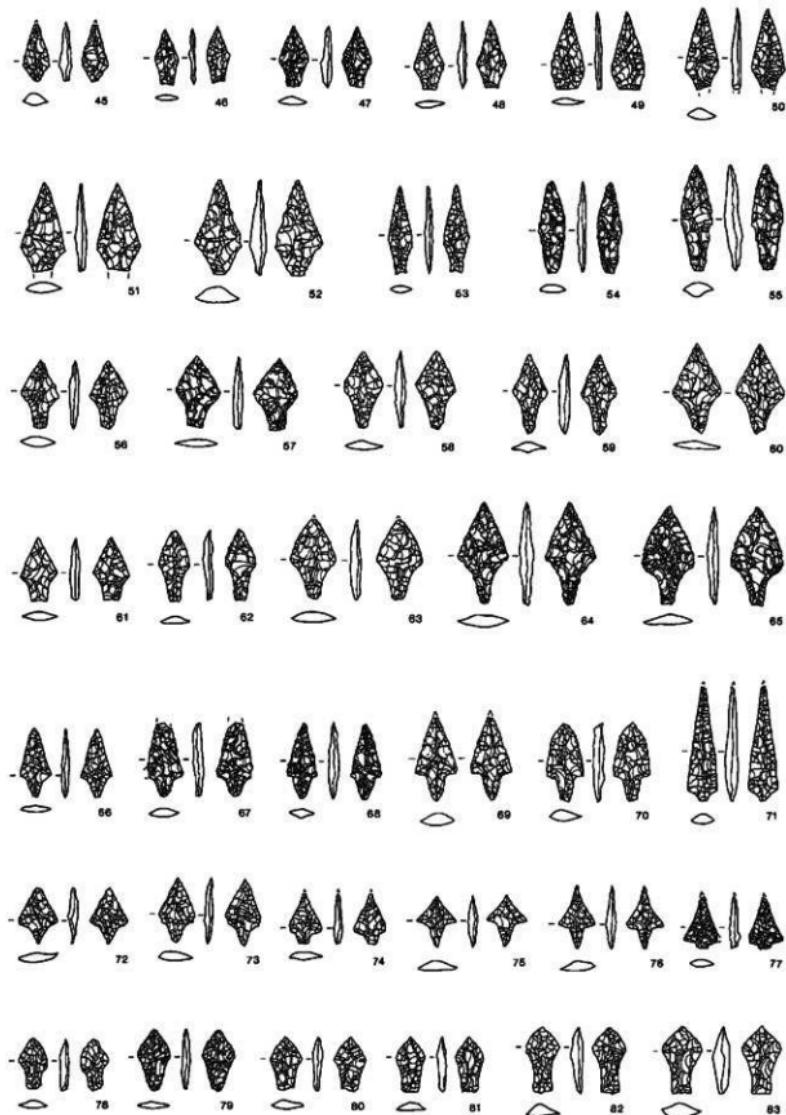


图114 IV层出土石器(2)

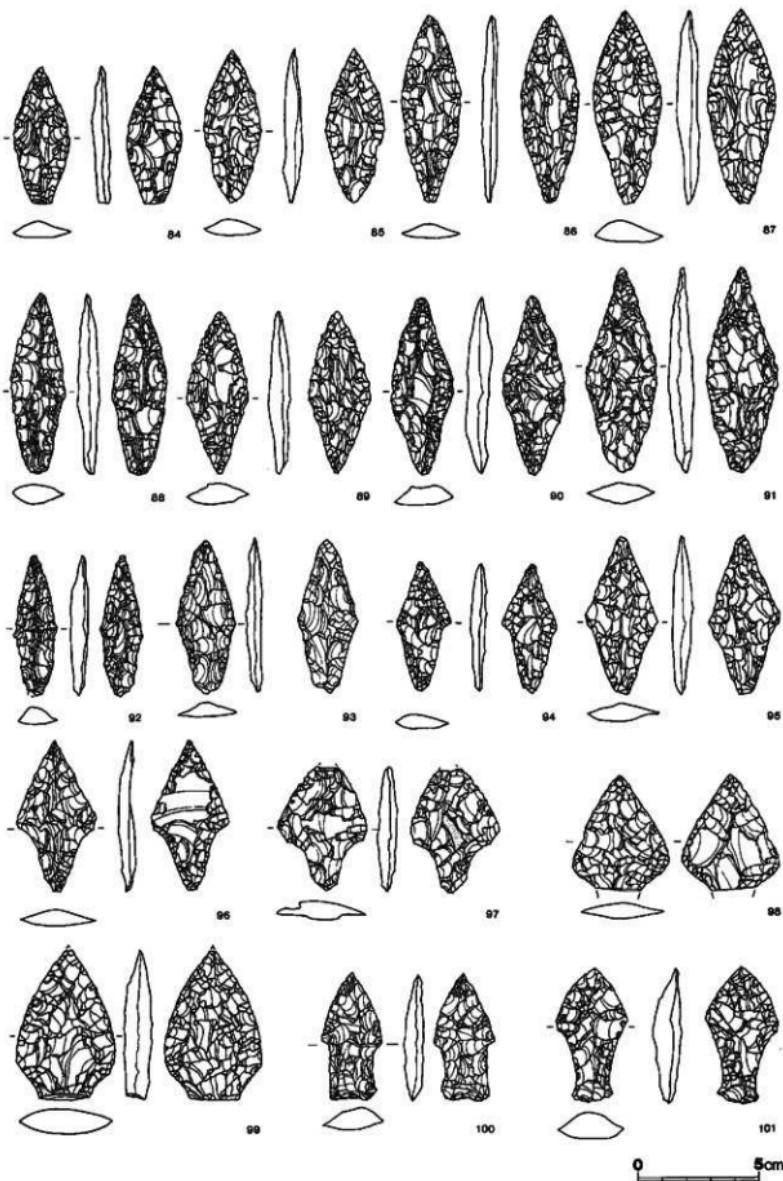


圖115 IV層出土石器(3)

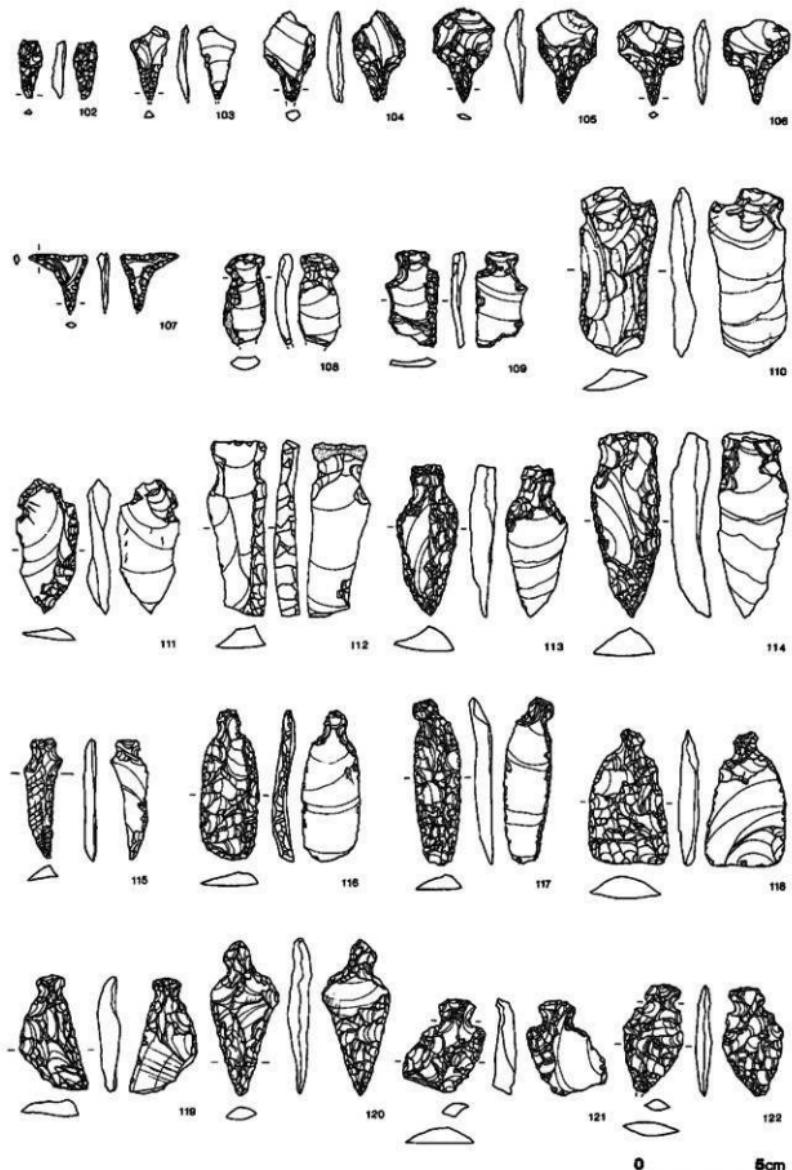


图116 IV层出土石器(4)

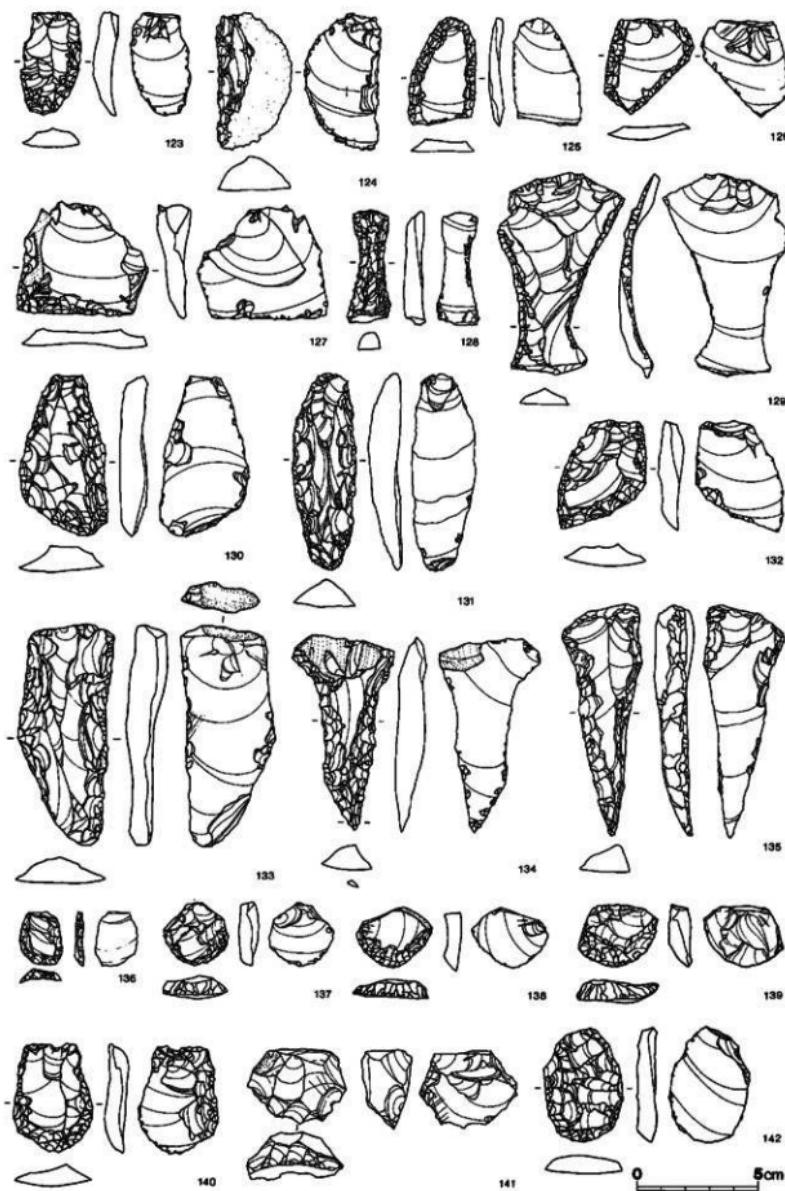


图117 IV层出土石器(5)

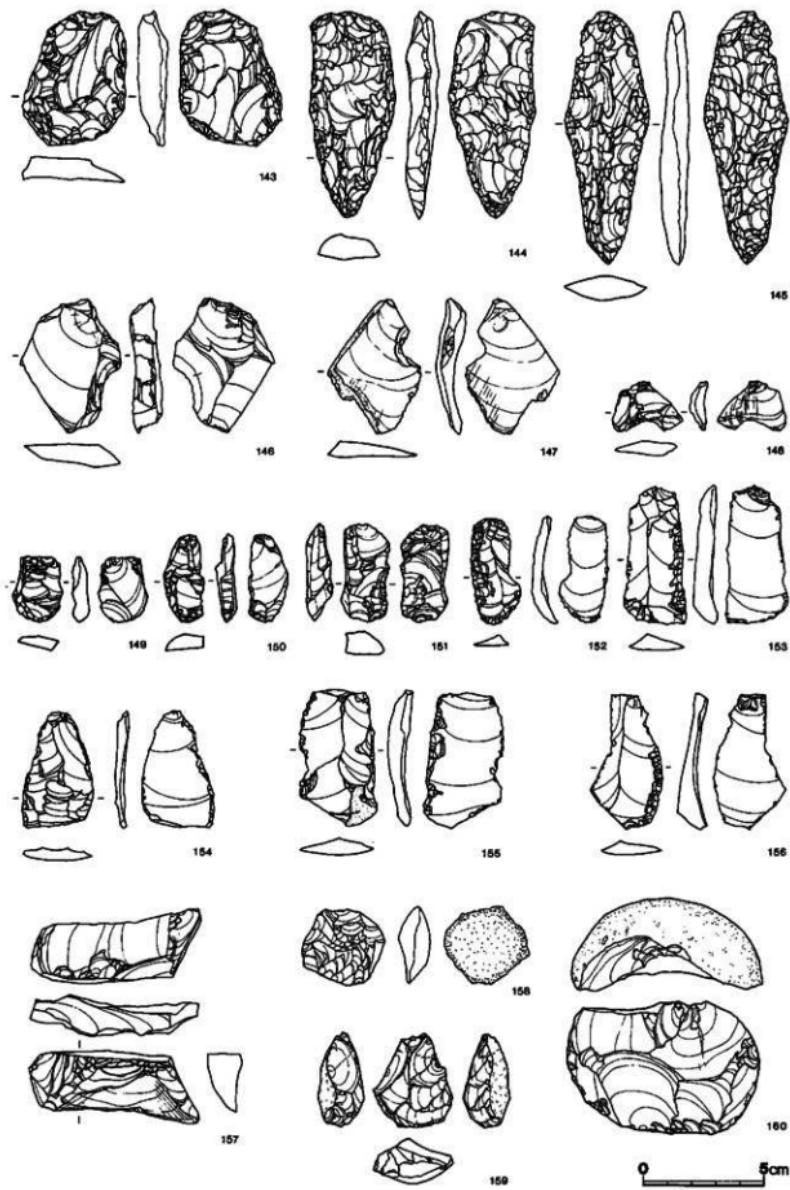


图118 IV层出土石器(6)

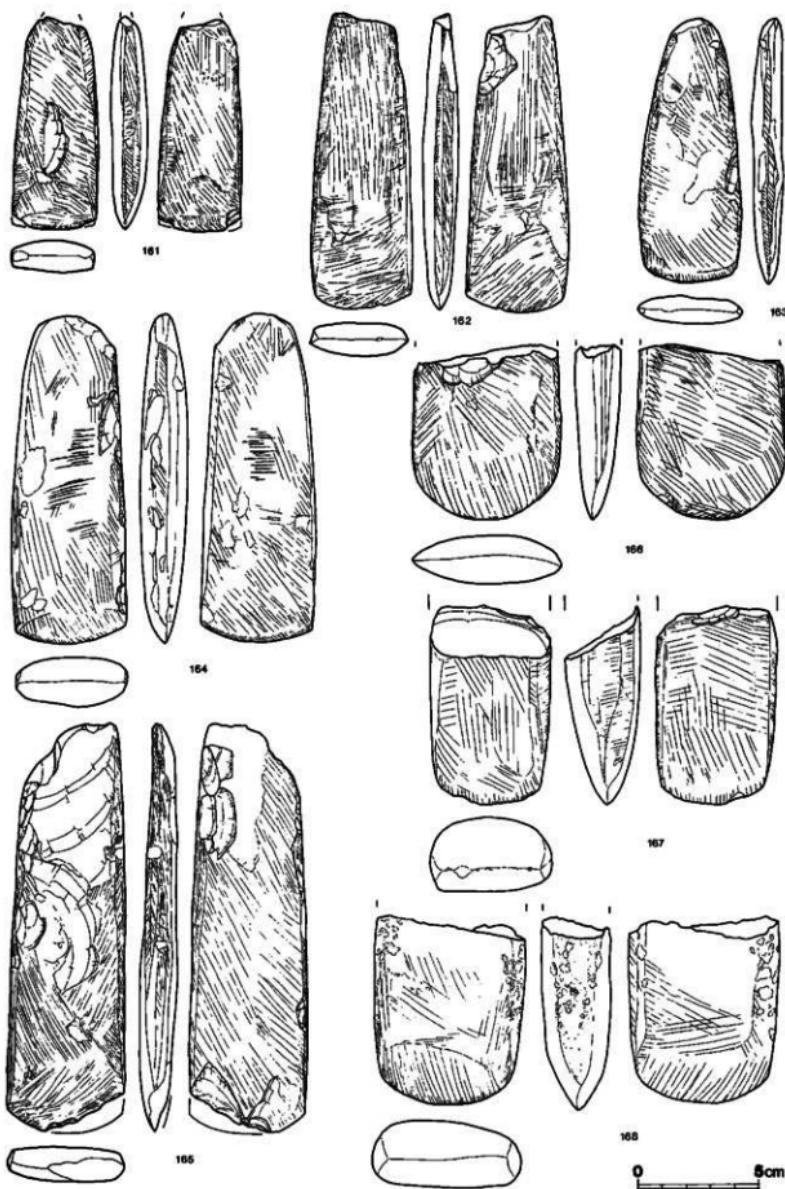


圖119 IV層出土石器(7)

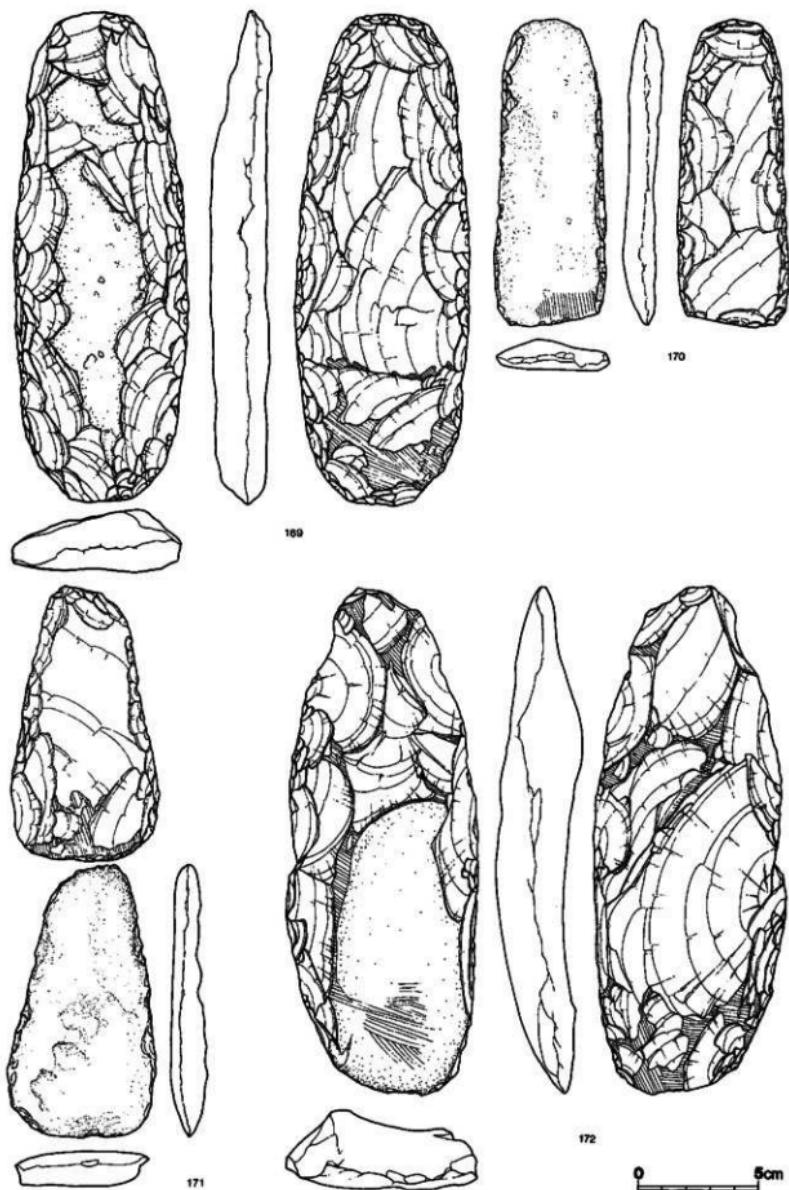


圖120 IV層出土石器(3)

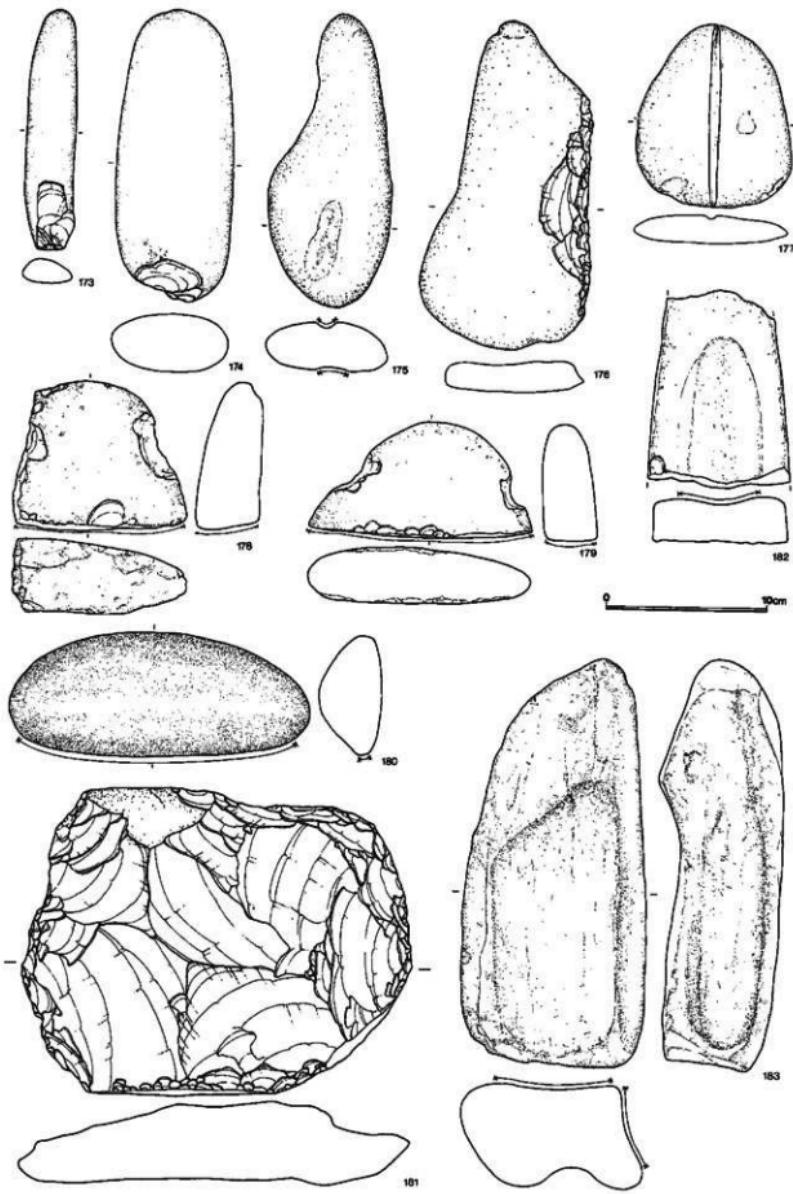


圖121 IV層出土石器(9)

表33 IV層出土石器一覧 (1) <() 内は現存値>

図番	グリッド	層位	器種名	分類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
1	R-26	IV	石鏃	Ia	(2.0)	(0.9)	0.3	(0.4)	Obs.	先端部欠損
2	2D-36	IV	"	"	(2.8)	(0.7)	0.3	(0.8)	"	"
3	2C-47	III	"	"	(2.5)	1.0	0.3	(0.8)	"	"
4	2F-41	IV	"	"	(2.7)	(0.9)	(0.3)	(0.8)	"	"
5	W-29	III	"	"	(2.7)	1.0	0.3	(0.8)	"	"
6	S-28	IV	"	"	(3.1)	1.0	0.3	(1.2)	"	"
7	S-28	IV	"	"	(2.7)	1.2	0.3	(1.4)	"	"
8	R-28	IV	"	"	(2.5)	0.8	0.3	(0.6)	"	"
9	2F-41	IV	"	"	3.0	0.9	0.3	0.7	"	"
10	U-28	III	"	"	3.4	1.0	0.3	0.9	"	"
11	H-13	拂土中	"	"	3.5	1.2	0.3	1.2	"	"
12	N-16	IV	"	"	3.3	1.4	0.2	1.0	"	"
13	G-28	IV	"	"	4.3	1.2	0.4	2.0	"	"
14	R-27	IV	"	"	(3.5)	1.0	0.3	(1.3)	"	先端部欠損
15	S-29	IV	"	"	(3.7)	1.1	0.3	(1.7)	"	"
16	S-27	IV	"	"	(4.0)	1.1	0.4	(10.0)	"	"
17	Q-27	IV	"	"	(4.4)	1.0	0.3	(1.6)	"	"
18	X-39	III	"	"	4.9	1.2	0.4	2.3	"	"
19	2F-39	III	"	"	4.8	1.1	0.5	2.7	Sh.	"
20	K-26	IV	"	1b	2.0	0.8	0.3	0.5	Obs.	"
21	E-6	不明	"	"	2.4	0.7	0.2	0.3	"	"
22	R-26	IV	"	"	2.3	1.0	1.2	0.7	"	"
23	R-26	IV	"	"	2.2	0.9	0.3	0.5	"	"
24	Q-28	IV	"	"	2.7	1.0	0.3	0.8	"	"
25	Q-27	IV	"	"	2.9	1.1	0.3	1.1	"	"
26	Z-35	IV	"	1c	2.4	0.8	0.3	0.6	"	"
27	F-5	IV	"	II	1.6	(1.3)	0.2	(0.3)	"	"
28	G-5	IV	"	"	2.3	1.7	0.2	0.6	"	"
29	Z-35	IV	"	"	2.1	1.7	0.3	0.8	"	"
30	O-18	III	"	"	2.6	1.6	0.4	1.4	"	"
31	P-25	III	"	"	(2.3)	(1.9)	0.2	(0.8)	"	先端部・基部欠損
32	O-19	III	"	"	2.7	1.5	0.3	0.8	"	"
33	2D-51	III	"	"	2.9	1.5	0.2	0.8	"	"
34	2D-54	IV	"	"	3.2	1.1	0.3	1.2	"	"
35	2A-42	IV	"	"	3.0	1.7	0.4	1.6	"	先端部欠損
36	Q-21	III	"	"	3.7	1.3	0.3	1.2	"	"
37	E-7	IV	"	"	4.5	1.6	0.4	2.0	"	先端部欠損
38	H-5	IV	"	"	3.5	1.9	0.3	1.7	"	"
39	Z-35	IV	"	III	2.0	1.5	0.3	0.9	"	"
40	X-28	IV	"	"	2.0	1.4	0.2	0.5	"	"
41	Y-28	IV	"	"	2.1	1.4	0.3	0.7	"	"
42	T-33	IV	"	"	2.4	1.6	0.2	0.9	"	"
43	Q-28	IV	"	"	(2.4)	1.3	0.2	(0.6)	"	先端部欠損
44	2E-44	III	"	"	(3.0)	1.4	0.3	(1.0)	"	"
45	2C-46	III	"	IV	(2.2)	1.0	0.4	(0.7)	"	"
46	Y-31	IV	"	"	2.1	0.9	0.2	0.3	"	"
47	F-5	IV	"	"	2.4	1.2	0.4	0.7	"	"
48	Q-25	IV	"	"	2.7	1.2	0.3	0.5	"	"
49	Z-5	IV	"	"	3.0	1.3	0.2	0.7	"	"
50	S-32	III	"	"	(3.2)	1.3	0.3	(1.1)	"	基部欠損
51	U-33	IV	"	"	3.5	1.8	0.4	1.7	"	"
52	O-18	III	"	"	3.8	1.9	0.6	2.5	"	"
53	F-25	III	"	"	3.5	1.0	0.3	0.6	"	"
54	F-H-6-8	I	"	"	3.6	1.0	0.3	1.0	"	"
55	E-5	IV	"	"	4.2	1.3	0.6	2.2	"	"
56	X-28	IV	"	"	2.7	1.5	0.4	0.9	"	"
57	S-34	IV	"	"	2.8	1.7	0.3	1.3	"	"
58	2B-44	III	"	"	3.1	2.5	0.3	1.6	"	"
59	Z-49	IV	"	"	3.2	1.4	0.4	1.3	"	"
60	U-37	III	"	"	3.5	(1.9)	0.3	(1.7)	"	"
61	T-34	IV	"	"	2.7	1.6	0.4	1.1	"	"

表34 IV層出土石器一覧 (2) <() 内は現存値>

図番	グリッド	層位	器種名	分類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 質	備 考
62	W-28	IV	石 繩	IV	2.8	1.2	0.3	0.8	Obs.	
63	T-33	IV	"	"	3.2	1.8	0.4	1.5	"	先端部欠損
64	O-18	2号墓土	"	"	4.0	1.9	0.5	2.6	"	
65	Y-50	IV	"	"	3.9	2.1	0.4	2.2	"	
66	X-30	IV	"	"	2.7	1.2	0.6	"		
67	2C-54	IV	"	V	(2.9)	(1.4)	0.4	(1.4)	"	先端部欠損
68	U-36	IV	"	"	3.0	1.1	0.4	1.0	"	
69	W-39	IV	"	"	(3.3)	1.6	0.5	(1.8)	"	先端部欠損
70	2C-53	III	"	"	3.1	1.5	0.4	1.5	"	"
71	2D-44	III	"	"	(4.6)	1.2	0.4	(1.7)	Sh.	"
72	J-26	IV	"	"	(2.2)	1.5	0.4	(0.7)	Obs.	"
73	2D-40	IV	"	"	2.6	1.4	0.3	0.8	"	
74	2E-37	III	"	"	(2.0)	1.3	0.3	(0.4)	"	先端部欠損
75	I-22	III	"	"	2.0	1.6	0.3	0.5	"	
76	2E-45	III	"	"	2.5	1.4	0.3	0.5	"	
77	Y-52	IV	"	"	(2.0)	(1.3)	(0.4)	(0.7)	"	先端部欠損
78	Y-28	IV	"	VI	2.0	1.1	0.3	0.6	"	
79	2C-43	IV	"	"	2.5	1.2	0.3	0.8	"	
80	X-28	IV	"	"	2.1	1.3	0.3	0.7	"	
81	X-28	III	"	"	2.2	1.1	0.3	0.6	"	
82	X-28	IV	"	"	2.6	1.3	0.5	1.1	"	
83	X-28	IV	"	"	2.7	1.6	0.6	1.7	"	
84	S-34	IV	石 柄	A	5.5	2.2	0.6	6.5	"	
85	Y-37	III	"	"	6.1	2.3	0.6	7.1	"	
86	O-33	IV	"	"	7.5	2.4	0.6	8.8	"	
87	V-35	III	"	"	7.7	2.7	0.8	14.0	"	
88	E-6	IV	"	B	7.3	2.2	0.7	11.0	"	
89	T-34	IV	"	"	6.5	2.5	0.8	9.5	"	
90	G-5	IV	"	"	7.1	2.5	0.8	12.4	"	
91	R-33	IV	"	"	8.2	2.8	0.9	16.2	"	
92	F-6	IV	"	"	(5.6)	1.8	0.6	(5.1)	"	
93	R-33	IV	"	"	6.2	2.4	0.6	17	"	
94	S-31	IV	"	C	5.1	2.1	0.5	4.1	"	
95	M-31	III	"	B	6.3	2.9	0.8	8.9	"	
96	I-25	IV	"	C	6.0	3.2	0.6	7.8	"	
97	Q-25	IV	"	"	(4.9)	3.6	0.7	(8.0)	"	先端部欠損
98	Z-45	IV	"	"	(4.6)	3.9	0.7	(10.0)	"	基部欠損
99	S-33	IV	"	"	6.1	3.9	1.0	22.9	"	
100	U-36	IV	"	D	5.1	2.4	0.7	19.4	"	
101	K-28	III	"	"	5.4	2.9	1.0	11.8	"	
102	2F-37	IV	石 繩	"	2.3	(0.9)	0.4	(0.7)	"	
103	Y-34	IV	"	"	(2.9)	1.5	0.3	(0.9)	"	先端部欠損
104	S-27	IV	"	"	(3.6)	2.0	0.5	(3.7)	"	"
105	S-27	IV	"	"	3.7	3.7	0.7	4.0	Sh.	
106	2F-40	IV	"	"	3.4	2.6	0.6	4.0	Obs.	
107	V-29	IV	"	"	(2.2)	2.3	0.3	(0.8)	"	
108	O-19	IV	石 柄	"	(3.7)	1.7	0.5	(3.7)	"	先端部欠損
109	E-8	IV	"	"	3.9	2.1	0.4	3.0	"	
110	2C-49	IV	"	"	6.3	3.1	0.9	17.6	Aga.	打面残闊
111	2B-35	IV	"	"	5.4	2.5	0.4	5.2	Obs.	
112	Y-28	IV	"	"	7.0	2.3	0.8	16.4	Aga-Sh	打面残闊
113	R-27	IV	"	"	6.0	2.4	1.0	11.8	Aga.	
114	M-22	III	"	"	7.5	2.7	1.4	27.4		打面残闊
115	S-27	IV	"	"	4.9	1.1	0.9	3.0	Sh.	
116	I-K-6-8	I	"	"	6.1	2.3	0.6	9.9	Sh.	
117	F-8	IV	"	"	6.7	1.8	0.6	8.4	Sh.	
118	Y-29	IV	"	"	5.4	3.2	0.7	12.4	Obs.	
119	2A-43	IV	"	"	4.7	2.3	0.6	1.9	"	
120	R-36	III	"	"	6.2	2.7	0.8	8.8	"	
121	G-11	IV	"	"	3.8	2.6	0.7	6.8	"	
122	E-9	IV	"	"	(4.4)	2.5	0.5	(5.1)	"	

表35 IV層出土石器一覧 (3) << () 内は現存値>>

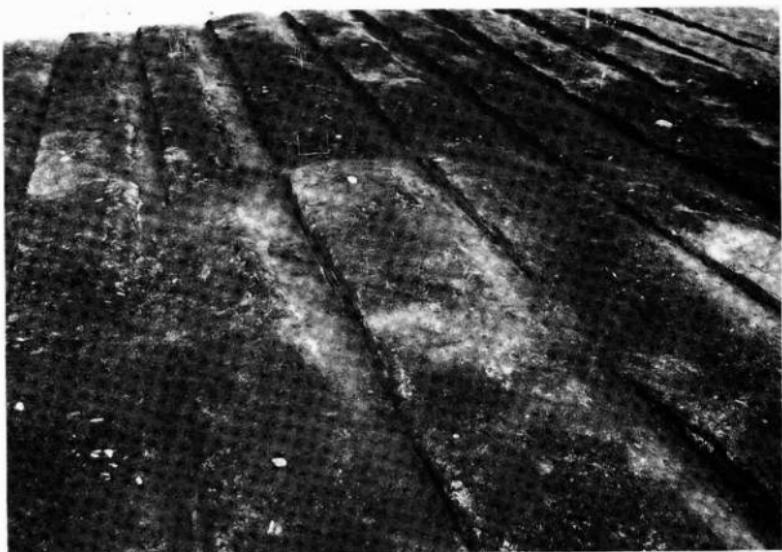
図番	ダリッド	層位	器種名	分類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 質	備 考
123	F-6	IV	石 鋸		4.2	2.4	0.7	7.8	Obs.	打面残置
124	I-26	IV	削 器		5.5	2.9	1.3	20.2	"	
125	X-29	IV	"		4.4	2.7	0.4	5.9	"	
126	I・K-6・8	III	"		3.8	3.1	0.7	8.3	"	打面残置
127	A-14	IV	"		4.6	5.3	1.0	22.5	"	"
128	T-28	IV	"		4.5	1.6	0.7	6.0	"	
129	P-23	IV	"		8.2	4.5	0.8	22.3	"	
130	G-9	IV	"		6.4	3.5	1.0	26.2	"	
131	2D-54	IV	"		7.9	2.5	1.2	22.1	"	
132	G-11	IV	"		4.4	3.3	0.7	12.7	"	
133	Q-36	IV	"		9.0	3.6	1.5	48.4	"	打面残置
134	L-29	III	"		7.7	4.1	1.0	21.4	"	"
135	2E-52	IV	"		9.4	3.1	1.4	30.2	Sh.	"
136	L-7	III	円形振器		2.1	1.7	0.4	1.9	Obs.	
137	Q-26	IV	"		1.5	2.6	0.9	6.2	"	打面残置
138	D-8	IV	"		3.0	2.3	0.7	5.0	"	"
139	E-9	IV	"		2.5	3.4	0.8	7.0	"	"
140	I・K-6・8	IV	"		4.4	3.2	0.8	11.8	"	
141	W-26	III	"		3.2	4.0	1.4	21.8	"	
142	I-6	IV	"		4.6	3.2	0.7	13.9	Aga-Sh.	
143	T-33	IV	両面加工の石斧		5.4	4.3	1.1	24.9	Obs.	
144	2A-46	IV	"		8.2	3.5	1.0	29.7	"	
145	Z-45	IV	"		10.2	3.4	1.0	32.2	"	
146	2D-53	IV	抉入振器		5.4	4.1	1.1	20.8	Mud.	打面残置
147	2D-54	IV	"		5.5	3.8	0.9	12.0	Obs.	"
148	N-23	IV	"		1.9	2.8	0.6	2.5	"	"
149	I-6	IV	ピストン式・キーホル		2.6	2.0	0.7	3.2	"	
150	X-28	IV	"		3.6	1.6	0.7	4.1	"	
151	Y-36	IV	"		4.8	1.9	1.0	5.8	"	
152	Y-31	IV	加工痕のある鋸片		4.2	1.8	0.5	3.8	"	
153	W-28	IV	"		5.6	2.5	0.7	8.6	"	
154	T-33	IV	"		4.7	2.9	0.3	5.0	"	
155	E・F-7	I	"		5.4	3.0	0.7	11.4	"	
156	I-6	IV	"		5.4	2.7	0.8	7.4	"	
157	2C-43	IV	石 細		7.0	2.4	1.0	25.7	"	
158	W-37	III	"		3.0	3.2	1.6	11.8	"	
159	X-42	不明	"		3.7	3.1	1.7	17.8	"	
160	2D-51	III	石 斧		7.9	5.4	3.4	185.1	"	
161	G-10	I	"		(8.6)	3.4	1.4	75.6	Gr-Mud.	刃部欠損
162	W-46	IV	"		11.9	4.1	1.3	101.7	Ser.	
163	F-7	IV	"		10.7	3.9	1.6	80.2	Gr-Mud.	
164	E-7	IV	"		13.2	4.6	1.9	20.5	"	
165	F-5	IV	"		16.7	4.8	1.4	192.2	"	刃部欠損
166	2G-39	IV	"		7.0	5.9	1.9	123.2	Ser.	上半部欠損
167	2H-42	IV	"		(8.0)	5.0	3.0	181.1	Gr-Mud.	"
168	2A-53	III	"		7.6	6.1	3.0	262	Sa.	"
169	O-18	III	"		20.0	7.1	2.5	490	Gr-Mud.	局部磨耗石斧
170	E・F-5・6	I	"		12.6	4.6	1.3	122.5	"	"
171	F-6	IV	"		11.1	6.0	1.4	117.3	Sa.	"
172	R-28	IV	"		20.5	7.9	3.1	550	And.	"
173	R-30	IV	砾 石		14.6	3.0	1.5	111	Gr-Mud.	
174	R-29	IV	"		17.8	7.2	3.4	830	Gne.	
175	M-17	IV	くぼみ石		17.9	7.6	7.5	429	Sa.	
176	X-45	III	石斧原材		20.2	10.4	1.7	670	Gr-Mud.	
177	F-6	IV	"		11.2	9.6	1.7	270	"	
178	G-5	IV	砾 石		9.1	10.8	3.9	528	Sa.	
179	G-6	I	"		7.1	13.8	3.4	435	"	
180	R-28	IV	"		18.5	7.6	4.1	890	Gne.	
181	G-13	不明	石斧原材		18.9	23.9	4.8	3000	Gr-Mud.	
182	G-5	IV	砾 石		11.8	8.8	3.1	450	Sa.	
183	P-23	IV	"		25.0	11.3	6.3	2500	"	



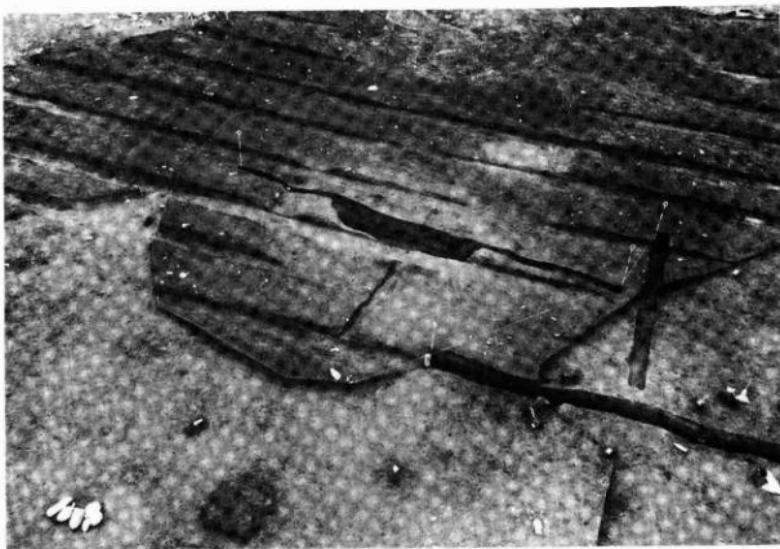
1 遺跡中央部風景



2 道跡



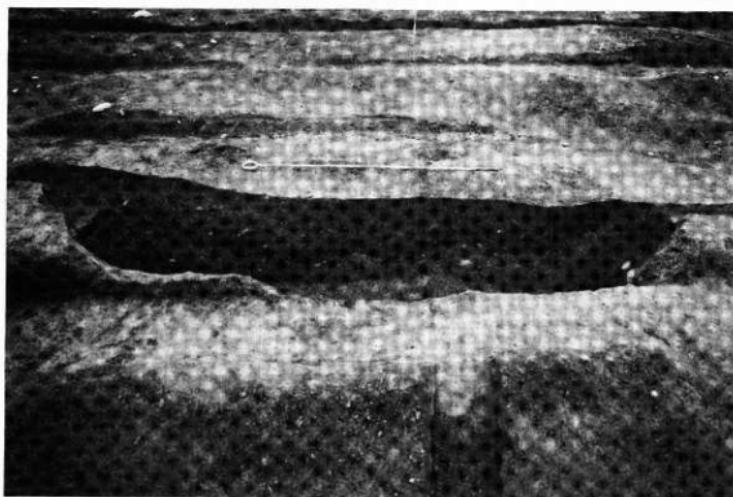
1 1号墓確認



2 1号墓調査進行状況



1 1号墓



2 1号墓 墓壙断面



1 1号墓 頭上部 中柄・刀子出土状況



2 1号墓 墓標穴脇 槍出土状況

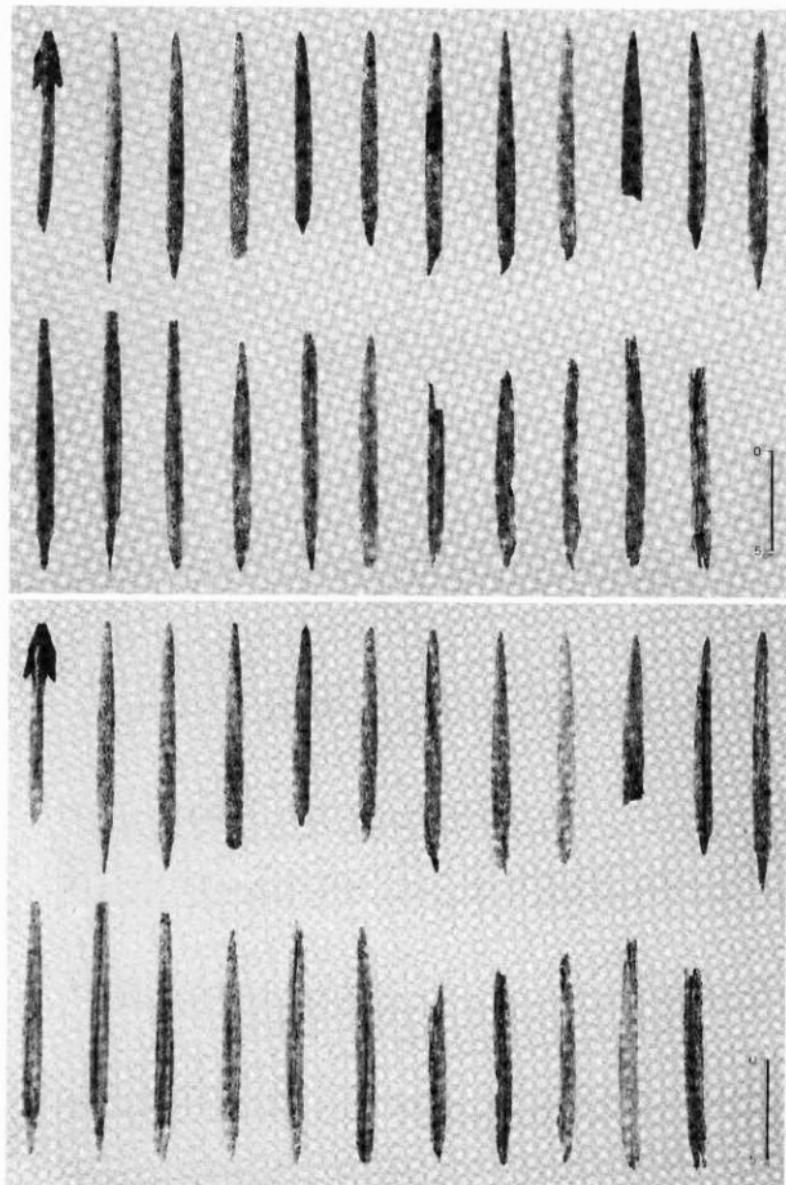


3 1号墓 頭骨周辺 副葬品出土状況

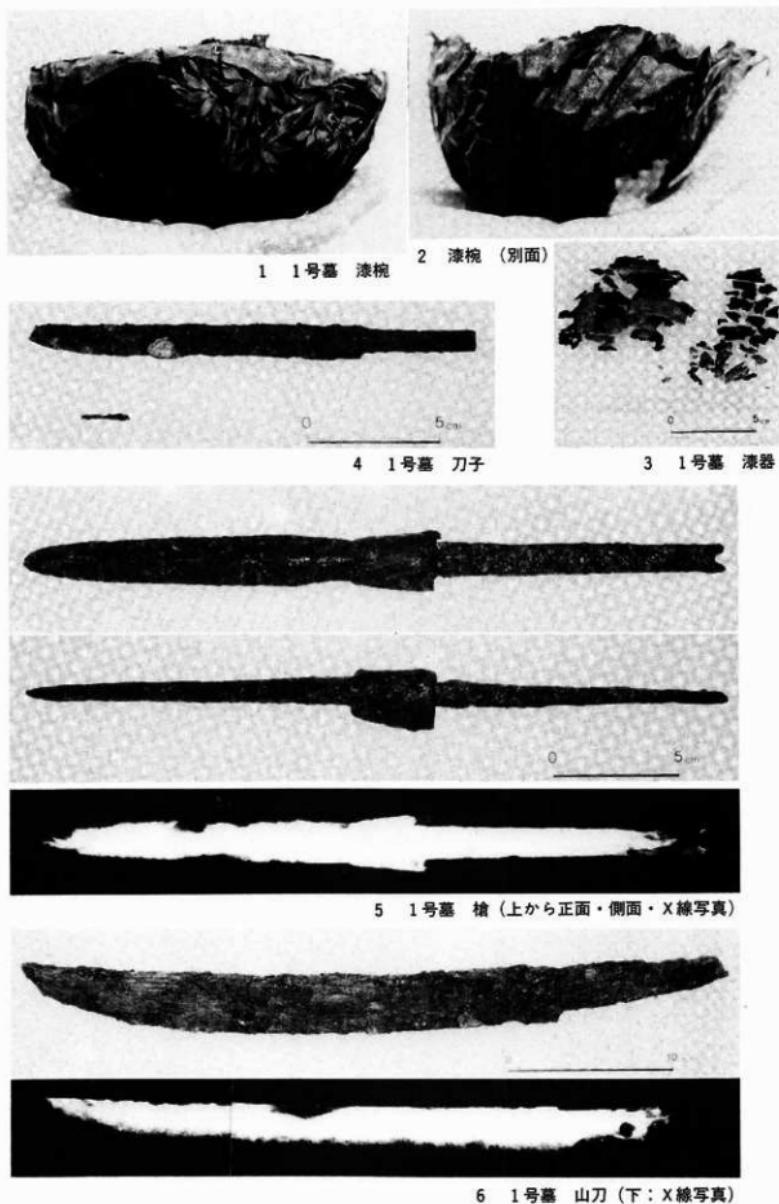


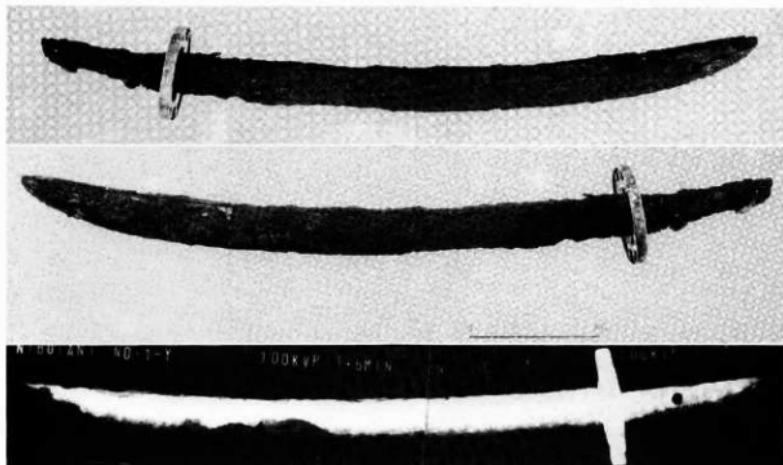
4 1号墓 右大腿骨上 漆器出土状況

5 1号墓 人骨・副葬品状況

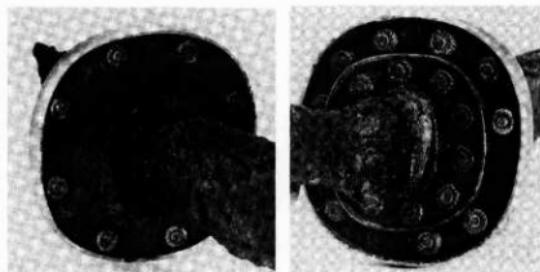


1 1号墓 中柄 (上:表、下:裏)

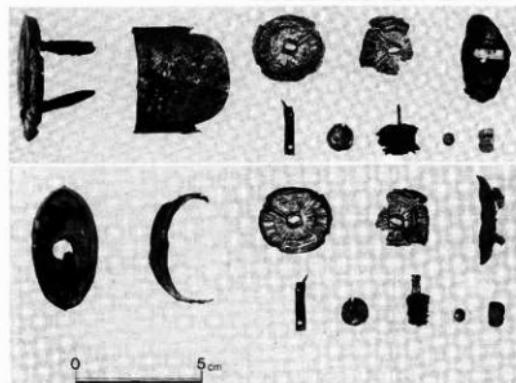




1 1号墓 太刀 (下: X線写真)



2 太刀 鐔部分
(左: 柄側、右: 刃側)



(柄頭 X線写真)

3 太刀 刀装具



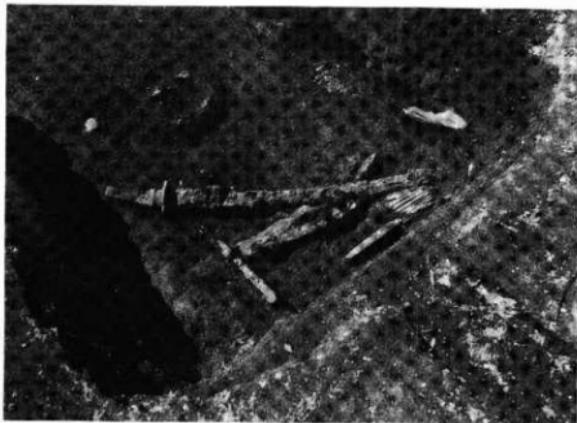
1 2号墓確認



2 2号墓



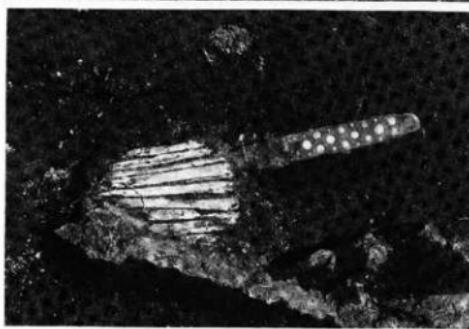
3 2号墓 墓標穴



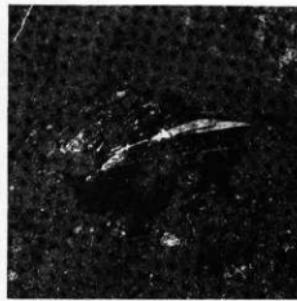
1 2号墓 頭上部分
副葬品出土狀況



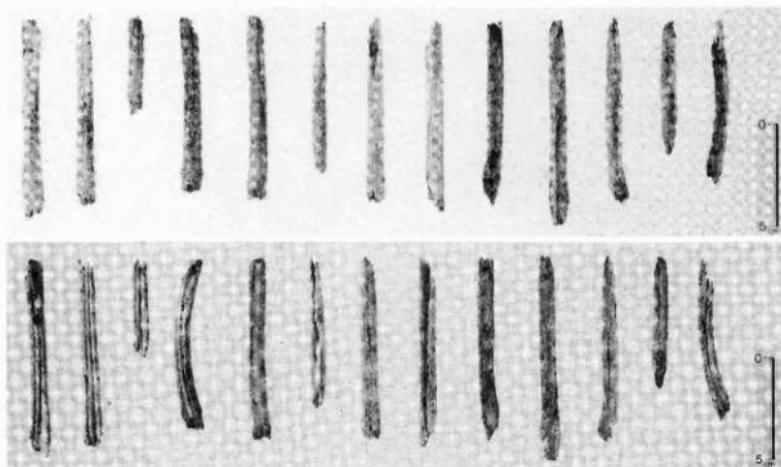
同上



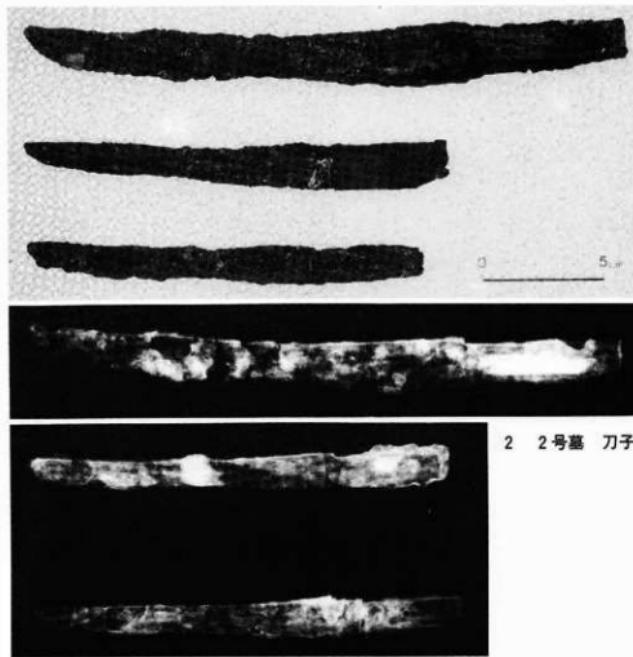
3 2号墓 中柄·刀子出土狀況



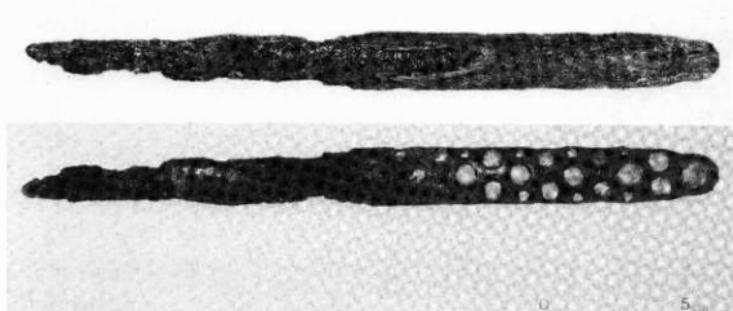
4 2号墓 漆器出土狀況



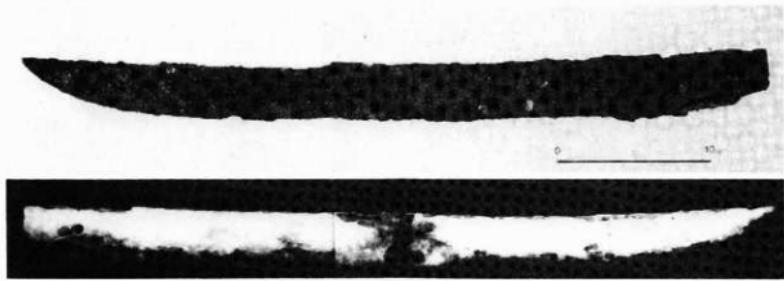
1 2号墓 中柄 (上:表、下:裏)



2 2号墓 刀子 (中・下: X線写真)



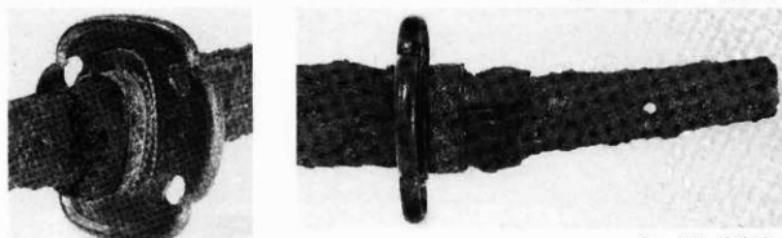
1 2号墓 装飾柄付刀子（下：X線写真）



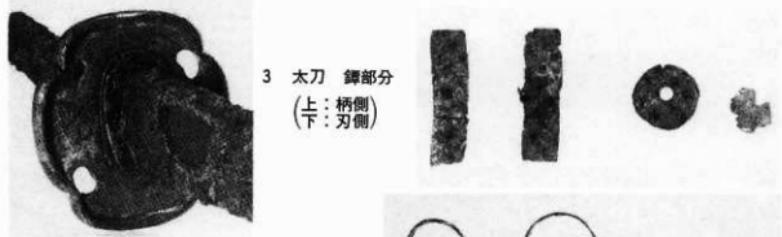
2 2号墓 山刀（下：X線写真）



1 2号墓 太刀 (下: X線写真)



2 太刀 柄部分

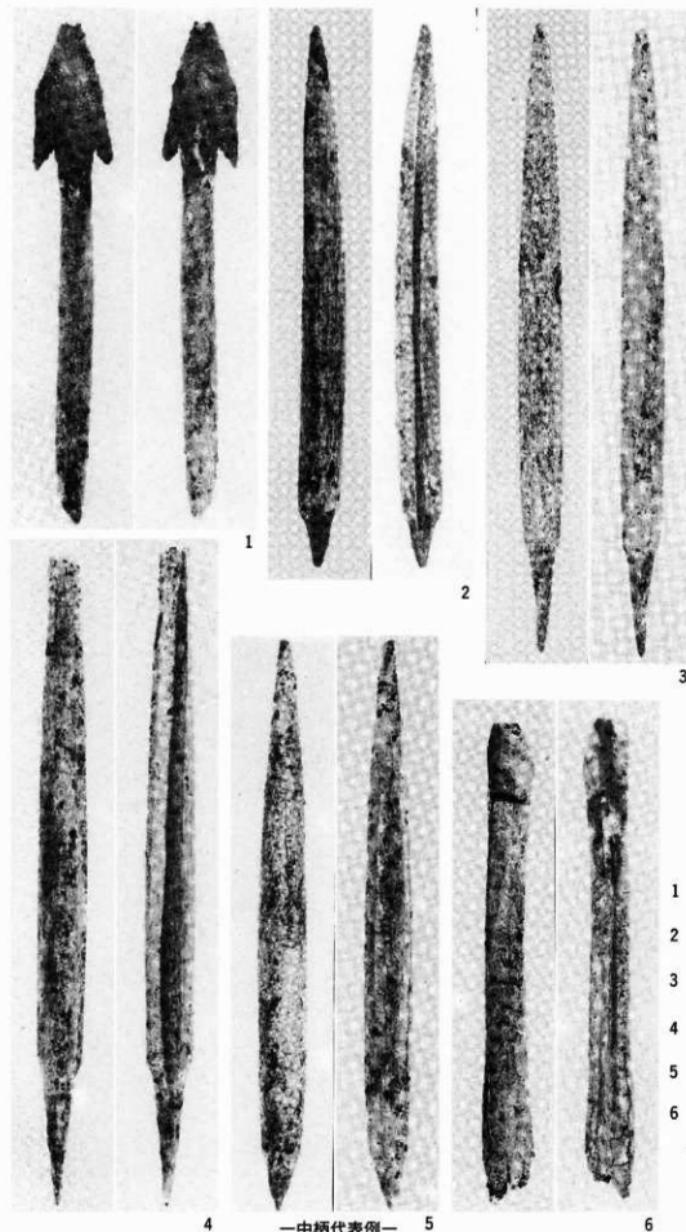


3 太刀 脼部分
(上: 柄側)
(下: 刃側)



4 太刀 刀装具

0 5 cm 5 精金具

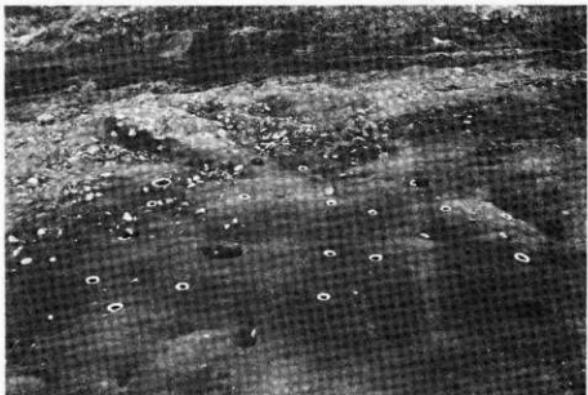


1 1号墓 No.1
2 1号墓 No.11
3 1号墓 No.2
4 1号墓 No.14
5 1号墓 No.16
6 2号墓 No.1
すべて実物大

—中柄代表例—

5

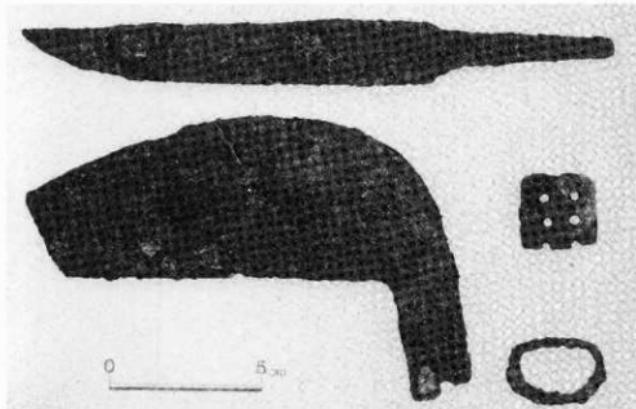
4



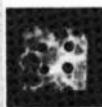
3 III H-1 柱穴断面
(P-13)



4 III H-1 鎏出土状况



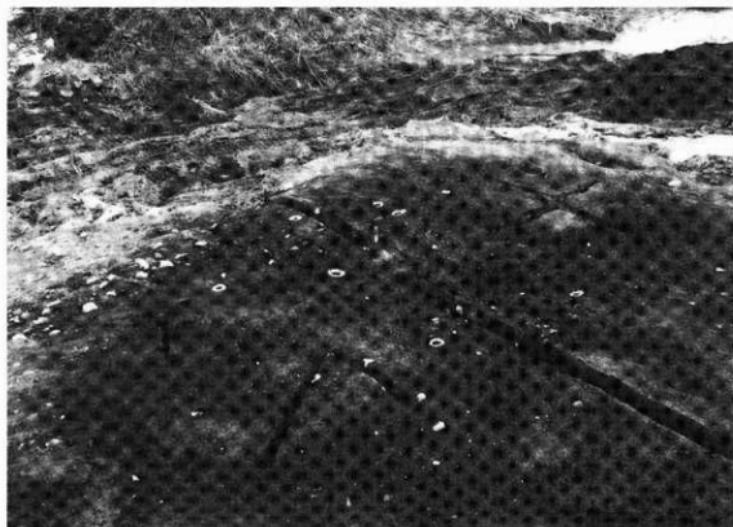
1 III H-1
鉄製品



2 小札 X線写真



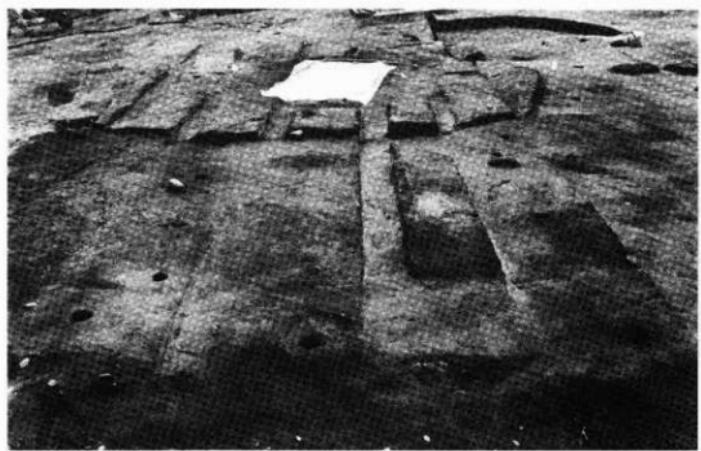
3 III H-1
古銭 (元豐通宝、
X 1)



4 III H-2



5 III H-2 鉄製品



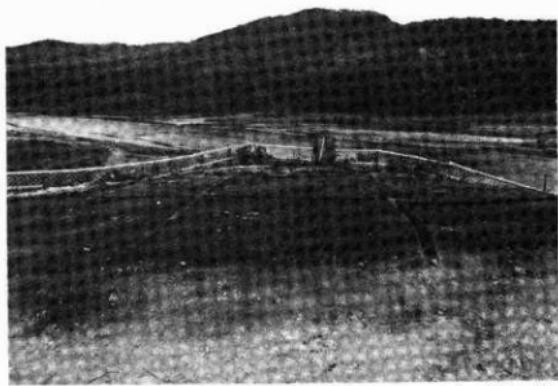
1 III H-3



2 III H-3 炉断面



3 III H-3 鉄製品



4 III H-4

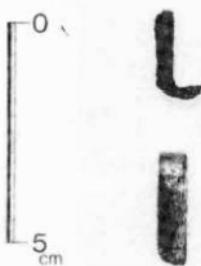


1 III H-4 鉄製品
(右上: 鋸)



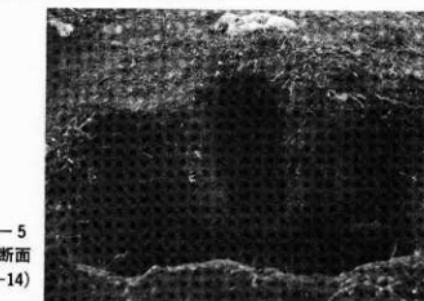
2 X線写真
(上: 鋸
下: 小札)

3 III H-4
鍤石出土状況

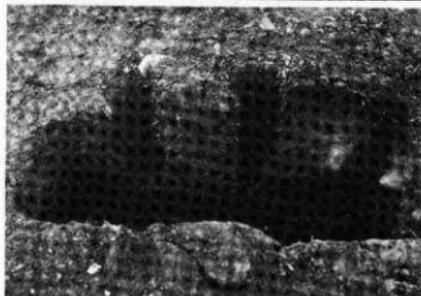


6 III H-5・6 金属製品
(上: III H-5、下: III H-6)

4 III H-5
柱穴断面
(P-14)



5 III H-6
柱穴断面
(P-13・12)

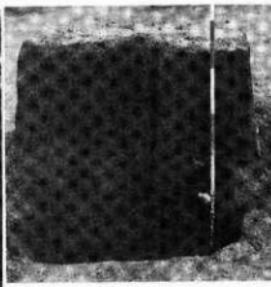




1 III H-7



2 III H-8 柱穴断面 (P-4・6)



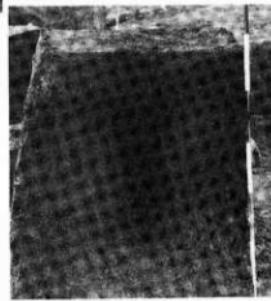
3 III H-8 柱穴断面 (P-9)



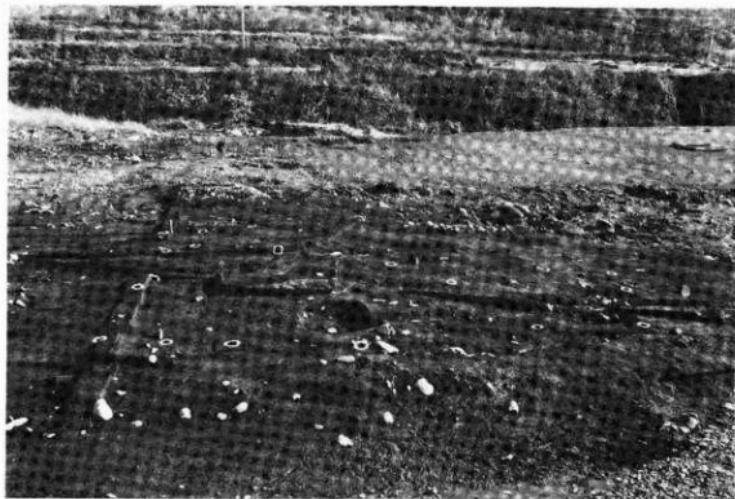
4 III H-8 マレブ出土状況

0 5 cm

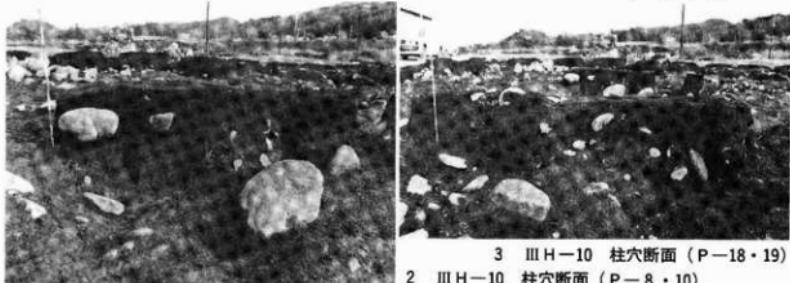
5 III H-8 マレブ



6 III H-9 柱穴断面 (P-3)

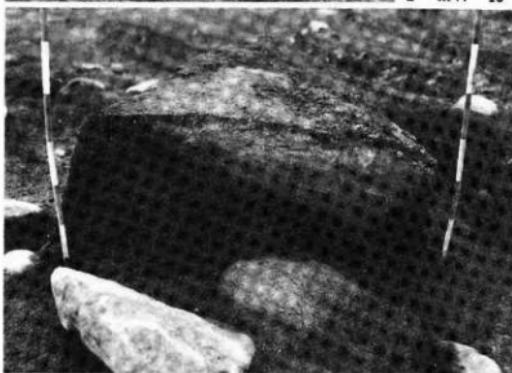


1 III H-10



3 III H-10 柱穴断面 (P-18・19)

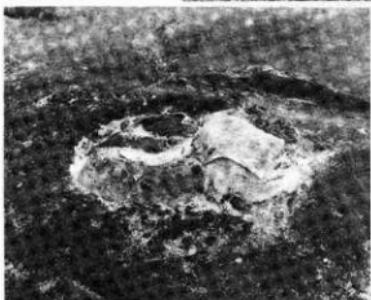
2 III H-10 柱穴断面 (P-8・10)



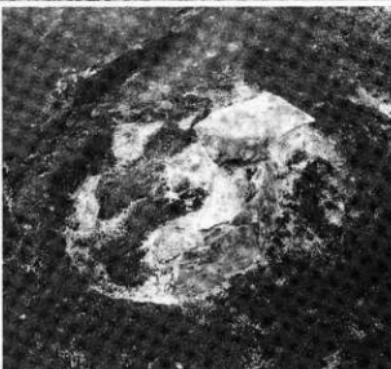
4 III H-10 炉 (F-1) 断面



1 III H-11 柱穴断面
(P-4)



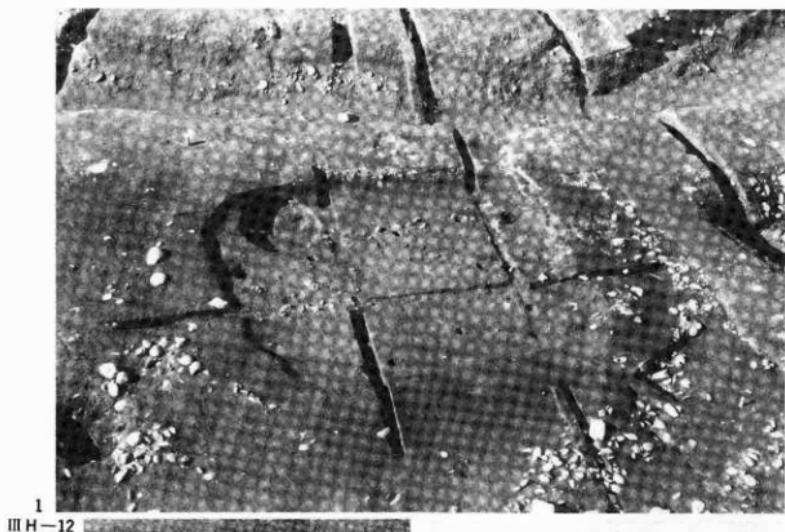
2 III H-11屋外 鐵鍋出土状况



3 同左



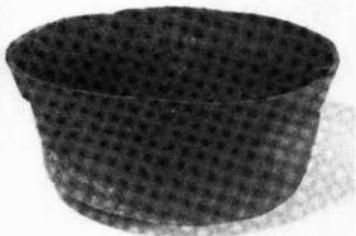
4 III H-11 吊耳鐵鍋



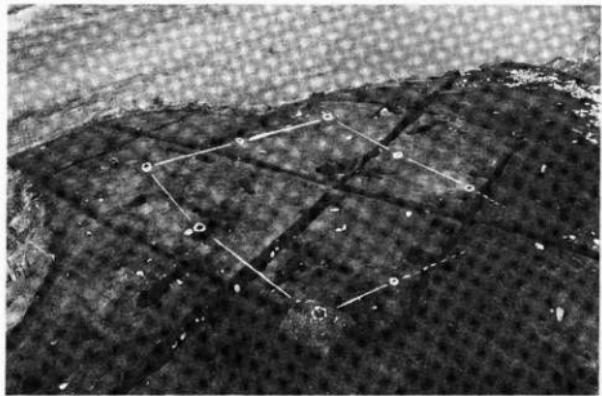
1
III H-12



2 III H-12 内耳鉄鍋出土状況



3 III H-12 内耳鉄鍋

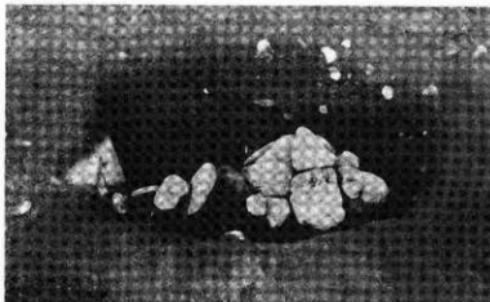
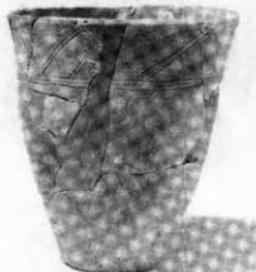


4 III H-13 (ボロモイチャシ A 級の)
建物跡と重複





1 III P-1 鐵製品



2 (左上) III P-2 土器

3 (右下) III P-2

4 (左下) III P-2 土器出土狀況



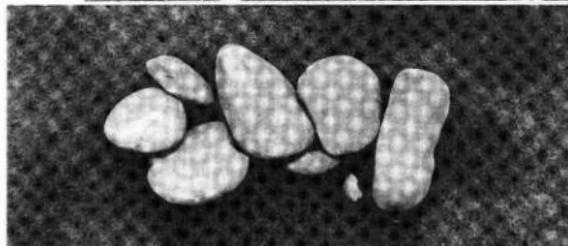
5 III F-6 出土

鹿角製銛先

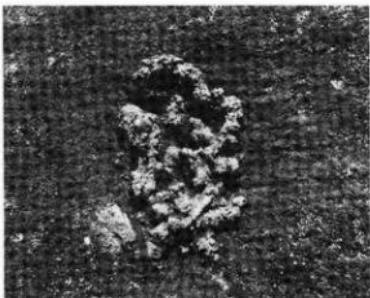
(X 1)



6 III F-6 斷面



7 集石



1 垂鈸出土状況 2 D-36



2 刀子出土状況 2 E-42



3 鐵斧出土状況 W-41



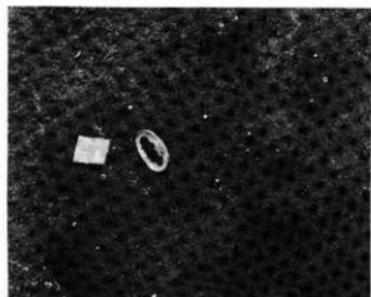
4 鋤出土状況 2 E-38



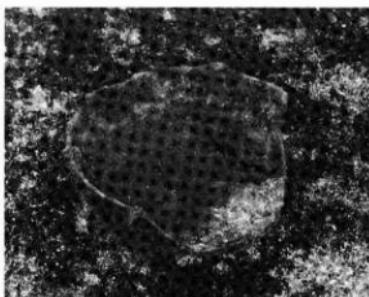
5 鋤先出土状況 Y-39



6 鋤先・錘石出土状況 2 A-40



1 ビーズ玉・刀装具出土状況 2 F-51



2 小型鉄鍋出土状況 2 E-29



3 鉄斧（鉈）出土状況 S-30



4 鎖出土状況 2 E-50



5 マレフ出土状況 W-43



6 ヤス出土状況 T-35



1 锤石出土状况 X-43



2 锤石出土状况 2 A-39



3 锤石出土状况 2 A-48



4 擦文土器出土状况 E-6



5 擦文土器出土状况 F-5



6 擦文土器出土状况 F-6



7 擦文土器出土状况 F-9



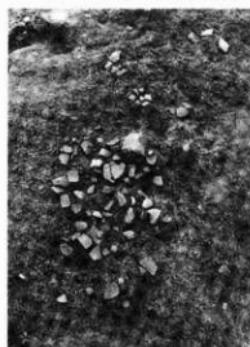
8 擦文土器出土状况 F-10



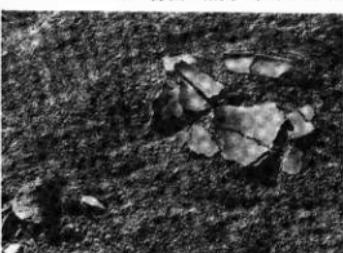
1 擦文土器出土状況 F-10



2 擦文土器出土状況 K-28



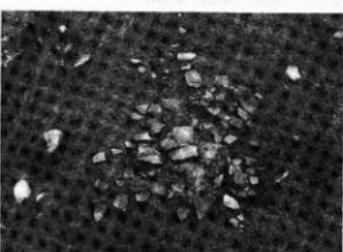
3 擦文土器
出土状況
P-20



4 擦文土器出土状況 S-25



5 擦文土器出土状況 Y-44



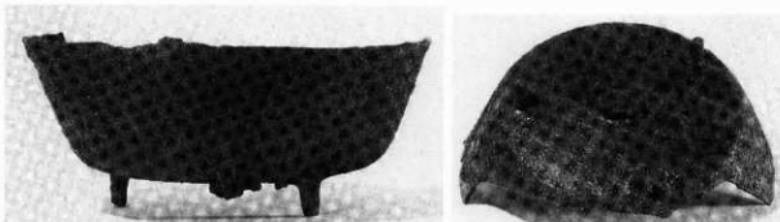
6 擦文土器出土状況 Z-41



7 擦文土器出土状況 Z-45



8 擦文土器
出土状況
2 E-37・38



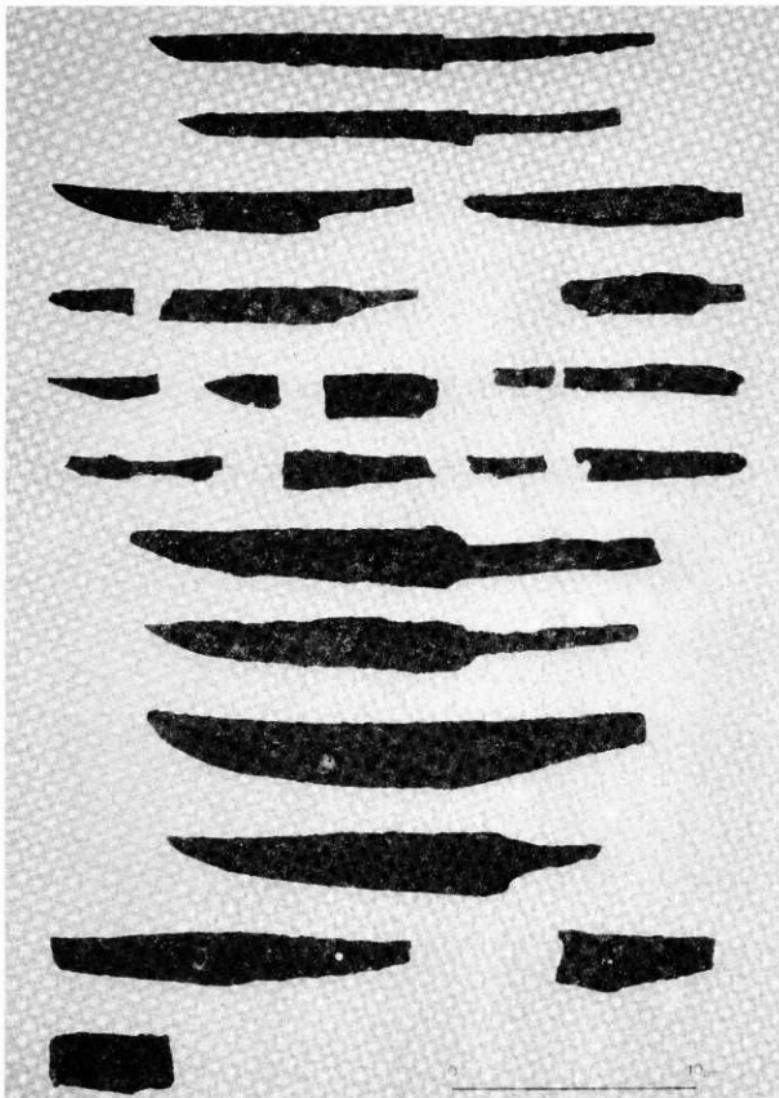
1 小型鐵鍋

2 同左底部

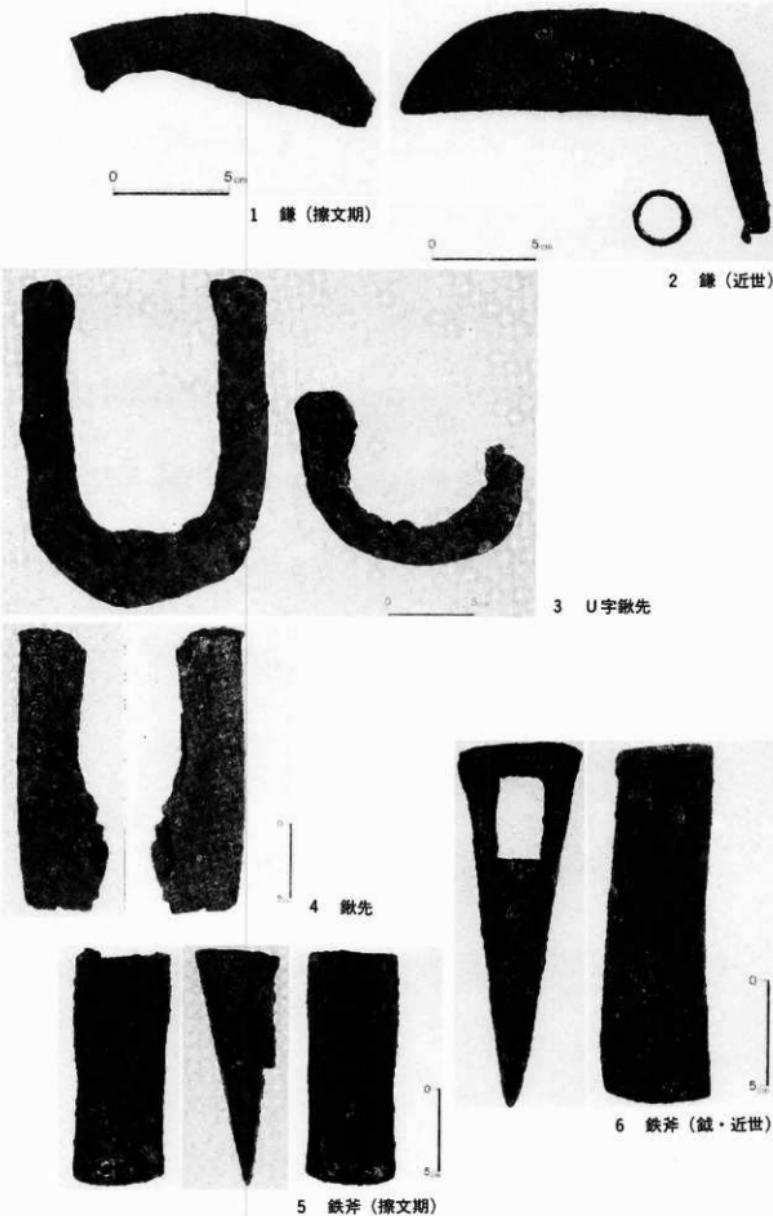


3 鐵鍋

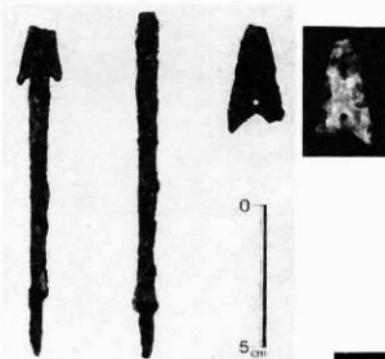
4 刀・ナタ (上:刀X線写真)



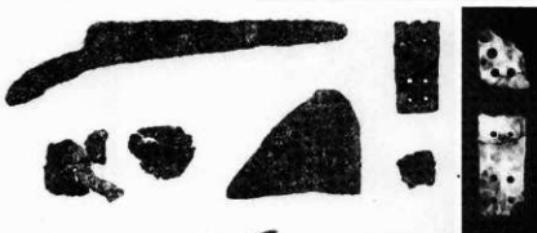
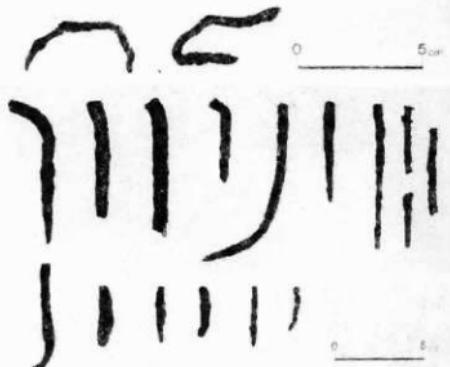
1 刀子



5 鐵斧 (鐵・近世)



1 鉄 (右:X線写真)

2 魚獲具 (アツ・マレフ・ヤス)
(左下:マレフ X線写真)3 鉄製品
(右上:小札X線写真)

4 鉄製品 (棒状鉄器)



1 垂飾 (下: X線写真)



3 古銭 (X 1)



2 刀装具



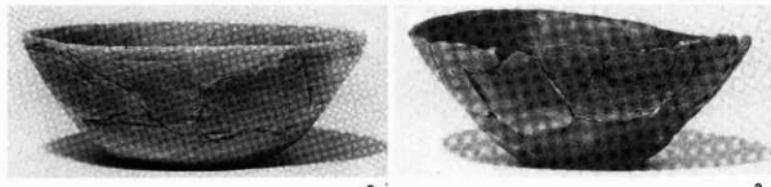
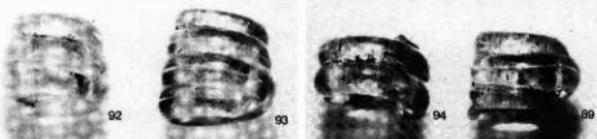
4 土製品 (X 1)

5 石製品



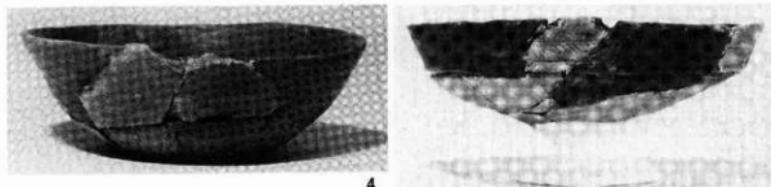
1 ビーズ玉

右6枚は拡大
Naは実測図に
符合する。



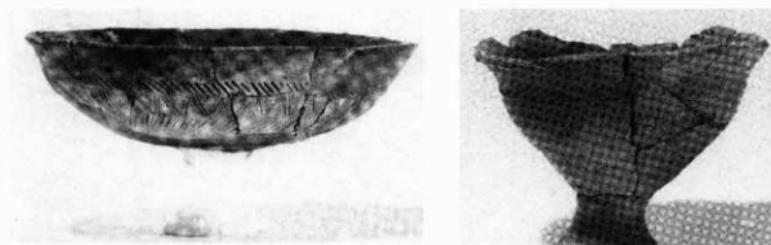
2

3



4

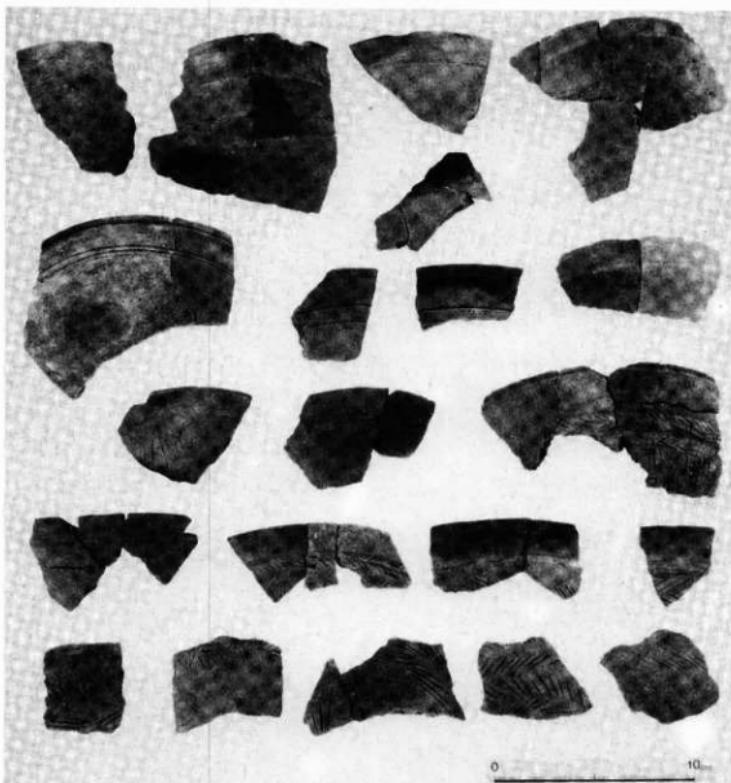
5



6

7

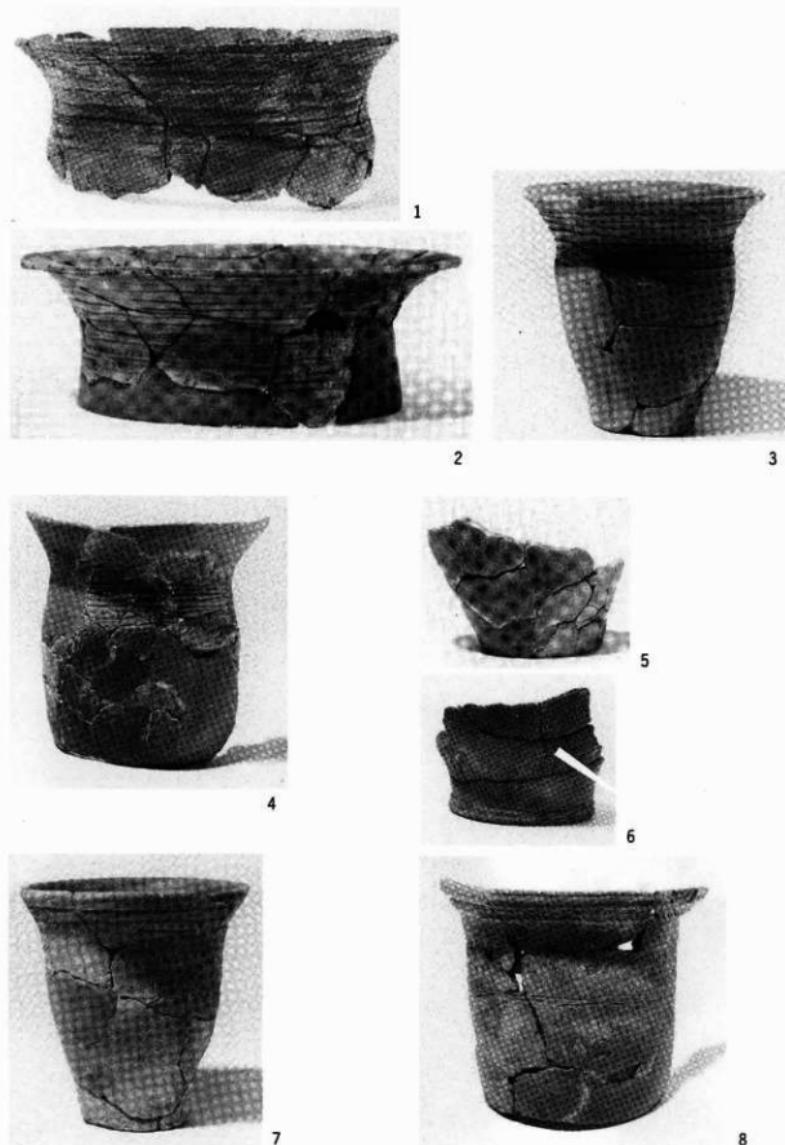
2～7 III層出土土器 (2～4环)
(5～7高环)



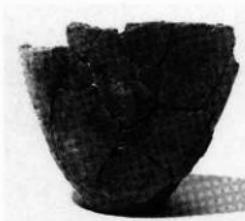
1 III层出土土器（坏·高坏）



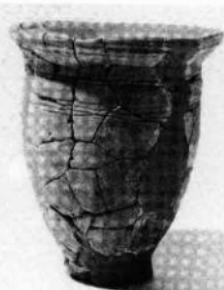
2 高坏脚部



III層出土土器



1



2



3



4



5



6

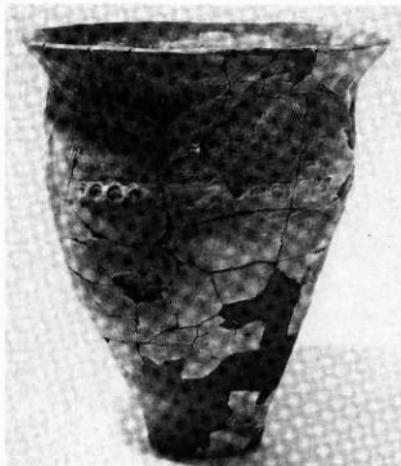


7

III層出土土器



1



3



2



4



5

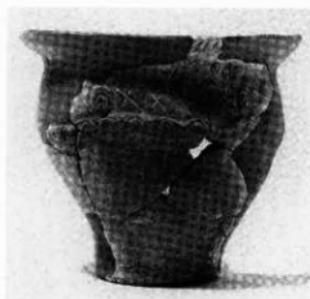


6

III層出土土器



1



3



2



4



5



6



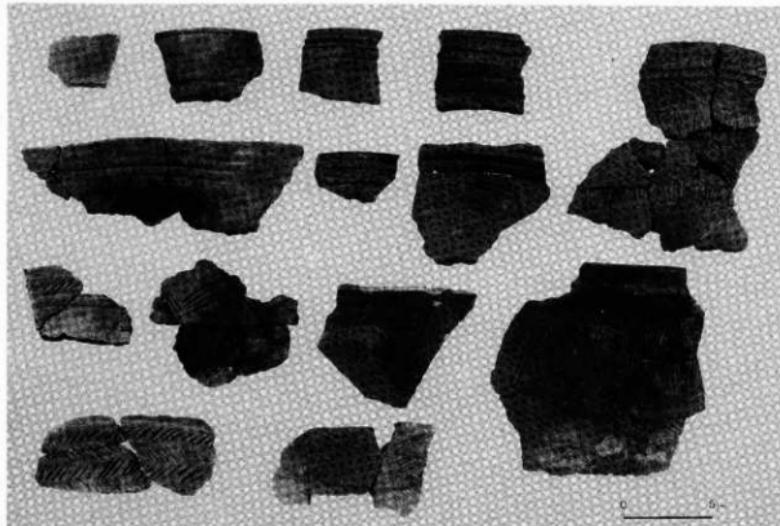
7



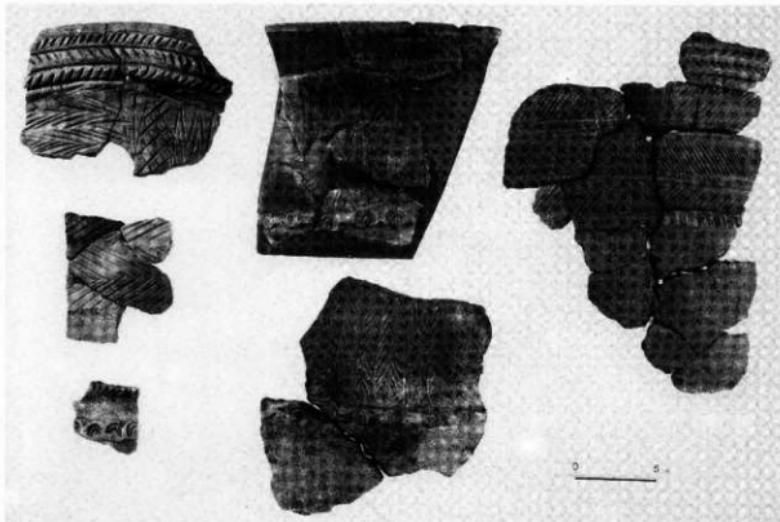
8

III層出土土器

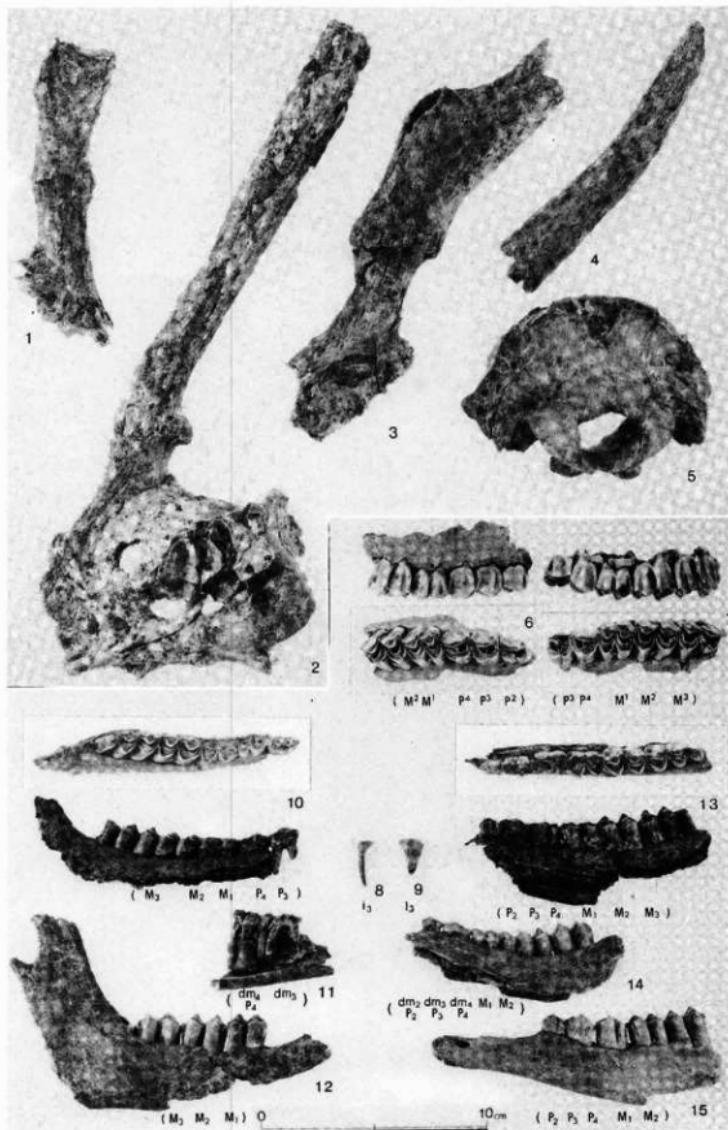
5～8 底面



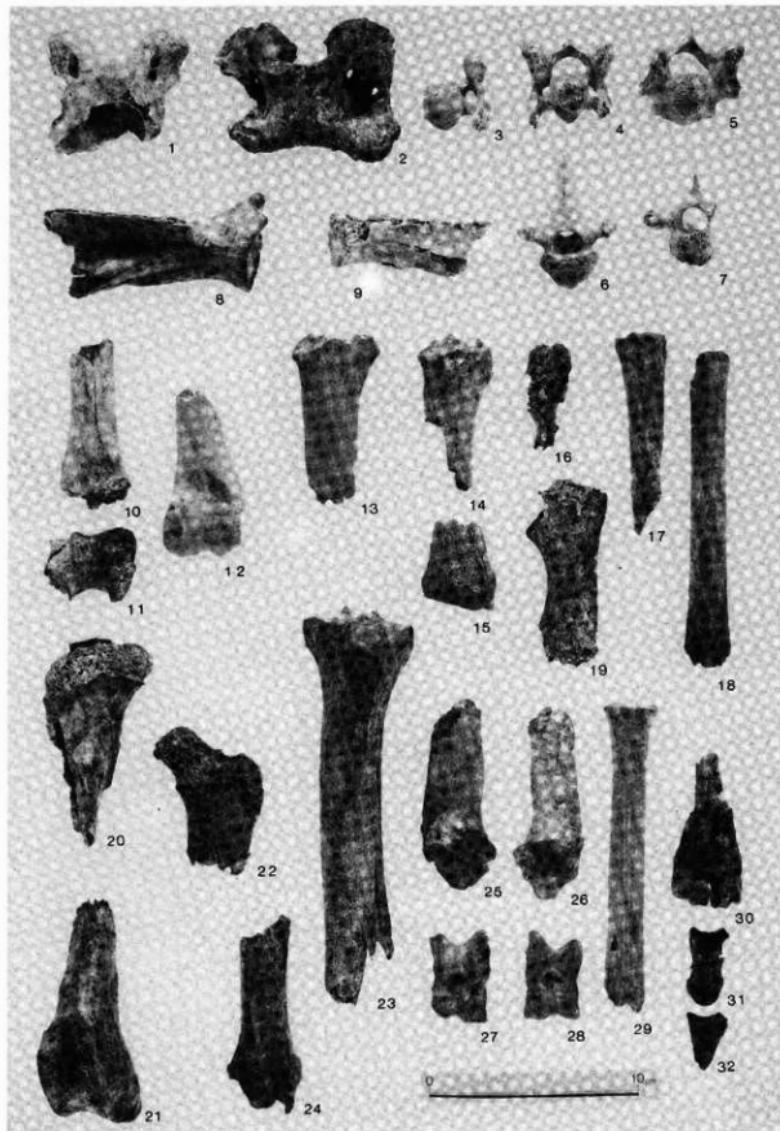
1 III層出土 土器片



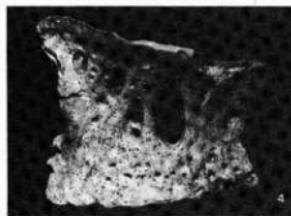
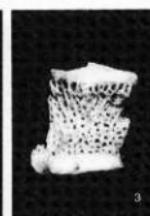
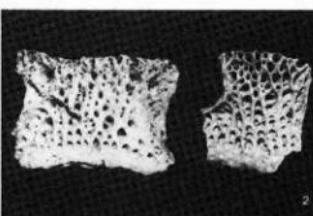
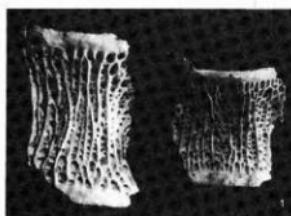
2 III層出土 土器片



[動物遺存体(エゾシカ)
(第1枝) 5 後頭骨
12 右、下顎 13~15 左、下顎 (2はX-40区送り場、他はユオイチャシ柵列跡)]



[動物遺存体(エゾシカ・ヒグマ) 1・2 環椎 3~5 頸椎 6・7 胸椎 8・9 肩甲骨(左・右)
10~12 上腕骨(右・右・左) 13~15 横骨(左・左・右) 16 左・尺骨 17・18 中手骨(右・左)
19 右・寛骨 20・21 右・大腿骨 22 ヒグマ、左・大脛骨 23・24 鹿骨(左・右) 25・26
踵骨(左・右) 27・28 距骨(左・右) 29・30 中足骨(右・左) 31 中節骨 32 末節骨 (22以
外はエゾシカ、9はT-28区、12はE-9区、他はユオイチャシ櫛列跡)]



- 1 サケ椎体 III H-3 炉
- 2 サケ椎体 ポロモイ A 炉
- 3 サケ椎体 ポロモイ A 炉
- 4 イトウ椎体 III H-3 炉
- 5 イトウ椎体 ポロモイ A 炉
- 6 キュウリ椎体 III H-3 炉
- 7 キュウリ椎体 III H-3 炉
- 8 シャマ椎体 III H-3 炉
- 9 シャマ椎体 III H-3 炉
- 10 ウグイ椎体 ポロモイ A 炉
- 11 ウグイ椎体 ポロモイ A 炉
- 12 カジキ椎体 ユオイ櫛列
- 13 ウバガイ左殻 R-28区

$(1 \sim 11 : \times 10)$
 $(12 : \times 1)$
 $(13 : \times \frac{1}{2})$

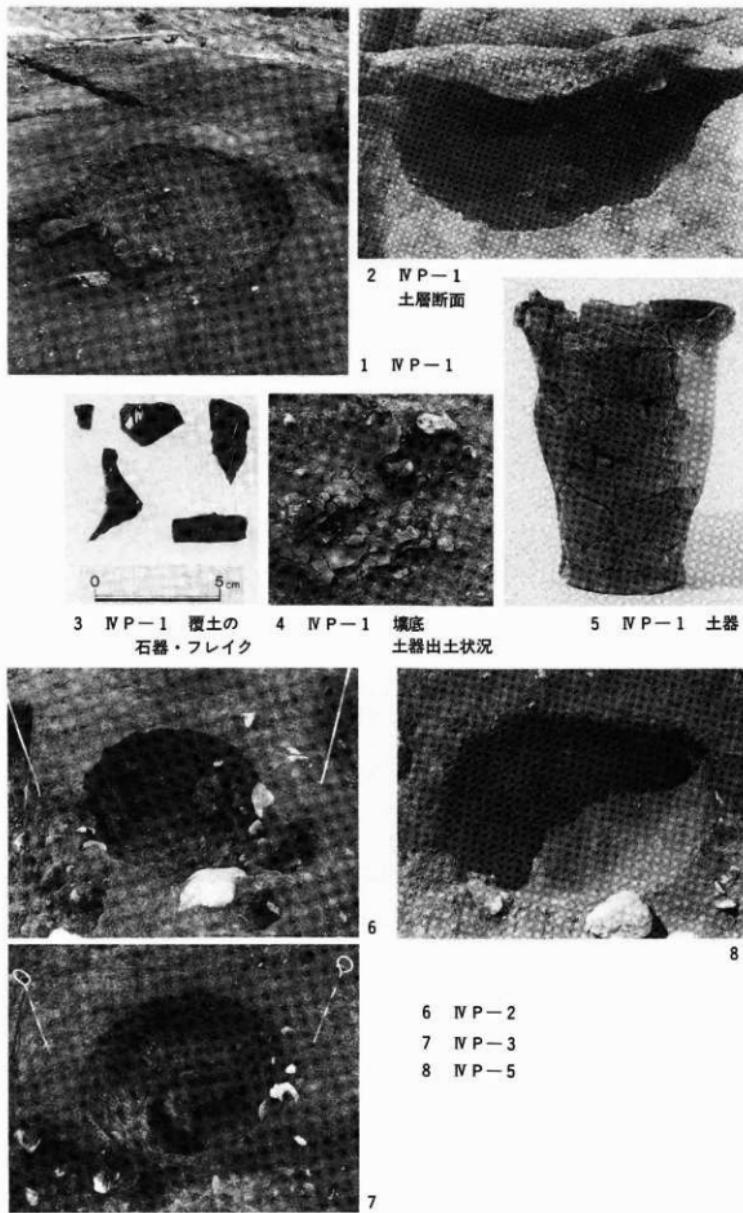


12



13

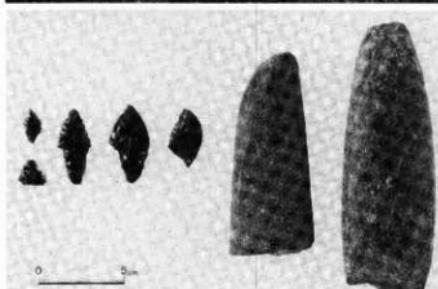
動物遺存体（貝・魚）





1 IVH-1

2 IVH-1 床面 石皿



3 IVH-1 石器

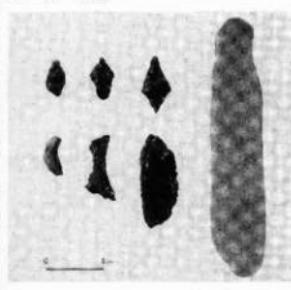


4 IVH-1 外周 土器



5 IVH-2

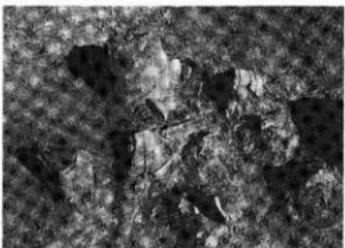
6 IVH-2 石器



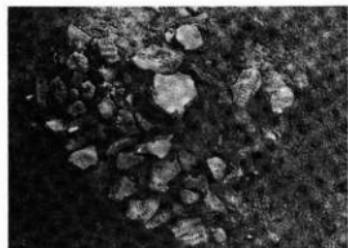
7 IVH-2 土器



1 縄文土器出土状況 R-27



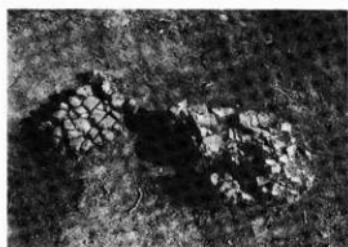
2 縄文土器出土状況 R-27



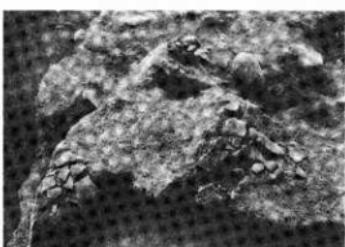
3 縄文土器出土状況 F-9



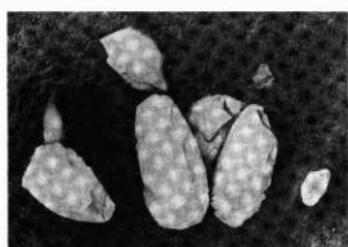
4 縄文土器出土状況 S-34



5 縄文土器出土状況 M-N-31・32



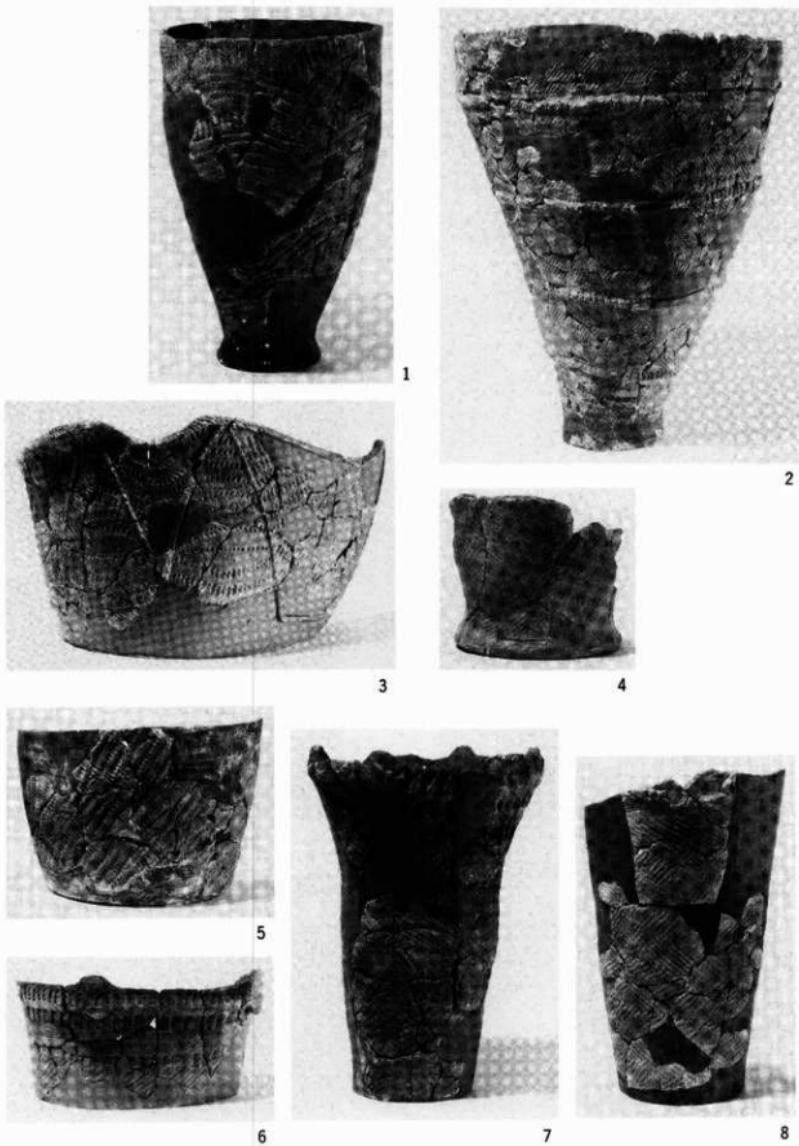
6 縄文土器 出土状況 O-32



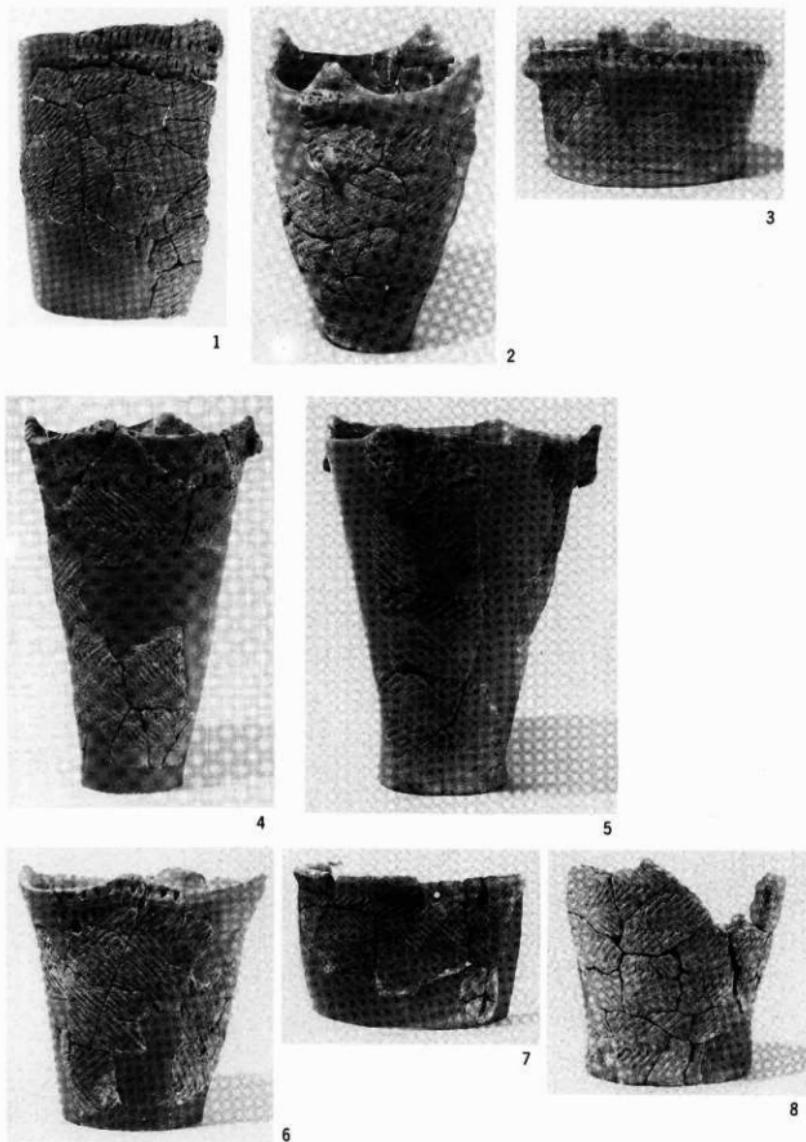
7 石器出土状況 G-13



8 石斧出土状況 R-28



IV層出土 土器(1)



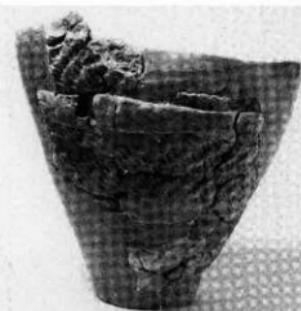
IV層出土 土器(2)



1



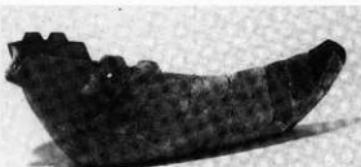
2



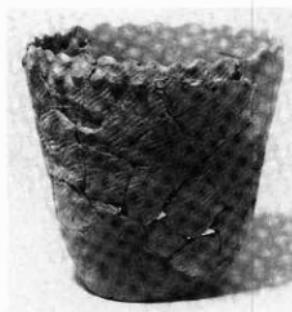
3



6



7

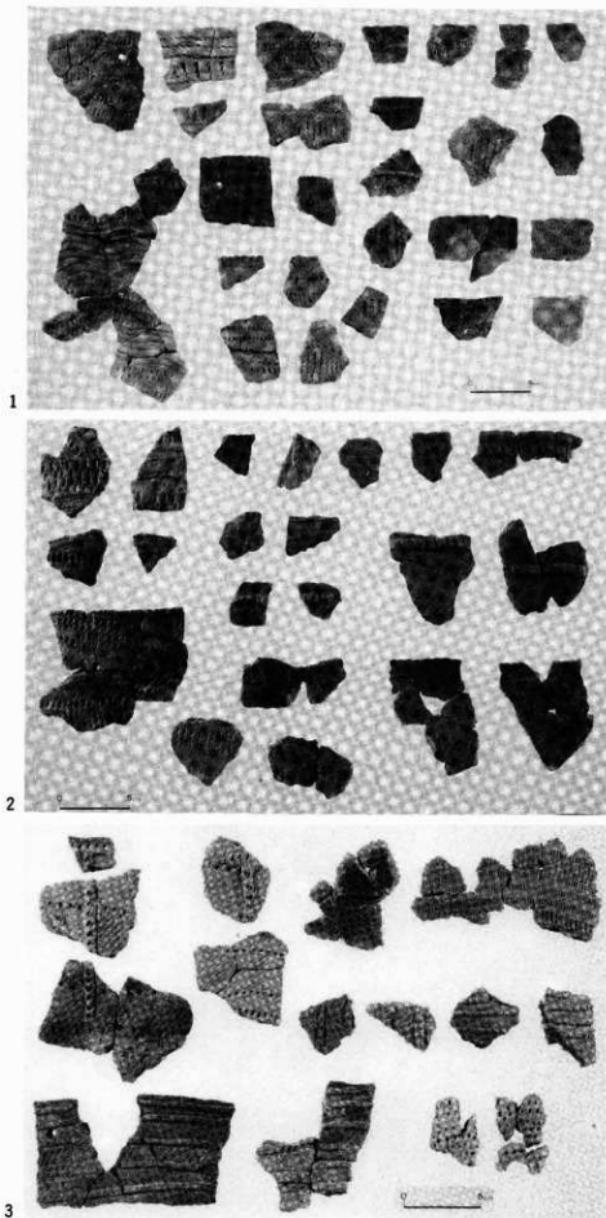


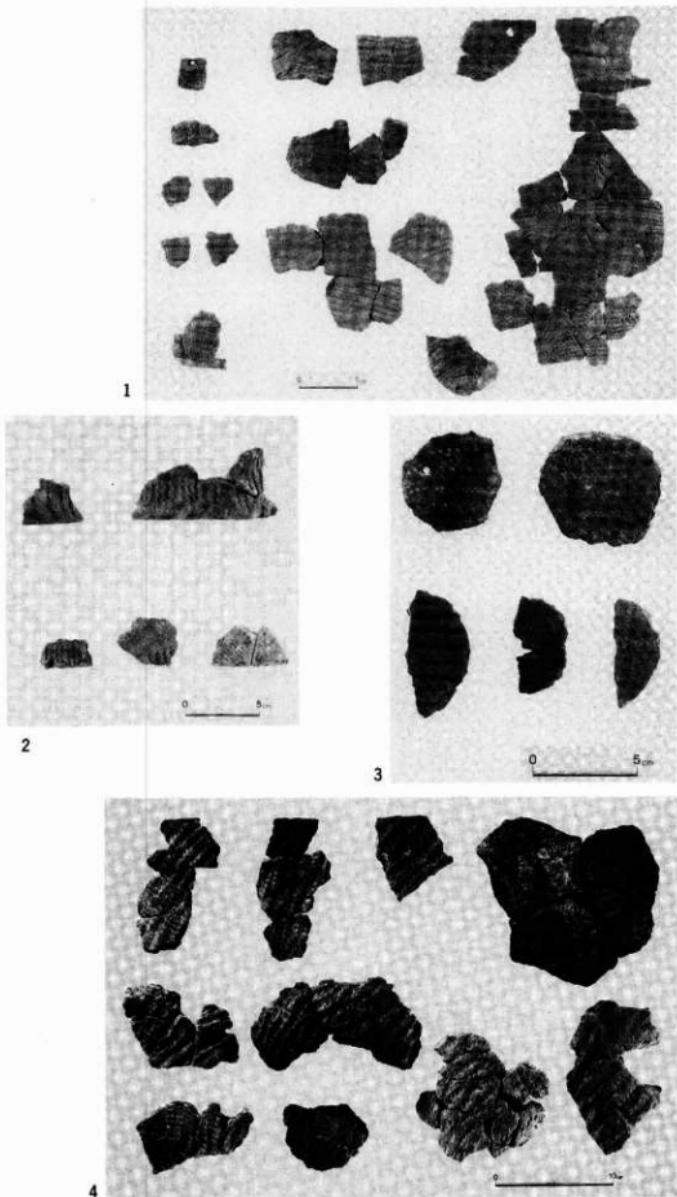
5

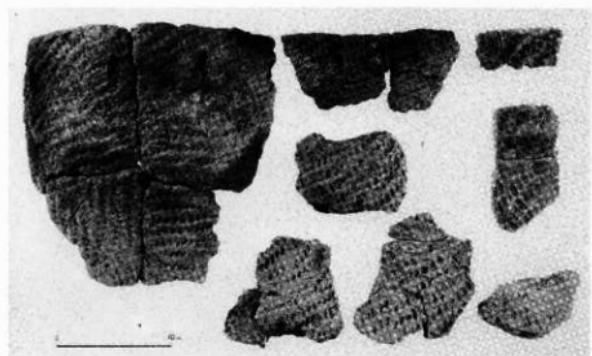
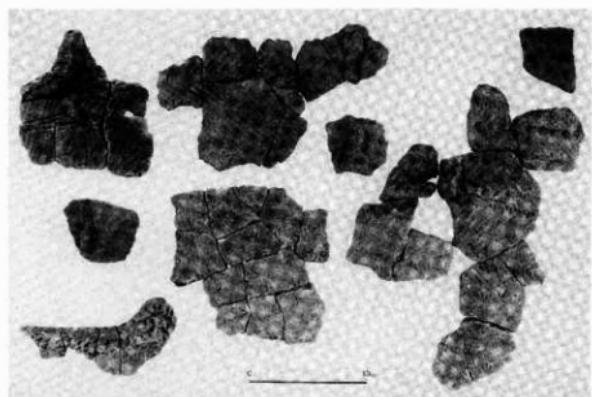
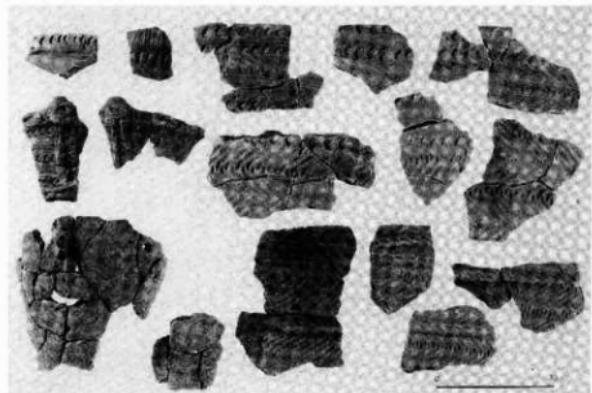


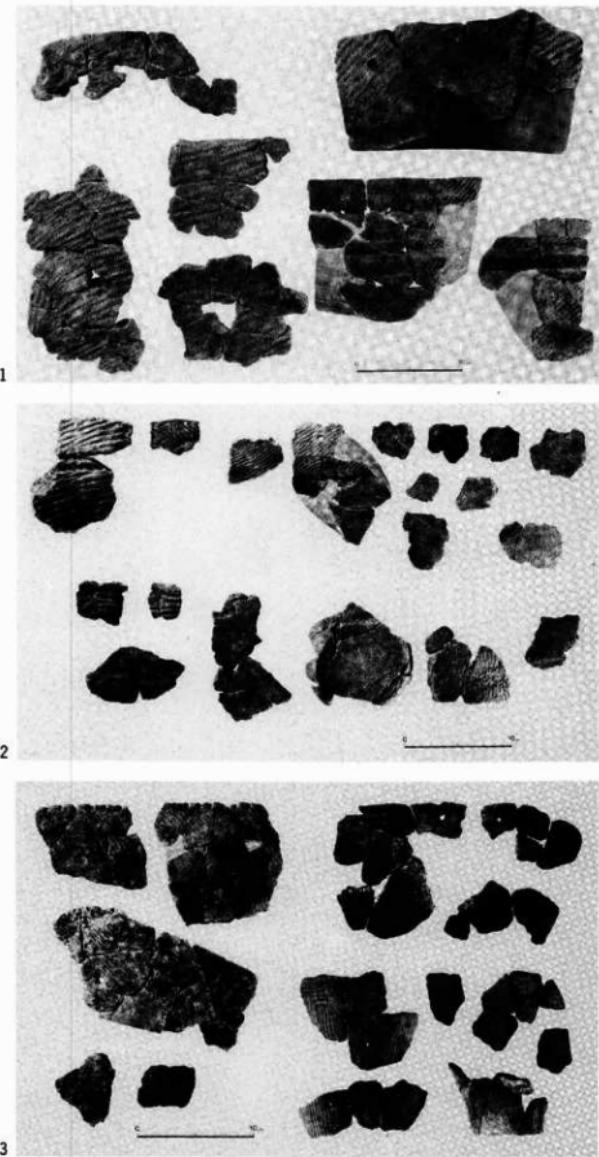
8

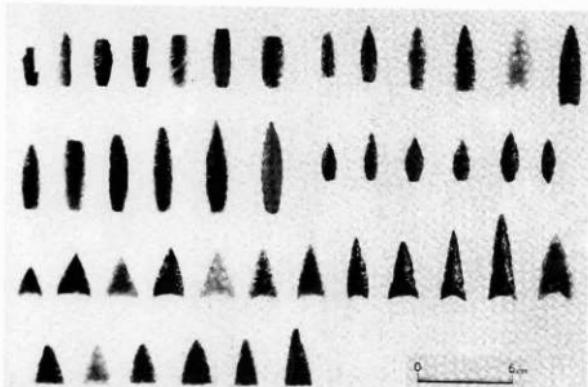
IV层出土 土器(3)



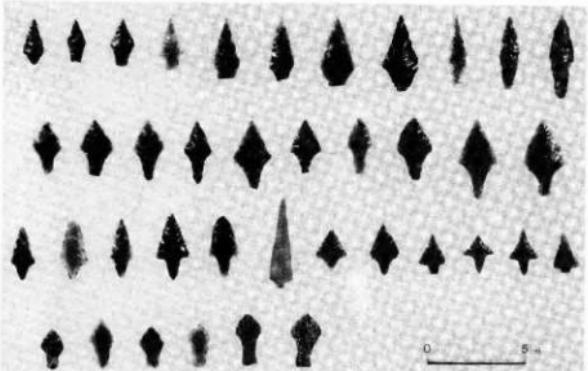




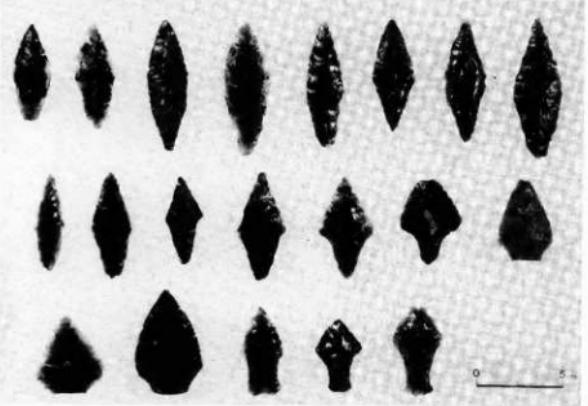




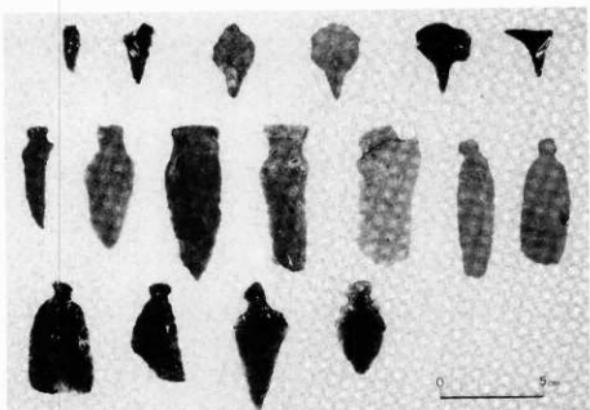
1 IV層出土の石鏃(1)



2 IV層出土の石鏃(2)



3 IV層出土の石槍



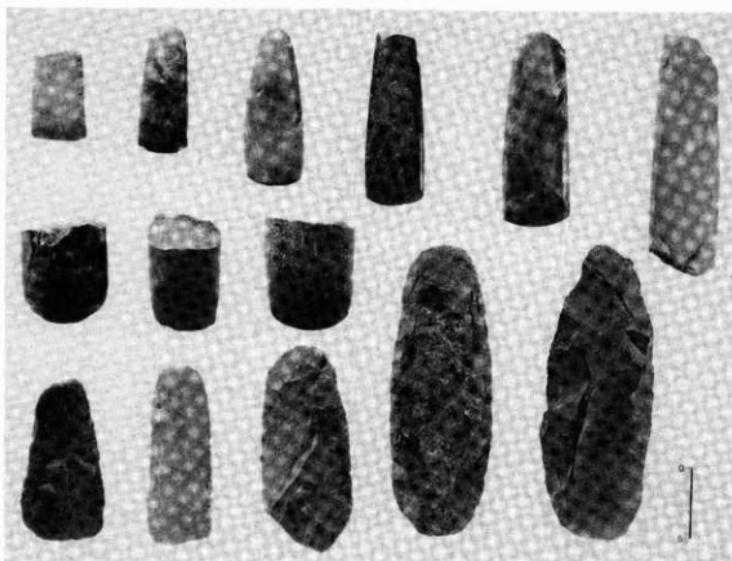
1 IV層出土の
石錐・石匙



2 IV層出土の削・撃器



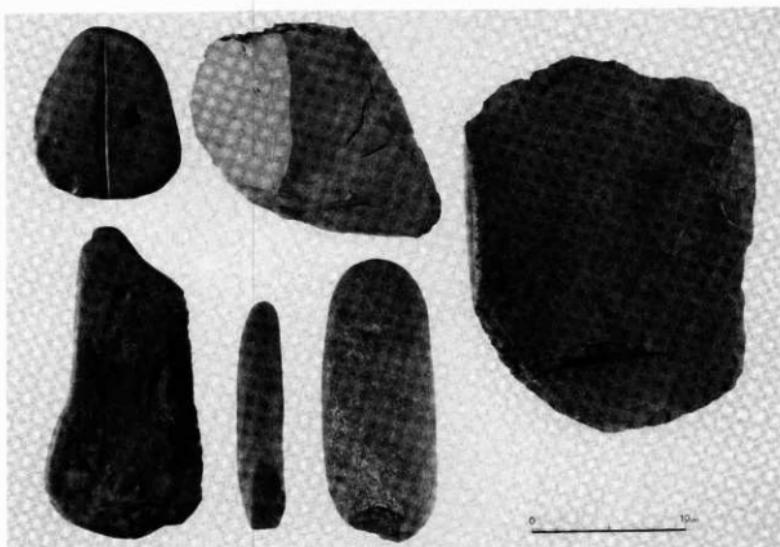
3 IV層出土
その他の石器・石核



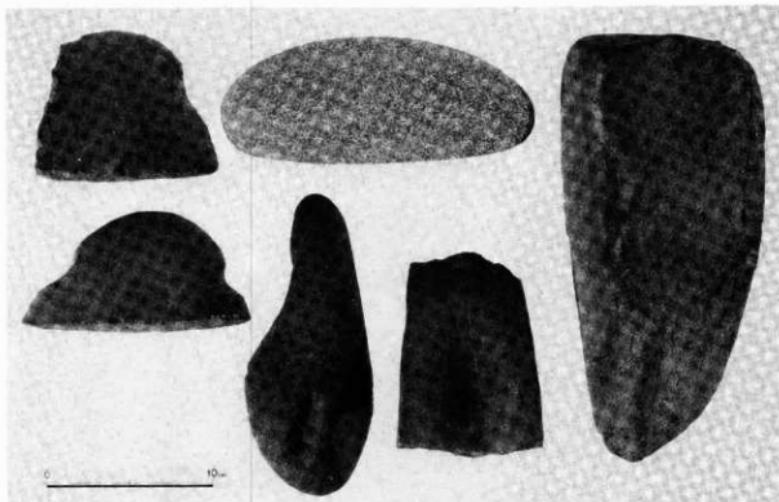
1 IV層出土の石斧



2 IV層出土の石斧



1 IV層出土の礫石器(1)



2 IV層出土の礫石器(2)

VII まとめ

付 篇

二風谷遺跡から出土した植物遺体について

矢野 牧夫

木材の樹種同定について

三野 紀夫

VII まとめ

1. 概括

前章までに報告したように、ユオイチャシ跡、ボロモイチャシ跡、二風谷遺跡からは、縄文時代早期から近世に至る、長期間に及ぶ遺構、遺物の検出があった。遺構には、チャシ跡をはじめ、建物跡、墓跡、道跡、送り場跡、炉跡、堅穴住居跡、土壤など各種のものがあり、遺物もまた、土器、石器から、金属器、漆器、骨角器、ガラス製品、鍾石、そして動植物の遺存体と、多様であった。このような多岐にわたる分野、事項について、それぞれ整理を分担し、執筆を割り振って、報告書を取りまとめたわけだが、結果的には、項目別の過不足や記載における不統一などが、十分回避できていない。また、本章では、調査結果について一応まとめるが、時間が不足で、対象は、ほぼ近世に限られる。

さて、沙流川流域は、近隣の鶴川中流域、静内川流域などと並んで、チャシの分布が濃密なことで知られている。潰滅したもの、地点が不明なものも含まれるが、沙流川流域では、現在、27カ所のチャシが数えられる。それらの位置や概要は、図121、表36に示すとおりで、鶴川筋のオルイカチャシ跡は別に扱う。オマンルバロやカムイミンタル、送り場などは、参考のために掲載したものである。なお、未登載だが、平取町内にも、カンカンの瀧の上手のオマンルバラ(二風谷部落誌編纂委員会1983)やキソオマップの穴(平取外八カ村小学校組合会1917)など、いわゆる冥界への入口があるという。

沙流川流域のチャシは、直線距離を図示したように、比較的短かな間隔で続いている。このような分布状態については、泉靖一氏のイオルに関する研究(泉1952)を踏えて、本堂寿一氏は、イオルとチャシがセットであり、漁獵区の占有的標示としての位置、すなわちベトイオル(川の漁場)の境界線に接する付近にチャシが造られたことを論断した(本堂1977)。そして、日高地方のチャシの多くが、「イオルの占有とその争奪の最も激化した時期、すなわちシャクシャインとオニビンが対立していた頃の短期間に製造された」(本堂1978)と考察している。それは、チャシの発生が惣大将制の形成に対応するもので、チャシの発生年代が17世紀初頭あたりに求められるとする、海保樹夫氏の見解(海保1973、1974)を承けたものである。チャシとイオルやコタンが密接な関係にあることは、宇田川洋氏によって、さらに詳しく追究されている(宇田川1980、1983)。

確かに、今回の出土品をみても、刀剣類や武具、鍋、農具や漁具など、鉄製品をはじめとする金属器や、漆器類などは、かなりの量にのぼる。これに、米や酒、衣料品など遺存しない生活物資の存在も考え合せると、本州方面からの移入品に対する依存度は、決して低くなかったことが知られる。当然ながら、それらを入手、交換するための代価となる資源の確保や、移出品の増産は、当時のアイヌ社会において、最優先の課題であったに違いない。

ボロモイチャシ跡の内部には、建物があった。特にA郭のそれは、敷地の大半を占める大きなもので、恒常的な居住にも十分耐えうる構造や設備をもっていたらしい。壁の内側の土壁上には棚がめぐり、ユーカラに語られた英雄の居館を彷彿させるものがあった。ユーカラに表現されたチャシを集成した、佐々木真弓、宇田川洋の両氏は、ユーカラ全体を通して、チャシは住居として登場する例が多く、砦というより、住居的機能が強調されていることを詳述している(佐々木・宇田川1985)。ボロモイチャシは、両氏の分類にいう「出崎にあるチャシ」に含まれよう。「惣大将制とチャシが密接不可分である」とした海保樹夫氏は、チャシには、「大酋長個人の所有に近く、その住居化していた」ものがあることを予測したが(海保1973)、ボロモイチャシは、居館と認定するに足るものであり、速断はできないが、個人所有のチャシであった可能性が考えられるように思われた。

表36 沙流川流域チャシー一覧

No.	チャシ期名称	遺物數量	形態	様の形状や數など	立地	標高	比高	備考	文献
1	柏知底	K・02・14	丘先式	弧状1枚 弧状1枚	沙流川右岸 沙流川左岸	小舌状部	160	20	石灰岩斜面により遺構 海外から海浜、小川、刀等
2	オダリオチャシ	K・02・50	丘先式		沙流川左岸		130	30	海外から海浜、小川、刀等
3	オウコナツイ	K・02・51			沙流川左岸				藤本編1980
4	ロランエトウ	K・02・52	丘先式、面施式	直状1枚、半円1枚 直状3枚(底部2、先端1)	沙流川左岸 沙流川左岸	舌状部	65	15	遺跡遺構により遺構 海外から海浜
5	アランビタ	K・02・53	丘先式、面施式	直状1枚、半円1枚 直状3枚(底部2、先端1)	原平川左岸 原平川左岸	舌状部	100	10	一部土草りにより遺構 海外から海浜
6	トウタイ	K・02・55	丘先式	直状1枚	原平川左岸 原平川左岸	舌状部	65	10	一部土草りにより遺構 海外から海浜
7	ニサンビラ	K・02・56	丘先式	直状1枚	原平川左岸 原平川左岸	舌状部	95	25	先端部は施歯で飾る 海外から海浜
8	ミアンビタ	K・02・58	丘先式	直状1枚	原平川左岸 原平川左岸	舌状部	70	20	町史ではコヨイチデナ 海外から海浜
9	スケレーベ	K・02・60	丘先式	直状2枚(底部1、先端1)	原平川左岸 原平川左岸	舌状部	100	20	先端部は川底移で遺構 海外から海浜
10	トウラシ	K・02・54	丘先式	弧状1枚	原平川左岸 原平川左岸	舌状部	98	30	海外から海浜
11	ニオイ	K・02・18	丘先式(風船式)	直状1枚	原平川左岸 原平川左岸	舌状部	90	20	昭和初期まで分布有在 海外から海浜
12	ウン	K・02・57	丘先式	直状1枚	原平川左岸 原平川左岸	舌状部	70	20	海外から海浜
13	ベガントウ	K・02・59	丘先式	弧状1枚	沙流川左岸 沙流川左岸	小舌状部			海外から海浜
14	ベナルコ	K・02・61			沙流川左岸 沙流川左岸				海外から海浜
15	ニナフミ	K・02・62	丘先式	弧状1枚 直状4枚(底部1、先端3)	沙流川左岸 沙流川左岸	舌状部	62	20	町史では第2条
16	ボンガルカン	K・02・63	丘先式	直状2枚	沙流川左岸 沙流川左岸	舌状部	59	20	海外から海浜
17	ボモキ	K・02・64	面施式	弧状2枚	沙流川左岸 沙流川左岸	舌状部	48	15	町史ではボモキチャシ
18	ニオイ	K・02・65	丘先式	弧状2枚	沙流川左岸 沙流川左岸	舌状部	47	13	海外から海浜
19	アベツ	K・02・19	丘先式	東西に土・石墨	沙流川左岸 沙流川左岸	舌状部	160	110	一部先端部
20	サルバ	K・02・66	丘先式	弧状1枚	沙流川右岸 沙流川右岸	舌状部	60	35	海外から海浜
21	シウンコツ	K・02・2	丘先式	弧状1枚	沙流川右岸 沙流川右岸	舌状部	40	20	町史ではシウンコツイ
22	エシゴロカン	K・03・67	丘先式(正圓形)	直状1枚 3つの窓を作出	沙流川右岸 沙流川右岸	舌状部	70	50	規則が大きい
23	ビラバタ	K・03・74	丘先式(正圓形)	直状1枚 段あり	沙流川右岸 沙流川右岸	舌状部	50	40	海外から海浜
24	ウェン	K・03・72	丘先式	J字状1枚	沙流川右岸 沙流川右岸	舌状部	25	20	先端部一面密着
25	ヒロレーフ	K・03・73	丘先式	弧状1枚	沙流川右岸 沙流川右岸	舌状部	25	20	先端部一面密着
26	トニカ	K・03・18	丘先式	直状2枚(底部1、先端1)	沙流川左岸 沙流川左岸	小舌状部	13	6	先端部一面密着
27	エサンショニ	K・03・12	面施式	半円1枚	鳩川左岸 鳩川左岸	舌状部	15	8	昭和初期まで年紀古
28	オルキン	J・14・22	丘先式	弧状2枚			60	20	海外から海浜
29	オルキンル・ハロ	K・03・2	現存底面の高さ1.1m、幅1.7m、奥行1.5m				5		鉄道工事により大半破壊
30	カムイシタク	K・03・39	溝状遺構が認められた				45		太平洋に面する海岸段丘
31	シノダリイカ	K・03・08	近世チャシ期(傳播も火山灰上面)の送り場				6	6	太平洋に面する海岸段丘



図122 沙流川流域チャン跡分布図

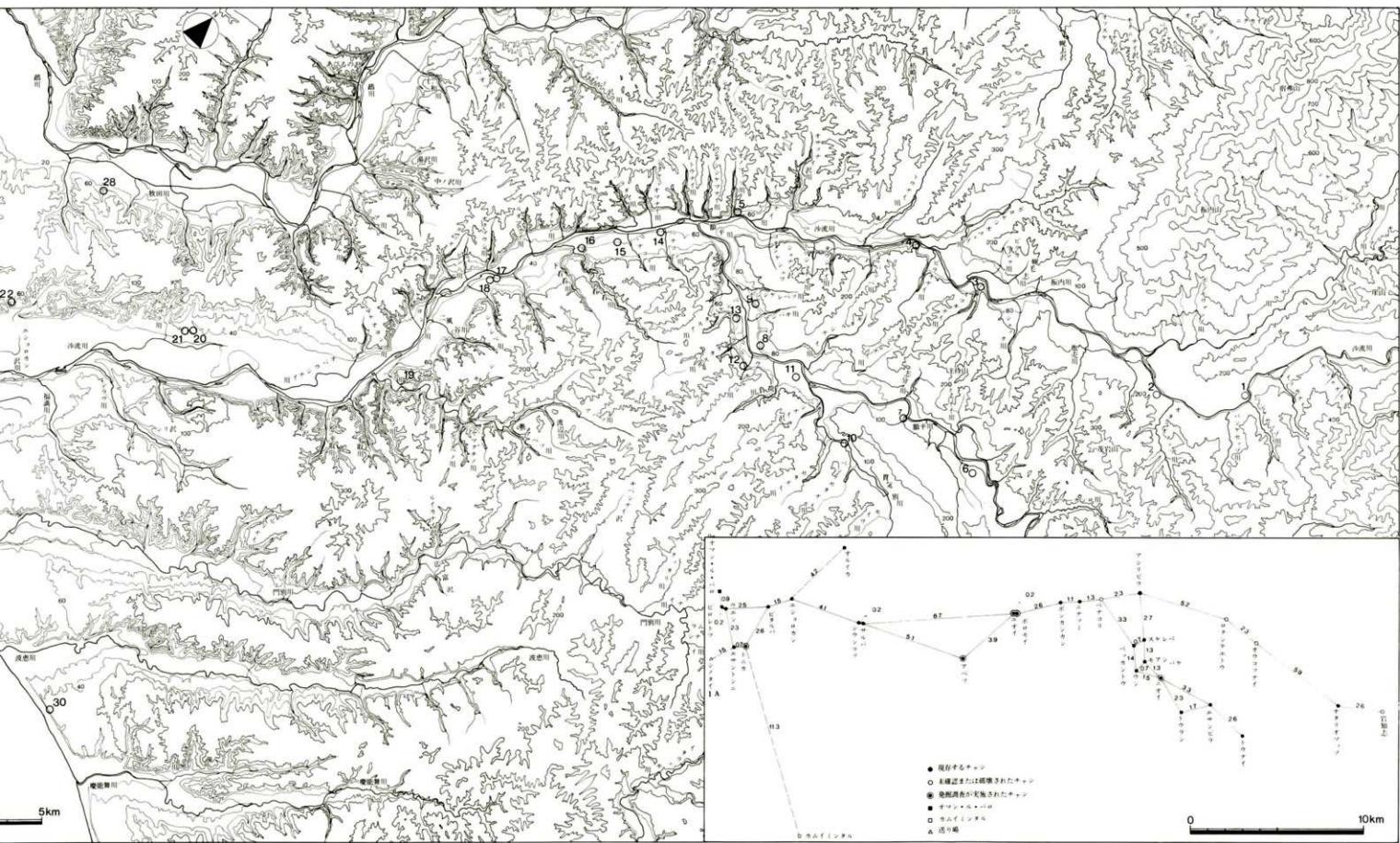


図122 沙流川流域チャツ分布図

A郭とB郭が連結するというボロモイチャシ跡の形態は、単純に濠の形状のみを取り上げれば、後藤秀彦氏の分類でいう第V群b類（後藤 1982, 1984）の一部に類例が求められる。具体的には、浦幌町十勝太川口、網走市呼人、美幌町リンナイ、津別町ウスイナスイ、ツベットウン、小清水町アオシマナイなどの各チャシが挙げられるが（北海道教育委員会 1983）、発掘例ではなく、また比較的大規模なものが多いようで、一概にボロモイチャシとの類似を強調することはできないようだ。

（高橋 和樹）

2. ユオイチャシ跡

ユオイチャシ跡は、2重の弧状濠に区画された、丘先式のチャシ跡である。チャシ内部は広く、集落があった可能性があるが、残念ながら、造田のために主体部が破壊されており、確認することはできなかった。濠も中央部が大きく削られ、濠底が辛うじて残っていたに過ぎない。

ユオイチャシ跡で特筆されるべきは、東側の縁辺沿いに、柵列跡が検出されたことである。この柵列は、ボロモイチャシ跡A郭にみられたような、濠の内側に構築されたものとは異なり、チャシ周縁のほぼ東半分を、延長 50 m 以上にわたって囲ったものである。釧路市フシコタンチャシ（沢・西 1975）や弟子屈町サンベコタンチャシ（沢・松田 1977）では、濠の内側に配置された柱穴群に統いて、チャシ先端部へと縁辺沿いにのびる柱穴群が検出されており、これらは性格を一にするものといえようか。詳細は未報告だが、平取町内のニオイチャシでも、崖に沿って柵列址が発見されたという（桜井 1967）。柵列が描写された例としては、野付、標津地区のヲ子ヨイ、チフル両チャシの抗争をテーマとした、加賀伝蔵の絵図が、本田克代氏によって紹介されている（本田 1981）。また、児玉作左衛門氏が引用し（児玉 1971）、北満保男氏によって訳出された、厚岸付近におけるフリースのチャシの実見記事は、寛永 20 年（1643）と年代が明確で、重要である。そこには「方形の防禦柵が、人の丈の 1.5 倍の高さに造られ、その柵の中には、2、3軒の家がある。防禦柵には、大きいカスガイのついた、松材の大きなとびらがあり」云々と記されている（北満 1980）。柵列の存在もさることながら、チャシ内部に集落があることは、特に重視されよう。

ところで、ユオイチャシの柵列跡は、柱穴と溝とによって構成されていた。ユーカラ『虎杖丸』では、柵列は以下のように表現されている（金田一 1944）。

Rikun sákma	上なる横の渡し木は	chiráshkorewé	柵のままにうねり
ránke sákma	下なる横の渡し木は	tutoyánkúttum	深く土中に
chi-oréte	埋れたり		

柵は、rash（割り木）を立て並べ、それに上下二段に sakma（横木）を渡したものとされている。土中に埋れた下の横木を抜けば、そこには溝が残されるわけで、ユーカラの説明は、ユオイチャシ跡における柵列跡の在り方に合致するものといえよう。

柵列跡に集中した獸骨の出土状態は乱雑であったが、それは、柱や横木が抜き去られた際に生じた攪乱のためと思われる。「シカは最も重要な生活資源ではあったが、極めて普通な存在で、数も多かったからシカ狩りには祭事ではなく、解体等の処理も粗略であった」といわれる（犬飼 1968）。とはいって、チャシ内に持ち込まれた獲物の残骸が、どこへなりと無闇に捨てられたわけではないだろう。西本豊弘氏は、中・近世の遺跡から出土する動物遺存体が、単に捨てたとは言い難い出土状態を示すこと、チャシについても、チャシそのものから骨が出土すること自体に問題があり、瀬田内チャシ、遠矢第 2 チャシ跡などに触れ、儀礼的取扱いの存在を想定している（西本 1985）。

（高橋 和樹）

3 ボロモイチャシ跡

ここでは、ボロモイチャシ跡A郭とB郭の建物跡の比較と、二風谷遺跡にある建物跡との関係について若干説明したい。説明するにあたって、A郭のものを建物跡Aとし、B郭のものを建物跡Bとして進めていきたい。

(1) 建物跡Aと建物跡Bとの比較

建物跡AとBは、ともに縦に区画された郭内のはば中央を占めている。建物跡Aは、コの字形にめぐる盛土によって、壁の基部をつくるのに対し、建物跡Bは、積石によって、それが成されている。材料の違いはあるものの、基本的には同じものと考えられる。また、建物跡Aほど明瞭ではないが、建物跡Bにも、溝状のくぼみがみられる。基本的な柱穴数も建物跡A・Bともに、一辺4本の柱穴を基本としているようで、建て方については同じ様なものであったと考えられる。ただし、建物跡Bは、溝状のくぼみの外側に柱穴があり、建物跡Aの在り方と逆である。南壁の部分では、くぼみを挿み込む形で内外に柱穴があり、これは、礫の重さに耐えるための補強のものと考えられないだろうか。また、建物跡Aにみられる張り出し部は、B郭内で検出された4本柱の足高倉と同様の機能を有するものではないだろうか。

建物跡A・Bが同様の建物構造をもつということを考えたが、両者の決定的差異は、建物跡Aにみられる中央の炉が建物跡Bにはないことである。また、遺物の出土のしかたをみても、建物跡Aに比べ、量的にも少なく、建物跡Bでは建物内部からの出土が少數である。建物跡Aが生活の場という色彩を色濃く出しているのに対し、建物跡Bにはその色彩が希薄な感じを受ける。特に建物跡B出土の鉄が意識的に折り割られていることや、溶けて固まった鉛塊などから、建物跡Bは、一種作業場的性格を有するのではないかろうか。

(2) ボロモイチャシ跡物と二風谷遺跡検出の建物跡との関係について

ここでは、建物の出土遺物に加えて、立地・長軸の方向を考えながら、それぞれの建物跡の関連性をみていく。

まず、ボロモイチャシ跡の建物跡Aを中心にみていくこととする。建物跡Aから出土している遺物で、他の建物跡からも出土しているものに直刃の身の薄い鎌、炉から出土している小札と用途不明の鉄器、それに鍾石があげられる。鎌は、IIIH-1から出土しており、小札はIIIH-4から出土している。IIIH-1・4からは、ともに鍾石が出土している。用途不明の鉄器は、IIIH-3の炉から出土しており、建物跡Aと同様の出土状況をもつ。IIIH-3から、建物跡Aの小札と多少形態の違ったものが出土しており、これは、IIIH-1からも出土している。遺物の面からみれば、建物跡AとIIIH-1・3・4は関連あるものと見受けられる。

立地の面から考えると、ユオイ沢に面する緩斜面にあるIIIH-1・2が、一つのブロックとして、また、IIIH-4とともに沙流川に面した縁辺部に位置するIIIH-5・6を、ひと固りとして考えられないだろうか。これらは、ともに長軸方向を北東に向けるものである。

以上、ユオイチャシ跡との関係も定かではなく、実証不足という感も拭えないが、性格の異なるとみられる2つの建物跡をもつボロモイチャシ跡を中心にして、遺跡ののる段丘面全体を生活の場とし、コタンが営まれたのではないかろうか。昭和59年度に検出された道路の延びる方向をみると、あながち否定されるものではないようと思われる。また、建物跡Aの炉出土の鉄器は明瞭な角張りはないものの、1号墓出土のものに近似し、1号墓の被葬者を考えると、一つの手掛りとなろう。

(田中 哲郎)

4 建物跡について

二風谷遺跡・ユオイチャシ跡・ボロモイチャシ跡において、柱穴が関わる、III層（中～近世）の遺構が幾種か存在する。二風谷遺跡では、IIIHとした建物跡13軒と柱穴列、ユオイチャシの柵列柱穴、ボロモイチャシのA・B郭内建物跡がそれである。ここでは、二風谷遺跡とボロモイチャシ跡A・B郭の建物跡について、若干検討を加えてみたい。各遺構の詳細や遺物と図は各項をもうけて掲載してあるので、ここではそれを表37にまとめておいた。

IIIH-7・12は堅穴状の建物跡である。IIIH-12はボロモイチャシA築の揚土をかぶり、チャシより古い段階のものであることはわかる。しかし、打込み柱の存在や内耳鉄鍋からみて、他の遺構やチャシとそれほど時間差のあるものではない。IIIH-7は、その埋まる過程で2号墓が占地しているため、それよりは古いことが認識できる。2号墓は埋まり方や副葬品等から、二風谷遺跡の近世遺構の中では最も古い時期のものと考えられ、そうなるとIIIH-7は、中世段階の堅穴、あるいは擦文終末期の所産といえるかもしれない。遺物が出土していないため断定できないが、柱が打込み柱らしいことは確かである。これら堅穴状の建物が平地の建物への移行形態であるのかどうかは、今後の検討課題である。ちなみに、擦文期終末からそれ以降、近世中葉ごろまでの堅穴の確認されている遺跡を列記すると、釧路市東釧路遺跡、同STV遺跡、釧路町昆布森中学校裏遺跡、別海町浜別海遺跡、根室市西四ヶ岡遺跡、美深町紋穂内遺跡、旭川市神居古潭遺跡、札幌市北大遺跡、千歳市ママチ遺跡、同千歳神社境内堅穴遺跡、松前町札前遺跡、同静浦D遺跡等があげられる。

平地の打込み柱建物（チャシ建物を含む）は、14軒確認された。そのうち、炉をとらえたもの7軒、炉を確認できないが、柱穴配列や規模から、居住・作業空間ととらえられるものが5軒、計12軒が主要な建物である。IIIH-5とボロモイチャシB郭東側の建物は、倉庫か物干場のような機能が考えられる。打込み柱は径5~15cmほどで、深さ16~80cmの尖底の長筒形を呈する。A郭建物跡やIIIH-5の一部には、掘立柱と思われる掘り方のありそうな柱穴が存在する。打込み柱は、おそらく途中までは人力で、あとは屋根などの材の重みで大地に固定されるものだろう。

構築時の設計を考えると、柱穴間隔は各戸まちまちであるが、(a) あるいは(aとb)という基本単位がある。aは、2a、3aというように倍数でも利用される。bはaの約1.5倍が多い。大体でみれば、各戸によりa+b=2aという違いはあるものの、1m前後に1つのまとまりを見い出せる。萱野茂(1976)によれば、チセを建て上げる時には、四隅の基本柱を立てて、桁をのせ、それから中間の柱を入れていくという方法をとるようで、逆にaやbは全体の規模が決定した後に生まれる単位かもしれない。ちなみに、ここで萱野氏が復元したチセの柱穴基本間隔はa=1m前後で、2aが主体である。しかし、基本単位があり、その倍数や合計で全体の規模を設計できるとも考えられる。入口もこの基本単位設計に組み入れられており、IIIH-1や10のごとく、チセのセム（物置き兼用の下屋）構造のような張り出しをもつものや、ボロモイチャシA・B郭・IIIH-6・9のように短辺に小さな張り出しをもつものの、IIIH-4・11のように長辺に張り出しをもつものがある。窓も、チセにみられるようなせまい柱穴間隔をもつ構造に見い出せそうである（IIIH-6・9・10・ボロモイA郭）。

建物主要部分の面積は、チャシ建物の40m²前後が最大規模で、IIIH-10の25m²、20m²前後のものIIIH-4・8・11、17m²位のIIIH-2・3、12~15m²のIIIH-1・6・9と5段階に分かれる。必要面積という考え方をすれば、家族構成を表しているのかもしれない。ちなみに、萱野茂(1976)が復元したチセの主要部面積は約40m²で、チャシのものが極めてこれに近い。

炉は、IIIH-1・2・3・4・10・13とチャシA郭建物で確認した。建物のはば中心に厚い灰層をもち、魚・鱈骨が残存する焼土がみられ、長期にわたって使用したものと思われた。IIIH-3とチャシA郭建

物の炉で、両者から小札や形態の酷似した鉄片が出土しているのは興味深い。

これらの建物跡は、チャシ跡のものを除けば長軸方向で3つに分類できる。すなわち、①南西一北東のIII H-1~4・8・10・11、②南一北のIII H-5・6、③南東一北西のIII H-9・13である。②は、台地縁辺を意識したもので、①に含まれるものであろう。とすれば、①②と③では、90°方向が異なることになり、集落という目でみれば時間的に差があるものと思われる。

立地を見ていると、④沙流川に面す段丘縁辺と、⑤ユオイ沢に面する段丘縁辺、⑥段丘中央平坦部という3つの条件から選択しているものと思われる。④がチャシはもちろん、III H-4・5・6・12・13、⑤がIII H-1・2・7で、他は⑥である。他遺構との重複関係は、III H-13がボロモイチャシA郭部分で、チャシに先行し、III H-9がIII H-8と1号墓に先行する。

各建物跡の遺物は、金属製品、鍾石にしても動植物の遺存体にしても、みな生活臭の強いものばかりである。共通する遺物は前記ボロモイチャシ跡の項で述べたとおり、A郭建物とIII H-1、同III H-3、同III H-4、III H-1と3にある。立地・遺物の生活臭という視点でいえば、沙流川の漁獲は言うに及ばず、対岸の沢は現在でもシカの水呑場であるという点で、狩猟との関わりが考えられる。ユオイ沢は、きれいな湧き水であり、飲料水はもちろん、使い方によっては農耕に利用できる。ユオイ沢は、舟を沙流川に出す場所だったという言い伝えもある。対岸には、オキクルミカムイが矢で射そなった熊を、怒りで岩にしたという伝説のウカエロシキがあり、晴れた日には、上流方向に美しい日高山系が容姿をあらわす。このように生活に適し、信仰崇拝の場としての条件もあるこの地は、早くから意識された土地であったろう。そこに人が住み、葬られることを受け入れる寛容な、いわば人間のための土地だったと言える。そして中世末～近世初頭に、ここに集落が形成され、埋葬があり、シンボリックなチャシの構築がなされたのだろう。

上記の諸点を考慮し、これら平地住居といえる建物跡を編年的にみてみると、重複関係や長軸からみてIII H-9と13がまず古く位置付けられる。これ以外はみな長軸方向が同一で、これ以後連続と集落が営まれていたと思われる。ここにボロモイチャシも含められることは、立地でIII H-4(突出部)、遺物でIII H-1・3・4という共通点があることでも察認できよう。そして、この中に比較的新しく位置付けられるのが、チセに近い形態をもつIII H-10ではないかと思われる。ボロモイチャシの建物は、構造的にみて一般の打込み柱よりは、長期にわたるものと考えられる。墓との関係でいえば、2号墓と1号墓の間に世代的な連續性はないようで、この時間差の中に集落としての建物跡やチャシが位置付けられるだろう。III H-12が平地建物に先行する堅穴なのか、併存するものなののかは詳かではないが、2号墓にやや先行するか、III H-9・13に近い段階のものと考えておく。

最後に、擦文期以降の平地の建物跡が検出されている遺跡をあげ、参考に付したい。そのあり方は、集落を形成するらしきものや単独で確認したもの等があるが、全体が明らかでないことが多く、前述した当該期の堅穴との関係もつかめない状況である。詳細は割愛させていただくことにし列記する。上ノ国町竹内屋敷遺跡・千歳市カマカ第一遺跡・同末広遺跡・同美々8遺跡・同ウサタマイ遺跡E地点・同祝梅堅穴遺跡・奥尻町青苗遺跡・松前町茂草B遺跡。また、これら以外にTa-b火山灰層を切る堅穴として、静内町シベチャリチャシ跡・門別町シノタイ遺跡があり、近世末期のものとして厚岸町下田ノ沢遺跡や苫小牧市植村A遺跡にその遺構が検出されている。

以上、きわめて雑駁であるが、列記した遺跡や二風谷遺跡・ボロモイ・ユオイの両チャシをどう位置付け、擦文期末～近代にいたる歴史を復元するかが課題として提起される。

(三浦 正人)

表37 建物跡一覧

遺構名	主要部面積	柱穴の基本開闊	柱穴の建立方法	入口構造	押の有無	遺物	立地等	国・表・図版番号
ⅢH-1	14.8m ²	a : 0.8m前後 b : 1.3m前後 bが主	打ち込み	柱穴13×14 15で形成?	2コ所 F1主	鐵(刀刃・タマク付) 刀子・小札・元島通定 鏡石(39個)・伊から 魚・鹿骨	ニオイ沢向きの傾斜面に立地。 長軸: 南西→北東。 南側に近接してⅢH-2あり。	国54・55 表11・25 図版42・43
ⅢH-2	17.6m ²	a : 1.0m前後 b : 1.5m前後 bが主	打ち込み	不明	2コ所 F1主	錫状銀器片 錫状銀器(タマク付) 伊から魚・鹿骨	ニオイ沢向きの傾斜面に立地。 武川ほど近く。 長軸: 南西→北東。 北側にⅢH-1。	国56 表12・25 図版42・43
ⅢH-3	17.6m ²	b : 0.9m前後 b、2a主	打ち込み	不明	1コ所	小札(鉄出土) 錫状銀器片(鉄出土) 不明銀器・伊から魚・ 鹿骨	台地中央平坦面に立地。 長軸: 南西→北東。 南側に1号墓・ⅢH-5、さらにⅢH-8。	国57 表13・25 図版44
ⅢH-4	19.4m ²	a : 1.0m前後 b : 1.5m前後	打ち込み	柱穴8×9 13×14×15 で形成	地上に5ヵ所 F3が主	錫状銀器 錫状銀器2 鏡石(37個)	沙良川に面する台地縁に立地。 長軸: 南西→北東。 南側にⅢH-5・6あり。	国58 表14 図版44・45
ⅢH-5	7.5m ²	a : 0.5m前後 b : 1.8m前後	打ち込み	不明	突出されず	不明遺物	沙良川に面する台地縁に立地。 長軸: 西→東と思われるが、跡跡が明確でない。小建物の重複と推測か? ⅢH-6も南に位置。	国59 表15 図版45
ⅢH-6	12.2m ²	a : 0.45m前後 2aが主	打ち込み	柱穴6×11 16×17で形成	突出されず	劍刀頭鳥(藤金物)	沙良川に面する台地縁に立地。 長軸: 南→北。北側にⅢH-5隣接。 建物内外にも柱穴多く。(付属施設?)	国59 表16 図版45
ⅢH-8	20.5m ²	a : 1.0m前後	打ち込み	不明	突出されず	マレブ 鏡石(35個)	台地中央平坦面に立地。 長軸: 南西→北東。北東に1号墓・ⅢH-5。北東側でⅢH-9柱穴と重複あり。(ⅢH-8古跡)	国61 表17 図版46
ⅢH-9	14.6m ²	a : 0.45m前後 b : 0.7m前後 2aが主	打ち込み	柱穴7×8 9×15×16× 17で形成	突出されず		台地中央平坦面に立地。 長軸: 南東→北西。1号墓がこの建物 の跡に占地。南側にⅢH-8柱穴と重複。 ⅢH-8のⅢH-3・南西のⅢH-8 より古い時期	国62 表18 図版46
ⅢH-10	25.7m ²	a : 0.7m前後 b、2a主	打ち込み	柱穴19×22~ 25で形成	2コ所 F1主	伊から魚・鹿骨	台地中央平坦面に立地。 長軸: 南西→北東。特にいい形跡。 馬込・土牛・板化材・鹿骨・鏡石が明確。 (これらは柱穴が見えられず、想像 筋とすることを保留)	国63 表19・25 図版47
ⅢH-11	(19.8m ²)	a : 1.1m前後 b : 1.85m前後	打ち込み	柱穴5×10× 11で形成?	突出されず	屋外に伏せ置かれた 吊耳鉢(物送り?)	ニオイ沢に面する台地縁に立地。 長軸: 南西→北東。特にいい形跡。 馬込・土牛・板化材・鹿骨・鏡石が明確。 (これらは柱穴が見えられず、想像 筋とすることを保留)	国64・65 表20 図版48
ⅢH-13	24.9m ²	a : 1.4m前後	打ち込み	不明	2コ所?		ボロモイチャシA系占地域に、A界隈 物語集落なり。 長軸: 南東→北西。	国66 表22 図版49
柱穴列	-	-	打ち込み	-	-	周辺に廻器多い。	ⅢH-10の南側に3本ずつ2ヵ所の柱 穴列。発達する施設か?	国66
炭化物列・焼土 (約30m ²)	-	-	不明	1コ所	刀子・元島通定? 不明銀器 波打影片		台地中央平坦面。 柱穴の確認はできなかつたが、建物跡と思われる。他に數ヶ所、同様の状況を示す箇所がある。	国69 表23
ボロモイチャシ A系遺物群	43.7m ² (51.6m ²)	a : 0.9m前後 b : 1.25m前後 bが主	獨立	溝と柱穴12× 14×22×26× 27×43で形成	F1が主要	金属器・鏡石・多岐 銀器群・ガラス玉片 伊から魚・鹿骨・鹿角 製鉄灰	沙良川に突き出する台地縁上。 溝・柱穴・盛・鹿骨・鏡石・炭化物 等で構成される。詳記: V章参照。	国61~37・表4・5 国版18~21・24~27
ボロモイチャシ B系遺物群	36.8m ² (47.4m ²)	a : 0.5m前後 aの倍数	獨立	柱穴1×2× 3の部分?	地中3ヵ所	金属器・鏡石 が、底面から魚・鹿骨	同上。(焼土が複数にかかる。 2軒の可能性高い。詳記: V章)。	国66~41・表6・7 国版18~19・22~24 27・28
ⅢH-7	10.2m ²	-	打ち込み?	不明	かまと? 焼土1ヵ所		ニオイ沢に面する台地縁に立地。 浅い埋り込みの柱穴跡の住居跡。 長軸: 南→北。後ろ2号墓が占地。	国69 国版6
ⅢH-12	22.4m ²	a : 1.0m前後	打ち込み 運動に 斜めの重複?	東角に、運動 場に連絡する部 分あり。	伊土4ヵ所 F1主	東角と野外のチャシ 埴土下に内耳鉢類。 (2升巻き) 伊・庄坂 から鹿骨	ボロモイチャシA系遺物群。長軸: 南西→北東。浅い埋り込みの柱穴跡の住居跡。 (詳記: V章)	国66・67 表21・25 国版49

5 近世アイヌ墓について

今回の発掘調査で、2基の近世アイヌ墓が確認された。いずれも、周溝・盛土・墓標穴をもち、墓墳も同じ長台形を呈するものであり、頭位方向も同じ北東方向、副葬品も基本的に同じものをもっている。そして、この2基の墓は、ともにTa-b火山灰に被覆されており、その下限を1667年とすることはできる。このように、降下火山灰を指標として、下限を18世紀中葉以前に確定できる近世アイヌ墓の調査例は年々増加してきており、千歳市ウサクマイ遺跡B地点・同N地点・千歳市末広遺跡・瀬棚町南川2遺跡などがあげられる。これらを中心にして、近世アイヌ墓の立地・形態・頭位方向について調べ、本遺跡の近世アイヌ墓の特徴をあげていきたい。

1. 立地および墓の形態について

二風谷例は、墓標穴の位置に多少の違いはあるものの、ともに周溝・盛土をもつ形態である。田村俊之氏分類のIIC型（田村1983）にあたる。類例は、ウサクマイ遺跡B地点の3号アイヌ墓、同N地点のAG-2と、末広遺跡のIP-1・2・3・14の6例がある。これらの地域はともに、河野広道氏が墓標よりみたサルンクルの地域（河野1925）にあたり、また、田村氏が20世紀前葉の沙流アイヌの葬制（久保寺逸彦1956）との比較で、千歳川流域のそれに共通性を見い出していることに、また一つ、周溝と盛土をもつ墳墓形態という共通要素が加わることになる^[1]。

周溝・盛土をもつ墳墓形態という共通性のある6例と、二風谷遺跡の2つの墓をについて、その立地をみると、二風谷遺跡の2号墓のみが竪穴のくぼみに立地している。他の7例はすべて河岸段丘上の平坦面につくられている。この立地の点から、他の形態の墓が混在する末広遺跡（昭和53～55年度調査区域）^[2]をみてみたい。末広の場合、図122^[3]のとおり、墓はすべて擦文期の竪穴のくぼみを外して、平坦部および段丘縁辺の傾斜地に立地することが認められる^[4]。ウサクマイ例についても同様であり、他地域の例でも同様の傾向がみられる。このことから、本遺跡2号墓は特異な例といえる。前項で述べたとおり、墓標穴の覆土の内容、墓全体を覆う腐植土の状況から、2号墓が時間的に1号墓に先行するものと考えられ、したがって、この周溝・盛土をもつタイプはある程度の時間幅をもっているものと思われる。2号墓の特異性は、時間的要素に起因するものと考えたい。

そこで、竪穴利用という点に着目すれば、ライトコロ川口遺跡の12号竪穴内墓壙が注目される。しかし、竪穴規模の相違、副葬品の相違や2号墓の上限の年代を決定できる要素もなく、年代的相同・系譜を考えられない状況にある。ただ、ライトコロ川口遺跡12号竪穴内墓壙の副葬品にあるコイル状鉄製品（垂飾）が、包含層からであるが、二風谷遺跡からも出土しており、沙流川流域地域と常呂地域との間に何らかのつながりが想定される。

2. 頭位方向について

近世アイヌ墓の頭位については、現在までのところ南南東から南東を中心に東方に集まる傾向があること、異常死による意図的な頭位の逆転があるという、2つの点が指摘されている（平川善祥1984）。二風谷遺跡の場合、1号墓・2号墓の頭位方向は、それぞれN-56°-E・N-27°-Eであり、大まかに言って北東方向を示している。この北東方向が何を意味するのかを考えるとき、2つの墓がともに沙流川の流れの方向に沿うことが注目される。そこで、現実にある環境、特に自然環境に目を向け考えていきたい。ここでは、近世アイヌ墓がまとまりとして把えられる末広遺跡・ウサクマイ遺跡群・南川2遺跡について整理してみたい。

整理するにあたっては、アイヌ民族の葬制を念頭に置いた藤本英夫氏の頭位論（藤本1971・1972）に批判的な検討を加えた林謙作氏の論考（林1977）を参考としたい。この中で林氏は、アイヌ民族の葬制・他界観について、サル川流域のアイヌ族が現世の領域（イウォル）に対応する他界を想定して



図122 末広遺跡近世アイヌ墓位置図

いるという、泉靖一氏の指摘（泉 1936）を踏まえながら以下のように述べている。「ボクナ・モシルの実態が、カソナ・モシルのコタン・イウォルの観念的投影であるとすれば、埋葬頭位は墓地とアフン・ルバロの位置によって規定されることになる。したがって、（中略）アフン・ルバロ⁽⁴⁸⁾がひとつであれば、ひとつの墓地に葬られている遺体の頭位は一方向に統一されるであろう」と、また、アイヌ族社会の現状よりも明確に血縁紐帯によって裏づけられていた段階では、同じコタンの成員であっても、その出自の違いによって、アフン・ルバロが違っていたことも想定でき、同一墓地内でも頭位の異なる遺体があつても不思議ではないだろうと問題提起をしている。これはつまり、コタン・イウォルに対応する他界が基本的に存在するものの、個々のコタンでは成員のもつ要素が混在しているということになろう。この点を念頭に置き、整理を行っていきたい。

(I) 末広遺跡の場合（図 122）

田村氏は、ウサクマイ例も含めて、墓壙形態との関連で頭位方向の細分を行っている（田村 1983）。これが、頭位方向の細分という点で初めてのものである。

ここでは、頭位方向を自然環境にからめて分類を行いたい。そこで、河川（千歳川）の流れに（段丘形状も考慮して）着目して分類すると、以下の様になる。

- a. 千歳川の流路方向に、ほぼ平行するもの。
- b. 千歳川の流路方向に、ほぼ直交するもの。
- c. a・bの中間的なもの。

a のグループに入りいるものは、IP-30・45・64・112・(・111)⁽⁴⁹⁾である。b グループには、IP-59・91・114 が入り、c グループには、IP-1・2・3・14・53・60・61・81・84・122・124・125 が入る。IP-54 については、a と c のどちらかであるが、はっきり区別できない。

a グループの場合、その立地は段丘縁辺部から段丘斜面部にかけて散在しており、b グループは調査区域の北隅に直線状に並ぶ傾向がみられる。c グループについては、調査区域の西側に集中する部分をもちながら、段丘面全体を利用している。

(2) ウサクマイ遺跡群の場合（図 124）

末広遺跡の場合と同様の見方をすれば、B 地点の A G - 2・3・14 は千歳川の流れに平行し、B 地点 3 号アイヌ墓については直交するかたちとなる。また、N 地点の 1 号・2 号は、千歳川の流れには直交し、苗別川の流れに沿うものとなる。

(3) 南川 2 遺跡の場合^[12]（図 123）

遺跡は、丁度、利別川の屈曲点にあたる右岸段丘上に立地する。利別川は、屈曲点より上流では、南東から北西方向に流れ、下流ではほぼ東から西へ流れている。1 号墓が下流の流れに沿う以外は、北グループ・南グループの墓は、ともにより上流の流れに沿うことになる。

このように、頭位方向が河川の流れに平行・直行するものが多く、河川の流路方向が、頭位を決定する一要素となるのではないかと思われる。

これまで、河川の流れの方向という自然環境に視点を置きみてきたが、墓の頭位方向の延長線上に何があるかとみると、特に南川 2 遺跡の場合、1 号墓のそれを除き瀬田内チャシ跡が存在している。ウサクマイ遺跡群の場合も B 地点 3 号アイヌ墓を除き、他の 5 墓の墳墓はベサのチャシに頭を向けているようにみられる。頭位方向を決定するにあたって、チャシが何らかの目印になったのではないかろうか。しかしながら、頭位を規制する要因の一つに、チャシをおいたとき、墓とチャシの同時性の問題、アイヌ社会におけるチャシの社会的性格付け、またあてはまらない墳墓が何に基因するのか、解決しなければならない問題が數多く残る。また、末広遺跡の場合や、河川の流れに直交し、頭を海の方向に向いていると考えられる 1984 年度調査の森町御幸町遺跡の場合には、頭位方向を規制するものとして、チャシなどにみられる実際に存在する物を求めるのが得ない。ただ、末広の場合、頭位方向によるある程度のグループ分けができたと考える。^[13]しかし、その成立要因については、林氏のいう同一コタン内の成員の出自差によるものなのか、複数のコタンによるものなのか、時間差によるものなのか解決できない状況にある。

二風谷遺跡の場合、2 基の墓はともに沙流川（ニオイ沢）の流れに沿うことは認められる。ただし、チャシと関連づけるにあたって、二風谷の場合には、近接する 2 つのチャシ跡に挟まれる立地条件をもっており、ニオイ・ボロモイのどちらか一方に関係づけることはできない。1 号墓は、チャシの廃棄と同時に新しいとみることで、問題はあまりないと考えられるが、2 号墓についてはチャシとの前後関係を決定付ける確固たるものがない、チャシ跡に墓がつくられている室蘭市絆納遺跡にみられるごとく、このチャシの存在する沙流川とニオイ沢に挟まれた段丘全体を一つの聖地（？）と考えるべきなのだろうか。また、沙流川本・支流域のコタンに対応するオマン・ル・バロは^[14]、沙流川河口部にあるものにすべて求められるのだろうか。二風谷や長知内にもオマン・ル・バロがあるという伝承があり、林氏がいうようにコタン、イウォルそれぞれにオマン・ル・バロを考える必要がある。それに、チャシがどのように関わるかが問題となろう。

以上、近世アイヌ墓について本遺跡発見の 2 号墓の特異性から、周溝・盛土をもつ墳墓形態の起源について若干触れた。また、頭位方向については、墓の位置する周辺環境が決定要因になるのではないかと考え、特にチャシの存在、広く言えばチャシの立地する場所・チャシの跡ということに注目した。しかし、これまで墓の形態・立地・頭位方向のみについて考えてきており、何ら副葬品についての分



図123 南川2遺跡近世アイヌ墓位置図

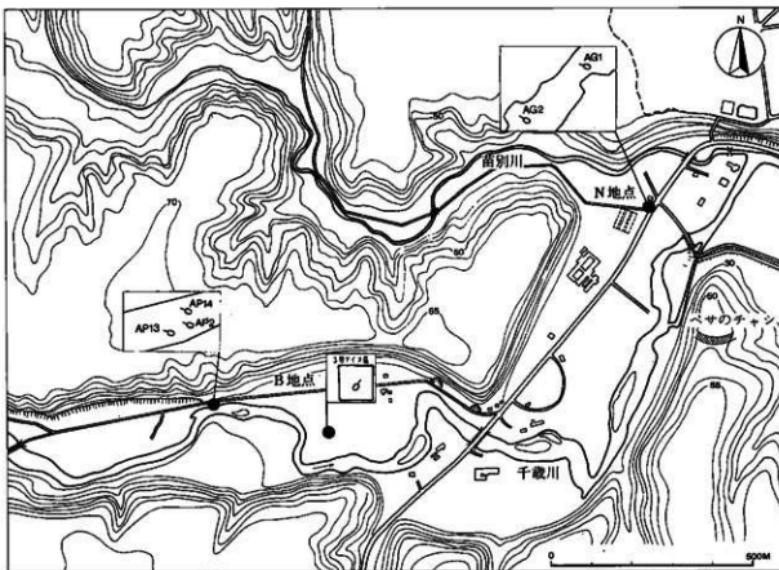


図124 ウサクマイ遺跡近世アイヌ墓位置図

析を行っていない。多くの問題点を列挙したに止っており、遺物を含めた分析を今後の課題としたい。

- 注1 平川善祥氏より、耕作等による後世の擾乱を受けやすく、墓の上部構造を破壊されるような地域にも、周囲・盛土をもつタイプの存在する可能性があり、限定的に使えることには危険性があるとの御教示を得た。
- 注2 Ta-b 火山灰上より掘り込まれたIP-58と、異葬墓であるIP-62・90・123は除外した。
- 注3 図中では、墓を横円と直線で示した。横円が頭の方向を示し、直線が遺体数を示している。直線2本の場合合葬墓である。
- 注4 IP-74・111は、兼文期の住居跡と重複する部分があるが、IB層上面において地形図からは、明確なくぼみとして竪穴をとらえられることはできない。
- 注5・9 あの世へ行く道の入口だという意味で、知里真志保・山田秀三氏(知里・山田1956)によれば、オマーン・ル・パロ(Omán-ru-paro、奥へ行く・道・の口)が胆振・日高などで、また前出のアフン・ル・パロ(Afun-ru-paro、入る・道・の口)が胆振・日高の沙流・旭川市近文などで使用されたとい。
- 注6 IP-111については、頭位方向は逆転するが、長軸方向で考えると、このグループに入いる。
- 注7 田村リラコ氏より、北群とされた1~4号墓についても、覆土および現場の状況からみて、火山灰下のものとみて、差支えないだろうとの御教示を得た。
- 注8 昭和59年度調査された地区的ものについては、IP-119がcグループに、IP-140がbグループに入っている
(田中 哲郎)

6 陶磁器と漆碗について

ここでは、今回の調査で出土した陶磁器と、1号墓出土の漆碗について述べる。

(1) 陶磁器

ユオイ・ボロモイ両チャシ跡、二風谷遺跡から出土した陶磁器は、ボロモイチャシ跡の縦内からその大半が出土した絵唐津と、ユオイチャシ跡から出土した明代後半の染付碗の破片のみであり、ともに、Ta-b 火山灰下からの出土である。その使用時期の下限は、1667年と置くことができる。

絵唐津は、見込みに3個所の胎土目跡を残すものである。この目跡は、窯詰技法にかかるものであり、胎土目から砂目に漸次かわるものである。この技術革新は、慶長年間に行われたとみられ(大橋康二1983)、この絵唐津の生産時期は、17世紀初頭を下らないものである。この時期の唐津焼を出土している道内の遺跡に、上ノ国町勝山館跡・上ノ国漁港遺跡・瀬田内チャシ跡があげられる。

染付も発見されている遺跡としては、勝山館跡・上ノ国夷王山墳墓群・瀬田内チャシ跡・千歳市末広遺跡があげられる。今回出土した山水の碗は、道内において類例はない。また、60年度実施された北海道教育委員会文化課による範囲確認調査において、ユオイ沢の対岸でも、明代後半の染付碗の破片が1点出土しており、今後資料の増加が期待される。

(2) 漆器

1号墓から出土した漆器の碗は、現在ひろく「南部の碗」といわれるもののうち、秀衡碗といわれるものである。秀衡碗は、「工芸志料」の中で、藤原秀衡が工人に命じて作らせたものを創始すると述べられているが、現在では南部産の漆碗の一つに、後世になって「秀衡碗」の名がつけられたものとみられ、その年代も桃山時代ごろのものとみられている。この秀衡碗について荒川浩和氏がまとめており(荒川1965)、その内容を要約すると以下のとおりである。

- 厚手で堅牢なつくり。
- 三つ椀形式で、數組で一揃となる。
- 内朱、外黒塗で、朱漆はかなり上質のものを用いる。
- 三等分法による文様構成。
- 雲形文(中央雲形・口縁をめぐる雲形)があり、そこに菱形・矩冊形の切落が押される。
- 朱漆絵の文様は、植物文に限られている。稀に鶴の文様がみられる。

1号墓出土の椀は、上記の特徴の大半のものがあてはまり、秀衡椀とすることに問題なかろう。また、現存する秀衡椀の計測値（荒川 1964・65）からみて、本例は三つ椀形式のうち二ノ椀とみられ、推定した高さは若干大きすぎるくらいがある。ただ、本例では文様構成が二等分法によっていることが相違点としてあげられる。

類例には、千歳市末広遺跡ⅠP-14出土のものがある。末広例は中央雲形間の文様が三葉藤で、中央雲形の形や押落の内容に細かな違いはあるものの、文様構成が二等分法によるものであり、二風谷例と全く同一とみてよいものである。これに対し、同じように切落が施される木古内町札刃遺跡2号墓出土の漆椀は、中央雲形中央に右三ツ巴文をもち、その左右に井手の切落を配するなど違いがみられる。また、三等分法の文様構成によるが、中央雲形間に袋紋（砂金袋）が対に描かれており、植物文をほとんどとする秀衡椀と大きな違いがある。二風谷・末広例と一線を画するようと思われる。

秀衡椀の他に、南部の椀にもう一つ同じ切落を用いる淨法寺椀がある。淨法寺椀は、四つ椀形式・紅柄朱を用いる。秀衡椀の中央雲形にあたる菱崩しに黄漆の斜線が入る。漆絵は黄漆による枝菊のみという点などで、秀衡椀と区別される。『蝦夷島奇観』に載る古椀図は、中央雲形に斜線が入ることや、枝菊の文様などから淨法寺椀とみられる。また、札刃例はこれにもあたらないようで、構図や切落などから秀衡椀系に含められようか。時間的な差を示すものであろうか。

これまで、産地などの特定できる特徴的な南部の椀についてみてきたが、この他にも多くの漆器が出土しており、かなりの量が移入されていると思われる。

中・近世の遺跡の発掘調査例は、それほど多いわけではないが、漆器に比べ陶磁器の出土が少ない。特に、道南の日本海側を除けば、それは極端なようにみえる。本遺跡の当該時期は、日本海の陶磁貿易を段階的に5期に分けた佐々木達夫氏の第III期の末期にあたる。これは、17世紀の前半期で中国陶磁輸入の最終段階にあたり、日本製品には美濃の志野皿と唐津の皿が加わる時期である（佐々木 1981）。本遺跡や末広遺跡にみられる内容についても、問題はないと思われる。石狩低地帯以東が、この日本海陶磁貿易の闇にあるとみれば、生産地との距離によって漆器の出土量との比較で、多寡が現われるのだろうか。また、漆器が墓に副葬されるのに対し、陶磁器のそれは全くなく、嗜好の問題が大きく関わるのかもしれない。加えて、生産用具などとして大量に移入される鉄器を考えるとき、鉄器の生産地がどこか、鉄器とともに移入されるものが何かということが陶磁器と漆器の出土量の関係をみると必要になると考えられる。

（田中 哲郎）

7 金属製品について

58~60年度の調査で出土した金属製品は、刀装具等も一点ずつ数えると、200点を超える。破片数では約1,500点を数える。ここでは、ユオイ・ボロモイ両チャシと二風谷遺跡遺構・包含層を総まとめにし、用途別に分け、類例等をあげておく。今後、擦文期～近世の金属製品を検討する上で、欠かせない資料になるものと思われ、ひいては当時の生活・交易等を解明する手段となるだろう。

鍋：18個体出土している。このうち内耳鉄鍋あるいは、そう推定されるものが6個体、吊耳鉄鍋および推定されるもの3個体、小型で吊耳か片口になるもの1個体がある。鉄鍋については越田賢一郎（1984）の詳細な論考があり、この遺跡の資料もこれを補強するものとなる。ボロモイチャシA郭先端出土の内耳鉄鍋とIIIH-12のものは、各項でも述べた如く二耳一対で、4升・2升という容量と、形態の類似から、交易品としてセットでもたらされたものと思われる。チャシとIIIH-12の間にには時間差があるが、これは4升焼きの方がより長く使える状態にあったということだろう。これがチャシ

先端部に底が抜けた状態で、伏せられた形で出土したのは、使用不能のものとして送りがなされたためと考える。ボロモイチャシB縁から出土した破片は、唯一、環状の耳をもつ。一文字湯口は、前出の4升焚きのものと、ユオイチャシから出土した底部片に確認された。他に湯口のわかるものは、内耳鍋ではない。吊耳鉄鍋はIIIH-11屋外の、物送りと思われるものが、唯一形状を確認できる(湯口・脚は不明)。内耳鉄鍋ほど、口縁部が外反せず、胴部とほぼ一体である。胴部のみで容量を計算すると5升焚きである。口縁には折り曲げた鉄片をかぶせた部分がある。V-46区出土の口縁片につく2枚の小札の例もあり、つり下げた時のバランス取りかと思われる。X-46区のものの小札は、補修・破片利用時の部品という考えもある。W-45区の耳部片は、極小型の吊耳鍋のものだろう。W-29区から出土した小型鍋は、片口鍋かもしれない。長六角形に近い丸型湯口と三本脚を底部に有し、吊耳が欠失したと思われる部分も観察できる。口縁部と胴部の区別はない。△欠失した部分に片口があったのではないかと思われる。容量は8合焚きである。鍋18個体という数字は、当該期の一つの段丘にある遺跡を調査したことからすれば、多いものではないかもしれない。しかし、少なくとも、鍋という生活に密着した道具が、二風谷という地域のある地点から、これだけの数出土したことは、他の金属器や、漆器等を含めて、当時の交易の重要さと隆盛を示しているといえよう。

農具：鍬先あるいは鋤先といえるものが3点出土している。2B-46区出土の角形の鍬先片は、刃先がかなり短くなるまで使用されたもので、破損後、木製具かタガネのように利用されたものである。風呂受け部の端を頭部として、そこに轍き痕がみられる。農具から工具へと、機能の転化をはかって鉄製道具を大事に使用していった好例である。刃先が角形となる鍬先の出土例は、寿都町朱太川右岸1遺跡、千歳市末広遺跡、静内町入舟チャシ跡の他、平取町では、アブシ2遺跡にある。U字鍬先は2点出土している。平取町ではニオイチャシ跡からも出土しており、全道では、今回の例を含めて、13遺跡16例が出土している。U字鍬先といつても、時期的な要素と、鍬・鋤という使用法による違いによって、形態上2つに分けられる。1つは本州古墳時代からの伝統をひく、まさにU字形をしたもので、当遺跡の2例もこれに加えられる。もう1つは、刃部高があり、全体的にも長さのあるもので、千歳市美々8遺跡や、瀬棚町瀬田内チャシ跡等にみられるものである。角形の事例はこれに近く、鋤先といえるものかもしれない。両者とも使い減りによる形態変化もあるだろうが、さらに、風呂受け部の形態や、大きさ、幅等で細分が可能である。大体でみれば、U字が先行形態で、鍬先であり、刃が高く、角形に類するものは、時間的にも下り、鋤先としての用途をもつものと思われる。「蝦夷島奇観」雜圖部農女図には、鍬・鋤を使用している絵がある。またIIIH-10建物範囲部分の土壤フローテーションでは、モロコシ類のえい果が検出されているし、ボロモイチャシ跡A郭建物跡の炉からはイネの穀殼が出土している。鍬・鋤の形態・編年とともに、当時の農耕の実態や食料交易を含めた検討を今後も続けて行きたい。より考古学的には烟造構の確認とその調査方法についても考えてみる必要がある。

鎌は擦文期のものと思われる鎌と、直刃で、全体形が現代のものに似てくる、近世のものに大別できる。擦文期のもの(2E-38区)は、直刃から曲刃部への移行部(くびれ部)からまた幅を広げる、珍しい形態である。片端には、柄装着部となる折り返しがある。松前町札前遺跡住居出土品や、千歳市ウサクマイ遺跡B地点にこの類例をみることができる。近世の、柄部をもつ直刃鎌は、ボロモイチャシA郭、IIIH-1、2E-50区で計4個出土している。大小の差はあっても、地金と刃金の区別のない薄板で、柄が刃部と約100度の角度をもつ、同一形態を示す。柄には目釘孔があり、木柄を装着するための口金(タマカラ)をつけたものもある。この形態は、千歳市末広遺跡近世墓塚や寿都町朱太川右岸1遺跡、瀬棚町瀬田内チャシ跡、南川2遺跡10号墓、斜里町オンネベツ西岸台地1号堅穴上層、浦幌町十勝太若月遺跡、浜中町ボロト沼遺跡等、近世遺構やそれを含む遺跡から出土している。直刃

の鎌の用途・使用法は、農具という範疇では把えられないかもしれない。「蝦夷島奇観」稚団部昆布団には、コンブ採りに使用する道具として、長い木柄をついた鎌を紹介している。草刈りや開墾のための用途以外に、長い木柄をつけての使い道があるのだろう。例えば、屋根・壁を葺いたり簾を編むための、カヤを密生した場所から刈り取る場合などに、その機能を果たすのではないだろうか。ただ、刃部に使い減りの見られないことや、全体が極度に薄いことなど、気になる点もある。近世の本州農家では厚みのあるものを草刈り用、うすいものをイネ、ムギ刈り用にしていたらしい。いずれにしても、擦文→近世と移行する上での、鎌の極端な形態変化が、一つの問題である。農耕に関して、使用法や対象物の変化があったのか、交易品として持ち込んでくる側での変化（製作・流通）に由来するものだろうか。そういった点では、近代～現代の一般に鎌といふ曲刀の形態が、擦文期の曲刃鎌と形態的には似ている点が多い。近世の鉄路町遠矢第2チャシ跡や八雲町ユウラップアイヌ墓地・余市町ヌッチ川遺跡でみられる近代の鎌にその系統が伝わるのだろうか。対して直刃の鎌は、上ノ国町勝山館跡から出土した、肩部が発達し、刃部と柄がほぼ直角をなす形態のものが、明治以降も使用されていたりする。乙部町栄浜遺跡第1地点からは、明治以降の遺物としてこの形態のものが出土している。直刃・曲刃という2系統の鎌があり、それが現代まで続くとすれば、各時期とその間の移行形態を、覚えることが肝要である。そういう意味では、今回出土した4点のような、直刃で全体に厚みのない形態をもつ鎌は、耐用年数や再利用のしにくさを考慮し、同時期の遺跡とも比較した上で、近世前半を盛行期とするものと把え、この形態を近世前半の標式遺物とすることも、可能のように思える。

苧引金は、苧引鎌とも呼ばれ、麻等の織維をとる道具として、東北地方等で、現在でも使われているところがあるらしい。宝永七（1710）年に加越地方で著された、土屋又三郎の「耕稼春秋」では、苧の皮をむくための小道具として、苧引金がしるされている。北海道では、最初の出土資料と思われるが、青森県八戸市根城跡や浪岡町浪岡城跡では多数出土している。両端の角部と棟側を木柄で固定し使用するようだが、本例が二風谷の地でいかなる用途に使われたかを知るには、農作物・採集植物等の検討も必要になってくる。

工具：斧は、擦文期の袋状鉄斧（三面覆いコの字形、W-41区）と、近世の鎌に近い形態（柄通し孔をもつ、S-30区）の2個が出土している。これも鎌と同様、擦文期と近世の極端な変化をうめる資料がない。装着方法や使用方法（刃部を横に使うか、縱に使うか等）の違いにより、2系統あるものと覚えるべきであろうか。鉄斧については、瀬川拓郎（1984）の論考があり、形態による分類と変遷について整理されている。それによればW-41区のもののように、袋部断面が角形で、この折り返しが三面覆いであるものは、擦文期の後半に位置付けられる。浦幌町十勝太若月遺跡5号住居跡や千歳市末広遺跡I H-44 覆土出土のものに、特に類似点がみられるが、本例はソケット部分と、刃部とを明確に区画しておりその点では、特異な例である。また近世の斧も、瀬川によれば柄通し孔の形態で新古が分けられ、長方形を呈す二風谷例は、火山灰からみても、Ta-b下で1667年以前の古い段階に位置付けられている。しかし、吉川金次（1984）によれば、明治末期でもこれと同形態のものが伐木用として使われていたことが言られている。類例は、千歳市美々8遺跡、斜里町オシネベツ西岸台地1号堅穴上層送り場、音別町ノトロ岬遺跡等に求められる。近世の斧・鎌については、近現代のものとの比較や、用途においても再検討すべき余地がある。

鎌は、III H-4から小型のものの先が1点出土している。現代の金切鎌に似た形状を呈し、伐木などに用いられるものではなく、小枝刈りや、鹿角の切断等に用いられるものであろう。小さいながらも、アサリをもっている（ナゲシはない）。類例は、小樽市桃内貝塚第二層から出土した破片がある。北海道における、鎌の出土品は少なく、他に上ノ国町勝山館跡のものがあるだけである。根室市オシネモ

ト遺跡のものは、調査者も明治中期以降のものと考えている。

ノミは、ボロモイチャシ A 郡建物跡で、1点出土している。本道でのノミの出土例は、瀬棚町瀬田内チャシ跡の3本の平ノミがある。古い時代のノミは両刃であったようで、その点で、両刃を形成する本例は、片刃になる以前のものと考えることもできる。ただ、本例の用途は、ほぞ穴を切る目的でなく、木を割る、削るためにものと思われ、そのための両刃ノミが近世まで残っていても何ら不思議はない。また本例には口金が付属し、さらにもう1個の環状鉄器が柄端 20 cm のところから出土している。これをノミの柄頭（カツラ）と考えてよいかもしれない。

道具としての刃物：ナタ、山刀（タシロ）、刀子（マキリ）類をここで扱う。ナタは、ボロモイチャシの A・B 築から各 1 丁と 2 F-50 区からの計 3 丁出土している。いずれも「直鉈」「腰鉈」といわれる形態のもので、長方形か平行四辺形の刃部と、やや下反する茎をもつ。重量感があり棟にはみな、敲打した痕跡であるつぶれがみられる。刃は両刃である。割り鉈・削り鉈という用途を名称化した言い方があり、本 3 例もこの範疇に入るものだろう。木材の伐採・加工や骨の打削に使われたもので、細工の際は、刃を対称物に当て、棟を敲くという使用法をとるため、棟につぶれができるのだろう。同形態のナタは、北海道では管見で 19 遺跡 25 点確認されている。現在使用されてあるものとも、両刃・片刃の違い程度で、ほとんどかわりない形態を示す。他の遺物とは逆に、変遷をたどることの難しいものであり、言い換えれば、用途の固定された、変化を受けにくい道具なのだろう。ただ山刀も同様の使用法があり、折れた刀も再利用でナタの機能を有することは、十分想像できる。再利用刀については、後述する。山刀（タシロ）は、1・2 号墓から各 1 点計 2 点の出土である。当時は、ナタほど一般的ではなかったのかもしれない。武器的要素を持っていたのだろう。

刀子は、遺跡から出土する鉄器としては、最も一般的で、それは、最も数多く存在し、頻繁に使用される道具であることを物語っている。生活必需品ともいえる刀子（マキリ）を、分析分類し、検討することができれば、様々な面で視野が広がることだろう。しかし、小製品で、使用頻度が高いことは、それだけ破損率が高いということと、着眼点の乏しさから、そこまで到達し得ないのが現状である。ちなみに、当遺跡の出土刀子は 38 点で、そのうち完成品とそれに近いものが 18 点である。破損しても、刃部を使用している例も多い。あえて分類すれば、刃部幅のわかるもの 33 点のうち 2.0 cm 以上のもの (a) 9 点、2.0 cm 以下のもの (b) 24 点となる。また、この 33 点のうち外反りのあるものの 6 点を (c) とすると、a+c となるものが、大きな反りをもち、木鞘柄に彫刻をもつといわゆる「マキリ」に近いものであろう。他にレウケマキリと呼ぶ、先端を曲げて木器の内側を削り込む道具がある。当遺跡では、2 点がその候補に上げられる。

魚獲具：マレブ（自在鉤鉈）。アブ（鉤）。ヤス・釣針が、魚を獲る際の金属製品である。これら魚獲具は、釣針が小型化する程度で、形態的に何の変化もなく、近現代へ移行してきたものと思われる。それほど、漁法が伝統的なもので、且つ、獲りやすい道具だったのだろう。マレブは 2 本出土している。いずれも小型で、マス漁用と思われ、III H-8 のものは、受けが浅く釣針状を呈する。先端も内湾しない。W-43 区のものは受けが深く、現存する多くのものに近い形態である。アブは中間部の破片 1 点出土している。カーブからみて、アブと判断した。ニオイ・ボロモイ両チャシから出土した釣針は、丸釘の加工品と思われる。マレブ・アブ・釣針は、本道でも多くの遺跡から出土しているが小型で鐵の付いたものを釣針と断定できる外は、大きさ・破片・形状等で、様々な解釈がなされている。困難な点もあるが、これに一定の基準をもうけて、統一見解を出すことが求められる。また当遺跡から出土する、棒状鉄器の破片中には、これら魚獲具ではないかと思われるものも多い。他の遺跡でも見逃されているものがあるだろう。これも一定の基準をもうければ、魚獲具として把えられよう。

ただ、釘等の棒状のものは、加工しやすく、それらをどう位置付けるかという問題がある。

ヤスは1点出土している。やや外反する大きなかえりをもつた1本ヤスで、民俗例からみると、3本ヤスの中心の1本として使用する例もある。組合せ、単独の使いわけができるものである。かえりのあるヤス先の出土例は、瀬棚町瀬田内チャシ跡と阿寒町坂の岡遺跡にみられる。

鎌：無茎のもの3本と有茎のもの3本が出土している。前者のうち1号墓の副葬品は、旗抉五角形式で、クジラの骨製の中柄が接続したままの状態である。ボロモイチャシA郭建物跡の炉と、2E-51区のものは、装鋒旗抉長三角形式で、装着のための小孔をもつ。この3本はキテの先端に用いられてもおかしくないものである。広鋒・狭鋒・三角形・五角形・底部の形態等でキテと鎌を区分できると思われるが、初源・機能の相違や、互換性のありそうなことなど、一筋縄ではいかない。

有茎の3本の、鎌の形態は、腹抉をもつ三角形式2本と斧頭形のもの1本に分けられる。三角形のうち、ボロモイチャシB郭のものは、笠被ぎがみられず、T-36区のものは、茎部との断面形のちがいで笠被ぎ、茎が分けられる。斧頭鎌のものは、笠被ぎと茎が明確に分化する。キテ・鎌については骨・木・竹等が組み合わさるもので、使用法も含めた総合的検討が必要であろう。

武具：槍・甲冑類（小札・縁金等）をここで説明する。刀については、出土の各項で形態等詳しく触れてある。破損品も多く、これらは二次使用、再利用されている。また墓出土の太刀についても当該項で、構成については述べた。刀装具と二次使用の2項は別項で詳述する。

槍先は、1号墓の墓標穴脇から出土している。「蝦夷島奇觀」禮部男夷墓図には、墓標脇に、穂先を上に向けて、木柄を突き立てた槍が描かれている。本例は、穂先が平三角造りで、柄への移行部が五角形、ここに袴形の口金がつき、柄は断面長四角形となる。千歳市末広遺跡I P-14墓壙外出土品に類品がある。また、余市水産博物館蔵のヨイチボロコタン伝世品に、本例のミニチュアとも言うべき、酷似した小品があり、重要な視点を与えてくれる。第1に、槍を武器としてではなく、いわゆる祭祀品・權威の象徴として把える視点、第2に交易に関する問題である。余市という地域は、中世から人が入り込み、交易も盛んな土地であったことと、山丹交易品といわれる遺物・伝世品も多数みられるなど、北海道の中へ近世研究には、看過できない場所である。この地に、1号墓槍と酷似した非実用品？が伝世していた事実に注目したい。本道で槍が出土した例は上記の他、白老町カムイエカシチャシ跡の大型槍先、足寄町トブシの鎌（平三角造の槍だろう）が報告等で形状が知られる。報文のみのものは、浦臼町、小樽市北祝津町、豊浦町有珠善光寺遺跡アイヌ墓、阿寒町、千歳市、江別市対雁樺太アイヌ墓地等である。また、鉢が、早来町、穂別町、中標津町、網走市モヨ貝塚から出土している。槍と鉢が混同されている部分もあり、これらの実物をもう一度整理する必要がある。

兜あるいは鎧と思われる破片が、ボロモイチャシB郭から出土している。小札・鉢が確認されているが、形状はつかめない。平取町内では、鎧の出土した遺跡が他に3カ所ある。アベツチャシ跡、額平川1遺跡、芽生3遺跡がそれで、特にボロモイ・ニオイの両チャシと時期的・距離的に近いアベツチャシからは、Ta-b火山灰直下から二体分の胴丸が検出されている。ボロモイチャシA郭からは、一部鍍金のある、鎧兜の鉄製縁金（覆輪）が出土している。形状や長さから、冠板・鳩尾板・眉庇につくものと思われる。小札もボロモイチャシA郭や、III H-1・3・4や鍋に付けられたもの等が、単独あるいは2点で出土している。形は主に、盛上本小札と呼ばれる片端が斜辺になるもので、室町時代のものとされる。全道的にみても、兜は比較的みられるが、鎧がまとまった形で出土しているのは、アベツチャシや余市町栄浜遺跡ぐらいで、小さなまとまりを除けば、ほとんどが、小札・縁金とも単独で出土している。おそらく、当初は鎧の形で手に入れたものが、時間のあるいは人为的に分解され、各部分を別目的で使用することになるのだろう。あるいは、初めから、甲冑とは関係のない単品

として、交易されるのかもしれない。その用途については、装飾あるいは鉄片としての利用が考えられるが、当遺跡でも見られるごとく、炉の中から小札が出土することにも注目したい。またIIIH-4から出土している鎖は、上ノ国町勝山館跡出土品にみられる、籠手を形成する小札をつなぐ鎖ではないかと思われる。

垂飾：2D-36 区から出土した、鉄製の細工品がある。そのうちのコイル状鉄製品が、常呂町ライトコロ川口遺跡 12 号窓穴内墓壙から出土したものに類似し、その新田栄治の報告(1980)に従って、本製品の一括を垂飾と考えた。新田は、金属の垂飾のついた帯の例として、樺太・アムール川流域・シベリア内陸のものを取り上げ、結論として、このコイル状鉄製品を、樺太方面とのつながりを示す腰帶型の垂飾とした。そして時期的には、平安時代末期をさかのばらないと位置付けた。当遺跡の他種細工品を含めたコイル状鉄製品「垂飾」は、出土層位(III層中間)や周囲の遺物出土状況から、據文期のものと考えられるが、そうなると、当時の交易ルートの一端がここにクローズアップされてくる。これは、そのまま中・近世の交易ルート検討に反映してくるものである。

刃装・象嵌装飾について：主に 1・2 号墓の太刀と装飾刀子について述べる。他に鐔・鍔・緑金物・小柄等が単独で出土しているが、これらについては、他の装飾品等に再利用されたものとみている。ニオイチャシの毛抜形太刀は、毛抜き透しこそ退化しているものの、この形式の太刀が一時に盛行するといわれている 10~11 世纪からみれば、かなり新しから、長時間の伝世を考えねばならない重要な資料である。2 号墓の太刀は、刀装飾自体に南北朝~室町時代の年代が与えられる。銅製木瓜型の猪目透しのある鐔は、道内でも 10 カ所以上で確認されており、猪目透しは、鎌倉時代に盛行するものという。1 号墓出土のような蝦夷透けの太刀が出現する以前のものであることは確かである。1 号墓の蝦夷太刀(エムシ)は、各種刀装具を寄せ集めて装飾されたものようである。鐔が逆向きに入れられていることも、刀本来のものではないことを物語っている。鐔・切羽の据文象嵌や覆輪と、目貫の位置に着けられたと思われる銀製金具・柄頭の装飾等は、当時の日本刀にはない。武器としての機能を失った太刀の姿であろう。類似の品物は、伝世品にも多くあり、千歳市ウサクマイ遺跡 A P-13 墓壙の太刀にもみられる。(ちなみにこのウサクマイ A P-13 墓壙は、副葬品内容や副葬状態が、1 号墓に酷似する点、興味深い)。鹿角製の鞘尻具を含めて、鞘は自ら製作した可能性があるにしても、このような、いわゆる蝦夷好みの太刀が、交易品として本道に流入してくることは、2 号墓の時期と比して、対交易者の好みをたくみに察知しているところなど、交易の隆盛を物語る資料ではないだろうか。その点では、2 号墓の柄部銀象嵌装飾刀子は、その先駆的遺物である。これにみられる銀丸板を配列した装飾は、千歳市未広遺跡 I P-45・84 の刀子柄、I P-114 の刀子鞘や、音別町ノトロ岬遺跡 A-1 号墓太刀の鞘の他、伝世品のエムシやイカヨブ(矢筒)・ペラウシトミカムイ(歎形)へという系譜をたどるものでやはり蝦夷好みのものといえるであろう。

古銭：すべて銅錢で、皇宋通宝(北宋仁宗 1039 年初鋤)楷書体 1 枚、元豐通宝(北宋神宗 1078 年初鋤)行書体 1 枚、元祐通宝(北宋哲宗 1093 年初鋤)小篆体 3 枚、洪武通宝(明 1368 年初鋤)楷書体 1 枚、永樂通宝(明 1408 年初鋤)楷書体 3 枚がある。元祐通宝のうち S-36 区のものは、文字が不鮮明で、裏面が平滑であり、模銅錢(銅写し銭)と思われる。ニオイチャシ出土の 5 枚のうち 4 枚は、ガラス玉と併出し装飾品と思われる(皇宋通宝は孔を加工)。他の 1 枚単独で出土したものも、装飾品か、針差し(チシボ)の綱りとして使用されたものであろう。

その他の金属製品：先述した通り、棒状鉄器の中には、魚獲具と思われるものがある。環状鉄器のほとんどは口金(タマクラ)であろう。W-37 区のレバー状の鉄器は、仕掛け弓の引き金(ヘチャウエニ)と酷似する。針金状の鉄器も 3 本あるが、これも既に使われた可能性があろう。X-38 区の捩棒

の混る棒状鉄器は、上ノ国町勝山館遺跡や、青森県八戸市根城跡の出土品から、火箸ではないかと思われる。ボロモイチャシB郭の鉛塊は、鉛環の前後の段階（製作過程か他器種への転換か）での溶解固化状態であろう。融点の低い鉛ならではのことと思われる。さらに火に関して言えば、ボロモイチャシA郭建物跡の炉とIIIH-3の炉から出土した、断面U字形気味の薄板小片が酷似し、この二つの炉からは、小札も出土している点が興味深い。今後、炉やその周辺から出土する金属器については、それを意識した調査が求められる。

再利用、二次的使用について：当該遺物の項でも記し、表38～40にも項目をもうけたのは、これが、金属製品の性格・意味の一翼を担う、重要且つ一般的な事項だからである。個々に再度触れるスペースはないので、代表例をあげると、ボロモイチャシB郭の刀（刀再利用）、Y-42区の刀子（刀再利用）、2B-46区鍬先（木割り具へ）の他、釣針は丸釘の加工、小札の単品使用があり、装飾品も広い目で見れば再利用品である。富永慶一（1964）は、阿寒町内の遺跡調査から、アイヌの刀身利用工具の存在を公にした。また、遠矢第2チャシ跡や瀬田内チャシの報告でも、その指摘がある。では、何故再利用、二次使用なのか。単純に考えれば、貴重品である金属製品を大事に使うということだろうが、富水報告等のように、主に刀を工具・刃物にするように、パターンがありそうである（例えば再利用するものと廃棄するもの・物送りするもの）。これは生産力の向上に寄与する度合の高低によるものではないだろうか。次にこれを若干検討しまとめとしたい。

金属製品と北海道中近世考古学：日常生活への金属製品の導入＝交易がもたらすものは、生産力の向上である。農耕の進歩・漁撈狩猟の充実・生活用品や生産物の加工が容易になることなどの発展がある。これが余剰生産物を生み出し、よって交易の隆盛をもたらす。交易が頻繁化し、手に入るものの範囲が広がると、交易のための生産をはかりはじめる。商品をつくり出すほどの生産力を保持するために、例えば前述した、道具の再利用・二次使用や工夫がなされる。このように交易が日常化すれば生産力向上と相乗効果で、財の蓄積がなされ、生活用具から装飾品・嗜好品へと交易品の内容にも変化があると思われる。単純化すると以上のような図式が成り立つだろう。交易品を持ち込む側は当然それを察知し、初期の生産・生活用具類から、いわゆる蝦夷好みのものや嗜好品へとその主体を変えていくと考えられる。北海道の中近世考古学を確立し、当該期の状況を明らかにするには、この交易の問題を抜きにしてははじまらない。金属製品各種の初源・変遷という形態変化を、據文期に纏めて把握するとともに、交易品として入ってくる漆器・農産物等を含めたセットで把握することが重要だろう。一つ一つのものは伝世もするし、再利用も行う。しかし全体をもって、検討し直すことが、交易のルートを把握することにもなり、究極的には、当該期の内外状況を見据えた、歴史の解明という中近世考古学の命題を確立し解決することになるだろう。

（三浦 正人）

表38 出土金属製品一覧 (1)

名 称	遺 墓・調査区等	二 次 的 使 用	特 復 そ の 他	国 卷 号
銅	ボロセイチャシA葬		内耳・一大字面・4枚葉巻・田口12のもの の各2枚・底端を鋸り切る。 ボロセイチャシA葬のもの	35-1
銅	III H-12		内耳・底内出土・口縫部片	66-1
銅	ボロセイチャシB葬		内耳・口縫・底縫部片	41-1
銅	V-24		内耳・口縫部片	73-1
銅	2D-46		内耳・口縫部片	73-2
銅	エオイチャシ(L-13)		一字文字面口・底部破片	25-5
銅	III H-11(O-19)		昂耳・5枚鋸き・底物外送り?	64-1
銅	W-45		昂耳・耳部片	73-4
銅	W-29		三本刺・丸型頭口・小型・8合巻き	73-5
銅	Y-43		口縫部片	73-3
銅	エオイチャシ(G-10)		昂耳?・口縫部片	25-1
銅	エオイチャシ		口縫部片	25-2
銅	エオイチャシ(K-6)		口縫部片	25-3
銅	X-46		口縫部片・小札2枚が折り曲げて取り付けられ る。	73-8
銅	ボロセイチャシA葬		鋼部片	35-2
銅	エオイチャシ(I-6)		鋼部片	25-4
銅	2D-46		鋼部片	73-6
銅	2C-48		鋼・底部片	73-7
鐵 先	2B-46	上端を鋸き、刃部を木削り?に使用	角擦・半横	75-33
鐵 先	Y-39		U字鋼	75-34
鐵 先	2A-40		U字鋼・鋸石と併出	75-35
鐵	ボロセイチャシA葬		直刃	36-12
鐵	ボロセイチャシA葬		直刃・茎内	36-11
鐵	III H-1		直刃・タマカラ付	55-2
鐵	2E-50		直刃・タマカラ付	75-30・31
鐵	2E-38		直刃・捲文柄	75-32
矛 引 金	ボロセイチャシA葬		直刃等の鐵壁をとる道具	36-16
矛 (頭)	S-30		納通し孔	75-36
矛	W-41		ショット・筋押す出し金剛寺字(三面鏡)・捲文 柄	75-31
鉤	III H-4		小型・あさり有り	58-1
の み	ボロセイチャシA葬		両刃づくり・タマカラ(口金)付	36-13
ナ タ	ボロセイチャシA葬		圓鉈・茎内出土・復につぶれあり。目釘孔1	35-8
ナ タ	ボロセイチャシB葬		圓鉈・茎内出土・復につぶれあり。目釘孔1	41-4
ナ タ	2F-50		圓鉈・復につぶれあり。目釘1	75-29
山 刀	1号墓		タシロ・柄・楠木質残存・両区。目釘孔2	47-2
山 刀	2号墓		タシロ・柄・楠木質残存・両区。目釘孔2	52-2
刀 子	エオイチャシ(E-7)		両区 (刀子分類) b	26-10
刀 子	III P-1		両区・鷹木質残存	b 71-1
刀 子	U-28		両区・茎尖	b 74-9
刀 子	Y-30		両区・茎尖	b 74-10
刀 子	Y-30	初先端のみの使用?	両区・刃・根につぶれためくられあり。	b 74-11
刀 子	H-19		根外反り・ヤカリ?・刃区	b + c 74-12
刀 子	2B-44		刃部一極	d 74-13
刀 子	1号墓		初先刃・柄・楠木質残存・両区	b 48-13
刀 子	2号墓		柄・楠木・有機質残存・両区。目釘孔1 b	53-9
刀 子	2号墓		側外底ツラ・柄・楠木質残存・両区。目釘孔1 b + c	53-10
刀 子	エオイチャシ(K-6)		初先刃・刃部片	b 26-11
刀 子	エオイチャシ(G-10)		初先刃片	b 26-12
刀 子	V-35	初先端のみの使用?	初先刃・刃部片・刃部接半につぶれあり。	b 74-14
刀 子	2E-51		初先刃片	b 74-15
刀 子	エオイチャシ(E-7)		刃部片	b 26-13
刀 子	エオイチャシ(E-7)		刃部片	b 26-14
刀 子	エオイチャシ(D-6)		刃部片	b 26-15
刀 子	ボロセイチャシB葬		刃部・茎片・両区	b 41-6
刀 子	炭化物列(Z-45)		刃部片	b 69-2
刀 子	25-47		刃部・茎片・両区	b 74-16
刀 子	2D-46		刃部片	b 74-18
刀 子	P-20		刃部片	b 74-19
刀 子	X-46		刃部・茎片・両区・X-46鋼と併出	b 74-20
刀 子	ボロセイチャシB葬		茎片・目釘孔1	- 41-5

表39 出土金属製品一覧 (2)

名 称	遺 墓・調査区等	二 次 的 使用	特 徴 そ の 他	図 番 号
刀 子	2A-44		基片・目釘孔1	《刀子分類》- 74-25
刀 子	P-20		基片	- 74-17
刀 子	2号墓		銅・純水銀・表面無加工・柄には鎌倉漆の朱 墨の痕跡認められず。	53-7
刀 子	ボロイチャンA器		マキリ?・柄木質既存・同区・基長い	36-9
刀 子	T-28		マキリ?・柄木質既存・同区・基長い	74-21
刀 子	2E-45		マキリ?・柄木質既存・同区・基長い	74-22
刀 子	Y-42	大刀先端部の加工使用	マキリ?・刀身に縦あり・横外反り a・c	74-23
刀 子	2B-49		マキリ?・刀身に縦あり・横外反り a・c	74-24
刀 子	2号墓		マキリ?・柄木質既存・横外反り a・c	53-8
刀 子	IIIH-1		マキリ?・同区	a 55-1
刀 子	2A-50		マキリ?・初先・目釘孔1	a・c 74-28
刀 子	X-43		マキリ?・刃部・基片・目釘孔1	a 74-26
刀 子	ボロイチャンA器		レウタマキリ?・刀身中央から曲	36-10
刀 子	2F-50		レウタマキリ?・初先曲	74-27
釣 钩	ユオイチャシ(G-10)	丸釘加工?	かえりなし	26-16
釣 钩	ボロイチャンA器	丸釘加工?	かえりなし	36-17
マ レ	III-C-8		受け張い・釣形態・マス用?	61-1
マ レ	W-43		受け張い・マス用の大きさ?	76-42
ア ピ	U-36		断面角	76-43
ヤ ス	T-35		かえりあり・三本ヤスの中央部?	76-44
鍔	ボロイチャンA器		鍔部分に刃付着(中納)?・鋸玉・裏 無基・小孔1・鍔骨質中納付・豊扶五角形式	36-15
鍔	1号墓		無基・小孔1・鍔骨質中納付・豊扶五角形式	48-15
鍔	2E-51		無基・小孔1・鍔骨質中納付三角形式	41-7
鍔	ボロイチャンB器		有基(長い)・鍔頭丸連続状三角形式	41-7
鍔	T-36		有基・鍔被鉄平造模秋三角形式	76-40
鍔	2C-50		鍔被鉄平造模秋三角形式	76-41
鍔	1号墓		鍔被鉄平造模秋三角・口金付・基頭穴出土	48-12
太 刀	1号墓	刀飾具は寄せ集め	銅木質・鍔・有機質既存・鍔頭部で刀面 を支え	47-1
太 刀	2号墓	刀飾具は寄せ集め?	刀頭部は木質・鍔・有機質くらべ・刀刃の握 持部は木質・鍔	52-1
太 刀	ユオイチャシ(G-H-5)		毛抜鉄大刀・足金物・貴金具あり。	25-6
刀 ユオイチャシ(F-5)			両区・横外反り・柄に金具あり	25-7
刀 ユオイチャシ(F-5)			伴出	25-8
刀 ユオイチャシ(F-5)		折損後も使用	初先・刀部片	25-9
刀 ボロイチャンA器		折損後も使用	刃部・基片・同区・目釘孔2	35-3
刀 ボロイチャンA器		折損後も使用	刃部・基片・刀区・目釘孔2・鑑内出土	35-4
刀 ボロイチャンA器			縦を有す・横・両区・目釘孔1・鑑内出土	35-5
刀 ボロイチャンA器			初先・縦縮短・浅い両区・目釘孔2	35-6
刀 ボロイチャンA器		折損後も使用?	刃部既くの刀部片	35-7
刀 ボロイチャンB器		折損後も使用	刃部既くの刀部片	41-2
刀 ボロイチャンB器		折損後も使用	初先・刀部片	41-3
刀 2B-41			横片・目釘孔1	75-38
小 礼	ボロイチャンA器	鏡片としての利用法	片端斜め・孔2列計14孔・鋸から出土	26-21
小 礼	IIIH-1	鏡片としての利用法	折損・鏡片正方形・孔2列計6孔	55-3
小 礼	IIIH-3	鏡片としての利用法	折損・現存孔2列計4孔・鋸から出土	57-1
小 礼	IIIH-4	鏡片としての利用法	2枚・片端斜め・孔2列計13孔	58-2
小 礼	W-43	鏡片としての利用法	折り畳まれてある・片端斜め・孔2列計13孔	76-45
小 枚	X-46	鏡の取手がパンツとなり。	一枚・片端斜め・孔2列計13孔	73-8
先 ?	ボロイチャンB器		小孔のある鏡(小孔の下)・鏡の形・形狀不整 その他の鏡(小孔の下)・鏡の形・形狀不整	41-13~20
鏡	田H-4		小鏡1個 (鏡?)	58-5
鏡	2D-36		コイル状・鏡・鏡面・長方形鏡・鏡状鏡・鏡 面鏡・大鏡・鏡頭・鏡字間に鏡縫合を有し 其風貌あり。	77-61~77
キ チ ル	ユオイチャシ(G-6)		鏡面大鏡・鏡頭・鏡字間に鏡縫合を有し 其風貌あり。	26-30
甲 金 鎏 金	ボロイチャンA器	他の範囲に使用?	本出土土器 (一ノ金鎔金)・本出土は琵琶 湖に近い・本出土は琵琶湖に近いものもある 本出土の鏡・鏡片	37-25~29
鏡 金	ボロイチャンB器	材料化 (磨かず既成品)?	鏡に1枚・他の範囲の既成品・様子はF-3 出土の鏡・鏡片	41-11~12
鏡 刃 刃	1号墓		鏡頭部・鏡頭部・鏡頭部	47-1
明 細 鏡	1号墓		鏡頭・四分一鏡・日賀鏡や折頭鏡の裁鋟	47-3~10
鏡 石 突	1号墓		島内鏡長円筒・刃2本	47-11
鏡 刃 刃 鎏 金	2号墓		鏡頭大鏡・刀身既存・鏡頭羽4枚・底革渡 鏡頭羽4枚・刀身既存	52-1
鏡 金 等	2号墓		銅鏡4枚・子打ち出し・鎔金2個・円錐形1個	51-1~3・4~6
鏡 金 具	2号墓		鏡頭・鏡口か石突付近の金具	52-5
鏡 金	IIIH-6	他の範囲に使用?	銅鏡破片	59-1

表40 出土金属製品一覧(3)

名 称	造 様・調査区等	二 次 的 使 用	特 徴 そ の 他	図 号 号
鎌 金・純	2F-S1	他の装飾に使用?	素面・縫は無潤の合せ。種源山形・ビーバー玉 の出	77-78・79
鎖	2F-S1	他の装飾に使用?	銅鎖・平頭の拳振・先に二段に別かれる	77-80
小 刃	W-42	他の装飾? 刀子の柄?	鉄鍔・環鎖・片面魚+子状 頭部・2點・西井花形・各端に2本の花鍔。 鍔に刻み?	77-81
第 金 具	T-39			77-82・83
古 鎌	ユオイチャシ(G-10)		「水滴通宝」	26-31
古 鎌	ユオイチャシ(G-10)	音鳴り(ガラス玉件出)	「皇宋通宝」? 孔の一隅を加工	26-32
古 鎌	ユオイチャシ(G-10)		「永楽通宝」	26-32
古 鎌	ユオイチャシ(G-10)		「洪武通宝」	26-34
古 鎌	ユオイチャシ(E-6)	織り or 計差し織り?	「永樂通宝」	26-35
古 鎌	ボロモイチャシ A器	織り or 計差し織り?	「光祐通宝」	36-35
古 鎌	IIIH-1	織り or 計差し織り?	「元豐通宝」	55-4
古 鎌	変化物列(Z-45)	織り or 計差し織り?	「元祐通宝」	69-1
古 鎌	S-36	織り or 計差し織り?	「光祐通宝」?	77-84
船 墓	ボロモイチャシ B器		4片・計24.5g・船底等装飾品の材料か、それ が抜けたものか?	41-9・10
針 金 状 鋼 器	ユオイチャシ		新面円	26-17
針 金 状 鋼 器	ボロモイチャシ B器		新面角	41-8
針 金 状 鋼 器	X-42		新面円	76-55
環 状 鋼 器	ユオイチャシ(G-5)		破片・新面内形	26-22
環 状 鋼 器	ユオイチャシ(L-6)		タマクラ	26-29
環 状 鋼 器	ボロモイチャシ A器		タマクラ	36-22
環 状 鋼 器	IIIH-2		タマクラ	56-2
環 状 鋼 器	IIIH-3		破片・新面内・炉出土	57-3
環 状 鋼 器	III P-1		ヨイル状	71-2
鉤 手 付 鋼 器	ユオイチャシ(G-10)			26-18
鉤 手 付 鋼 器	V-40			76-56
針	I号墓		青銅器出土・新算品ではない可能性あり。田 中一里塚跡出土	48-14
釘			銀巻釘の頭部	36-18・19
錐 次 鋼 器	ボロモイチャシ A器		丸釘の先?	36-20
錐 次 鋼 器	ユオイチャシ(M-11・E-8)	釘の加工品?	丸釘の先? 無腹具?	26-19・20
錐 次 鋼 器	X-48・W-38		丸釘の先?	76-59・53
錐 次 鋼 器	Y-39・2D-44・S-28・X-47		新面丸方彫・魚龍具?	76-46・49
錐 次 鋼 器	X-38		錐等複数の頭がある。火薙か?	76-54
錐 次 鋼 器	ユオイチャシ		用途不明	26-25~27
錐 次 鋼 器	IIIH-2		圓曲部あり	56-1
錐 次 鋼 器	IIIH-5		圓曲部あり	59-1
錐 次 鋼 器	IIIH-4			58-3・4
錐 次 鋼 器	変化物列(Z-45)			69-3
錐 次 鋼 器	2A-50・Q-26			76-51・52
不 明 鋼 器	ユオイチャシ(E-7)		厚みのある小片	26-21
不 明 鋼 器	ユオイチャシ(I-6)	刀子からの転用?	一部刃部状? 横側に半円形の小抉幅あり。	26-23
不 明 鋼 器	ユオイチャシ(I-14)		厚みのある無刃部・U字形に横に曲る。内部 内出土	26-24
不 明 鋼 器	ユオイチャシ(H-6)		薄く幅狭い茎・同様屈曲	26-24
不 明 鋼 器	Z-E-51		薄く幅狭い茎・屈曲部あり	76-58
不 明 鋼 器	ボロモイチャシ A器		薄板小片・断面U字気味	36-23・24
不 明 鋼 器	IIIH-3		薄板小片・断面U字気味	57-2
不 明 鋼 器	Z-42		三角形薄板	76-57
不 明 鋼 器	U-28		薄板・2点	76-58
不 明 鋼 器	U-37			図示せず
不 明 鋼 器	W-37		仕掛け弓の引き金(ヘタ・ウェル)に類似	76-80

8 ガラス玉について

ガラスには金属の輝きにはない、独特の色と透明感をもった幻惑性がある。これが装飾品、特に玉として製品化されると、多種多様に集めたり、同一のものをそろえたりと、あらゆる構成方法で美を醸し出す。ユオイチャシ跡から出土した青色(浅葱色)の蜜柑玉や、ボロモイチャシ跡や二風谷遺跡

2 F-51 区のビーズ玉も、このような装飾品を構成するものであろう。特にユオイチャシの蜜柑玉が銅鏡 4 枚(1 枚は孔加工鏡)と一括出土し、2 F-51 区のビーズ玉が銅製刀装具と併出することは、ガラス玉だけでなく、金属製品と組み合わせた装飾品という点で、伝世しているタマサイ(玉飾り)やニンカリ(耳飾り)を想起させる。ただ一般にタマサイには、大小・形状・色調・文様等の様々な要素が組合せられているが、当 3 遺跡で出土したものは、それだけの構成要素を持ち合わせない。玉飾りの一部の欠落か、何らかの本体にとりつけられていた装飾と考えられよう。

中世～近世における北海道のガラス玉については、形・色・材質・製作技法の面のほか、それらを含めた流入経路～交易の問題が重要である。山丹交易によるのか本州との交易かをえることは、金属製品・漆器・食料等も含めた交易の実態と生活を知る上で必要である。視野を広げれば、当時の北海道の、東北アジア地域における立場を規定する一要素となり得る。ここではその一助となるべく当遺跡のガラス玉について、形・色・材質・製作技法について触れておく。なお、材質についての分析は、東京国立文化財研究所 江本義理氏による螢光 X 線分析のスペクトル強度によった。

ユオイチャシのものは蜜柑玉である。4 房と 5 房のものがある。側面の丸い平玉に筋を入れたもので、入り方に不規則なところがある。色は青(浅葱色)で、透明感がある。筋の入れ方や色からすると、蜜柑玉としては古そうなものである。材質は、鉛が強いスペクトルを示し、銅が弱、鉄が微。亜鉛が極微を示す。鉛ガラスであり、鉛によって浅葱色が出されているのである。

ボロモイチャシのものは、すべて小破片で、孔の痕跡も確認できない。玉ではなく、ガラス屑のような感じさえ受ける。黄味がかった透明のもの他、紺色の粒が 1 片ある。分析は行っていないが、他の例からみて、無色がアルカリ石灰ガラス、紺色が鉛ガラスと思われる。

2 F-51 区のものは、22 個が、無色透明・深紅透明・水色透明・水色・青緑透明と色で 5 種、丸珠のあるもの・製作時の螺旋痕跡のあるもの・螺旋をはっきり残したものと形で 3 種に分けられる。色と形の組合せによって 9 種類のビーズ玉に分けられる。材質分析では、無色のものは、亜鉛・銅・鉄が微といいう結果で鉛が土、おそらくアルカリ石灰ガラスであろう。深紅は、鉛が強く、亜鉛が微、銅・鉄が極微、水色と緑青が、鉛・亜鉛が弱、銅が微、鉄が極微のスペクトルを示している。色つきのものは、鉛ガラスで、他の元素で色が変化しているものと思われる。製作方法は、丸珠のあるものでは両面に千切れ跡のあるものが多く、これは鉄線上で棒状に丸められた原体を、切り放す時のものと思われる。螺旋形のものは、鉄棒を回しながら、溶かしたガラスをこれに極細く垂らしたもので、これを適当に小割りしたものが 1 個の玉であろう。螺旋痕跡のあるものは、小片にした玉に、研磨という工程を加えた結果であろう。類似品では、算盤玉に段筋のあるものがあり、これが螺旋技法かと思われるが、他に当技法やその実例については、管見では、これを知らない。今後の課題とするとともに、これが、交易ルートを探査する 1 つの手がかりであることを、しるしておく。(三浦 正人)

表41 出土ガラス玉一覧

遺跡名	出土地点	數	色	形	量	最大・平均寸法 mm・重さ g () 内平均	伴出物	回番	No.	備考
ユオイチャシ跡	G-106	4	青	4.5mm の管球玉形	39: 直径 4.5(4.5)・高さ 77・重さ 37: 直径 11		古鏡 4 枚	回26	36～39	加熱化跡状 不明
ボロモイチャシ跡	A 氏土塁外縁	9	紺色(白)	薄片・ビーズ玉	直合計 0.86			—	—	丸に埋設できない
二葉谷遺跡	2 F-51 区	22	紺色?	ビーズ玉 らせん巻・螺旋	直 4.5(3.9)・厚 3.9(3.8)・重 0.075 (うち 4.8(0.088) 全 0.075)		刀削真	回29	38～54	縦・羽毛模様なし
				厚紅?	直 4.1(4.0)・厚 3.4(3.6)・重 0.069(0.065)		刀削真	回30	55～67	黒赤なし・薄い・
				水色?	ビーズ玉 らせん巻・螺旋	直 4.0(3.5)・厚 3.2(2.7)・重 0.054(0.046)		—	106～108	106は螺旋なし・透明白・不透明
				青緑?	ビーズ玉 らせん巻・螺旋	直 3.7(3.1)・厚 2.9(2.3)・重 0.046(0.036)		—	95～96・98・99	
				水色?	風化 らせん巻・螺旋	二風化上部 220 個の平均 直 3.5(2.7)・重 0.9(0.96)		—	97～107	

9 錘石について

ボロモイチャシ跡A郭・B郭の建物跡、及び二風谷遺跡の建物跡からは、小礫が、30~60個まとまって出土しており、III層包含層からも11カ所の集中箇所が検出されている。各々の集中箇所をブロックと呼ぶこととする。

(1) 錘石の形態と重量

各錘石ブロックの平均値は各遺構及びIII層包含層の項に示した。個々のブロックの長幅分布をみると、図125の上段のような最大長4~8cm、最大幅2~4cm、重量が10~40gにピークをもつ、比較的小形のものと、B郭ブロック2のように最大長6~9cm、最大幅3~5cm、重量70~130gにピークをもつ比較的大形のもので構成されるブロックがある。他のブロックの錘石は両者の中間に含まれる。数例の例外を除くと、すべての錘石は最大長4~9cm、最大幅2~5cm、重量20~90gの範囲にある（図125）。

錘石の形は、図125右列に示したように長楕円形である。稜をもち、断面隅丸長方形のものと、稜をもたない断面卵形のものがある。前者には砂岩・泥岩、後者には片麻岩が多い。表面はいずれも滑らかであり、河原石と思われる。剥離度、敲打痕など人為的加工のみられるものはない。

(2) 錘石の用途と製品

錘石は、形態・重量ともにかなりの規格性があり、またその出土状態からみても、同時に使用された可能性が強い。アイヌの民具には、編み物用の錘り石・ピッ（pit）があり、大きさ・形態において似似し、本遺跡の錘石も編み物用として用いられたものであろう。

また、編み機はイテセニ（itesei-ni）といわれ、ござ〔トマ（toma）〕や、袋〔サラニップ（saranip）〕等を編むのに使われる。ピッはトマを編むのに50~60個、サラニップを編むのに36個前後必要であるとされる（萱野1978）。本遺跡の錘石ブロックを構成する個数は30~60個が多く、直接に対象製品を推定することは困難であるが、A郭ブロック2のように、小さめの礫で構成され、個体数も少ないブロックに関しては、ゴザというよりは、袋等の小形の製品を編むために用いられたと考えることもできよう。

(3) 出土状態の検討

25ブロック中、建物跡内出土のものは10ブロックを数える。建物跡内における錘石ブロックの出土位置をみると、ボロモイチャシA郭・B郭建物跡、IIIH-1・4、いずれも建物跡長軸の中央部から入口部（推定）にかけての場所からの出土であるという共通点が察える。

アイヌ住居において、住居の中央部に位置する炉と出入りとの間の空間は、「女の仕事場（敷き物編み、糸筋ぎ、布織り等）」であるとされ（渡辺1980）、建物跡内の錘石のブロックの出土位置はこれに符合するものである。とすれば、建物跡内の錘石ブロックの位置は、建物跡が住居として利用されていた時点からさほど移動していないことができる。ブロック個々の出土状態からみると、A郭ブロック5・6、B郭ブロック2、IIIH-4のブロックは1~1.30mの長さで列をなすように検出され、また一方A郭ブロック2・7、B郭ブロック1では約40cm²の範囲内から積み重なるように検出されたことからも遺棄されたものと判断される。また、前者の出土状態は使用状況を、後者のそれは袋等に入れられ保管されていた状況を表わしている可能性がある。III層包含層のブロックに関しても、後者の出土状態が多くみられ、付近に何らかの遺構があった可能性もある。

以上、本遺跡の錘石の形態、用途について触れ、出土状態からの検討を行なったが、ほぼ同一時期のものに末広遺跡の建物跡に伴う礫がある（田村編 1985）。錘石については、擦文期の住居跡内の礫との関連、建物内空間利用の問題等、今後検討すべき問題が多い。

（寺崎 康史）

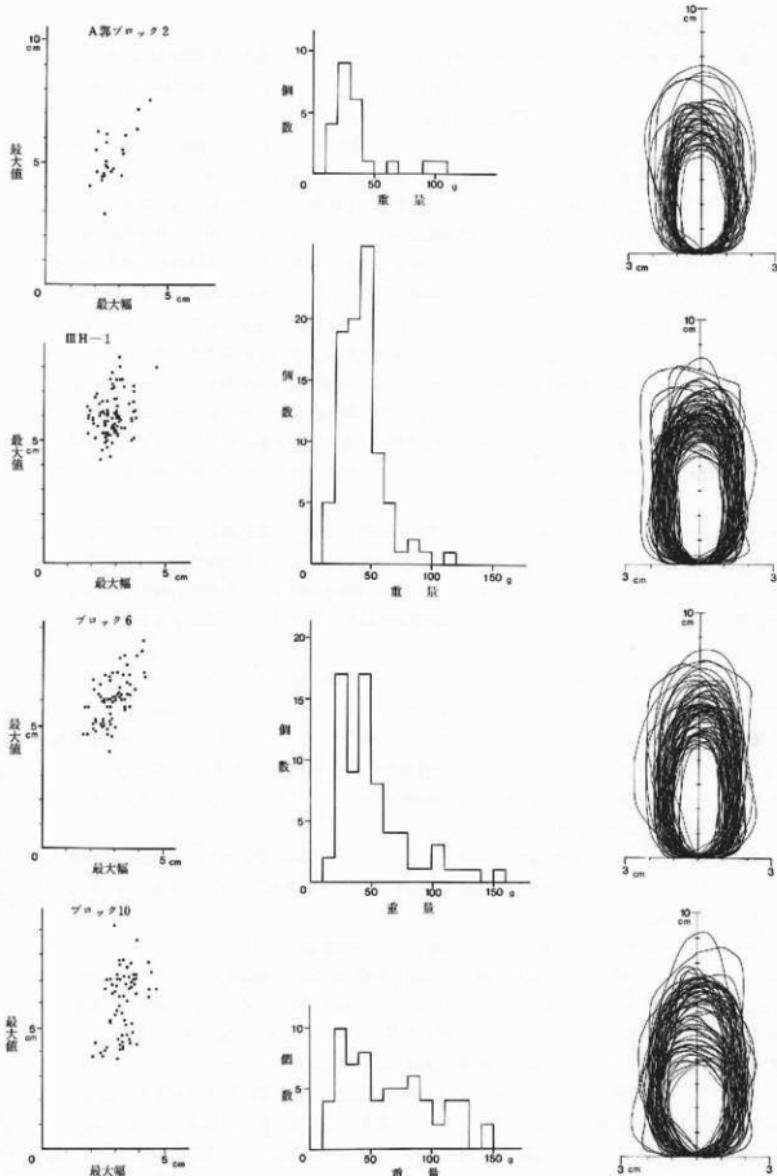


図125 錘石の長幅分布、重量分布と形態の相似傾向

10. 回転式鉗頭について

鉗頭は、ボロモイチャシA郭内建物跡の焼土中から1点、二風谷遺跡で建物跡に関連すると思われる焼土(III F-6)の灰層中から1点、計2点出土している。^(註1)いずれも、火を受け白変しており、全体の形をとどめていない。(その推定図は、図126-8、10に示してある)

鉗頭は、2点とも中柄の挿入される部分(ソケット)が開窓になるもので、窓のはば中央に締着溝がめぐり、索孔が二孔式のタイプである。先端部に刃溝が施され、尾部が二股にわかれる。さらに、もっと細かく観察するならば、前者(図37-31)は先端部から尾部にかけて全体に薄く扁平である。さらに、索孔の並び方が横位で、窓をめぐる締着溝のみぞは浅く、幅も狭い。窓の内部は間口が広く、奥に行くにしたがってせばまる。それに対して、後者(図70-III F-6-1)は体部が丸味をもち肉厚である。索孔は斜位につけられ、背面には浅い網溝が認められる。締着溝のみぞは深く、幅が広い。窓の内部は、間口と奥行きの幅はほぼ一定している。特に、尾部の両側縁は反りかえらず、内彌気味である。このような特徴をもつ類例は、ライトコロ川口遺跡出土の鉗頭のC類に求められそうである。

ところで、両者の窓の横断面を比較してみると、前者が開口部が狭くなっているのに対して、後者は、口が大きくあいている。前者のケースは、開口部が狭くなっているため、締着紐用の加工(締着溝)を必要としなくても中柄を窓内に固定することが可能である。このことは、締着溝が痕跡的にしか認められないことと関連するものと思われる。他方、後者の例は、締着溝に革バンド等を巻き付けないと鉗頭は中柄と固定しないものである。

以上のように、両者には共通点もあるが、鉗頭と中柄が固定される結合部の形態にやや違いが認められる。そこで、その違いをメルクマールにして、前者をAタイプ、後者をBタイプと便宜的に呼ぶこととする。そして、二者のうち、Aタイプは鉗頭と中柄を固定するための締着溝がきわめて浅くなり、窓がより閉窓に近づいていること、さらに索孔が横位になることなどを考え合せると、Aタイプがキテにより近い鉗頭といえそうである。

A、Bタイプの年代は、櫛前山の噴火によって、その下限(1667年)が与えられているが、上限についてははっきりとらえられない。ただ、Aタイプについては、ボロモイチャシ築内出土の古唐津から推して、16世紀末~17世紀初頭のものと考えることができる。また、Bタイプは、締着溝が明瞭に残っており、窓も大きく開いていることなどを考慮にいれるとAタイプより古い可能性をもっている。ちなみに、二風谷遺跡から一文字湯口の内耳鉄鍋が出土しているので、Bタイプの年代は内耳鉄鍋が^(註2)全道的に普及した15・16世紀とも考えられる。

次に、A、B両タイプの鉗頭を擦文文化・オホーツク文化以降に発達する回転式鉗頭の変遷の中に位置づけることによってその特徴を一層明らかにしたい(図126参照)。特に、索孔と窓の変化に焦点をあてつつ述べる。

まず、A、B両タイプに共通してみられる索孔がいつ頃出現してきたのかという点について考えてみたい。このことに関して、石附氏は神恵内村觀音洞窟遺跡出土の鉗頭を中心にして、擦文文化期から近世のキテに至るまでの変遷をとらえ、そのなかで、索孔の出現は擦文文化以降(鎌倉時代から室町初期の頃)^(註3)にみられるということ、さらに索孔の並び方が継位であることを述べている。ところで、觀音洞窟出土の擦文文化期の鉗頭は、縄文、統繩文期の開窓式鉗頭(オープント・ソケット)の伝統をひくもので、その特徴は、ひとつの溝で鉗頭と中柄を固定する締着部(締着溝)と獲物をたぐり寄せる網の取り付け部(索溝)とを併用していたことにある。そして、擦文文化期の鉗頭とそれ以降の鉗頭との間には、形態上において連續性が認められ、両者の大きな違いは後者の先端部に索孔が設けられたことにある。この索孔の出現は、締着溝と索孔との分離をもたらし、縄文文化以来伝統的に固執

していた装着方法を転換させたという意義をもっているものと思われる。そして、索孔の出現は、鉈頭と中柄を固定する結合部に大きな変化をもたらす契機を与えたといえる。すなわち索孔をもつタイプは、索孔が体部の中央にくることによって、縫着溝の位置が尾部に下がってくるとともに窓が徐々に閉じてくるようになる。このように、積丹半島では、擦文文化以降に伴う鉈頭から近世のキテにかけては、窓の形態に着目していながら開窓 (●) → 半閉窓 (◎) → 閉窓 (○) というように間断なくその発展を追うことができる。^(註4)

他方、オホーツク文化の栄えた根室半島ではすでに積丹半島より古くから索孔をもつ鉈頭（前田B群、E群）が、オホーツク文化後半期のオンネモト遺跡から出土している。しかし、根室半島ではオホーツク文化以降その系統がたどれる鉈頭は今のところ発見されていない。その空白を埋める資料としては、オホーツク海沿岸地域ではライトコロ川口遺跡出土の鉈頭がある。宇田川氏がタイプF（そのうちa・b・c類）と分類したもので、15世紀頃の年代が与えられている。^(註5) これらには、刃溝を作出していない例が圧倒的に多く、先端を明瞭に尖がらせていること、さらに索孔が縦位で縫着溝の位置が尾部付近にさがっていること、また尾部に幾何学文様が施されている例などの特徴から考えると全体に擦文文化の系統をひく鉈頭に近いといえよう。

いずれにしても、15・16世紀には北海道各地域に縦位あるいは斜位に並ぶ二孔式の索孔をもつ鉈頭が分布しており、横位の索孔をもつ鉈頭は出現していない可能性が強い（図126参照）。その意味で、ボロモイチャシA郭建物跡出土のAタイプは、Ta-b層（1667年）の下層から出土し、その年代の下限がはっきりしていること、横位の索孔をもつ鉈頭の出現をはっきり示す資料として重要であるとともに、後続するキテとの関連を考えるうえでも興味深い資料である。

沙流川河口のシノタイ遺跡では、Ta-b層（1667年）の上層から「キテ」と呼ばれる鉈頭が出土している。この鉈頭は、索孔が横位に並ぶ二孔式で、鉈頭と中柄を固定する窓の部分は完全に閉じており、先端部には刃溝が作出され、体部は肉厚で頑強である。Aタイプの鉈頭と「キテ」との相異は、大小の差を別にすれば、窓の形態にある。このように、横位の索孔をもつ鉈頭が火山灰（Ta-b層）を境にして半閉窓から閉窓に推移していくことが日高地方でうかがうことができる。

なお、日高地方のキテは、索孔が横位のもの（大塚氏のいうType B_a）が圧倒的に多いが、釧路・北千島・南千島では後世まで縦位の索孔をもつキテ（同Type B_a）が残るようである。^(註6)

註1 最近、焼土から鉈頭が出土する例が増えてきている。魚骨層、貝塚から出土てくる鉈頭などはイワクテとして理解されているが、焼土出土の遺物をどう考えるかは今の所明らかになっていない。今後、注意していく必要があろう。

註2 越田 1984 a 35 頁参照

註3 森 浩一編『日本民俗文化大系』3 稲と鉄の項で石附氏がテキ（鉈）の型式変遷について述べている。その発表以前に、石川直章氏が観音洞窟出土の鉈頭を分類しているが、石附氏の分類とはやや異なるようである。

註4 このような流れは、すでに千代 雄氏が神戸内観音洞穴出土の鉈頭をA～E類に分類することによってA～C類が開窓式、D類（中世のキテ）が半閉窓式、E類（江戸から明治時代のキテ）は閉窓式になると考へていた。（渡辺 誠『鐵文時代の漁業』203 頁参照）

註5 宇田川 1980 103 頁

註6 ただ、これらの資料のなかに、縫着孔をもつ特殊な例（報告書Fig. 32-6）があること、また、モヨロ貝塚出土の鉈頭中に、形態がタイプFのa類に似た資料で索孔が一孔式の例が認められることから、北千島、アリューシャン列島出土の鉈頭とのかかわりも考えられる。この点については、擦文文化以降の鉈頭における索孔の出自とともにまだ検討の余地が残されている。

註7 大塚 1976 807～808 頁

（橋市 幸生）

地 年 代	道南・積丹半島	道央・日高沿岸	道東
20世紀 19世紀	<p>丸文島 利尻島 日本海 津軽内陸音洞跡 横田内チャシ跡 奥ヶ崎遺跡 カマキリ貝塚 二高浜遺跡 白樺町 太平洋 サンドベイチャシ跡 トモ一遺跡 サンベコタンチャシ跡 オホーツク海 チリコロ川口遺跡 ヤンベコタンチャシ跡 トモ一遺跡 白樺町 静内町</p>	<p>1. 採集地・静内町 2. 採集地・白樺町</p>	
18世紀	<p>3. 横田内チャシ跡</p>		<p>4. シノタイ遺跡</p>
17世紀	<p>5. 横田内チャシ跡 6. 神恵内観音洞跡 7. 末広遺跡 8. ボロモイチャシ跡 9. トブ遺跡</p>		
16世紀		<p>10. 二風谷遺跡 11. サンベコタンチャシ跡 12. 上之国藤山船跡 13. 神恵内観音洞跡</p>	
15世紀		<p>14. 奥ヶ崎遺跡 15. ライトコロ川口遺跡 16. ライトコロ川口遺跡 17. 神恵内観音洞跡 18. 神恵内観音洞跡</p>	
14世紀 13世紀		<p>19. ライトコロ川口遺跡 20. ライトコロ川口遺跡</p>	

図126 撥文化・オホーツク文化以降の回転式鉗頭の変遷図(縮尺1/3)

付 篇

二風谷遺跡から出土した植物遺体について

北海道開拓記念館 矢野牧夫

1. 観察の結果

113個のアクリル製ケースに封入された、約800点の植物遺体を観察した。試料の観察にあたっては、肉眼によるほか、倍率15倍のルーペ、さらに試料によっては双眼実体顕微鏡により、細かな形態や表皮などの特徴により種名の同定をおこなった。

これまでに明らかにし得たものは次のとおりである。

1) 木本類

アサダ	種子
コナラ	殻斗および堅果の表皮
キイチゴ属	種子
ヒロハノキハダ	種子
ヤマブドウ	種子
サルナシまたはマタタビ	種子
エゾニワトコ	種子

2) 草本類

タデ科	種子
アカザ科	種子
種名不詳粒球状種子	
3) 栽培種と思われるもの	
イネ科	穎果
モロコシ	穎果

2. 考察

木本類では、アサダほか計7種を検出した。量的にやや多いものとしては、キイチゴ属種子(S-26区、2D-36区、Z-42区、IIIH-10)、次いで、コクワまたはマタタビ(IIIH-9、X-39区)をあげることができる。食用としたものとして、キイチゴ属、コクワまたはマタタビ、ヒロハノキハダ、エゾニワトコ、ヤマブドウなどが考えられるが、キイチゴ属の種子、コクワまたはマタタビの種子を除いては産出量が少ないために、それらが当時の食生活と直接どのようなかかわりをもっていたかは今のところ不明である。

草本類では、タデ科とアカザ科の種子が検出されたが、生活との関係は不明である。多量に産出した細粒球状種子は今後の精査が必要である。

次に、栽培種とのかかわりで、イネ科とモロコシの穎果を検出したが、イネ科としたものは、キンニココロまたはアワと思われる。試料は炭化しており細かな識別は困難であるが、今後の調査において、この種が各遺構より量的に多く産出するならば、栽培種としてのアワの存在はより確実となる。

一方、モロコシは、IIIH-10において2点検出した。試料の大きさ、形態から種名を決定したが、表皮の模様が炭化のためやや不鮮明である。道内ではこれまでに根室市の西月ヶ丘遺跡、および松前

町の札前遺跡からそれぞれモロコシが産出している。

いずれにしても、二風谷遺跡からのモロコシの産出は、道内において発見された最も年代の新しい試料であり、この種がどの時期まで生活とのかかわりをもっていたかという問題をさぐるうえで貴重な資料となるであろう。

表42 二風谷遺跡検出植物遺体一覧

遺跡名・区名	植物 遺体	遺跡名・区名	植物 遺体	遺跡名・区名	植物 遺体
IIH-3	ヒハノモヘダ ヤツドウ タケ科 種名不詳細粒状遺体	III日-9	カルナシ・マタタビ 種名不詳細粒状遺体	S-33区	コナラ ヤクニ サルナシ・マタタビ ユズヒトロ
	穂子	III日-10	キイチゴ タケ科 種名不詳細粒状遺体	U-29区	穂子 穂子
	穂子		モロコシ 穂子	X-39区	モロコシ 穂子
IIIH-4	タデ科 アカギ科 イネ科	P-18区	種名不詳細粒状遺体	2D-36区	アザダ モロコシ 穂子
	穂子		キイチゴ 穂子		モロコシ 穂子
	穂子	S-36区	モロコシ 穂子	IVH-1	モロコシ (風穴)

木材の樹種同定について

北海道開拓記念館 三野 紀雄

昭和59、60年度に発掘調査がおこなわれたボロモイ、ユオイ両チャシ跡より出土した木材は、ボロモイチャシ郭内の建物跡のものは炭化木材、そしてユオイチャシ柵列跡のものは炭化していない木材である。

下表のとおり建物跡の木材にはヤチダモ、ハンノキ、ヤナギが、柵列跡の木材にはミズナラ、コナラあるいはカシワと思われるコナラ属の樹木とイヌエンジュが見られる。これらの樹木は現在も遺跡附近に見られ、ヤチダモ、ハンノキ、ヤナギなどは川畔などの溝湿地に、そしてナラやカシワそれにイヌエンジュはやや乾燥した地に生育している。

表43 木材の樹種同定結果

ボロセイチャシB乳頭物跡		
資料番号	樹種	備考
C-1	ヤチダモ?(Fraxinus sp.)	土留板(削板)
2	ヤナギ類(Salix sp.)	〃
3	ヤチダモ?(Fraxinus sp.)	〃
4	〃	〃
5	〃	〃
6	ヤチハンノキ?(Alnus sp.)	〃
7	ヤチダモ?(Fraxinus sp.)	〃
8	〃	〃
9	〃	〃
10	〃	〃
11	〃	〃
12	ヤチハンノキ?(Alnus sp.)	〃
13	ヤチダモ?(Fraxinus sp.)	〃
14	〃	〃
17	〃	〃
18	〃	〃
19	〃	〃
20	〃	〃
21	広葉樹 不明	丸太材(柱?)
22	ヤナギ類(Salix sp.)	〃
37	ヤチダモ?(Fraxinus sp.)	土留板(削板)
38	広葉樹 不明	〃

ボロセイチャシB乳頭物跡

資料番号	樹種	備考
C-1	ヤチダモ?(Fraxinus sp.)	土留板(削板)
2	〃	〃
3	〃	〃
4	〃	〃
5	〃	〃

ユオイチャシ柵列跡

柱穴番号	資料番号	樹種	備考
14	木片1	(メラ、コナラあるいはカシワ)(Quercus sp.)	
14	木片2	〃	
14	木片3	〃	
27	木片	〃	
38	〃	〃	
42	〃	〃	
61	〃	〃	
16	C-1	イヌエンジュ(Masckia)	炭化木材



1 2 3



4 5



6 7



8

1～3：III H-10 モロコシえい果
4、5：現在のモロコシえい果
6：X-39区 エゾニワトコ種子
7：X-39区 サルナン科種子
8、9：III H-3 ヤマブドウ種子
10：III H-3 ヒロハノキハダ種子

(拡大率×5)

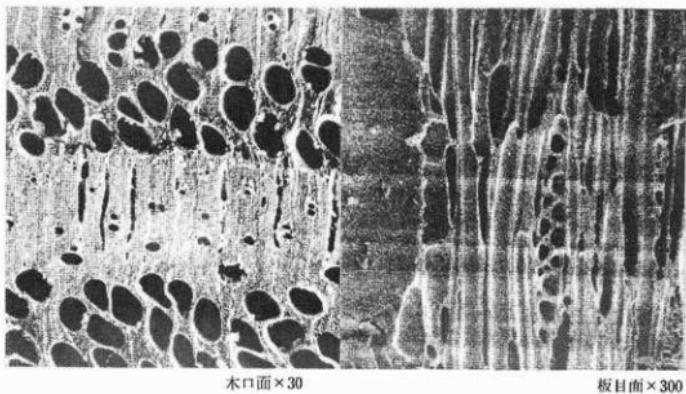


9

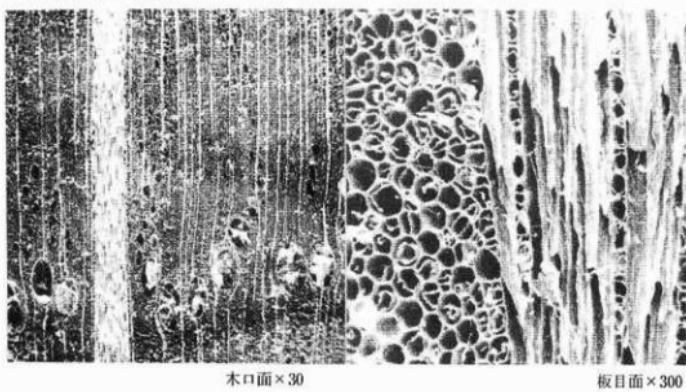


10
植物遺体

トネリコ属(*Fraxinus* sp.)



コナラ属(*Quercus* sp.)



木材組織の顕微鏡写真

引用・参考文献

金属製品保存処理について

種口清治・岩崎友吉 1970 「日光男体山頂祭祀遺跡出土鉄器の保存処置」『保存科学7』東京国立文化財研究所
江本義理 1970 「日光男体山鉄器および東京国立博物館屋外灯籠のさびの分析並びに鉄器類の腐食についての
考察」『保存科学7』

種口清治・青木繁夫 1972 「黄金塚古墳出土鉄器の保存処置について」『保存科学9』

青木繁夫 1973 「松林山古墳出土鉄器の保存処置と考古学上の新知見について」『MUSEUM 273』東京国立博
物館

種口清治・青木繁夫 1974 「観音山古墳出土金属製品の保存処置について」『保存科学13』

青木繁夫 1975 「岩手県押野古墳鐵刀の修復について」『保存科学14』

青木繁夫・岩本克昌 1976 「原一号墳出土鉄器の保存処置について」『常陸浮島古墳群』浮島研究会

奈良國立文化財研究所埋蔵文化財センター 1980 「埋蔵文化財ニュース24」

三浦正人 1980 「観音寺山古墳出土鉄器の保存修復処置」『常陸觀音寺山古墳群の研究』茂木雅博編

舉行本

アイヌ文化保存対策協議会編 1969 「アイヌ民族誌上・下」第一法規

安藤邦彦 1983 「茅葺きの民俗学」はる書房

イザベラ・バード【高梨健吉記】 1973 「日本奥地記行」平凡社・東洋文庫240

飯沼二郎 1980 「日本の古代農業革命」筑摩書房・ちくまぶっくす27

飯沼二郎・堀尾尚志 1976 「農具」法政大学出版局・ものと人間の文化史19

石井昌国 1966 「族手刀—日本刀の始源に関する一考察」雄山閣出版

石附喜三男編 1984 「北海道の研究2考古篇II」清文堂

石附喜三男・梅原達治 1982 「北海道における農耕の起源(予報)」札幌大学

伊藤清三 1979 「日本の後」東京文庫出版

宇田川洋 1981 「アイヌ伝承と祭」北海道出版企画センター

宇田川洋 1977 「北海道の考古学2」北海道出版企画センター・北海道ライブラリー11

宇田川洋 1980 a 「アイヌ考古学」教育社歴史新書102

宇田川洋・豊原熙司・藤本 強編 1985 「北海道のチャシ集成図(道東北篇)」北海道チャシ学会・北海道
出版企画センター

小笠原信夫 1975 「鉄」保育社・カラーブック330

尾崎元春 1968 「甲冑」至文堂・日本の美術24

海保嶽夫 1974 「日本北方史の論理」雄山閣出版

海保嶽夫 1979 「近世の北海道」教育社歴史新書99

海保嶽夫 1982 「北海道の研究4近世篇II」清文堂

海保嶽夫 1985 「史料と語る北海道の歴史—中世・近世篇—」北海道出版企画センター・北海道ライブラリー23

加島 進 1971 「刀装具」至文堂・日本の美術64

金子浩昌 1984 「貝塚の歯骨の知識」東京美術・考古学シリーズ10

萱野 茂 1976 「アイヌ民家の復元 チセ・ア・カラ」未来社

萱野 茂 1978 「アイヌの民具」すざわ書房

萱野 茂 1984 「沙流川沿いの地名」二風谷アイヌ文化資料館

金成まつ【金田一京助証記】 1961~1975 「アイヌ叙事詩・ニカラ集I~IX」三省堂

菊池徹夫 1984 「北方考古学の研究」六興出版

北構保男 1983 「1643年アイヌ社会探訪記」雄山閣出版

北構保男 1985 「アイヌ史断想」北海道出版企画センター

金田一京助 1923 「アイヌの研究」1940再版・八洲書房

金田一京助 1934 「アイヌ叙事詩ニカラ概説」青磁社

金田一京助 1944 「アイヌ叙事詩虎杖丸の曲」青磁社

金田一京助・杉山寿栄男 1942 「アイヌ藝術第三巻木工篇」1972復刻・北海道出版企画センター

金田一京助・杉山寿栄男 1943 「アイヌ藝術第三巻金工・漆器篇」1973復刻・北海道出版企画センター

久保 麻・櫻森 進他 1984 「松前町史通説編第一巻上」

窪田義郎 1979 「改訂鉄の考古学」雄山閣出版

工業善通社 1984 「埋蔵文化財ニュース49・漆製品出土遺跡地名表—東日本編—」奈良國立文化財研究所埋蔵

文化財センター

- 黒川侯頼 1878 「工芸志料」[前田泰次・校註]『増訂工芸志料』平凡社・東洋文庫254)
- 耿寶昌 1984 「明清瓷器鑑定(明代部分)」中華書局香港分局
- 河野常吉[宇田川洋校註] 1981 「河野常吉ノート考古篇1」北海道出版企画センター
- 河野常吉[宇田川洋校註] 1983 「河野常吉ノート考古篇2」北海道出版企画センター
- 河野広道 1972 「北方文化論 河野広道著作集I」北海道出版企画センター
- 河野広道 1972 「続北方文化論 河野広道著作集II」北海道出版企画センター
- 河野広道 1972 「続々北方文化論 河野広道著作集III」北海道出版企画センター
- 河野広道[宇田川洋編] 1981 「河野広道ノート考古篇1」北海道出版企画センター
- 河野広道[宇田川洋編] 1984 「河野広道ノート考古篇5」北海道出版企画センター
- 河野本道・渡辺茂他 1974 「平取町史」
- 児玉作左衛門編 1971 「日本人類学・先史学」日本学術振興会
- 後藤守一 1942 「日本古代文化研究」河出書房
- 後藤寿一 1976 「北海道先史時代考2」北海道出版企画センター
- 小林行雄 1962 「古代の技術」塙書房
- 小松大秀編 1985 「漆工(歴史・古代編)」至文堂・日本の美術229
- 朝日観光開拓財団 1981 「自然と文化'81夏季号 日本の金属文化」
- 坂詰秀一編 1986 「出土渡来鏡-中世-」ニュー・サイエンス社・考古学ライブラリー-45
- 桜井清彦 1967 「アイヌ秘史」角川書店
- 佐藤寒山編 1966 「刀劍」至文堂・日本の美術6
- 佐藤直太郎 1968 「続・佐藤直太郎研究論文集」釧路市 刻路叢書9巻
- 澤口信一 1933 「日本漆工の研究」丸善
- 静内町史編纂委員会 1963 「静内町史」
- 紫田光男 1985 「刀劍ハンドブック」光藝出版
- 市立函館博物館編 1973 「函館志鹿古戦」
- 進藤俊綱 1983 「織付と滑接の話」論創社
- 真藤建志郎 1985 「「家紋」の事典」日本実業出版社
- 新日本製鐵株式会社企画室編 1984 「鉄の文化史」東洋経済新報社
- 杉山寿栄男 1936 「アイヌたま」復刻1974・北海道出版企画センター
- 鈴木邦輝 1979 「道北地方のチャシ」名寄叢書3
- 鈴木根夫編 1985 「漆工(中世編)」至文堂・日本の美術230
- 宋塵星[蔽内 清訳註] 1969 「天工開物」平凡社・東洋文庫130
- 高倉新一郎 1965 「アイヌ研究」北海道大学生活協同組合
- 高倉新一郎 1972 「アイヌ政策史」三一書房
- 高倉新一郎 1974 「日本の民俗 北海道」第一法規
- 鷹部豊福平 1943 「アイヌの住居」彰国社
- 橋 薩光 1977 「下北古代文化」下北の歴史と文化を語る会
- 知里真志保 1956a 「アイヌ語入門」篠善房 1985復刻・北海道出版企画センター
- 知里真志保 1956b 「地名アイヌ語小辞典」1984復刻・北海道出版企画センター
- 千歳市史編纂委員会編 1983 「千歳市史」
- 東京工業大学難波史研究会編 1982 「古代日本の鉄と社会」平凡社選書78
- 中里太郎右衛門 1986 「日本のやきもの3 唐津」淡交社
- 中里太郎右衛門 1980 「世界陶磁全集7・江戸(二)」小学館
- 中田幹雄・平川善祥・松下豆他 1980 「熊野喜蔵氏資料目録・II」北海道開拓記念館一括資料目録編13集
- 永竹威 1975 「唐津」保育社カラーブック342
- 名取武光 1972 「アイヌと考古学(一)」北海道出版企画センター
- 名取武光 1974 「アイヌと考古学(二)」北海道出版企画センター
- 二風谷部落誌編纂委員会編 1983 「二風谷」二風谷自治会
- 日本貿易陶磁研究会 1985 「日本貿易陶磁文献目録」
- 灰野昭裕編 1985 「漆工(近世編)」至文堂・日本の美術231
- 森中美枝 1980 「アイヌ文学ニカラへの招待ー」北海道出版企画センター
- 森 憲麿(村上島之丞) 1799 「蝦夷島奇観」[1982佐々木利和・谷澤尚一解説「蝦夷島奇観」雄峰社]
- 塙原和郎・藤本英夫・浅井亨・吉崎昌一・河野本道・乳井洋一 1972 「シンポジウムアイヌ」北海道大学園

- 林 葦茂 1969 「アイヌの農耕文化」慶友社
 久末道一 1983 「室蘭の文化遺産」室蘭市教育委員会
 平取外八ヶ村学校組合会編 1916 「平取外八ヶ村誌」
 平取村開村五十周年史編纂委員会 1952 「平取村開村五十周年史」
 広井雄一 1971 「刀剣とみかた『技術と流派』」第一法規
 藤本 強 1979 「北辺の遺跡」教育社歴史新書17
 藤本 強 1982 「獵文化」教育社歴史新書36
 藤本英夫 1964 「アイヌの墓」日本経済新聞社
 藤本英夫 1971 「北の墓」学生社
 藤本英夫・名嘉正八郎編 1980 「日本城郭大系1北海道・沖縄」新人物往来社
 北海道教育委員会 1983 「北海道のチシン」
 北海道郷土資料研究会 1959 「快風丸記事」(旧水戸藩徳川家蔵「快風丸船図記事」「快風丸駆逐記事」「快風丸記」)
 洞 富雄 1956 「樺太史研究—唐太と山丹一」新樹社
 前 久夫 1983 「遺具古事記」東京美術選書34
 松浦武四郎〔吉田常吉編〕 1984 「新版蝦夷日誌(上)東蝦夷日誌」時事通信社
 松浦武四郎〔吉田常吉編〕 1984 「新版蝦夷日誌(下)西蝦夷日誌」時事通信社
 松田権六 1964 「うるしの話」岩波新書52
 宮川愛太郎 1965 「陶磁器研究」共立出版
 室蘭市史編集室 1975 「室蘭のうつりかわり」
 森 浩一 1976 「考古学入門」保育社カラーブック360
 門別町郷土史研究会 1969 「アイヌの叙事詩」
 矢島 音 1979 「北海道の葬送・墓制」男女社
 山上八郎・山岸素夫 1975 「銀と兜」保育カラーブック344
 山岸寿治 1985 「漆ぬりもの風土記東日本編」雄山閣出版
 山岸寿治 1985 「漆ぬりもの風土記西日本編」雄山閣出版
 山田秀三 1984 「北海道の地名」北海道新聞社
 吉川金次 1984 「斧・鑿・鉋」法政大学出版社。ものと人間の文化史51
 吉崎昌一・森田忠志・森田洋子 1969 「函館市志海苔町の舊鐵造構」市立函館博物館
 読売新聞社 1979 「日本の漆器」
 渡辺 誠 1973 「織文時代の漁業」雄山閣
- 報告書
- 石川 徹 1979 「続千歳遺跡」千歳市教育委員会
 石附喜三男他 1974 「ウサクマイ遺跡-B地点発掘報告書」ウサクマイ遺跡調査団
 石附喜三男編 1977 「ウサクマイ遺跡-N地点発掘報告書」千歳市教育委員会
 石附喜三男・石川直幸他 1984 「神恵内村音鏡洞窟」神恵内村教育委員会
 石橋次雄・木村方一・後藤秀彦 1974 「十勝太岳月-第二次発掘調査」浦幌町教育委員会
 乾 芳宏・八木謙吉他 1985 「トニカチャシコフ」門別町教育委員会
 岩崎卓也・北様保男・前田 利他 1974 「オソネモト遺跡」東京教育大学文学部
 ウサクマイ遺跡研究会編 1975 「烏帽子舞」雄山閣
 宇田川洋他 1982 「波幌第二遺跡-1981年度」常呂町教育委員会
 宇田川洋・豊原照司 1984 「トブー遺跡の発掘調査」網羅川流域史研究会
 内山真澄 1985a 「寿都町文化財調査報告書」寿都町教育委員会
 内山真澄 1985b 「チャランケ・チャシ発掘調査報告書」島牧村教育委員会
 江上波夫・關野 雄・桜井清彦 1958 「館址」 東京大学出版会
 篠谷昌康 1979 「日高門別の先史遺跡」
 大谷敏三・田村俊之 1982 「末広遺跡における考古学的調査(下)」千歳市教育委員会
 大沼忠春他 1977 「元和8遺跡の調査」「元和(続)」乙部町教育委員会
 大沼忠春・西田 茂他 1981 「吉井の沢の遺跡」神北海道埋蔵文化財センター第5集
 大場利夫・石川 徹 1967 「千歳遺跡」千歳市教育委員会
 大場利夫・大井晴男編 1973 「オソコロマナイ貝塚」東京大学出版会
 大場利夫・大井晴男編 1976・1981 「香深井遺跡上・下」東京大学出版会

- 大場利夫・洞井力蔵 1958 「岩内遺跡」岩内町教育委員会
- 大場利夫・御瀬喜一・金子有明 1963 「寿都遺跡」
- 大場利夫・新岡武彦・大井晴男・寿地俊彦 1972 「枝幸町川尻チャシ調査概報」枝幸町教育委員会
- 大場利夫・松崎岩穂・渡辺兼麻 1961 「上ノ国遺跡」上ノ国町教育委員会
- 大場利夫・溝口 朝 1971 「室蘭駿駄遺跡発掘調査概報」室蘭市教育委員会
- 小笠原忠久 1978 「臼尻B遺跡発掘調査概報」南茅部町教育委員会
- 小笠原忠久 1980 「臼尻B遺跡」南茅部町教育委員会
- 岡田宏明・宮塚義人・樋田光明・森中美枝 1977 「カムイエカシチャシ」白老町教育委員会
- 兎柳 彰・青柳文吉 1983 「史跡松前藩戸切地陣屋跡」上磯町教育委員会
- 金盛典夫・村田良介・松田美穂子 1981 「斜里町文化財調査報告Ⅰ」斜里町教育委員会
- 北構保男・岩崎卓也・前田 海他 1972 「浜別遺跡」北地文化研究会
- 北構保男 1980 「根室地方のチャシ」「北海道東部地区的遺跡研究」筑波大学先史学・考古学研究調査報告書Ⅰ
- 木村尚尙・青柳文吉 1982 「史跡松前藩戸切地陣屋跡」上磯町教育委員会
- 草間俊一 1965 「岩手県福岡町畠野遺跡」福岡町教育委員会
- 工藤清泰他 1980 「淡河城跡Ⅲ」淡河町教育委員会
- 工藤竹久・佐々木浩一他 1983 「史跡根室駿駄発掘調査報告書V」八戸市教育委員会
- 久保 泰 1979 「茂草B遺跡調査報告」松前町教育委員会
- 久保 泰・松谷 太 1985a 「札前」松前町教育委員会
- 久保 泰・松谷 太 1985b 「史跡福山城Ⅱ」松前町教育委員会
- 越田賛一郎 1985 「莊内藩ハママシケ陣屋跡の調査」浜益村教育委員会
- 越田賛一郎・工藤研二他 1983 「美沢川流域の遺跡群Ⅳ」北海道埋蔵文化財センター第7集
- 後藤秀彦・石橋次雄他 1975 「十勝若月一第三次発掘調査」浦幌町教育委員会
- 古原敏弘・森 広樹・久保 泰・谷岡康孝他 1980 「頬田内チャシ跡遺跡発掘調査報告書」頬田町教育委員会
- 駒井和愛編 1964 「オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡上巻」東京大学
- 駒井和愛編 1965 「オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡下巻」東京大学
- 健北海道埋蔵文化財センター 1982 「縄株I・2・3遺跡」(概報)
- 齊藤邦典・藤田 登・中村公室 1981 「史跡上之国勝山館跡II」上ノ国町教育委員会
- 齊藤邦典・藤田 登 1982 「史跡上之国勝山館跡III」上ノ国町教育委員会
- 西蓮守徹・田村俊之他 1979 「ウサカマイ遺跡群とその周辺における考古学的調査」千歳市教育委員会
- 西蓮守徹・大谷俊三・田村俊之他 1981 「末広遺跡における考古学的調査(上)」千歳市教育委員会
- 佐藤一夫・宮本靖夫編 1984 「タココロ」苫小牧市埋蔵文化財センター
- 佐藤一夫・工藤 雄他 1985 「苫小牧東部工業地帯埋蔵文化財発掘調査概要報告書VII 昭和57年度版」苫小牧市埋蔵文化財センター
- 佐藤忠雄他 1981 「奥尻島青苗遺跡」奥尻町教育委員会
- 佐藤忠雄・山田 忍 1974 「上島松遺跡」恵庭市教育委員会
- 佐藤忠雄・山田 忍 1978 「青苗遺跡発掘調査概報」奥尻町教育委員会
- 沢 四郎 1978 「弟子屈町矢沢遺跡調査報告-第二次調査-」弟子屈町教育委員会
- 沢 四郎編 1972 「北海道厚岸町下田ノ沢遺跡」厚岸町教育委員会
- 沢 四郎他 1978 「弟子屈町屈斜路コタン遺跡調査報告」弟子屈町教育委員会
- 沢 四郎・西 幸隆・豊原熙司他 1975 「釧路市桂恋フシココタンチャシ調査報告」釧路市立郷土博物館
- 沢 四郎・西 幸隆・松田 猛他 1977 「弟子屈町矢沢遺跡調査報告-第1次調査-」弟子屈町教育委員会
- 樋田光明・樋田美枝子 1983 「標津の堅穴VI」標津町教育委員会
- 関野 雄・藤本 雄他 1972 「常呂」東京大学文学部考古学研究室編
- 高橋和樹他 1981 「遠矢8遺跡」北海道教育委員会
- 高橋和樹・三浦正人・森健治 1984 「史跡松前藩戸切地陣屋跡」上磯町教育委員会
- 高橋正勝編 1971 「柏木川遺跡の墳墓と住居」北海道文化財保護協会
- 高橋正勝 1973 「新浜遺跡」えりも町教育委員会
- 高橋正勝・直井孝一・圓部真宰他 1981 「元江別遺跡群」江別市教育委員会
- 高橋正勝・直井孝一・圓部真宰・野中一宏・北沢 実・高橋豊彦 1982 「萩ヶ岡遺跡」江別市教育委員会
- 田部 淳・田村リラコ・田村美智子他 1985 「南川2遺跡」渡利町教育委員会
- 田村俊之編 1985 「末広遺跡における考古学的調査(続)」千歳市教育委員会
- 田原良信・鈴木正吾 1984 「史跡志賀館跡I」函館市教育委員会
- 田原良信・鈴木正吾 1985 「史跡志賀館跡II」函館市教育委員会

- 千代 幸也 1972 「『縄内館』福島町教育委員会
- 東京大学文学部考古学研究室・常呂研究室編 1980 「ライトコロ川口遺跡」東京大学文学部
- 富水慶一 1966 「北海道白糠町の先史文化第二輯」白糠町教育委員会
- 富水慶一 1969a 「北海道白糠町の先史文化第三輯」白糠町教育委員会
- 富水慶一 1969b 「北海道白糠町の先史文化第四輯」白糠町教育委員会
- 富水慶一・沢 四郎他 1963 「北海道阿寒町の文化財先史 文化財第一輯」阿寒町教育委員会
- 富水慶一・沢 四郎他 1965 「北海道阿寒町の文化財先史 文化財第二輯」阿寒町教育委員会
- 豊原照司・宇田川洋・松田 猛他 1973 「釧路川流域の遺跡」釧路川流域史研究会
- 長沼 孝 1982 「史跡白老仙台藩陣屋跡」白老町教育委員会
- 西 幸隆・松田 猛 1985 「史跡国泰寺」厚岸町教育委員会
- 野村 崇他 1964 「栗山町の文化財」栗山町教育委員会
- 野村 崇他 1969 「空知の文化財保証第1集 堆積文化財編」空知地方史研究協議会
- 野村 崇・平川羊祥・藤村久和・海保嶽夫他 1974 「札刈遺跡」木古内町教育委員会
- 野村 崇・本堂寿一他 1977 「石狩川中流域の先史遺跡」空知地方史研究協議会
- 長谷川潤一他 1980 「鍵ヶ関村古道跡発掘調査報告書」青森県教育委員会
- 福士廣志・豊原照司 1982 「ホロト沼遺跡発掘調査報告書」浜中町教育委員会
- 福田友之他 1975 「遠矢第2チャシ跡遺跡調査報告書」北海道教育委員会
- 藤田 登他 1985 「御幸町」森町教育委員会
- 藤本英夫・木村英明 1968 「虹糞山遺跡」石狩町教育委員会
- 前田正憲 1985 「史跡松前藩戸切地陣屋跡」上磯町教育委員会
- 松崎水穂・齊藤邦典 1980 「史跡上之国勝山館跡」上ノ国町教育委員会
- 松崎水穂・齊藤邦典・藤田 登・前田正憲他 1983 「史跡上之国勝山館跡IV」上ノ国町教育委員会
- 松崎水穂・齊藤邦典・藤田 登・前田正憲 1984 「史跡上之国勝山館跡V」上ノ国町教育委員会
- 松崎水穂・齊藤邦典 1985 「史跡上之国勝山館跡VI」上ノ国町教育委員会
- 松崎水穂・前田正憲・藤田 登 1984 「夷王山墳墓群」上ノ国教育委員会
- 松崎水穂・荒木伸介・藤田 登 1984 「上ノ国魚港遺跡」
- 三浦圭主・大瀬秀男他 1984 「浜通遺跡」青森県教育委員会
- 峯山 敦 1959 「ヌッチャ川遺跡」余市町教育委員会
- 峯山 敦・金子浩昌・松下 直・竹田輝雄 1971 「天内山」北海道出版企画センター
- 峯山 敦・大沼忠春他 1977 「榮浜遺跡」乙部町教育委員会
- 宮塚義人編 1983a 「おびらたかさご」小平町教育委員会・北海道留萌土木現業所
- 宮塚義人編 1983b 「おびらたかさごII」小平町教育委員会
- 山崎博信 1970 「鉱洞内遺跡」美深町教育委員会
- 山本文男編 1984 「ノトロ岬」音別町教育委員会
- 山本文男・沢 四郎他 1977 「昆布森中学校裏遺跡発掘調査報告書」釧路村教育委員会
- 吉崎昌一・岡田淳子編 1981 「北大構内の遺跡〔I〕」
- 吉田玄一他 1985 「泊村茶津貝塚」北海道文化財研究所
- 横山英介・石橋孝夫編 1975 「石狩・八幡町遺跡 ワカオイ地点調査報告書」石狩町教育委員会
- 涌坂周一他 1984 「松川川北岸遺跡」羅臼町教育委員会
- 論文、報文等**
- 朝岡康二 1983 「鉄の生命」「あるく。みる。きく193」日本観光文化研究所
- 朝岡康二 1985 「鉄分布の意味」「列島の文化史2」日本エディタースクール出版部
- 天野哲也 1983 「擦文社会における金属器の普及量と所有形態」「考古学研究117」
- 荒川浩和 1964・65 「漆碗資料(1)~(3)」「THE MUSEUM158・165・171」
- 石川直章 1982 「回転式鉗先-キテの源流-」「考古学と古代史」同志社大学考古学シリーズ1
- 石附高三男 1983 「エゾ地の鉄」「縄と鉄」小学校・日本民俗文化大系3
- 泉 靖一 1952 「沙流フイムの地縁集団におけるIWOR」「民族学研究10-3・4」
- 伊藤初太郎 1938 「根室半島に存在せるチナン」「考古学雑誌28-7」
- 大隅哲夫 1968 「アイヌと山」「民族学研究32-4」
- 宇田川洋 1969 「鉄鍋考」「貝塚2」物質文化研究会
- 宇田川洋 1972 「撒文集落の一分析例——北海道釧路STV遺跡の調査から——」「物質文化19」
- 宇田川洋 1980b 「物送り場としての駒穴上層遺構について」「ライトコロ川口遺跡」東京大学文学部
- 宇田川洋 1981 「チナン地名資料集成」「北海道チナン学会研究報告1」

- 宇田川洋 1985a 「アイヌ文化期の送り場遺跡」『考古学雑誌70-4』
- 宇田川洋 1985b 「チャシック分布の一分析例」『東京大学考古学研究室紀要』
- 宇田川洋・加藤晋平・越田賢一郎 1972 「北海道端野町のイワタケ(物送り場)」『考古学ジャーナル67』ニューサイエンス社
- 榎森 道 1979 「ユーカラの歴史的背景に関する一考察」『史潮5』歴史学会
- 遠藤香澄 1982 「石器」「美沢川流域の遺跡群 発掘調査の概要」『北海道埋蔵文化財センター』
- 肩谷昌康 1955 「沙流川流域における遺跡遺物について」『先史時代2』
- 肩谷昌康 1956 「日高国沙流川流域における遺跡・遺物について」『北海道地方史研究20』
- 肩谷昌康 1960a 「シノタイ岬——沙流川河口におけるアイヌの遺跡」『北海道地方史研究25』
- 肩谷昌康 1960b 「シウシコクのチャシ」『先史時代11』
- 肩谷昌康 1962 「佐畠田のオマンボロ」『北海道地方史研究45』
- 太田敏量・宮 宏明他 1984 「美里洞窟の発掘調査と現況」『北見郷土博物館紀要14』
- 大暮司紀之 1981 「遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節検定法」『考古学と自然科学13』
- 大谷敏三 1983 「先史時代「千歳市史」
- 大塚和義 1966 「挿入離頭鉄」『物質文化7』
- 大塚和義 1976 「オホーツク文化とそれ以降の回転式鉄頭の型式とその変遷」『史学研究96』
- 大塚和義 1981 「失われたアイヌの儀礼——門別町シノタイ遺跡——」『アーネ97』平凡社
- 大場利夫 1962 「モヨ貝塚出土の金属器」『北方文化研究報告17』北海道大学
- 大橋康二 1983 「伊万里磁器創成期における唐津焼との関連について」『中国史・陶磁史論集』
- 大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』『佐賀県立九州陶磁文化館』
- 大沼忠春 1981 「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌66-4』
- 小片 保 1969 「北海道沙流川部別町千歳アイヌ墳墓址」『日本考古学年報17 昭和39年度』
- 岡田宏明 1960 「アイヌ文化史に関する一考察」『民族学研究24-4』
- 尾形禮正 1986 「出土渡来銭の観察」『出土渡来銭——中世』ニューサイエンス社
- 小川貴史 1980 「出土鉄製品とその問題点」『碇ヶ関村古墳群遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会
- 奥山鏡吉・浅川秀明 1956 「サシリイ遺跡」『知床半島東南岸の考古学的調査』札幌北高等学校郷土研究部
- 小浜基次・峯山 嶽他 1963 「有珠善光寺遺跡」『北海道の文化特集号』北海道文化財保護協会
- 海保樹夫 1970 「文献史料より見たるチャシ」『北海道考古学9』
- 海保樹夫 1974 「17世紀のアイヌ社会における地域性」『物質文化23』
- 海保樹夫 1978 「松前藩の成立とアイヌ民族の動向」『歴史手帖6-11』
- 海保樹夫 1982 「獵文化の文献史的解釈」『物質文化38』
- 加藤邦雄 1981 「瀬棚町発見の火葬墓について」『北海道考古学17』
- 加藤邦雄 1984 「北海道の中世墓について」『北海道の研究2・考古学篇II』清文堂
- 加藤晋平 1980 「撫民の栽培植物について—とくにソバの問題—」『北方科学調査報告1号』(1985「シベリアの先史文化と日本」六典出版 所収)
- 加藤晋平・鶴丸俊明他 1981 「原始・古代—考古学資料による北見の歴史」『北見市史上巻』
- 壹野 茂 1985 「アイヌの民具その魂」『言語14-3』大修館書店
- 河村淳史 1966 「斜里町シシキンコタン貝塚発見の迴転式燕形鉄先」『北海道考古学2』
- 菊池徹夫 1962 「アイヌ民族史叙述への考古学的寄与とその前提条件」『金鉢161』早稲田大学考古学研究会
- 菊池徹夫 1972 「撫民式土器基本形態」『北海道考古学8』
- 菊池徹夫 1973 「八世紀前後の北海道における金属製品について」『北海道考古学9』
- 菊池徹夫 1979 「撫民文化の鐵器について」「どもめん22」
- 菊池徹夫 1972 「北千島の「オホーツク文化」に関する問題点」『北海道考古学8』
- 北嶋保男・須貝 洋 1952 「北海道根室半島・トーザムボロ・オホーツク式遺跡調査報告」『上代文化24』
- 北嶋保男・山浦 清 1979 「根室市弁天島西貝塚縦穴調査報告」『北海道考古学15』
- 久保 泰 1979 「松前町字上川境遺跡の調査」『松前藩と松前13』松前町史編集室
- 久保 泰 1982 「松前町静浦D遺跡の調査について」『松前藩と松前19』松前町史編集室
- 久保 泰 1983 「静浦D遺跡と道南地方の擦文化」『考古学ジャーナル213』ニューサイエンス社
- 久保寺透彦 1956 「北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心として—」『民族学研究19-3・4』『同20-3・4』
- 久保寺透彦 1968 「アイヌの建築儀礼について」『北方文化研究3』北海道大学北方文化研究施設
- 河野常吉 1906 「チャシ即ち蝦夷の皆」『札幌博物学会報1-1』(1968「北海道の文化13」所収)
- 河野常吉・寺田貞次・阿部正己他 1918 「北海道人類学会雑誌第一号」
- 河野広道 1931 「墓標の形式より見たるアイヌの諸系統」「蝦夷往来4」

- 河野広道 1932 「アイヌの系統 サルンクルについて」『人類学雑誌7-4』
- 河野広道 1933 「発寒村の遺跡発掘記」『蝦夷往来10』
- 河野広道 1957 「先史時代史」「新里町史」(1972「統々北方文化論・河野広道著作集III」)
- 河野広道 1953a 「先史時代論」「網走市史」(1972「統々北方文化論・河野広道著作集III」)
- 河野広道 1953b 「先史時代」「小樽市史」
- 河野広道 1959 「北海道出土の大形U字形鉄器について」『北海道学芸大学考古学研究会連絡紙19』
- 河野広道・佐藤忠雄 1959 「神居古原遺跡発掘報告」『旭川郷土博物館研究報告No.2』
- 河野広道・近藤義雄 1959 「千歳市発見の江戸時代末期穴住居址」『ウタリ2-2』北海道学芸大学考古学研究会
- 河野本道 1968 「先史時代」「稚別町史」
- 越田賢一郎 1984a 「北海道の鉄器について」「物質文化42」
- 越田賢一郎 1984b 「ガラス玉の里を訪ねて」「北海道の文化51」北海道文化財保護協会
- 越田賢一郎 1985 「山丹交易をめぐる國際情勢」「盈虚集2」立教大学東洋史同学会
- 児玉作左衛門 1936 「八寶遊楽部に於けるアイヌ墳墓遺跡の発掘に就いて」『北海道大学医学部解剖教室報告1』
- 児玉作左衛門・大場利夫・渡 雅夫 1955 「北大遺跡について」『北方文化研究報告10』北海道大学
- 児玉作左衛門・大場利夫 1956 「根室国根室沼遺跡の発掘について」『北方文化研究報告11』北海道大学
- 児玉作左衛門・大場利夫 1959 「天塨国豊富遺跡の発掘について」『北方文化研究報告14』北海道大学
- 後藤守一 1934 「北海道に於ける古墳出土の遺物の研究(4)」『考古学雑誌24-2』
- 後藤守一 1939 「上古時代鉄器の年代研究」「人類学雑誌54-4」(1942「日本古代文化研究」)
- 後藤秀一・曾根原武保 1934 「撫爾園千歳郡恵庭村の遺跡について」『考古学雑誌24-2』
- 後藤秀彦 1982 「チャシの形態分類に関するメモ」『浦幌町郷土博物館報19』
- 後藤秀彦 1983 「チャシの形態分類に関する予察」「十勝考古6」「十勝川流域史研究会
- 後藤秀彦 1984 「北海道のチャシ」「北海道の研究2 考古学篇II」清文堂
- 小林和夫 1975 「安政3年の蝦夷地におけるコタンの分布」『北方文化研究5』北海道大学北方文化研究施設
- 青藤 健 1975 「北海道のチャシについて」『北海道考古学14』
- 桜井清彦 1958 「北海道奥尻島青苗貝冢について」「古代27」早稲田大学考古学会
- 桜井清彦 1977 「鮭・チャシ研究ノート」「北奥古代文化9」
- 佐々木達夫 1981 「日本海の陶磁貿易」「日本海文化8」金沢大学文学部日本海文化研究室
- 佐々木真弓・宇田川洋 1985 「ユーラシアに表現されるチャシ」『北海道チャシ学会研究報告3』
- 佐藤一夫 1975 「アイヌ時代の遺跡と遺物」「苫小牧市史上巻」
- 佐藤達夫 1952 「我が國に於ける迴転式鉗頭について」「赤生一」
- 佐藤達夫 1953 「我が國に於ける回転式鉗頭について」1983「東アジアの先史文化と日本」所収
- 佐藤達夫 1964 「モヨロ貝塚の発掘(続)・骨角器」「オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡下巻」東京大学
- 沙流川流域史調査団 1962 「北海道沙流川流域史調査報告(第一次)」「史報63-64」
- 沢 四郎編 1972 「釧路市縁ヶ岡 S-TV 遺跡発掘調査報告」「釧路市立郷土博物館紀要1」
- 沢 四郎・宇田川洋 1969 「北海道東釧路村昆布森中学校裏遺跡の調査」「考古学雑誌55-1」
- 沢 四郎・山本文男他 1976 「北海道の古墳墓について」「北方文化研究5」「同6」北海道大学北方文化研究施設
- 静内高校文化人類学研究部 1964 「シベチャリのチャシ。発掘報告-第一次調査-」「ひだか16」静内高等学校
校文化人類学研究部
- 鈴木公雄 1965 「「チャシ」の性格に関する一試論」「物質文化6」
- 瀬川拓郎 1984 「縄文期の鉄斧について」「北海道史研究34」
- 高倉新一郎 1933 「発寒村発掘の遺物に就いて」「蝦夷往来10」
- 高橋信雄 1982 「東北地方北部の土器と古代北海道系土器との対比」「北奥古代文化13」
- 高橋正勝 1981 「北海道南部の土器 2、中期の土器」「縄文文化の研究4・縄文土器II」雄山閣
- 田村俊之 1983 「北海道における近世の墓制一千歳川流域の考古学的調査からー」「北海道考古学19」
- 千代 豊 1967 「考古学からみた瀬田内チャシ」「新しい遺史23」
- 千代 豊 1969 「中世の戸井館址調査報告」「北海道考古学5」
- 知里真志保 1959 「アイヌの鮭漁」「北方文化研究報告14」北海道大学
- 知里真志保・山田秀三 1956 「あの世の入口」「北方文化研究報告11」北海道大学
- 出利葉浩司 1985 「アイヌの飴鉢車について」「北海道開拓記念館研究年報13」
- 土井義夫 1971 「関東地方における住居址出土の鉄製農具について」「物質文化18」
- 土井義夫 1976 「鉄製農工具研究ノート」「どるめん10」

- 富水慶一 1963 「アイヌ民族の狩猟獵観及び狩猟道具」『北海道の文化4』北海道文化財保護協会
- 富水慶一 1964 「アイヌの刀身用金属工具」『北海道の文化7』北海道文化財保護協会
- 富水慶一 1969 「和天別河口堅穴住居址群跡調査概要(第3次調査)」『北海道考古学5』
- 富水慶一 1971 「音別町オコタヌンベッチャシコツの遺物」『北海道考古学7』
- 中島謙男 1965 「森川(森川)発掘に参加して」『青銅台史4』函館東高等学校歴史研究部
- 永田富智 1966 「道南十二館の歴史的考察」『新しい道史18』
- 永田富智 1968 「上ノ国の人定着年代について」『新しい道史27』
- 仲村 研 1982 「中世の大工・刀工・鉄物師と技術」『技術の社会史(I)古代・中世の技術と社会』有斐閣
- 名取武光 1963 「アイヌの民具」『物質文化2』
- 名取武光・松下 亘 1964 「桃内遺跡」『北方文化研究報告19』北海道大学
- 成田修一 1985 「江戸時代のアイヌ語」『言語14-2』大修館書店
- 西本豊弘 1981 「骨角器・骨角製品について」『香深井遺跡・下』東京大学出版会
- 西本豊弘 1985 「北海道の狩猟・漁労活動の変遷」『国立歴史民俗博物館研究報告6』
- 新田栄治 1980 「12号墳内墓壙出土の遺物と被葬者」『ライトコロ川口遺跡』東京大学文学部
- 日本民族学協会 1952 「沙流アイヌ共同調査報告」『民族学研究16-3・4』
- 野村 崇 1970 「早来町の先史時代」1973「早来町史」
- 萩中美枝 1985 「アイヌの漁法」『技術と民俗(上)』小学館・日本民俗文化大系13
- 長谷川徹 1982 「厚真町厚真12遺跡出土の舟形土器」『北海道考古学だより14』
- 林 謙作 1977 「御殿山墳墓ノ埋葬頭位ヲ論シ併セテあいの族ノ他界觀ニ及フ」『北方文化研究11』北海道大学北方文化研究施設
- 林 善茂 1956 「アイヌの収穫・貯蔵技術」『北方文化研究報告14』北海道大学
- 原田喜世子 1985 「アイヌの迷路習俗」『北海道の研究7 民俗・民族篇』清文堂
- 姫田忠義 1975 「日本のうつわ」「あるく・みる・きく103」日本観光文化研究所
- 平川善洋 1980 「アイヌ文化」『北海道考古学講座』山やま書房
- 平川善洋 1984 「近世アイヌ墳墓の考古学的研究」『北海道の研究2 考古学篇II』清文堂
- 福士廣志 1985 「北海道留萌市出土の星兜鉢および呂糞残欠について」『考古学雑誌71-1』
- 藤村久和 1963 「チヤン考」『北海道学芸大学札幌分校寮記ちかる7』
- 藤本英夫 1976 「チヤンについて覚書」『北海道考古学12』
- 藤本英夫 1977 「チヤンについて」『アイヌ文化3』朝アイヌ無形文化伝承保存会
- 北海道 1969 「左留場所大図書」『新北海道史第7巻史料1』
- 本田克代 1981 「北海道東部のチコイチャシ、チフルチャシの一物語」『北海道チヤン学会研究報告1』
- 本堂寅一 1977 「東北地方におけるチヤン論史考」『北奥古代文化9』
- 本堂寅一 1978 「北海道におけるチヤン遺跡の諸問題」『歴史手帖6-11』
- 前田 潮 1971 「骨話について」『浜別海遺跡』北地文化研究会
- 前田 潮 1974 「オホーツク文化とそれ以降の回転式鉗頭の型式とその変遷」『史学研究96』
- 松井恒幸 1977 「「北のガラス史」のための覚書」『市立旭川郷土博物館研究報告11』
- 松井恒幸 1978 「「北のガラス史」のための覚書II」『市立旭川郷土博物館研究報告12』
- 松崎水穂・百々幸雄・中村公宜 1981 「北海道洲崎熊発見の中世遺物と頭首」『考古学雑誌67-2』
- 松下 亘 1973 「北恵余市町浜大沖遺跡の遺物一特に括出土した青磁について」『北海道考古学9』
- 松下 亘 1974 「骨角器」「フゴッペ洞窟」ニュー・サイエンス社
- 松下 亘 1984 「北海道出土の中国陶磁」『北海道の研究2 考古篇II』清文堂
- 三木文雄 1954 「古墳出土の縄に就いて」『考古学雑誌40-1』
- 溝口 利・大場利夫 1981 「室蘭の先史時代 第一章人類のあけぼの」『新室蘭市史第一卷』
- 峯山 岷 1964 「有珠養光寺の墓」『北海道の文化8』北海道文化財保護協会
- 峯山 岷・山口 敏 1972 「先史時代」『豊浦町史』
- 宮澤智士 1983 「近世民家の地域的特色」『講座日本技術の社会史7 建築』日本評論社
- 村田修三 1984 「中世の城壁」『講座日本技術の社会史6 土木』日本評論社
- 矢野牧夫 1985 「出土した植物遺体について」『札前』松前町教育委員会
- 山岸素夫 1974 「釧路市羅ケ岡出土の星兜残欠」『釧路市立郷土博物館館報229』
- 山崎博信 1966 「北海道名寄市内湖墳墓」『日本考古学年報14 昭和36年度』
- 山田悟郎 1984 「推文農耕の起源」『歴史公論103』雄山閣
- 山田秀三 1969 「ニッタチカウシ物語—狩猟のアイヌ地名」『北海道の文化17』北海道文化財保護協会
- 横山英介 1982 「縄文時代開始にからむ諸問題」『考古学研究112』

- 横山英介 1984 「北海道におけるヨクロ使用以前の土師器—推文時代前期の諸定—」『考古学雑誌70-1』
- 吉岡康暢 1979 「北海道の中世陶磁」『日本海文化6』(1984『北海道の研究2考古篇II』所収)
- 吉川金次 1968 「日本古代の縄について」『物質文化11』
- 吉川金次 1969 「古墳出土の縄について」『物質文化13』
- 吉川金次 1983 「大工道具」『講座日本技術の社会史7 建築』日本評論社
- 吉崎昌一・森田知忠 1968 「志瀬苔中世遺構の調査」「新しい道史30」
- 吉田 敏 1955 「日高アイヌとの交流」「愛鄧説料・東北海道アイヌ故郷風土記資料」帯広市社会教育叢書1
- 渡辺俊一 1972 「石狩低地帯の土師器—その受容と展開をめぐる素描一」「北海道考古学17」
- 渡辺 仁 1980 「室内生活空間の型・俗(男・女)2分型」「ライトコロ川口遺跡」東京大学文学部
- 渡辺 誠 1981 「羅ひ物用鍾具としての自然石の研究」「名古屋大学文学部研究論集 LXXX」
- 図録等
- 彌永北海道歴史館編 1985 「図録 北海道の貨幣」
- 萱野 茂 1970 「物とこころ 二風谷アイヌ文化資料越案内」平取町
- 鈴木浮世絵財団 1980 「蝦夷風俗西展」リッカー美術館
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1984 「国内出土の肥前陶磁」
- サントリーアート・コレクション 1971 「サントリーアート・コレクション」
- 東京国立博物館編 1985 「日本の陶磁」
- 渡岡町教育委員会編 1985 「シンボジウム中世考古学の諸問題資料集」
- 藤島玄治郎監修 1980 「平泉」 中尊寺・毛越寺
- 北海道開拓記念館編 1983 「特別展 発掘された北の文化」
- 北海道先住民族資料展覧会 1954 「北海道先住民族資料展覧会記録 附郷土資料図録(第2集)」
- 北海道立近代美術館編 1984 「日本の椅子」北海道立近代美術館
- 山田一孝・古原敏弘他 1984 「静内町アイヌ民俗資料館」静内町教育委員会
- 陸別町郷土資料研究会 1979 「トラリチャシ群」

北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第26集

ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡

—沙流川総合開発事業（二風谷ダム建設用地内）

埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭和61年3月26日発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒064 札幌市中央区南26条西11丁目

☎011(561)3131

印 刷 国際印刷株式会社

〒063 札幌市西区手稲東3南1丁目

☎011(661)2221

